

# 磐越自動車道関係発掘調査報告書

## 北野遺跡Ⅰ

### (下層)

2003

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

# 磐越自動車道関係発掘調査報告書

## 北野遺跡 I

(下層)

2003

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

## 序

磐越自動車道は、福島県いわき市を起点として常磐自動車道から分岐、郡山市で東北自動車道に連結し、新潟市で北陸自動車道と結ばれる総延長約213kmの高速道路です。平成9年10月に全線が開通し、太平洋側と日本海側を結ぶ一大動脈として、それぞれの地域の経済・文化活動に寄与しています。

磐越自動車道が通過した地域には、旧石器時代から近世までの様々な遺跡が存在し、これまでその成果を公表してきました。本書はこの磐越自動車道の建設に伴って実施した東蒲原郡上川村北野遺跡（下層）の発掘調査報告書です。北野遺跡（下層）は、約5,000年前に噴火した沼沢火山灰の二次堆積層に覆われた遺跡です。縄文時代早期中葉～前期末葉までの人々の活動の痕跡が、後世の破壊を受けず良好な状態で残されていました。早期中葉・前期前葉～中葉・前期後葉～末葉の各時期の住居跡や土坑など、集落を構成する遺構が数多く検出されました。新潟県内でも類例が少なく貴重な資料です。特に前期後葉～末葉の集落跡では、竪穴住居は構築時の掘り上げ土を周囲に盛り上げた周堤が検出されました。全国的に見ても類例は多くありません。また、これらの集落跡に伴う土器・石器などの遺物が多く出土しました。

発掘調査で得られた資料や本報告書が、埋蔵文化財に対する理解や認識を深める契機となり、地域の歴史の資料として広く活用されることを期待しています。

最後に、調査から本書の作成まで多大な御協力と御援助を賜りました上川村教育委員会、並びに地元の方々に対して厚くお礼申し上げます。また、日本道路公団新潟建設局（現、日本道路公団北陸支社）・同津川工事事務所には格別の御配慮を賜りました。ここに深甚なる謝意を表します。

平成15年2月

新潟県教育委員会

教育長 板屋越 麟 一

## 例 言

- 1 本報告書は、新潟県東蒲原郡上川村大字九島字長木3,429番地ほか（通称：北野）に所在する北野遺跡の発掘調査記録である。北野遺跡は間層を挟んで上層と下層に分かれるが、本報告書は下層の発掘調査記録である。
- 2 本発掘調査は、磐越自動車道の建設に伴い日本道路公団（以下、道路公団という）から新潟県が受託したもので、発掘調査は調査主体である新潟県教育委員会（以下、県教委という）が、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団という）に委託し、平成5～7年度に実施した。
- 3 整理作業及び報告書作成にかかる作業は、平成14年度に県教委が埋文事業団に委託し、実施した。
- 4 出土遺物及び調査・整理作業にかかる各種資料は、すべて県教委が保管・管理している。資料の有無や閲覧希望は、県教委に問い合わせ願いたい。
- 5 遺物の注記は北野遺跡（下層）の略記号「北下」とし、出土地点や層位を併記した。
- 6 本書の図中で示す方位は、すべて真北である。
- 7 遺物番号は、土器と石器ごとにそれぞれ通し番号を付した。本文及び観察表・図面図版・写真図版の番号は、種別で一致する。
- 8 本文中の注は第VI章を除いて脚注とし、頁ごとに番号を付した。また、引用文献は第VI章を除き、著者及び発行年（西暦）を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
- 9 石器の石材鑑定は、高濱信行氏（新潟大学積雪地域災害研究センター）に御教示をいただき、高橋保雄が個々の石材の認定を行った。
- 10 自然科学分野にかかる各種分析は、株式会社古環境研究所の了解を得て編集した。
- 11 遺構図のトレース及び各種図版の作成・編集に関しては、株式会社セビアスに委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。遺物写真撮影（剥片石器を除く）は、デジタルカメラ（ニコンD100）で撮影し、遺構写真と合わせ、CD化して編集を行った。剥片石器の写真撮影は、株式会社セビアスに委託した。なお、委託業者に支給した図版作成・編集作業にかかる資料は、以下のとおりである。  
本文・押図：テキスト形式・Excel形式のデータ、トレース原図・貼り込み版下  
遺構図面図版：原図（修正済）・レイアウト図・文字データ  
遺物図面図版：トレース図（個別）・拓影・レイアウト図  
写真図版：デジタルデータ・レイアウト図
- 12 本書の執筆は、高橋保雄（埋文事業団主任調査員）、荒谷伸郎（同 嘱託員）がこれにあたり、編集は高橋が担当した。執筆分担は、以下のとおりである。  
第二章、第五章2、第七章2・・・荒谷伸郎  
第一章、第三章、第四章、第五章1・3、第七章1・3・・・高橋保雄  
第六章・・・株式会社古環境研究所
- 13 土器の写真図版の縮尺は、図面図版と同じである。そのため写真図版中への記載を省略した。
- 14 本遺跡については、〔高橋雄1995・1996〕などに概要が報告されているが、これらの間に齟齬が生じた場合は本報告をもって正とする。
- 15 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々および機関から多くの御教示・御協力を賜りました。ここに記して厚くお礼申し上げます。（敬称略 五十音順）  
諫山えりか 石原正敏 速藤 佐 岡村道雄 小熊博史 金子直行 鹿瀬町教育委員会 上川村教育委員会 駒形敏明 佐藤雅一 品田高志 鈴木 暁 鈴木徳雄 関 雅之 関根慎二 田中耕作 谷藤保彦 津川町教育委員会 中島栄一 橋本哲夫 細田 勝 本間信昭 本間 宏 前山精明 増子正三 三川村教育委員会 水澤幸一 宮本長二郎 横山勝栄 渡辺美穂子

# 目 次

第 I 章 序 説	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	2
A 一次調査	2
B 二次調査	3
3 調査体制	5
4 整理の経過と体制	6
第 II 章 遺跡の位置と環境	7
1 地理的環境	7
A 周辺の地形と自然環境	7
B 沼沢火山灰の堆積について	8
2 歴史的環境	9
第 III 章 調査の概要	13
1 遺跡の立地と微地形	13
2 グリッドの設定	14
3 基本層序	14
4 遺構の層位と時期	16
第 IV 章 遺 構	17
1 概 要	17
2 竪穴住居	17
A 大型竪穴住居	17
B 小型竪穴住居	22
C 土坑から変更された竪穴住居	24
3 掘立柱建物	28
4 土 坑	28
5 焼 土	30
6 集 石	31
7 遺物集中地点	31
8 溝	31
9 ピ ッ ト	32
10 硬 化 面	32

第V章 遺物	33
1 概要	33
2 土器・土製品	33
A 土器	33
B 土製品	46
3 石器	46
A 石鎌	47
B 石鎌失敗品	47
C 尖頭器	48
D 石錘	49
E 石匙	50
F 不定形石器	51
G 両極剥離痕のある石器	52
H 篋状石器	52
I 打製石斧	53
J 石錘	54
K 石錘失敗品・素材	55
L 磨製石斧	55
M 敲磨石類	56
N 石皿	59
O 砥石	59
P 器種分類不明石器	60
Q 石核	60
R 石核素材	62
S 接合資料	62
第VI章 自然科学の分析	64
1 地質とテフラ	64
2 放射性炭素年代測定結果	66
3 植物珪酸体分析	66
4 花粉分析	69
5 寄生虫卵分析	73
第VII章 まとめ	74
1 遺構について	74
A 所属時期の検討	74
B 各集落跡の比較	74
C 大型住居と小型住居の構造	76
D 前期後葉～末葉の集落内の変遷	77
2 土器について	78
A 前期初頭から中葉の土器	78
B 前期後葉から末葉の土器	79
3 石器について	82
A 石器組成	82
B 器種と石材選択	83
《要約》	85
《引用文献》	86

## 挿図目次

第 1 図	磐越自動車道路線図	1	第 21 図	打製石斧分類図	53
第 2 図	上層：第一次調査トレンチ位置図	2	第 22 図	石錘分類図	54
第 3 図	下層：第一次調査トレンチ位置図	2	第 23 図	石錘失敗品・石錘素材分類図	55
第 4 図	遺跡付近の段丘模式図	7	第 24 図	磨製石斧分類図	56
第 5 図	沼沢カルデラ・只見川・阿賀野川の位置図	9	第 25 図	敲磨石類分類図	57
第 6 図	北野遺跡及び周辺主要遺跡位置図	11	第 26 図	石皿分類図	59
第 7 図	グリッド設定図	13	第 27 図	砥石分類図	60
第 8 図	小グリッド模式図	14	第 28 図	石核分類図	61
第 9 図	極小グリッド模式図	14	第 29 図	12B5の土層柱状図	65
第 10 図	基本層序と沢Aの土層堆積図	15	第 30 図	植物珪酸体分布図(1)	68
第 11 図	土器の部位名称	33	第 31 図	植物珪酸体分布図(2)	69
第 12 図	Ⅲ群5・6類器形分類図	36	第 32 図	植物珪酸体顕微鏡写真	70
第 13 図	包含層出土土器重量分布図	37	第 33 図	花粉組成図	71
第 14 図	石器出土分布図	46	第 34 図	花粉・胞子顕微鏡写真	72
第 15 図	石鐮分類図	47	第 35 図	遺構・遺物の時期別分布図	74
第 16 図	石鐮失敗品分類図	48	第 36 図	竪穴住居の構造模式図	76
第 17 図	尖頭器分類図	49	第 37 図	前期後葉～末葉集落跡の遺構変遷図	77
第 18 図	石錘分類図	49	第 38 図	3類aと類似する土器出土遺跡	81
第 19 図	石匙分類図	50	第 39 図	鉄石英(緑)出土分布図	84
第 20 図	不定形石器分類図	52			

## 表目次

第 1 表	周辺の主要遺跡一覧	10	第 8 表	遺構の所属時期一覧表	75
第 2 表	石錘分類別重量分布表	55	第 9 表	器種別石器出土数	82
第 3 表	12B5のテフラ検出分析結果	65	第 10 表	石器の分布と所属時期表	83
第 4 表	屈折率測定結果	65	第 11 表	器種別石材表	84
第 5 表	放射性炭素年代測定結果	66	別表 1	遺構一覧表	88
第 6 表	植物珪酸体分析結果	67	別表 2	土器観察表	90
第 7 表	花粉分析結果	71	別表 3	石器観察表	96

## 図版目次

### [図面図版]

図版 1	北野遺跡(下層)の調査範囲と周辺の地形	図版 11	遺構個別実測図 7	SI1051・1054	
図版 2	沼沢層(Ⅳ層)直下の地形図	図版 12	遺構個別実測図 8	SB1045・1063	
図版 3	沼沢火山灰層直下(V層上面)での検出遺構配置図	図版 13	遺構個別実測図 9	SI1003・1008・1011・1012	
図版 4	北野遺跡(下層)遺構配置図	図版 14	遺構個別実測図 10	SI1016・1037・1039・1040・1071	
図版 5	遺構個別実測図 1	SI1029	図版 15	遺構個別実測図 11	SK1001・1002・1004 ～1007・1013～1015・1017～1019・1021
図版 6	遺構個別実測図 2	SI1034	図版 16	遺構個別実測図 12	SK1020・1022～1026・1028・1031～1033・1038・1041
図版 7	遺構個別実測図 3	SI1035	図版 17	遺構個別実測図 13	SK1042～1044・1046
図版 8	遺構個別実測図 4	SI1050			
図版 9	遺構個別実測図 5	SI1057			
図版 10	遺構個別実測図 6	SI1027・1036			

- 1047・1049・1052・1053・1056
- 図版 18 遺構個別実測図14 SK1048・1055・1058  
～1061・1064～1066
- 図版 19 遺構個別実測図15 SK1067～1070・1072  
～1077
- 図版 20 遺構個別実測図16 SD1030、SX1062、ビ  
ット、焼土
- 図版 21 遺構個別実測図17 焼土、炉
- 図版 22 遺構個別実測図18 焼土、集石、遺物集中  
地点
- 図版 23 遺物実測図1 土器1
- 図版 24 遺物実測図2 土器2
- 図版 25 遺物実測図3 土器3
- 図版 26 遺物実測図4 土器4
- 図版 27 遺物実測図5 土器5
- 図版 28 遺物実測図6 土器6
- 図版 29 遺物実測図7 土器7
- 図版 30 遺物実測図8 土器8
- 図版 31 遺物実測図9 土器9
- 図版 32 遺物実測図10 土器10
- 図版 33 遺物実測図11 土器11
- 図版 34 遺物実測図12 土器12

#### 【写真図版】

- 図版 57 遺構位置と周辺の景観・遺跡遠景
- 図版 58 V層上面での完掘全景・V層上面での遺跡  
全景・基本層序(13B6)
- 図版 59 SH1027・SH1029・SH1035・15FG・16FG  
付近全景
- 図版 60 土器・石器
- 図版 61 遺跡西区完掘全景・遺跡東区完掘全景
- 図版 62 SH1029
- 図版 63 SH1034
- 図版 64 SH1035
- 図版 65 SH1050
- 図版 66 SH1057
- 図版 67 SH1027・SH1036
- 図版 68 SH1036・SH1051
- 図版 69 SH1051・SH1054・SB1045
- 図版 70 SB1063・SH1003・SH1008
- 図版 71 SH1011・SH1012・SH1016・SH1037
- 図版 72 SH1039・SH1040・SH1071・SK1001
- 図版 73 SK1002・SK1004・SK1005・SK1006
- 図版 74 SK1007・SK1013・SK1014・SK1015
- 図版 75 SK1017・SK1018・SK1019・SK1020・  
SK1021
- 図版 76 SK1022・SK1023・SK1024・SK1025
- 図版 77 SK1026・SK1028・SK1031・SK1032・  
SK1033

- 図版 35 遺物実測図13 土器13
- 図版 36 遺物実測図14 土器14・土製品
- 図版 37 遺物実測図15 石器1
- 図版 38 遺物実測図16 石器2
- 図版 39 遺物実測図17 石器3
- 図版 40 遺物実測図18 石器4
- 図版 41 遺物実測図19 石器5
- 図版 42 遺物実測図20 石器6
- 図版 43 遺物実測図21 石器7
- 図版 44 遺物実測図22 石器8
- 図版 45 遺物実測図23 石器9
- 図版 46 遺物実測図24 石器10
- 図版 47 遺物実測図25 石器11
- 図版 48 遺物実測図26 石器12
- 図版 49 遺物実測図27 石器13
- 図版 50 遺物実測図28 石器14
- 図版 51 遺物実測図29 石器15
- 図版 52 遺物実測図30 石器16
- 図版 53 遺物実測図31 石器17
- 図版 54 遺物実測図32 石器18
- 図版 55 遺物実測図33 石器19
- 図版 56 遺物実測図34 石器20
- 図版 78 SK1033・SK1038・SK1041・SK1042・  
SK1047・SK1043
- 図版 79 SK1044・SK1046・SK1048・SK1055・  
SK1049
- 図版 80 SK1049・SK1052・SK1053・SK1056・  
SK1058
- 図版 81 SK1059・SK1060・SK1061・SK1064
- 図版 82 SK1064・SK1065・SK1066・SK1067
- 図版 83 SK1067・SK1068・SK1069・SK1070
- 図版 84 SK1072・SK1073・SK1074・SK1075
- 図版 85 SK1075・SK1076・SK1077・SD1030・  
SX1062
- 図版 86 7C・1号焼土・8D・1号焼土・11D・1号焼  
土12B・3号焼土・12F・1号焼土・13D・1号  
焼土・14F・1号焼土・15D・1号焼土
- 図版 87 16E・1号焼土・17C・3号焼土・17E・2号  
焼土・18F・2号焼土・8E・1号集石・14F・  
1号集石・17F・1号集石
- 図版 88 17F・1号集石・17F・2号集石・17F・3号集  
石・17G・1号集石・18F・1号集石
- 図版 89 13E・3号遺物集中地点・18F・1号遺物集  
中地点・15B・1号遺物集中地点・4B・沢A  
土層堆積状況・6A21基本層序・10B6基本層  
序・東側調査区境界壁・西側調査区境界壁
- 図版 90 土器 1

図版 91	土器 2	図版 104	石器 5	不定形石器(3)・両極剥離痕のある石器
図版 92	土器 3	図版 105	石器 6	筒状石器・打製石斧・石錘(1)
図版 93	土器 4	図版 106	石器 7	石錘(2)・石錘素材・磨製石斧
図版 94	土器 5	図版 107	石器 8	敲磨石類(1)
図版 95	土器 6	図版 108	石器 9	敲磨石類(2)・石皿(1)
図版 96	土器 7	図版 109	石器 10	石皿(2)・砥石(1)
図版 97	土器 8	図版 110	石器 11	砥石(2)
図版 98	土器 9	図版 111	石器 12	器種分類不明石器・石核(1)
図版 99	土器 10・土製品	図版 112	石器 13	石核(2)・石核素材・接合資料(1)
図版 100	石器 1	図版 113	石器 14	接合資料(2)
図版 101	石器 2	図版 114	石器 15	接合資料(3)
図版 102	石器 3	図版 115	石器 16	接合資料(4)
図版 103	石器 4			

# 第I章 序 説

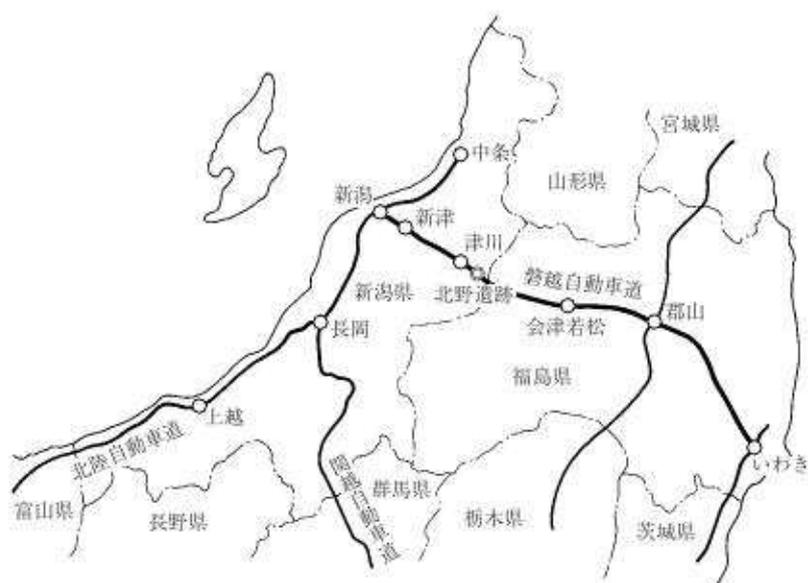
## 1 調査に至る経緯

**基本計画～工事施工命令** 磐越自動車道のうち北野遺跡にかかる区間（福島県会津坂下～津川間）は、延長約33.2kmを測る。この区間は全線の最後の工事区間であり、基本計画は昭和53（1978）年12月に決定された。昭和61年1月には建設大臣から日本道路公団新潟建設局（以下、道路公団）に対して整備計画が示され、調査開始の指示が出された。これを受けて道路公団は経済・地形・文化財など工事の施工に必要な調査を開始した。平成元（1989）年11月、道路公団は新潟県教育委員会（以下、県教委）に県境～津川間（13.8km）の法線内全域の埋蔵文化財包蔵地の分布調査を依頼した。県教委はこれを受け、同月に分布調査を実施し、北野遺跡（No.48地点）を含む13地点について一次調査の必要性和各地点の調査対象面積を回答した。なお、この区間の工事施工命令は昭和63年1月に出され、路線発表は同年3月に示された。これ以降、本格的な道路建設の準備・工事が進められ、平成9年10月1日に全線が開通した。

**一次調査** 平成2年1月、道路公団と県教委は分布調査の結果を踏まえ協議を行った。その結果、津川～安田間の29地点の一次調査が終わり次第、この区間の二次調査に入ることとなった。北野遺跡は平成4年7月に一次調査を行った。この結果、沼沢火山堆積物層（基本層序IV層）（以下、沼沢火山灰層）を挟んで上・下層から縄文時代の遺物・遺構が認められ、二次調査が必要であることが判明した。しかし、遺跡西側の低湿地部分は満水状態、東側の墓地部分は未移転のために調査ができず、また下層は上層の遺構・遺物が密集することから範囲を確定することができなかった。したがって、これらの部分については、二次調査と併行して平成5年4～5月・11～12月、平成6年7月に行い、上層・下層の範囲を確定した。

**二次調査** 平成5年3月、道路公団と県教委は調査工程の協議を行い、北野遺跡の二次調査は平成5～7年度に実施することに決定した。二次調査面積は最終的に上・下層を合わせて17,800m<sup>2</sup>であり、県教委から委託を受けた（財）

新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）があたった。なお、磐越自動車道の建設に伴う県境～津川間の二次調査遺跡は北野遺跡のほか、七瀬道下遺跡（平成6・7年度）、上小島遺跡（平成7年度）の3遺跡である。



第1図 磐越自動車道路線図

## 2 調査の経過

### A 一次調査

北野遺跡は過去にも遺物が採集されている場所で、新潟県遺跡台帳に登録されている周知の遺跡である。一次調査の対象面積は12,500m<sup>2</sup>であり、1回目の調査は平成4年7月に行った。この時点では調査対象地の西側の湿地部分が湛水状態、東側の墓地部分は木移転のために調査ができず、これらを除いた部分に2×5mのトレンチを18か所設定した。各トレンチはバックホーと人力で掘り下げ、遺物・遺構の有無を確認し記録した。その結果、沼沢火山灰層を挟んで上層では、トレンチ8～17で縄文時代中期末葉～後期初頭が主体の土器・石器が多数出土し、複式炉や住居跡と推定される遺構も検出された。下層では、トレンチ7・8・18で縄文時代前期の土器・石器が出土した。上層は検出された遺構や遺物量から該期の拠点集落跡の可能性が推定された。下層は上層の遺物・遺構が密集していたため、下層まで調査できなかったトレンチが多かったものの遺物包含層の広がりや予想させる結果となった。しかし、前述の理由から上層・下層ともに二次調査面積の確定ができないことから、二次調査に着手し、併行して調査面積の確



第2図 上層：第一次調査トレンチ位置図（数字はトレンチ番号）



第3図 下層：第一次調査トレンチ位置図（数字はトレンチ番号）

定することとした。なお、一次調査対象地の最も東側の部分（トレンチ1～6）では遺物・遺構は皆無であり、二次調査面積から除外した。この部分は北野遺跡の存在する段丘面より約5m低く、洪水堆積物が厚く堆積しており、常浪川の氾濫原と判明した。

2回目以降の調査は二次調査と併行して平成5年4月20・21日に西側低湿地部分、5月13・14・17日に墓地部分の東側段丘崖を対象として行った。西側低湿地部分には5か所のトレンチを設定し、バックホーで掘削した。いずれも遺物は少なく、流れ込みの土器・石器がわずかに出土した。また、有機質遺物は皆無であり、湧水・流水も少なく、乾期には干上がる沢と推定した。湿地部分は「沢A」と命名し、沢の底面から遺跡寄りを二次調査範囲とした。墓地部分の東側段丘崖には13か所のトレンチを設定し、バックホーと人力で掘り下げた。段丘崖部の覆土は薄く、西側の墓地部分からの流れ込みと推定される土器・石器がわずかに出土した。段丘崖裾部は洪水堆積物が厚く堆積し、遺構・遺物は皆無であった。この結果、東側段丘崖部分は、その裾部まで常浪川の氾濫原と判断し、段丘崖肩部までを上層の調査範囲とした。これにより、上層の二次調査範囲は8,900m<sup>2</sup>と確定した。

下層の調査範囲の確定は、上層の調査の終了に合わせて行った。上層の調査範囲の西側（4～13・B～G列グリッド）は、平成5年11月27日～12月1日にかけて行った。約2×5mのトレンチを大グリッド（10×10m）に合わせ、36か所を設定した。調査の結果、トレンチ2～13・35で遺構・遺物が確認され、西側は上層と同じ範囲を調査範囲として確定した。東側部分は、墓地部分を除いた部分の調査が終了した平成6年7月11～15日にかけて行った。トレンチは西側と同じように29か所を設定した。調査の結果、すべてのトレンチから遺構・遺物が確認され、東側も広範囲に遺物が包含されると判断され、上層調査範囲と同じ段丘崖肩部まで二次調査範囲として確定した。これにより、下層の二次調査範囲も上層の調査範囲と同じく8,900m<sup>2</sup>とした。

## B 二次調査

二次調査は平成5～7年の3か年にわたり実施した。調査の前半（平成5年4月～平成6年7月）は主に上層、後半（平成6年7月～平成7年8月）は主に下層の調査であったが、墓地部分の移転が平成7年4月下旬であったため、平成7年度は上層と下層の調査を併行して行った。以下、調査日誌から経過を抄述する。

### 平成5年度

- |          |   |
|----------|---|
| 4月19日    | 器材を搬入する。  |
| 4月20・21日 | 西側低湿地部分一次調査。上層の西側調査範囲を確定する。   |
| 4月22日    | 西側低湿地部分（沢A）をバックホーにより掘削を開始する。  |
| 4月24日    | 西側5列グリッドから表土・包含層を掘削する。  |
| 5月13～17日 | 東側段丘崖一次調査。上層の東側調査範囲を確定する。   |
| 6月7日     | 9列グリッドより東は、遺物が極めて多く出土するため、表土からの人力掘削にする。   |
| 6月10日    | 5・6Bグリッド、実測・写真などの記録が終了する。以後、漸次東に調査が進行する。  |
| 7月14日    | 11列グリッドより東は遺構・遺物が多く、しかも性格不明の礫も多く存在するため、調査は困難をきたす。このため礫の全体状況を把握するため、表土層・包含層（II層）の削平を先行させる。 |
| 11月4日    | 15～19列グリッドの礫出土状況を空中測量する。以後、性格不明の礫を除去しながらの調査となる。   |

## 2 調査の経過

- 11月27日～12月1日 下層の西側一次調査。下層の西側調査範囲を確定する。
- 11月30日 13列グリッドまでほぼ完掘。遺構平面図を空中測量する。
- 12月3日 遺物・諸記録類を撤収し、平成5年度調査を終了する。
- 平成6年度**
- 4月12日 現地入り。調査準備を始める。
- 4月19日 14列グリッドから包含層削平・遺構確認・遺構掘り・実測などを中心に本格的な発掘調査が始まる。
- 7月7日 県教委の立会いにて、墓地部分を除いた上層の終了を確認する。
- 7月8日 下層の西側、4・5Bグリッドから包含層を削平する（下層二次調査開始）。
- 7月11～15日 墓地部分を除いた下層の東側を一次調査する。下層の東側調査範囲を確定する。
- 8月2日 下層の西側、4・5Bグリッド遺構掘りが終了する。
- 8月30日 4～12・B～D列グリッドの遺構掘り・実測が終了する。県教委の立会いのもと終了を確認する。
- 10月24日 沼沢火山灰層直下（基本層序V層上面）の地形を空中測量する。
- 10月25日 下層のテフラ検出、植物珪酸体分析、花粉分析、寄生虫卵分析のための試料を採取する。
- 11月17・18日 13列グリッドまで調査をほぼ終了する。調査中の遺構に土嚢を詰め、シート掛け保護する。沼沢層の年代測定のための炭化物を採取する。
- 11月22日 遺物・諸記録類を撤収し、平成6年度調査を終了する。
- 平成7年度**
- 4月12日 現地入り。調査準備を始める。
- 4月18日 前年度からの遺構確認・遺構掘り・実測などを中心に本格的な発掘調査が始まる。
- 5月23日 下層：13～14・B～DグリッドのV層上面遺構をほぼ完掘する。遺構平面図を空中測量する。引き続きさらに下層（V～VII層）を調査する。
- 6月25日 下層：墓地部分を残し、V層上面の遺構を完掘する。遺構平面図を空中測量する。引き続きさらに下層を調査する。
- 7月25日 上層：墓地部分は21Dグリッドを残しほぼ完掘する。他のグリッドは下層調査に入る（墓地部分下層調査開始）。
- 8月28日 下層：すべてのグリッドで地山層（基本層序VII層）まで削平する。すべての遺構を完掘する。実測・写真などの記録を終了する。
- 8月29日 県教委の立会いのもと終了を確認する。全景写真を空中撮影する。
- 8月31日 器材・遺物・諸記録類を搬出し、調査を終了する。

### 3 調査体制

一次調査（平成5年度以降は、二次調査と併行したため省略する）

調査期間 平成4年7月14～7月17日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）

調査受託 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 本間栄三郎）

管 理	総 括	藍原 直木（事務局長）
	管 理	渡辺 耕吉（総務課長）
	庶 務	藤田 守彦（主 事）
調 査	調査総括	茂田井信彦（調査課長）
	調査指導	戸根与八郎（調査課調査第一係長）
	調査担当	北村 亮（調査課主任）
	調査職員	阿部 雄生（調査課専門員）

#### 二次調査

平成5年度

調査期間 平成5年4月19日～12月3日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）

調査受託 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 本間栄三郎）

管 理	総 括	藍原 直木（事務局長）
	管 理	渡辺 耕吉（総務課長）
	庶 務	藤田 守彦（主 事）
調 査	調査総括	茂田井信彦（調査課長）
	調査指導	藤巻 正信（調査課調査第一係長）
	調査担当	高橋 保雄（調査課主任）
	調査職員	北村 亮（調査課主任）
		須藤 高志（調査課専門員）
		南 雄二（調査課専門員）
		阿部 雄生（調査課専門員）
		春日 真実（調査課専門員）
	佐藤 恒（調査課嘱託員）	
	上村 利明（市町村職員実務研修生・橋尾市教育委員会）	
	高橋 理彦（市町村職員実務研修生・柿崎町教育委員会）	
	新保 誠吾（市町村職員実務研修生・吉川町教育委員会）	

平成6年度（調査主体・調査受託は平成5年度に同じ）

調査期間 平成6年4月12日～11月22日

管 理	総 括	藍原 直木（事務局長）
	管 理	渡辺 耕吉（総務課長）
	庶 務	泉田 誠（主 事）
調 査	調査総括	茂田井信彦（調査課長）
	調査指導	藤巻 正信（調査課調査第一係長）
	調査担当	高橋 保雄（調査課主任調査員）
	調査職員	南 雄二（調査課文化財調査員）
		石山 精哉（調査課文化財調査員）
	佐藤 恒（調査課嘱託員）	
	清塚 則和（調査課嘱託員）	

#### 4 整理の経過と体制

平成7年度（調査主体・調査は平成5年度に同じ）

調査期間 平成7年4月12日～8月31日

管 理	総 括	籠原 直木（事務局長）
	管 理	渡辺 耕吉（総務課長）
	庶 務	泉田 誠（主 事）
調 査	調査総括	亀井 功（調査課長）
	調査指導	藤巻 正信（調査課調査第一係長）
	調査担当	高橋 保雄（調査課主任調査員）
	調査職員	島田 昌幸（調査課文化財調査員）
		石山 精哉（調査課文化財調査員）
佐藤 恒（調査課嘱託員）		
斎藤 本恭（市町村職員実務研修生・相川町教育委員会）		
小鍛治快弘（市町村職員実務研修生・村松町教育委員会）		
	栢森 秀之（市町村職員実務研修生・田上町教育委員会）	
	杉本 陽子（市町村職員実務研修生・柿崎町教育委員会）	

## 4 整理の経過と体制

遺物及び図面・写真などの諸記録類の基礎整理は、発掘調査と併行して行った。しかし、遺物・諸記録類共に膨大なため、未整理なものは調査年度の冬場に行った。遺物は洗浄・注記を業者に委託し、諸記録類の基礎整理、遺構カードの作成は調査員が行った。本格的な整理作業は、埋文事業団が県教委から委託を受けて、下層を平成14年4月から行った。整理体制は、以下のとおりである。なお、上層の整理作業は平成15・16年度に予定されている。

整理期間 平成14年4月1日～平成15年3月31日

整理主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越麟一）

整理受託 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 板屋越麟一）

管 理	総 括	黒井 幸一（事務局長）
	管 理	長谷川司郎（総務課長）
	庶 務	高野 正司（総務課主任）
整 理	整理総括	岡本 郁栄（調査課長）
	整理指導	北村 亮（調査課整理担当課長代理）
	整理担当	高橋 保雄（調査課主任調査員）
	整理職員	荒谷 伸郎（調査課嘱託員）
	整理作業員	小田美知子・小田美子・齋藤文子・齋藤真由美・渡辺恵子・山上敦子・齋藤由香（以上、調査課朝日分室嘱託員）

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境

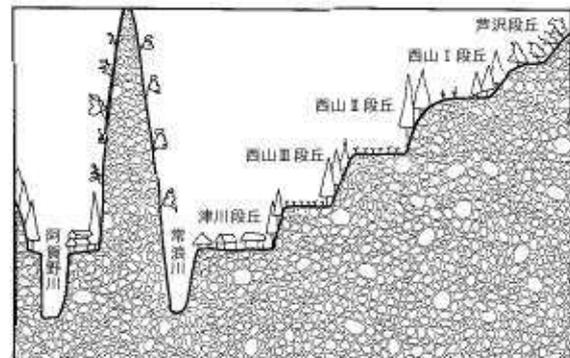
#### A 周辺の地形と自然環境

北野遺跡は新潟県東蒲原郡上川村大字九島字長木3,429番地ほかに位置する。東蒲原郡は新潟県の東北部に位置し、上川村を含む2町2村によって構成され、面積953km<sup>2</sup>、人口は約17,000人（平成4年7月1日推計）である。郡内を西流する阿賀野川は、福島・栃木県境の荒海山に源を発する。郡内で常浪川、新谷川と合流して水量を増した流れは山間部を抜け、平野部の広大な水田地帯を潤しつつ日本海へと注ぐ、流路延長約210km、流域面積約7,710km<sup>2</sup>の東日本屈指の大川である。

上川村は東蒲原郡の東南に位置し、北は同郡津川町、三川村、西は中蒲原郡村松町、南蒲原郡下田村と、東南は福島県との県境を挟み西会津町、金山町、只見町と接している。上川村の面積は同郡総面積の3分の1以上を占める361.13km<sup>2</sup>、人口は3,588人である（東洋経済新報社刊・都市データバック2002年度版より）。村の総面積の実に97%が林野で、南側には越後山脈が走る典型的な山村である。平野部が少ないことから、現在の集落の多くは常浪川を中心とした細長い盆地上に営まれている。気候は8月の平均気温が24.7℃なのに対し、1月の平均気温は0.2℃であり、寒暖の差が大きい。冬は北西季節風の影響で降水量が多くなる典型的な日本海型気候となる。当地では年平均2,293mmの降水量の実に約4割が降雪によりもたらされ、その最深積雪の年平均は111cmに達する（気象データは気象庁津川観測所1979～2000年、最深積雪のみ1980～2000年）。

北野遺跡の眼前を流れる常浪川は、中の又山の標高1,070m付近に源を発する。その流れは途中、広谷川、柴倉川、東小出川といった支流と合流しつつ、上川村内を曲流しながらもおおむね北東流し、津川町の麒麟山付近で阿賀野川に合流する流路延長約30km、流域面積約385km<sup>2</sup>の一級河川である。流域は、不動滝より上流の上流域、不動滝から栃堀間の中流域、栃堀からの下流域の3区間に大別される。この上・中流域には国指定史跡の室谷洞窟、小瀬ヶ沢洞窟があり、両洞窟とも河岸段丘の縁にあることから、常浪川により形成された隆起河蝕洞と考えられている。北野遺跡の位置する下流域は、津川盆地を流れる。津川盆地は周辺の急峻な山地が中～古生代の非常に硬質な粘板岩やチャートによって形成されているのに対し、比較的軟らかいグリーンタフと呼ばれる凝灰岩層が厚く堆積している【天野ほか1995】。この地質の違いは地形に反映され、周囲と異なる丘陵性の山地と盆地を形成している。下流は上、中流に比べ河床勾配が4/1,000以下と小さく蛇行が見られるようになる。その河岸には低位の段丘がよく発達しており、北野遺跡もこの段丘上に位置している。

遺跡の立地する段丘面は、阿賀野川の合流点から南に約3.5km上流、常浪川下流の左岸に位置



第4図 遺跡付近の段丘模式図【滝沢ほか1995】

し、基本層序Ⅶ・Ⅸ層の砂礫層が示すように常浪川により形成された河岸段丘である。この段丘は地質学的には「津川段丘」[稲葉<sup>ほか</sup>1976]に区分され、常浪川の蛇行によって開析されている。遺跡はこの段丘の低位面にあり、上位段丘とは比高約20mの崖と小さな沢によって区切られている。この段丘低位面は長さ約450m、幅約130mの舌状形を呈し、常浪川の現河床との比高は約7mとなっている。

## B 沼沢火山灰の堆積について

北野遺跡では縄文時代中・後期を主とする包含層（上層）と縄文時代早・前期の包含層（下層）の間層として、調査区ほぼ全域を覆いつくすようにサラサラの黄褐色砂質土、淡黄色砂が合わせて65～95cm前後堆積していた。この堆積層は基本層序Ⅲ・Ⅳ層に該当する。この砂質土は、堆積の特徴及び地質学的見地から、隣接する福島県大沼郡金山町の沼沢火山から供給された火山灰と考えられる。この火山灰は河川を伝い広域に分布することや、堆積時期が縄文時代前期末葉であると推定されることから、以前より地質学ばかりでなく考古学も加えた両分野により度重なる検討が加えられてきた。ここでは、今回報告する基本層序Ⅲ・Ⅳ層以下の包含層についての年代的位置付けを地質学の成果を交え、改めて確認することを目的とする。以下、これまでの研究を振り返ることで要点の整理を行いたい。なお、同火山灰層は「沼沢火山灰層」[滝沢<sup>ほか</sup>1995]、「鹿瀬軽石砂質層」[稲葉<sup>ほか</sup>1976]、「沼沢浮石質砂層」[只見川第四紀研究グループ1966a・b]と呼称されている。しかし、すでに指摘[滝沢<sup>ほか</sup>1995]があるように煩雑で無用の混乱を招く可能性もあるため、以下では「沼沢火山灰層」に統一して記述する。

### 1) 堆積過程

沼沢火山は、北野遺跡とは御神楽岳（標高1,386.5m）を挟んだ約26km南東、只見川の右岸に位置する。火山は現在、面積3km<sup>2</sup>、最深部96mのカルデラ湖となっている。これは北野遺跡のⅢ・Ⅳ層を形成する堆積物を噴出した際の火山口と考えられている。

この北野遺跡の下層を埋没させた沼沢火山灰層は、噴火に伴う直接的な堆積層ではない。通常、火山灰は偏西風の影響から主に火山口の東側へ飛ばされるため、北西に位置する北野遺跡周辺には到達しにくい。事実、津川周辺では確実に降下火山灰層とされるものは確認されていない。北野遺跡の沼沢火山灰層は一度降下した火山灰が河川、つまり只見川を経由し、阿賀野川を流下する過程で形成された二次堆積層であることに大きな特徴がある。しかしながら、沼沢火山灰層が堆積する標高が両河川の現水面から20m以上も高いことから、その堆積過程は以下のように考えられている。①沼沢火山の噴火による大量の軽石・火山灰が、只見川・阿賀野川に沿って流下する（只見川流域及び会津盆地西部では、沼沢火山の火砕流堆積物が確認されている[柳田1979]）。②これらの火山性物質が流下する過程で阿賀野川の谷を埋積し、堰の役割を果たすことで一時的なダム湖を形成する。この堰は沼沢火山灰層の分布と地形から、津川の下流、岩谷付近の峡谷に形成されたと考えられる。ダム湖は火山灰で混濁した流水で満たされ段丘面を浸したが、水流は穏やかでそれまでの地表面（基本層序Ⅴ層）を流出させなかった。沼沢火山灰層の堆積の最高地点は現在の所、津川町猿額遺跡の標高88.3m地点で確認されている。このことからダム湖の湖水は一時的にはあるが西山Ⅱ段丘面まで到達していた[滝沢<sup>ほか</sup>1995]。③このダム湖を満たした湖水に含まれた微細な火山灰（軽石は流下の過程で小さくなり、津川付近では含まれない）が湖底に沈積することによって水平層理の砂質土層が形成される。④ダム湖の水が引き、砂質土層が地表面となる。さらに火山灰流下の過程で幾度となくこの過程が繰り返され、沼沢火山灰層が形成されたと考えられる。このような現象は津川盆地

ばかりでなく、上流部の野沢盆地付近でも起こったと考えられており、広範囲に火山灰を二次堆積させた。このように只見川、阿賀野川を流下した火山灰の一部は段丘上に砂質土層を形成した。さらに下流にまで流下したのは河口にまで到達し、新潟砂丘の形成にも関与することから〔坂井1981〕、砂丘形成過程の鍵層として認識されている。

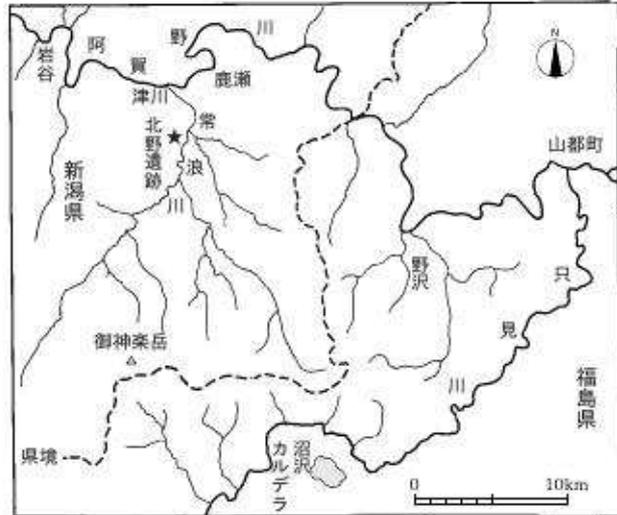
## 2) 堆積年代

沼沢火山灰層の堆積年代については地質学、考古学の両分野から検討されている。只見川第四紀研究グループは沼沢火山灰層中の炭化自然木片のC<sup>14</sup>による年代測定を試み、4950 ± 100年B. P.、5030 ± 100年B. P.〔只見川第四紀研究グループ1966a〕、4870 ± 110年B. P.〔同1966b〕との結果が得られたことから、その堆積時期が「縄文前期の後半」であることを指摘する。その後、行われた考古学による発掘調査では、これを裏付けるように沼沢火山灰層の上下層から縄文時代前期末葉に比定される大木6式土器の出土事例が報告されている。

北野遺跡と同様に沼沢火山灰の二次堆積層に埋没した遺跡としては津川町猿額遺跡〔滝沢ほか1995〕、福島県山郡町上ノ原遺跡〔芳賀ほか1983〕などがあげられる。猿額遺跡では沼沢火山灰層により埋没した土坑から大木6式土器が出土しており、その上層の包含層からも大木6式が出土している。上ノ原遺跡でも沼沢火山灰層の直下から「大木6式の前半期」の土器が出土している。また、降下火山灰層（一次堆積層）が確認されている会津高田町鹿島遺跡〔丹野・本間1991〕、同町下谷ヶ地平B・C遺跡〔芳賀・藤谷1986〕、同町菅宮西遺跡〔芳賀ほか1984・1990〕、磐梯町・猪苗代町にまたがる法正尻遺跡〔松本ほか1991〕でも沼沢火山灰層の直下から大木6式土器が出土している。さらに、北野遺跡の下層からも大木6式土器が出土している。以上の例から、沼沢火山が噴火活動を開始したのは大木6式期で、その後の二次堆積もほぼ同時期に始まったことが推測できる。一方、火山活動の終了時期に関しては明確にし得ない。沼沢火山灰層の上層からは中期前半以降の遺構・遺物が出土することが多いが、猿額遺跡、法正尻遺跡では火山灰層の上層からも大木6式が出土している。このことから、大木6式の有する絶対的な時間幅をここでは明確にできないものの、噴火活動の終了から人々が再び痕跡を残すまでの時間差を考慮しても、噴火活動の開始から終了（二次堆積の終了）までが大木6式期内の比較的短い期間で完結したものと考えられる。

## 2 歴史的環境

東蒲原郡の遺跡分布状況を見ると、いずれも阿賀野川及びその支流によって形成された河岸段丘上に位置し、その大部分が縄文時代の中期から晩期にかけての遺跡である。しかし、今回の北野遺跡の調査を含む磐越自動車道、常浪川ダムの開発に伴い、これまであまり知られていなかった旧石器時代や縄文時代草創期・早期・前期の遺跡の発掘調査が行われ、多くの成果が得られている。以下に縄文時代を中心に概観する。



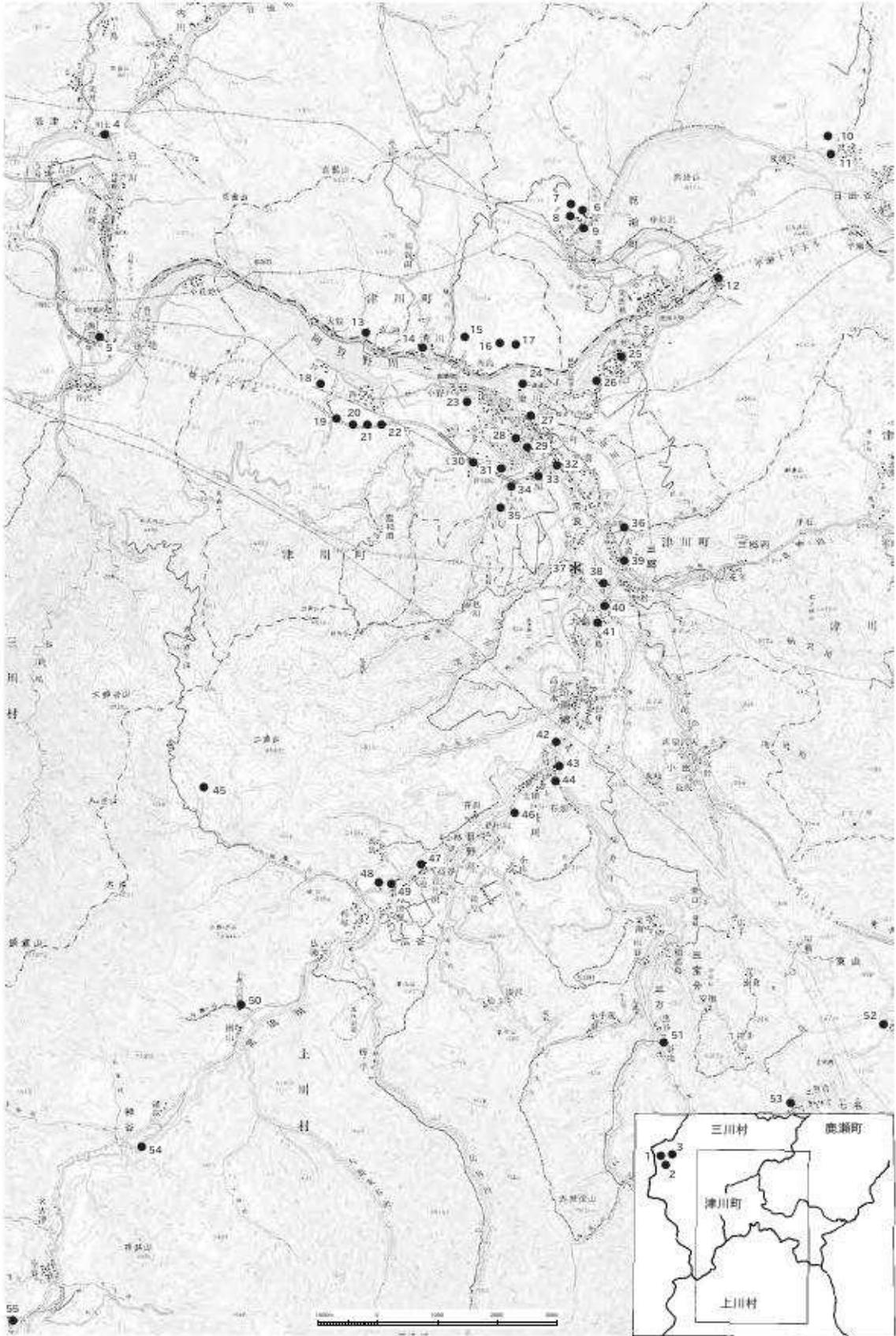
第5図 沼沢カルデラ・只見川・阿賀野川的位置図  
〔稲葉ほか1976を一部改変〕

草創期・早期では、上川村小瀬ヶ沢洞窟（50）、同村室谷洞窟（55）のふたつの国指定史跡が全国的にも著名である。しかし、近年の常浪川ダムの開発に伴い上川村大谷原遺跡（54）の調査が行われ、縄文時代早期における台地上での生活の痕跡も明らかなものとなっている。常浪川の中流域に位置する小瀬ヶ沢洞窟は、長岡市立科学博物館によって昭和33、34年に調査された我が国を代表する草創期の遺跡である。この調査で微隆起線文、爪形文、多縄文などの多量の土器と有舌尖頭器、植刃器、石鎌などの石器が出土した〔中村1960〕。また、近年新たな観点を交えた再検討が行われた〔小野・鈴木<sup>※</sup>1994〕。小瀬ヶ沢洞窟のさらに6.5km上流にある室谷洞窟も昭和35～37年にかけて長岡市立科学博物館と新潟大学医学部解剖学教室により発掘調査が行われ、草創期から弥生時代にかけての遺物が出土した。この調査で縄文時代前期初頭とされる女性人骨が、ほぼ完全な状態で発見された。この人骨は埋葬されたことがほぼ確実と考えられており、当該期の埋葬形態を考える上で欠くことのできない資料である〔中村・小片1962、谷口1996〕。大谷原遺跡では早期中葉・貝殻沈線文期の集落跡が調査されている。竪穴住居跡、墓と考えられる土坑群など、県内でも類例の少ない当該期の遺構が検出されており、注目されるものである〔遠藤1995〕。

前期の遺跡としては、今回報告する北野遺跡（37）の下層に加え、三川村上ノ平遺跡（3）、津川町猿額遺跡（20）、同町中棚遺跡（19）などがある。上ノ平遺跡では大木6式期の竪穴住居跡1軒、ピット1基が検出されており、その規模からキャンプサイトとしての性格が強いとの指摘がある〔沢田1996〕。猿額遺跡は北野遺跡同様、上下2枚の包含層の間層として沼沢火山灰層の堆積が確認されている。この上下層からそれぞれ大木5・6式土器が出土しており、明確に沼沢火山灰層堆積以前の所産と考えられる大木

No.	遺跡名	時 期	No.	遺跡名	時 期
1	堂田	縄文（中・晩期）	29	金鉢清水	縄文
2	吉ヶ沢	旧石器、縄文（前期）	30	上ノ山	縄文、平安
3	上ノ平	旧石器、縄文（前・後期）、平安	31	羽黒林	縄文
4	若宮洞窟	縄文（晩期）	32	中島	縄文
5	牧ノ沢	縄文（後・晩期）	33	奥田	縄文
6	角神A	旧石器	34	大舟	縄文
7	角神B	縄文	35	エンマ坂	旧石器
8	角神C	縄文	36	古天神	縄文（後・晩期）
9	角神D	縄文（中期）	37	北野	縄文（早・前・中・後・晩期）、中世、近世
10	長者屋敷	縄文（中・後・晩期）	38	楠川	縄文（中・後・晩期）
11	中貝	縄文（中期）	39	天満	縄文
12	深戸	縄文（中・後期）	40	七福道下	縄文（中・後・晩期）
13	大師堂	縄文（後期）	41	キンカ杉	縄文（後期）
14	原	縄文（中・後・晩期）	42	大屋敷	縄文（中・後・晩期）
15	角嶋岩陰	縄文（後期）	43	入道岩陰	縄文（晩期）、弥生
16	小野戸	平安	44	関後	縄文
17	角嶋山	縄文（後期）	45	人ヶ谷岩陰	縄文（晩期）
18	赤岩	縄文（中・後・晩期）	46	山口	縄文
19	中棚	縄文（前・中期）	47	孤窪	縄文（中・後・晩期）
20	猿額	縄文（前・中期）	48	揚城	縄文（晩期）
21	大坂上道	縄文（中・後期）	49	八田蟹	縄文
22	今井野	縄文	50	小瀬ヶ沢洞窟	縄文（草創、早期）
23	御小屋	中世	51	栗瀬B	縄文（中・後期）
24	津川城跡	中世	52	中山	縄文
25	大鹿瀬	縄文（後期）	53	谷地	縄文（中・後期）
26	麒麟山東方	縄文	54	大谷原	縄文（早・中期）
27	上鉄砲町	縄文（中・晩期）	55	室谷洞窟	縄文（草創・早・前・中・後・晩期）、弥生
28	古志王	縄文（中・後期）			

第1表 周辺の主要遺跡一覧



国土地理院発行 1:50,000

「津川」「御神楽岳」「大白岳」「野沢」を使用 (1:100,000)

第6図 北野遺跡及び周辺主要遺跡位置図

6式土器が提示されている〔滝沢<sup>14</sup>1995〕。

中期になると遺跡数はさらに増加し、確認されている遺跡数の上では最盛期を迎えることになる。しかし、発掘調査が行われた遺跡は少なく、北野遺跡の上層を含めても数例に留まる。発掘調査が行われた遺跡としては、上川村キンカ杉遺跡（41）、同村七堀道下遺跡（40）、津川町原遺跡（14）、同町古志王遺跡（28）、同町大坂上道遺跡（21）がある。キンカ杉遺跡は2,000m<sup>2</sup>とそれほど広い調査区では無いにも関わらず、9棟の住居跡と59基の貯蔵穴が検出され、この地域の拠点集落と考えられている。同時に出土した会津地方の特徴を備えている土器群と合わせ、北野遺跡上層との関連が注目される〔遠藤1995〕。原遺跡は縄文時代中期から晩期、弥生時代にかけての遺跡である。津川町教育委員会によって広大な遺跡の一部分の発掘調査が行われ、土壇18基を検出、出土遺物の主体は大木8式から10式期のものである〔山武考古学研究所1985〕。大坂上道遺跡から出土した土器は東関東や北陸の影響が強く見られ、県内の他の地域には認められない傾向を示している〔滝沢<sup>14</sup>前掲〕。また、発掘調査が行われていないものの、三川村堂田遺跡（1）、鹿瀬町長者屋敷遺跡（10）は表面採集資料などから中期以降の大集落であると推定されている。

後期の遺跡は中期から継続しているものが多く、それ以外では、北野遺跡の上層を含め、津川町大師堂遺跡（13）、同町楠川遺跡（38）、鹿瀬町深戸遺跡（12）、三川村牧ノ沢遺跡（5）などがある。遺物が単独で確認される例が多く、集落跡の調査が行われたのは北野遺跡の上層のみとなっている。

晩期の遺跡も中・後期から継続しているものが多く、それ以外では、上川村人ヶ谷岩陰遺跡（45）、津川町入道岩陰遺跡（43）、三川村若宮洞窟遺跡（4）などがある。人ヶ谷岩陰遺跡は三方を山々に囲まれた標高約350mの山間部に位置する。上川村教育委員会が昭和55年に行った発掘調査では晩期最終末の土器群や有柄式石鏃などが出土した〔小野1986〕。

弥生時代に入り、以後、奈良・平安時代までは遺跡数が極端に減少し、人々の生活の痕跡が希薄な時期となる。現在のところ当該期を知る手がかりは、いくつかの遺跡の上層部からわずかに出土する遺物・遺構に限られており、古墳時代・奈良時代の遺跡に関しては皆無という状況である。これは、山岳地帯が卓越し、平坦地が少ないという当地の状況により、弥生時代以降に確立した水稲稲作文化を受容し切れなかった地形的要因も大きかったと考えられる。

中・近世になると政治的な側面を交え、再び人々の痕跡が明確になる。この時代の遺跡としては津川町津川城跡（24）、同町御小屋遺跡（23）などがある。県指定史跡となっている津川城は、建長4年（1252年）に藤倉盛弘によって、阿賀野川と常浪川の合流点に位置する麒麟山に築かれた山城である。特に会津藩にとっては寛永4年（1627年）に江戸幕府の命により取り壊されるまで、越後口警備の重要な拠点であった。また、北野遺跡の上層からも中世の建物跡・溝、近世の墓及びそれらに伴う遺物が出土している。

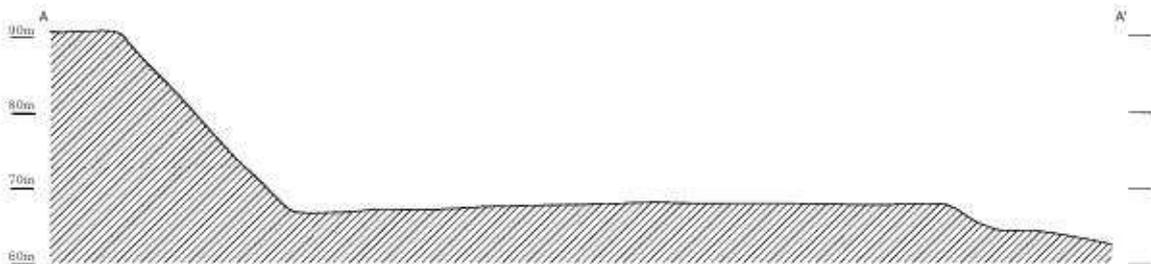
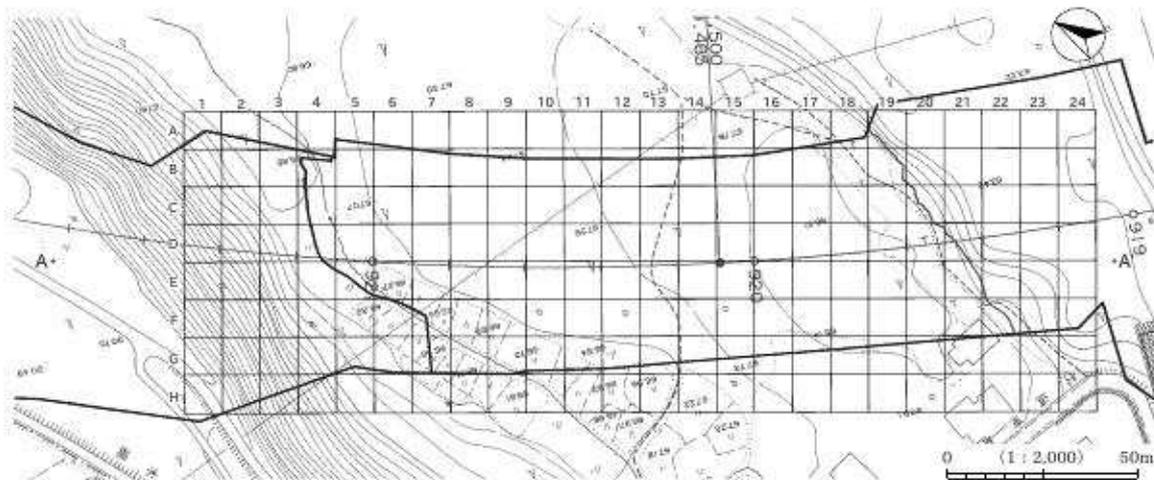
# 第Ⅲ章 調査の概要

## 1 遺跡の立地と微地形 (図版1)

北野遺跡は阿賀野川の支流常浪川によって形成された左岸の段丘平坦地に所在する。この段丘は長さ約450m・幅約130mの広さを持ち、北東-南西方向に三日月状に延びる。西側は比高22mの上位段丘の崖、南側から東側は常浪川、北側は常浪川の氾濫原により区切られる。遺跡の標高は68mで現河床との比高は7mを測る。遺跡はこの段丘のやや北東寄りに、長木集落は中央部から南東側に位置している。西側の段丘崖沿いには小さな沢が流れ<sup>1)</sup>、東-南側の眼前に常浪川が流れ、北-東-南側に開けた土地である。いうなれば南に開けた平坦地で、水場もあり、洪水などの危険も少なく<sup>2)</sup>、人々の生活に適した地に遺跡は立地していたといえる。

このことは発掘調査の結果、この段丘に人々の活動の痕跡が残される縄文時代早期以降～晩期までの遺物が出土し、早期中葉～前期前半・前期後葉～末葉・中期前葉・中期末葉～後期初頭・後期中葉の住居跡が確認され、また、古代・中世、近世以降～現代までの遺物が出土していることから裏付けられる。

なお、発掘調査以前は杉林、一部は畑・水田・墓地として利用されていた。また遺跡名の「北野」は、遺跡付近が「北野」と地区民に呼称されて来たことに由来する。現在、常浪川を挟んで対岸の津川町大字



第7図 グリッド設定図

- 1) 発掘調査時点ではほぼ埋没し水田として利用されていたが、段丘形成後～縄文時代には沢になっていたものと推定される。
- 2) 調査の結果、沼沢火山灰層に覆われた縄文時代の一時期を除いて、洪水に見舞われた痕跡は認められなかった。

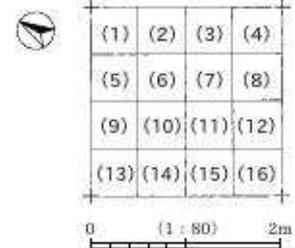
天満に所在する「北野天満宮」が、かつて遺跡付近に「北野神社（天満宮）」として存在していたという伝承が残されている。

## 2 グリッドの設定

グリッドの方向は、自動車道の法線と一致させるため、センター杭を基準とした。STA920（16E杭）（旧座標X = 183.755.613、Y = 85.777.128）を基点とし、STA921（旧座標X = 183.842.765、Y = 85.728.091）と結んだ線（横軸）と、これにSTA920で直交する線（縦軸）を基準線とした。これを基に1辺10mの方眼を組み、これを大グリッドとした（第7図）。この



第8図 小グリッド模式図



第9図 極小グリッド模式図

ため、横軸方向は真北から約29.5度西偏している。大グリッドの表示は、第7図のように縦軸を左から右に算数字順、横軸を上から下へアルファベット順とし、これを組み合わせた。

小グリッドは、大グリッドをさらに2m方眼に25分割した。小グリッドの表示は第8図のように、北隅を1（基点）に算数字順とした。包含層出土遺物の出土地点は、基本的に大グリッドと小グリッドを組み合わせた。

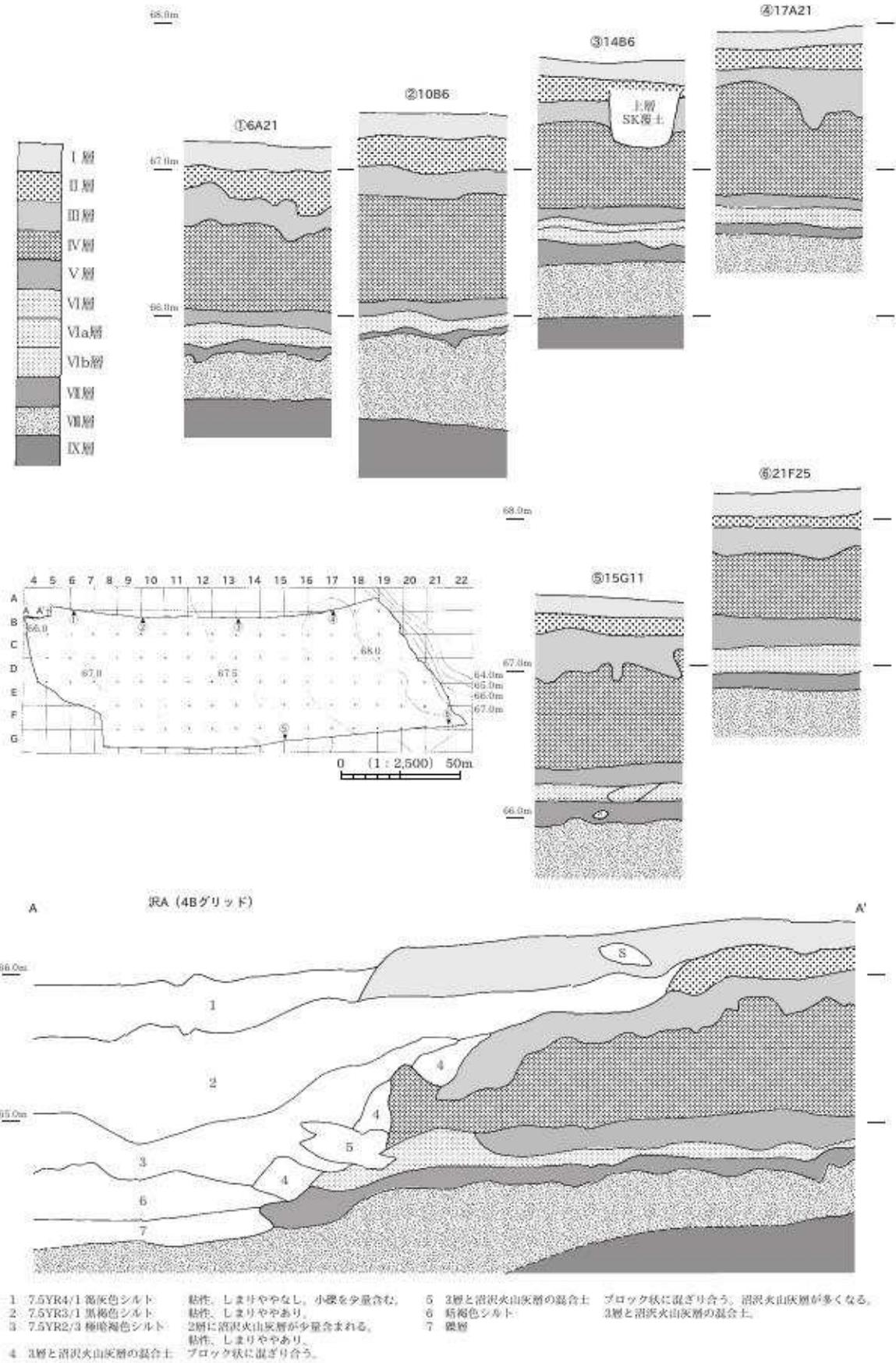
極小グリッドは、2m方眼の小グリッドをさらに50cm方眼に16分割した。極小グリッドの表示は第9図のように、北隅を(1)（基点）に、括弧付きの算数字順とした。微小遺物の検出のための土壌採取などでは、極小グリッドを使用した。

## 3 基本層序

既述のように本遺跡は常浪川左岸の段丘平坦地に立地する。しかし、西側にはほぼ埋没していたが、低湿地が存在し、東側は墓地移転のため攪乱があった。したがって、平坦地はどの地点においても層序は同一であるが、西側の低湿地部分では沢地の埋没堆積となり層序が異なる。また、東側の段丘崖付近ではIV層（沼沢火山灰層）が流出し薄くなる。

以下、基本層序I～IX層まで説明する。なお、色調は『新版標準土色帖』[農林水産省農林水産技術会議事務局1993]を用いた。

- I層：10～20cm 10YR2/2 黒褐色シルト 現表土・耕作土である。
- II層：10～20cm 10YR3/3 暗褐色シルト 縄文時代中期前葉以降の遺物包含層である。
- III層：15～25cm 10YR5/6 黄褐色砂質土 IV層への漸移層。II層とIV層の混じり。
- IV層：50～70cm 10YR8/6 黄橙色砂・2.5Y8/4 淡黄色砂 沼沢火山灰の二次堆積物層（沼沢火山灰層、約五千年前）。IV層下部では、7.5YR7/4 にぶい橙色を呈する。
- V層：10～15cm 7.5YR3/1 黒褐色シルト 縄文時代前期の遺物包含層である。上面からは前期後葉～末葉の遺物が多く出土する。
- VI層：10～15cm 7.5YR3/4 暗褐色シルト。VI層は分層できる時のみa・bを付したが、分層できない



第10図 基本層序と沢Aの土層堆積図

ときは単にVI層とした。VI層最上部より約6,300年前の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰(K-AH)が検出されている(第VI章参照)。早期の遺物包含層である。

VIa層: 0~5cm 7.5YR3/3 暗褐色シルト VIb層よりやや明るい。

VIb層: 10~15cm 7.5YR3/4 暗褐色シルト VIa層よりやや暗い。

VII層: 5~15cm 7.5YR4/3・4/4 褐色砂質土 VII層への漸移層。地山漸移層。

VIII層: 30~40cm 10YR5/6・5/8 黄褐色砂 常浪川の洪水で堆積した砂。地山。

IX層: 砂礫層 常浪川により堆積した砂礫。地山。

## 4 遺構の層位と時期

沼沢火山灰層は西側の沢地部分を除いた、ほぼ全面にわたり確認できた。その層厚は、沼沢火山灰の純層(IV層)が約50~70cm、沼沢火山灰の漸移層(III層)が約15~25cmである。このIII・IV層を合わせると約65~95cmの厚さになり、北野遺跡の上層と下層を明確に区別する間層となっている。上層(I・II層)からは縄文時代中期前葉以降の遺構・遺物、下層から早期中葉~前期末葉の遺構・遺物が検出されている。しかも、沼沢火山灰層は、層状に堆積していることから緩やかな湛水状態での堆積と断定できる。このため、沼沢火山灰層直下では、湛水以前の地形が明確に確認された。また、同直下(V層上面)では前期末葉(大木6式)の遺物、半埋没状態の遺構、住居跡の周堤、SK1052の掘り上げ土などの遺構構築時の盛土や排土も検出された。この面で検出された遺構の覆土は、基本層V層に近似するものであり、前期後葉~末葉の遺構と推定できる。

V層(黒褐色シルト)とVI層(暗褐色シルト)では、層序の明るさに違いが認められた。VI層・VII層(地山漸移層)・VIII層(地山層)で確認された遺構には、V層上面やV層中で確認された遺構と明らかに覆土の明るさ、しまりに違いが認められるものがあった。これらの遺構は、前期以前に構築された遺構と推定される。なお、科学分析の結果、VI層最上部より約6,300年前の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰(K-AH)が検出されている。しかし、分析結果は調査終了後に出されたため、発掘調査時ではしっかりと意識の上での調査はなされなかった。

おおむねV層上面・V層中で確認された遺構は縄文時代前期前葉~末葉に、VI~VIII層で確認された遺構は、一部を除き<sup>1)</sup> その多くは早期の遺構と推定している。

1) 掘立柱建物のSB1045・1063は、VII・VIII層で確認されたが、覆土はV層に近似するものであり、また主軸方向から前期後葉~末葉に所属する遺構と推定される。

# 第Ⅳ章 遺 構

## 1 概 要

北野遺跡下層では、半埋没状態で沼沢火山灰層に覆われた前期末葉の地表面（Ⅴ層上面）、前期後葉～末葉を中心とした遺構・遺物が検出された。図版2では沼沢層直下（Ⅴ層上面）の地形と半埋没状態の遺構、図版3にはⅤ層上面の地形とⅤ層上面・上層で検出された遺構、図版5ではⅦ層（地山漸移層）、Ⅷ層（地山層）の地形と下層検出のすべての遺構を示した。検出された遺構は、竪穴住居（略号SI）18基、掘立柱建物（略号SB）2棟、土坑（略号SK）53基、焼土53基、集石7基、遺物集中地点11か所、溝（略号SD）1条、硬化面（略号SX）1基、その他のピット（略号P）29基である。時期は、縄文時代早期中葉～前期末葉の時期幅を持つ。以下、遺構の種類ごとに概要を記述する。

## 2 竪穴住居

竪穴構造をもつ建物跡を竪穴住居とした。建物の性格を限定しない「掘立柱建物」が2棟検出されているため、建物の性格を限定する名称である「竪穴住居」は「竪穴建物」とすべきかもしれないが、ここでは一般的に定着している「竪穴住居」を用いた。発掘調査時に竪穴住居としたもの9基、整理作業の過程で土坑から竪穴住居へ変更したもの9基で、計18基検出された。

前者の9基は沼沢火山灰層を除去後、半埋没状態であったためⅤ層上面で確認できた。その配置は調査区の中央やや南東寄り、14～16・B～Dグリッドを半円状（環状）に囲むように検出された。炉は検出できなかったものもあるが、掘り込みがあり、床面・柱穴は検出されている。また、構築時に掘り上げた盛土（周堤）が認められたものも多い。規模的にみると、長軸6.2～16.4mの大型竪穴住居と径3.8～4.1mの小型住居に区分される。大型は5基、小型は4基検出されている。すべて伴出遺物、覆土の堆積状況から前期後葉～末葉の集落跡に伴うものである。

後者の9基は発掘調査の時点では土坑との認識で調査したが、整理作業の過程で竪穴住居と改めたものである。確認面はⅦ・Ⅷ層であり、径2m以上の掘り込みを持ち、柱穴と推定されるピットを持つものに限定了。したがって、これ以外にも竪穴住居が存在する可能性もあるが、前述の基準に照らし合わせれば竪穴住居と推定されるものだけに限定した。9基の竪穴住居は、調査範囲の北西側の6～7・B～Dグリッドに5基、中央部やや西側の12～14・E～Fグリッドに4基が集中する。周辺の遺物の分布状況、覆土の状況、確認面などから前者は早期中葉に、後者は前期前葉～中葉に所属すると推定される。

### A 大型竪穴住居

SI1029（図版5・59・62）

検出状況 当初、12C・13B～CのⅤ層上面での窪地は、4B～13Gに延びる浅い沢からの連続と想定していたため、竪穴住居という認識がなかった。上層の調査が終わり、沼沢火山灰層の除去作業が終了する段階になり、14B～Cに竪穴状の落ち込みと隣接して掘り上げ土の盛土らしき遺構が確認されたた

## 2 竪穴住居

め、竪穴住居という想定に切り替え調査を進めた。予想外の大型竪穴住居になり、12Cまで延びた。12Cは既にV層上面での調査が終了し、VII・VIII層まで削平されていたため、柱穴以外は検出できなかった。

**位置** 前期後葉～末葉の集落跡の北側、13～14・B～Cに位置し、南にSI1027が存在する。

**確認面** V層上面が窪み沼沢火山灰層が堆積していたため、この面で確認できた。

**平面形** 前述のように西側の一部は検出されていないが、それ以外の壁の形状、東側の柱穴と西側の柱穴との比較から小判形と推定される。

**規模** 長軸は西側のプランが不明確であることから、東側の柱穴位置を参考に約16.4mと推定した。短軸7.4m、確認面からの深さ28cm、面積108.2m<sup>2</sup>(推定)を測る。長軸方向はN-72°-Wである。

**周堤** 遺存する部分を見る限り、壁上端から幅1.9～5.0m、最大厚11cmの範囲で盛土されていた。幅が広く厚さが薄いのは、住居廃絶後の流失と推定される。周堤は東側ではV～VII・VIII(少量)層の混合土からなり、これ以外ではV・VI・VII(少量)層の混合土からなる。これは東から西に緩く傾斜している地形上に竪穴住居を構築し、掘り込んだ土はすぐ脇の外側に盛土した結果と思われる。周堤部を薄く削平したが、垂木尻の痕跡は検出できなかった。

**壁** 遺存する部分を見る限り、床面より緩やかに立ち上がり、緩やかな傾斜を持つ。

**柱穴** ビットは12基検出され、このうちP1～11を支柱穴と断定した。これらの柱穴は長径44cm・短径35cm・深さ42cm(11基の平均値)のしっかりした掘り込みをもつ。長軸方向に沿って北側に5基、南側に4基がほぼ平行し、それぞれ対になる(P10に対応するのがP4ないしP5)。柱穴覆土は埋土と覆土が明確に識別できるものが多く(P2～4・6・7・10・11)、埋土には基本層VII・VIII層が混入する。P11の柱穴周辺にはIX層の礫が散布することから、柱の根固めには柱穴の掘り込み土が利用されたものと断定できる。また、掘形を見る限り、やや外向きに掘り込まれている柱穴が多い(P1～6・8・10・11)。

**炉** 検出できなかった。

**床** 東から西に緩く傾斜する地形上のため、東側はVIII層、西側はVII層を床面とし、ほぼ平坦である。

**その他の付属施設** P12は柱穴P6とP11のほぼ中間に位置し、径80cm・深さ8cmを測る。平面形は円形、断面形は浅い皿状を呈する。覆土はVII層がやや多く含まれる暗褐色砂質土で、南側に径10cm・厚さ4cmの扁平円礫がある。床面検出と同時に確認されたため、SI1029に伴う施設である。位置的に見ると炉跡の可能性も否定できないが、焼土・灰・内面の赤化、礫の被熱は認められなかった。

**覆土** 沼沢火山灰層下の覆土は、壁際を除き単層である。5～10cmと薄く、基本層V層に近似している。壁際では周堤から流れ込んだ覆土が堆積しており、自然堆積である。

**出土遺物** 覆土・床面から土器10点(1～7)、石器59点(30・49)、礫55点が出土している。

**時期** 出土土器、覆土の堆積状況から前期後葉～末葉である。

**重複関係** 南西側でSI1027とそれぞれの周堤で重複するが、新旧は不明である。

### SI1034 (図版6・21・63)

**位置** 前期後葉～末葉の集落跡の最も東側、17Bに位置し、南にSI1035が存在する。

**確認面** V層上面が窪み沼沢火山灰層が堆積していたため、この面で確認できた。

**平面形** 北西側は一次調査のトレンチや上層遺構のフラスコ状土坑のため破壊されているが、これ以外の形状から小判形と推定される。

**規模** 長軸は北西側のプランが不明確なため、南側の掘り込みライン、柱穴位置などの関係から約7.9mと推定した。短軸4.6m、確認面からの深さ28cm、面積32.4m<sup>2</sup>を測る。長軸方向はN-26°-E

である。

**周 堤** 遺存する部分を見る限り、壁上端から幅0.9～3.0m、最大厚5cmの範囲で確認された。厚さが薄いのは、構築時の掘り込みが浅いためと廃絶後の流出によるものと推定される。周堤土はV・VI層の混合土で構成される。

**壁** 掘り込みが浅いため、床面から緩く立ち上がり、緩い傾斜を持つ。

**柱 穴** ビットは12基検出した。このうちP1・3・9・11・12を支柱穴と判断した。5基の柱穴は、長径59・短径47・深さ54cm（10基の平均値）を測り、しっかりとした掘り込みを持つ。長軸方向に沿って東側にはP12・9・11が、西側にはP1・3が平行し、P1と9、P3と11が対になる。P12に対応する柱穴も存在したと思われるが、一次調査トレンチのため検出できなかった。柱穴の覆土にはいずれも炭化粒が含まれ、P1・11のようにやや多く含まれるものもある。P11・12は柱根部と推定される部分がやや窪んでいる。P9・11・12の掘形を見る限り、やや外向きの掘り込まれている。

**炉** 中央部に炉1（径約80cm）、炉2（103×63cm）、炉3（135×81cm）の3か所で焼土面が見られ、地床炉と判断した。

**床** VI層を床面とし、ほぼ平坦である。

**その他の付属施設** P2・7・10は沼沢火山灰層を除去後に浅い落ち込みが認められ、本住居に伴う施設である。規模はP2が長径84・短径42・深さ30cm、P7が長径96・短径76・深さ22cm、P12が長径120・短径100・深さ70cmを測る。P12は特に規模が大きく、側壁はオーバーハングしている。住居跡に伴う貯蔵穴と推定できる。P2・7も柱穴とは異なる性格の施設と考えている。

**覆 土** 沼沢火山灰層下の覆土は基本的には単層であり、壁際付近を除いては約5cm程度の薄さである。これは構築時の掘り込みが浅いこともあるが、廃絶後あまり期間を経ず沼沢火山灰層に覆われた結果によるものであろう。また、覆土には多量の炭化粒が混入していることから焼失住居の可能性がある。

**出土遺物** 覆土が薄いため出土遺物の多くは、床面からの出土である。住居内から土器49点（8～21）、石器20点、礫30点が出土し、周堤上面からも遺物が認められた。

**時 期** 出土土器、覆土の堆積状況から前期末葉で、沼沢火山灰層に覆われた時期に近いものと推定される。

**重複関係** 17B・1号遺物集中地点と周堤が重複するが、同時期である。

SI1035（図版7・59・64）

**位 置** 前期後葉～末葉の集落跡の東側、17～18・C～Dに位置し、周辺にSI1034・1054が存在する。

**確認面** V層上面が大きく窪み沼沢火山灰層が堆積していたため、この面で確認できた。

**平面形** 北側の一部は一次調査のトレンチにより破壊されているものの、小判形である。

**規 模** 長軸7.5m・短軸4.6m・確認面からの深さ62cm、面積29.1m<sup>2</sup>を測る。長軸方向はN-24°-Eである。

**周 堤** 壁上端から幅1.2～2.7m、最大厚12cmの範囲で盛土されていた。厚さが厚いのは、構築時の掘り込みが深いためにもよるが、廃絶後あまり時をおかず沼沢火山灰層に覆われたためとも思われる。周堤盛土は2層に識別されるが、下層はV・VI層を多く含み、上層はVII層を多く含む。周堤盛土を薄く削平しながら掘り下げたが、垂木尻などの痕跡は認められなかった。

**壁** 床面から緩やかに立ち上がるが、壁中位から壁端部はやや急になる。

## 2 竪穴住居

**柱 穴** 住居内から29基のピットが検出された。このうちP1～8を支柱穴と判断した。これらの柱穴は長径43・短径36・深さ41cm(8基の平均値)を測り、他のピットに比べしっかりと掘り込みを持つ。長軸方向に沿って左側にP1～4、右側にP5～8が平行し、P1と5、P2と6、P3・4とP7・8が対になる。住居の南側のP3・4とP7・8は、4本で対になることから支柱穴以外に入口などの施設の可能性もある。柱穴の掘形を見る限り、P1～3・7がやや外向きに掘り込まれている。

**炉** ほぼ中央部に90×60cmの範囲で床面が焼土化していた。地床炉である。

**床** VII層を床面とし、ほぼ平坦である。

**その他の付属施設** P9は住居の南東側、P6と8のほぼ中間にある。床面検出時に確認されたことから住居に伴う施設である。平面が楕円形、長径90・短径36・深さ20cmを測る。規模が他の柱穴に比べ大きく、覆土も炭化粒が多く含まれ、他の柱穴と異なる。柱穴以外の何らかの施設と推定される。

**覆 土** 沼沢火山灰層下の覆土は、中央部で約10cmを測り、壁際は厚くなる。大きく4層に識別され、壁近くには周堤盛土の流れ込みが多く、自然堆積である。

**出土遺物** 住居内から土器2点(22・23)、石器25点(196)、礫30点が出土している。このほか周堤上面からも遺物が認められた。なお、完形土器22は床面直上の一括である。196はP7に流れ込んだようにも見えるが、住居内覆土出土であり、住居廃絶後の廃棄または周囲からの流れ込みと推定される。

**時 期** 出土遺物、覆土の堆積状況から前期末葉である。また、覆土の堆積は比較的薄く、住居廃絶後、あまり時を経ず沼沢火山灰層に覆われたと推測できる。しかし、SI1034に比べると覆土はやや厚く、周堤盛土の流れ込みが多いことから、SI1034よりやや古いものと推定される。

**重複関係** 17C・3号焼土と周堤盛土が重複する。17C・3号焼土が周堤上にあることからこれより古くなる。

### SI1050 (図版8・65)

**位 置** 前期後葉～末葉の集落跡の南側、15E～F・16Fに位置し、北にSK1048・1055、東にSK1049・1053・1056、南にSK1052・1058、西にSI1051が存在する。

**確認面** V層上面が大きく窪み、沼沢火山灰層が堆積していたためこの面で住居跡と確認できた。

**平面形** 西側の一部は一次調査のトレンチにより破壊されているものの、小判形である。

**規 模** 長軸11.7m・短軸6.0m・確認面からの深さ36cm、面積60.9m<sup>2</sup>を測る。長軸方向はN-12°-Eである。

**周 堤** 壁上端より周囲に5cm前後の周堤盛土が認められ、幾分高くなるものの著しく周辺地形より高くなることはない。しかし、東から西に向けて緩く傾斜する地形の中で西側に多く盛土されていることが認められ、緩斜面を平坦化する意図が窺がえた。周堤盛土はV・VI層を主体とする土で構成されている。

**壁** 掘り込みも浅く、床面からの立ち上がりが緩く、壁面の傾斜も緩やかである。

**柱 穴** ピットは10基検出された。このうちP1～6を支柱穴と判断した。6基の支柱穴は長径44・短径38・深さ47cm(6基の平均値)を測り、しっかりと掘り込みを持つ。主軸方向に沿って西側にP1・3・5が、東側にP2・4・6のそれぞれ3基が平行し、P1と2、P3と4、P5と6が対になる。いずれの柱穴も掘形はやや外向きに掘り込まれている。P7と8は規模が支柱穴に比べると小さく浅いが、住居のほぼ中央部にあり対になる。支柱穴とも推定される。

**炉** 床面の焼土化、被熱礫などの存在は認められず、不明であった。

**床** 東から西に緩く傾斜する地形を掘り込み床面としたため、西側はVI層上～中位を、東側はVI層下

位～Ⅶ層上位を床面とし、ほぼ平坦である。

その他の施設 P9・10は住居の南壁際にあり対になる。規模はP9が径28×32cm、P10が径24×26cmで支柱穴に比べるとやや規模が小さい。何らかの施設に伴うピットと考えている。

覆土 沼沢火山灰層下の覆土は東側の一部を除き単層で、約10cmの厚さである。中央部より東側は覆土が厚くなることから、地形的にやや高い東側周堤盛土からの流れ込みが多かったと推定できる。

出土遺物 土器172点(24～42)、石器14点、礫133点が出土しているが、土器は細片が多い。

時期 出土土器・覆土の堆積状況から明確な時期決定はできないものの、前期後葉～末葉に収まる。

重複関係 SK1052には周堤が切られ、SK1058には本住居の周堤土が乗っている。

#### SI1057 (図版9・66)

位置 前期後葉～末葉の集落跡の最も南側、16～17・F～Gに位置し、北側にSK1052・1058が存在する。

確認面 V層上面が窪み沼沢火山灰層が堆積していたため、この面で確認できた。

平面形 小判形を呈する。

規模 大型住居に分類した中では最も小型の住居で、長軸6.2m・短軸4.6m・確認面からの深さ62cm、面積24.3m<sup>2</sup>を測る。長軸方向はN-13°-Eである。

周堤 壁上端より周囲に厚いところで5cm前後の盛土が認められたが、著しく周辺の地形より高くなることはない。掘り込みが深いため、住居構築時の周堤は高かったと推定されるが、廃絶後から沼沢火山灰層に覆われるまでの期間が長かったため、盛土の多くは住居内及び周辺に流出したものである。盛土は薄く削平したが、垂木尻などの痕跡は認められなかった。

壁 床面からやや緩く立ち上がり、南壁は比較的緩く、これ以外はやや急な傾斜である。

柱穴 ピットは11基検出され、このうちP1～6を支柱穴と判断した。支柱穴は長径37・短径30・深さ30cm(6基の平均値)を測る。しっかりとした掘り込みを持つが、他の大型竪穴住居に比べると規模もやや小さく、深さもやや浅い。支柱穴は長軸方向に沿って左側にP1～3が、右側にP4～6が各3基づつ平行し、P1と4、P2と5、P3と6が対になる。柱掘形を見る限りP1・4～6はやや外向きに掘り込まれている。P7を除き、P8～11は規模も小さく浅いことから支柱穴の可能性もある。

炉 中央部のやや南側P2・3・5・6のほぼ中間に径83×80cm・深さ5cmの掘り込み炉があり、北側に長さ22cm・幅14cm・厚さ8cmの炉石が置かれていた。

床 Ⅶ層を床面とし、ほぼ平坦であるものの、壁際近くに比べ中央部がやや低くなる。

その他の付属施設 P7は長さ72・幅21・深さ6cmの小溝状を呈し、南壁にほぼ平行する。またP3・6・11に挟まれている。入口など何らかの施設に関するものと考えている。

覆土 沼沢火山灰層下の覆土は、中央部で23cmの堆積を示し、壁際ではさらに厚くなる。大きく3層に識別され、壁近くで周堤からの流れ込みが多くなり、自然堆積である。覆土は他の大型竪穴住居に比べ、最も厚く堆積する。大型住居の中で最も小さく掘り込みが深いことにもよるが、住居の廃絶から沼沢火山灰層に覆われるまでの期間が長かったものと推定される。

出土遺物 南西側の覆土から多く出土した。覆土から多く出土し、床面からは少ない。土器はいずれも細片である。内訳は土器57点(43～56)、石器63点、礫147点である。石器が多く、剥片52点を数える。

時期 出土遺物、覆土の堆積状況から明確な時期決定はできないものの、前期後葉～末葉の時間幅に収まる。ただし、覆土が厚いことから住居の廃絶から沼沢火山灰層に覆われるまでの期間が長いことが

想定され、大型竪穴住居の中では比較的古くなる可能性がある。

## B 小型竪穴住居

SI1027 (図版10・59・67)

位置 前期後葉～末葉の集落跡の西側、13C～Dに位置し、SK1028と重複し、周辺にSI1029・SK1076・1077が存在する。

確認面 V層上面が窪み沼沢火山灰層が堆積していたため、この面で確認できた。

平面形 円形を呈する。

規模 長径3.8m・短径3.5m・確認面からの深さ38cm、面積10.2m<sup>2</sup>を測る。

周堤 壁上端から幅1.2～1.9m、最大厚12cmの範囲で盛土されていた。周堤盛土はV～VII層の混合土である。

壁 床面からの立ち上がりは比較的緩いが、壁面はやや急斜である。

柱穴 ビットは23基検出された。このうちP1～5・7・9～11は形と掘り込みがしっかりし、位置的にも壁際ないし壁近くに位置する。覆土は炭化粒が少量混入する暗褐色砂質土またはシルトである。なお、掘形を見る限り、P1・4・5・7・10・11はやや内向きに掘り込まれていた。

炉 検出できなかった。

床 VII層を床面とし、ほぼ平坦であるものの壁際から中央部にかけて緩く傾斜する。

その他の付属施設 P8は長径60・短径56・深さ29cmを測り、他のビットに比べると著しく大きい。小型竪穴住居の柱穴はいずれも径が小さいことを考えると、柱穴以外の施設の可能性がある。なお、同様のビットはSI1036でも認められている。

覆土 沼沢火山灰層下の覆土は、中央部で厚さ約15cmを測る。壁際ほど厚くなり、自然堆積である。大きく3層に識別され、壁際から堆積した様子が明らかである。覆土は主に周堤盛土からの流れ込みである。

出土遺物 覆土下層からの出土はあるものの、床面からの出土は皆無である。内訳は土器15点(57～62)、石器10点、礫4点である。

時期 遺物、覆土の堆積状況からは詳細な時期決定はできないが、前期後葉～末葉の時期幅に収まる。

重複関係 床面下でSK1028と重複するが、これより新しい。また、北側でSI1029と周堤が重複するものの新旧関係は不明である。

SI1036 (図版10・67・68)

位置 前期後葉～末葉の集落跡のほぼ中央部やや南側、15～16・D～Eに位置する。

確認面 V層上面が窪み沼沢火山灰層が堆積していたため、この面で確認できた。

平面形 楕円形を呈する。

規模 長径4.1m、短径3.6m、深さ32cm、面積11.9m<sup>2</sup>を測る。

周堤 壁上端から幅0.7～2.7m、最大厚9cmで盛土されていた。盛土はV～VII層の混合土である。

壁 床面からの立ち上がりから壁上端まで緩やかな傾斜である。

柱穴 ビットは12基検出されたが、P1を除き径20～30cmの円形を呈する。このうちP2～5は深さ33cm(4基の平均値)を測り、しっかりと掘り込みを持つ。主軸方向に沿って南側にはP2・3が、北側にはP4・5が平行し、P2と5、P3と4がそれぞれ対になる。P2～5を主柱穴と考えている。

炉 中央部やや東寄りに径45cmの範囲で床面が焼土化し、炭化粒が集中する部分が認められた。地床炉である。

床 VII層下面～VIII層上面を床面とし、ほぼ平坦である。

その他の付属施設 P1は長径80、短径47、深さ38cmを測り、他のピットに比べると著しく大きい。小型竪穴住居の柱穴はいずれも径が小さいことを考えると柱穴以外の施設の可能性がある。なお、同様のピットはSI1027でも認められている。

覆土 沼沢火山灰層下の覆土は、中央部で厚さ約15cmを測り、壁に近づくにつれ厚くなり自然堆積である。大きく3層に識別され、壁際から堆積した様子が明らかである。覆土は主に周堤盛土の流れ込みである。

出土遺物 床面からの出土が多い。内訳は土器10点(63～68)、石器5点、礫12点である。

時期 遺物、覆土の堆積状況から詳細な時期決定はできないが、前期後葉～末葉の時期幅に収まる。

#### SI1051 (図版11・68・69)

位置 前期後葉～末葉の集落跡の南西側、15F～Gに位置する。

確認面 V層上面がわずかに窪み沼沢火山灰層が堆積していたため、この面で確認できた。

平面形 円形を呈する。

規模 長径3.9m、短径3.6m、深さ26cm、面積10.4m<sup>2</sup>を測る。

周堤 壁上端より周囲に盛土が認められたが、極めて薄く周辺の地形よりやや高くなる程度である。掘り込みが浅いことにもよるが、廃絶後から沼沢火山灰層に覆われるまでの期間が長かったため、盛土の多くは住居内及び周辺に流出したものとも思われる。盛土はV層を主体とするV・VI層の混合土である。

壁 床面からの立ち上がりから壁上端まで極めて緩やかな傾斜である。

柱穴 ピットは6基検出されたが、このうちP1～4は長径24・短径21・深さ19cm(4基の平均値)を測り、しっかりとした掘り込みを持つ。P2・4が壁際に、P1・3がやや内側に位置し、それぞれ対になるように配置される。P1～4を支柱穴と考えている。残りの2基は大きさもやや小さく浅いため、支柱穴と考えている。

炉 検出できなかった。

床 VI層上位を床面としほぼ平坦であるが、中央部に向かって緩く傾斜するため、浅い皿状を呈する。

覆土 沼沢火山灰層下の覆土は中央部で厚さ約10～15cmを測り、壁際ほど厚くなり自然堆積を示す。黒褐色土の単層であり、やや高い東側から周堤盛土が多く流れ込み堆積した様子が明らかである。

出土遺物 覆土や床面から土器・石器・礫が出土している。内訳は土器17点(69～75)、石器12点、礫25点である。

時期 出土遺物から前期末葉に所属する。

#### SI1054 (図版11・69)

位置 前期後葉～末葉の集落跡の中央やや東側、16～17・C～Dに位置し、南東側にSI1035が存在する。

確認面 V層上面がわずかに窪み沼沢火山灰層が堆積していたため、この面で確認できた。

平面形 円形を呈する。

規模 長径3.8m、短径3.6m、深さ20cm、面積10.6m<sup>2</sup>を測る。

周堤 壁上端より周囲にわずかに盛土が認められたが、極めて薄く周囲よりやや高くなる程度であ

## 2 竪穴住居

る。盛土の薄さは掘り込みが浅いことと流失によるためと考えられる。盛土はV・VI層の混合土である。

壁 床面からの立ち上がりから壁上端まで極めて緩やかな傾斜である。

柱 穴 ビットは17基検出された。長径26・短径22cm(17基の平均値)を測る。

炉 ほぼ中央部に炭化粒が多く認められたが、炉跡と断定できなかった。

床 VII層上面を床面としほぼ平坦であるが、中央部に向かって緩く傾斜するため、浅い皿状を呈する。

覆 土 沼沢火山灰層下の覆土は、中央部で厚さ約15cmを測り、壁に近づくにつれ厚くなる。自然堆積である。大きく3層に識別され、壁際から堆積した様子が明らかである。主に周堤盛土の流れ込みであるが、地形的にやや高い南西側から多く流れ込み堆積している。

出土遺物 覆土や床面から土器・石器・礫が出土している。内訳は土器3点(76～78)、石器1点、礫11点である。

時 期 遺物、覆土の堆積状況からは詳細な時期決定はできないが、前期後葉～末葉の時期幅に収まる。

重複関係 16D・1号焼土、17C・1号焼土と重複するが、覆土内からの検出であり、住居が埋まる過程の中で焼土が形成されたものと判断できる。したがって、焼土よりSI1054が古くなる。

### C 土坑から変更された竪穴住居

発掘調査時には土坑と認識して調査したが、整理作業の段階で竪穴住居に変更したものである。変更する基準として、径2m以上の竪穴状の掘り込みがあり、柱穴と推定されるビットが1基以上確実に存在し、図面・写真・調査所見などからほぼ確実に竪穴住居と推定されるものに限定した。したがって、この基準に満たないものでも竪穴住居の可能性のある土坑も存在する。これらの土坑については、土坑の個別説明でその可能性を述べる。なお、土坑から竪穴住居に変更された遺構には、土坑との認識で調査したため、竪穴住居としての情報が充分得られなかったものもある。

#### SI1003 (図版13・70)

位 置 調査区の北西部、7Bに位置する。

確認面 VI層を削平中に確認した。

平面形 楕円形を呈する。

規模 長径2.7m、短径2.1m、深さ22cm、面積4.7m<sup>2</sup>を測る。長軸方向はN-2.5°-Eである。

壁 床面からの立ち上がりから壁上端まで緩やかな傾斜である。

柱 穴 ビットは43基検出された。長径18・短径14・深さ10cm(43基の平均値)を測る。小規模で浅いものが多い。

炉 なし。

床 VII層を床面とし、やや凹凸がある。

覆 土 確認面から中央部で厚さ約10cmを測り、自然堆積である。しまりのある黒色土を主体とし、大きく3層に識別される。

出土遺物 覆土から石器・礫が出土している。内訳は剥片3点、礫8点である。

時 期 伴出遺物が少なく詳細な時期決定はできないが、周辺出土の土器から早期中葉期と推定される。

#### SI1008 (図版13・70)

位 置 調査区の北西部、6Dに位置する。

確認面 V～VI層を削平中に確認した。

- 平面形 不整隅丸方形状を呈する。
- 規模 長径3.6m、短径3.1m、深さ20cm、面積8.6m<sup>2</sup>を測る。長軸方向はN-20°-Wである。
- 壁 部分により異なるが、立ち上がりから壁上端までやや急な傾斜で、壁ラインの凹凸がやや激しい。
- 柱 穴 完掘写真を見る限り、小穴状のピットが20本以上検出されている。
- 炉 なし。
- 床 VII層を床面とし、やや凹凸がある。
- 覆 土 確認面から中央部で厚さ17cmを測り、2層に識別される。自然堆積である。
- 出土遺物 覆土から土器・石器・礫が出土している。内訳は土器3点、石器3点、礫7点である。
- 時 期 伴出遺物が少なく詳細な時期決定はできないが、周辺出土の土器から早期中葉期と推定される。

SI1011 (図版13・71)

- 位 置 調査区の北西部、6Cに位置し、東側にSI1012が存在する。
- 確認面 VII層を削平中に確認した。
- 平面形 不整形を呈する。
- 規模 長径2.1m、短径1.2m、深さ14cm、掘り込み面積2.1m<sup>2</sup>を測る。長軸方向はN-11°-Wである。
- 壁 部分により異なるが、立ち上がりから壁上端までおおむね緩やかな傾斜である。
- 柱 穴 ピットは写真で見える限り、10基以上検出されている。このうちしっかりとした掘り込みを持つ2基を図示した。P1は長径28・短径22・深さ11cm、P2は長径25・短径17・深さ10cmを測る。
- 炉 なし。
- 床 VII層を床面とし、やや凹凸がある。
- 覆 土 確認面から中央部で厚さ約10cmを測る。粘性のない黒色土・暗褐色土を主体とし、大きく4層に識別される。SI1012の覆土に近似する。
- 出土遺物 覆土から石器・礫が出土している。内訳は石器2点(199)、礫14点である。
- 時 期 伴出遺物が少なく詳細な時期決定はできないが、周辺出土の土器から早期中葉期と推定される。

SI1012 (図版13・71)

- 位 置 調査区の北西部、6Cに位置し、西側にSI1011が近接する。
- 確認面 VII層を削平中に確認した。
- 平面形 北東側は一次調査のトレンチで破壊を受け、全容は明らかでないものの不整形を呈するものと推定される。
- 規模 推定長径2.7m、短径1.7m、深さ9cm、面積3.0m<sup>2</sup>を測る。長軸方向はN-7.5°-Eである。
- 壁 部分により異なるものの、立ち上がりから壁上端までおおむね緩やかな傾斜である。
- 柱 穴 比較的しっかりとした掘り込みを持つピットは、7基検出された。長径28・短径21・深さ11cm(7基の平均値)を測る。
- 炉 なし。
- 床 VII層を床面とし、やや凹凸がある。
- 覆 土 確認面から中央部で厚さ約8cmを測り、上層は黒褐色土・暗褐色土が、下層は黄褐色土が主体となる。1・2層はSI1011の覆土に近似する。
- 出土遺物 覆土から石器・礫が出土している。内訳は石器2点、礫29点である。

## 2 竪穴住居

時 期 伴出遺物が少なく詳細な時期決定はできないが、周辺出土の土器から早期中葉期と推定される。

### SI1016 (図版14・71)

位 置 調査区の北西部、7Cに位置する。

確認面 VII層を削平中に確認した。

平面形 不整形を呈する。

規 模 長径2.0m、短径1.8m、深さ8cm、掘り込み面積2.3m<sup>2</sup>を測る。

壁 部分により異なるものの、立ち上がりから壁上端まで緩やかな傾斜である。

柱 穴 ビットは16基検出された。長径18・短径14・深さ9cm(16基の平均値)を測る。小規模で深さも10cm未満のものが大半である。

炉 なし。

床 VII層を床面とし、やや凹凸がある。北側・南側の壁近くは中央部よりやや高くなる。

覆 土 確認面から中央部で厚さ約10cmを測る。しまりのある黒色土の単層である。

出土遺物 出土していない。

時 期 伴出遺物が少なく詳細な時期決定はできないが、周辺出土の土器から早期中葉期と推定される。

### SI1037 (図版14・71)

位 置 調査区のほぼ中央のやや西寄り、12Eに位置する。

確認面 VII層を削平中に確認した。

平面形 不整形を呈する。

規 模 長径2.4m、短径1.7m、深さ12cm、面積3.1m<sup>2</sup>を測る。長軸方向はN-55.5°-Eである。

壁 立ち上がりから壁上端まで緩やかな傾斜である。

柱 穴 写真を見る限り10基以上のビットが検出されている。P1は南側壁際にあり、長径40・短径35・深さ16cmを測る。これ以外は小規模で、深さも浅い。

炉 なし。

床 VIII層上面を床面とし、やや凹凸がある。

覆 土 中央部で厚さ約6cmを測る。炭化粒を含んだしまりのある暗赤褐色土・暗褐色土を主体とし、3層に識別される。

出土遺物 出土していない。

時 期 伴出遺物がなく詳細な時期決定はできないが、周辺出土の土器や覆土のしまりから前期前葉～中葉期と推定される。

### SI1039 (図版14・72)

位 置 調査区のほぼ中央やや西寄り、12Eに位置する。

確認面 VI層を削平中に確認した。

平面形 やや凹凸があるものの、隅丸長形状を呈する。

規 模 長径3.3m、短径2.5m、深さ28cm、面積6.8m<sup>2</sup>を測る。長軸方向はN-32.5°-Eである。

壁 部分により異なるものの、立ち上がりから壁上端まで急な傾斜である。

柱 穴 写真を見る限り、壁際に規模の小さいビットが多く検出されている。このうちP1は南側壁近くにあり、径45・深さ11cmを測る。他のビットと異なり、規模も大きくしっかりした掘り込みを持つ。

炉 なし。

床 VII層を床面とし、やや凹凸があるもののほぼ平坦である。

覆 土 中央部で厚さ約15cmを測り、自然堆積である。炭化粒を含んだしまりのある赤褐色土・暗褐色土・褐色土を主体とする4層に識別される。

出土遺物 覆土より剥片2点、礫2点出土している。

時 期 伴出遺物がなく詳細な時期決定はできないが、周辺出土の土器や覆土のしまりから前期前葉～中葉期と推定される。

#### SI1040 (図版14・72)

位 置 調査区のほぼ中央やや南寄り、13Eに位置する。

確認面 VII層を削平中に確認した。

平面形 南側に張り出しを持つ不整楕円形を呈する。

規 模 長径2.2m、短径1.8m、深さ16.5cm、面積3.1m<sup>2</sup>を測る。長軸方向はN-80°-Eである。

壁 部分より異なるものの、立ち上がりから壁上端まで緩やかな傾斜である。

柱 穴 4基のピットが検出されている。長径40・短径35・深さ16cm(4基の平均値)を測る。小規模で深さも浅い。

炉 なし。

床 VII層上面を床面とし、やや凹凸がある。

覆 土 中央部で厚さ約13cmを測り、自然堆積である。炭化粒を含んだしまりのある黒褐色土・暗赤褐色土を主体とする2層に識別される。

出土遺物 覆土より土器2点(85)、剥片2点、礫1点が出土している。

時 期 伴出遺物が少なく詳細な時期決定はできないが、周辺出土の土器や確認面の層位、覆土の状況から前期前葉～中葉期と推定される。

#### SI1071 (図版14・72)

位 置 調査区のほぼ中央やや南寄り、14Fに位置し、東側はSI1050が存在する。

確認面 VI層を削平中に確認した。

平面形 楕円形を呈する。

規 模 長径2.4m、短径2.0m、深さ14cm、面積3.7m<sup>2</sup>を測る。長軸方向はN-5.5°-Eである。

壁 立ち上がりから壁上端まで緩やかな傾斜である。

柱 穴 壁際に3基のピットが検出されている。長径45・短径31・深さ15cm(3基の平均値)を測り、いずれもしっかりとした掘り込みをもつ。

炉 なし。

床 VII層上面を床面とし、やや凹凸があるものの、ほぼ平坦である。

覆 土 中央部で厚さ約10cmを測り、自然堆積である。暗褐色土・褐色土を主体とする2層に識別される。

出土遺物 覆土から礫2点出土している。

時 期 伴出遺物がなく詳細な時期決定はできないが、周辺出土の土器や確認面の層位、覆土の暗褐色土から前期前葉～中葉期と推定される。

重複関係 SI1050の周堤と重複するが、周堤より下層で確認されたことから、SI1050よりも古い。

### 3 掘立柱建物

2棟検出されており、いずれも前期後葉～末葉の集落跡の南側に存在する。柱穴覆土、主軸方向、周辺の出土遺物の状況、位置から前期後葉～末葉の集落跡に伴うものと考えている。

#### SB1045 (図版12・69)

前期後葉～末葉の集落跡の最も南側、19・F～Gに位置する。桁行2間、梁間1間の南北棟建物(N-11.5°-E)で、長軸方向はSI1050・1057とほぼ一致する。柱間寸法は東桁行5.4m(P1～2間2.0m、P2～3間1.6m、P3～4間1.8m)、西桁行5.6m(P5～6間2.0m、P6～7間1.8m、P7～8間1.8m)、北梁間2.2m、南梁間2.5mで、柱内側面積は13.0m<sup>2</sup>である。梁間寸法がやや異なるものの、ほぼ長方形に並ぶ。柱穴掘形は長径18～44cm、短径18～34cm、確認面からの深さ13～23cmを測る。覆土は黒褐色土・暗褐色土で構成されるが、上層はV層に近似する黒褐色土である。重複関係はない。

#### SB1063 (図版12・70)

前期後葉～末葉の集落跡の南側、17～18・F～Gに位置する。桁行2間(5.8m)、梁間1間(2.6m)の東西棟建物(N-64°-W)で、長軸方向はSI1029とほぼ一致する。柱間寸法は北桁行(P2～3間2.8m、P3～6間3.0m)、南桁行(P1～4間3.0m、P4～5間2.8m)共に5.8mでほぼ長方形に並ぶ。柱内側面積は15.1m<sup>2</sup>を測る。柱穴掘形は長径32～50cm、短径28～42cm、深さ36～61cmを測る。覆土は黒褐色土・暗褐色土・褐色土で構成されるが、上層はV層に近似する黒褐色土である。柱穴掘形を見る限りSB1063のほうがSB1045よりやや規模が大きい。17F・2・3号焼土、18F・1・3号焼土、18G・1号焼土、17F・3号集石、18F・1号集石と重複するが、焼土、集石に乱れがないため、これより古くなる。

### 4 土 坑

総数53基を数える。分布は竪穴住居ほどまとまりはないが、調査区北西部の竪穴住居群周辺から沢A沿いの微高地、調査区中央部から東部の竪穴住居群周辺に多く分布する。竪穴住居の存在しない10B杭周辺にも4基集中するが、おおむね竪穴住居群周辺にあり、竪穴住居との密接な関係が窺われる。遺構の確認面は、V層上面の半埋没状態で確認されたものも含め、V～VI層で確認された。所属時期はすべて縄文時代であり、早期中葉～前期末葉に収まる。特徴的な所見のみ抽出して記述する(別表1参照)。

#### SK1001 (図版15・72)

覆土下層から早期中葉の田戸上層式期の土器3点(79)、石器3点、礫1点が出土している。土器、確認面、覆土の状況から早期中葉の所産と推定される。

#### SK1002 (図版15・73)

覆土はしまりのある黒褐色土・暗褐色土の2層に識別され、自然堆積である。SI1003の覆土に近似する。

#### SK1004 (図版15・73)

確認面はVI層であるが、出土遺物(80～83)、周辺遺構の時期から前期後葉～末葉と推定される。

#### SK1005 (図版15・73)

底面はほぼ平坦で、側壁は垂直ないしはオーバーハング気味に立ち上がる。また、底面のほぼ中央部に長径25・短径22・深さ27cmのピットが穿たれている。

## SK1007 (図版15・74)

平面形は不整形であるが、掘り込みがしっかりしている。底面はやや凹凸があり、壁は緩く立ち上がる。住居跡の可能性のあるものの、幅が狭く柱穴と思われるピットが検出されないことから土坑とした。

## SK1015 (図版15・74)

覆土は2層に識別されるが、主体はⅦ層に近似したしまりのある暗褐色土である。確認面、覆土、周辺の遺物・遺構の状況から早期中葉と推定される。

## SK1019 (図版15・75)

底面はやや凹凸があり、壁は緩く立ち上がる。壁際にピットが3基検出されている。住居跡の可能性もあるが、規模がやや小さいため土坑とした。時期は確認面から土器片が多数(86・162～164)が出土<sup>1)</sup>し、確認面、周片の遺物出土状況などから前期前葉と推定される。

## SK1021・1023・1024 (図版15・16・75・76)

いずれも規模がほぼ同じ。形状も底面が平坦で、側壁は急斜～垂直を呈する。SK1005に類似<sup>2)</sup>する。10C杭周辺に分布し、同じ性格の土坑と推定される。所属時期はSK1021の繊維を含んだ土器細片2点から前期前葉～中葉と考えている。

## SK1025 (図版16・76)

底面はやや凹凸があり、壁は緩く立ち上がる。図示されたピットは1基であるが、写真を見る限りほかにもピットが数基検出されている。住居跡の可能性もあるが、規模がやや小さいため土坑とした。

## SK1028 (図版16・77)

SII027と重複するが床面下にあり、これより古くなる。

## SK1033 (図版16・77・78)

側壁がオーバーハングする小フラスコ状土坑である。

## SK1042・1047 (図版17・78)

それぞれ重複するが、SK1042がSK1047を切って構築している。SK1042が新しい。なお、SK1042は側壁が垂直ないしはオーバーハングする小フラスコ状土坑である。

## SK1044 (図版17・79)

覆土上層から前期後葉の浮島式を含む土器(89～93)が出土しており、前期後葉の所産と推定される。

## SK1046 (図版17・79)

側壁は垂直ないしはオーバーハング気味に立ち上がる小フラスコ状土坑である。

## SK1048・1055 (図版18・79)

それぞれ重複するが、SK1048がSK1055を切って構築しているため、SK1048が新しい。

## SK1052 (図版17・80)

側壁は垂直ないしオーバーハング気味に立ち上がる。大型のフラスコ状土坑である。SII050の周堤と重複するが、周堤を切って構築している。東から西に緩く傾斜する地形に構築したため、掘り込み土は低い西側に積み上げている。周囲を平坦にしようとする意図が窺える。

1) 確認面出土であったため、図版は包含層遺物として掲載してある。

2) SK1005は底面中央部にピットが存在する。SK1023も写真を見る限り、ピットらしい痕跡が見える。

## SK1058 (図版18・80)

SI1050の周堤と重複するが、周堤が乗っているため、SI1050より古くなる。

## SK1059 (図版18・81)

側壁は垂直ないしはオーバーハング気味に立ち上がる。小フラスコ状土坑である。なお、底面のほぼ中央部に長径25cm・短径23cm・深さ22cmのピットが穿たれている。

## SK1060 (図版18・81)

一部は近世墓墳に破壊されている。

## SK1064 (図版18・81・82)

大半が上層遺構(縄文時代中期のフラスコ状土坑)に破壊され、詳細は明らかでない。

## SK1066・1067・1069・1073 (図版18・19・82・83・84)

すべて集石土坑で、分布範囲は比較的集中する。規模の違いはあるが、確認面、礫の被熱、底面の凹凸状態、遺物出土量(少ない)、位置などに共通性がある。性格も同一で、時期も同じく前期前葉～中葉と考えている。なお、SK1066はSI1054の周堤と重複するが、周堤が乗っているため、SK1066が古くなる。

## SK1074 (図版19・84)

SI1050と重複するが、SI1050が乗っているため、SK1074が古くなる。

## 5 焼 土

住居や土坑などの遺構に伴わず、地面が焼土化している単独の遺構である。屋外焼土遺構〔鈴鹿ほか1996〕、焼土遺構〔松本ほか1987〕などと呼称されている。総数53基を数える。分布は調査区北西部の竪穴住居群周辺、12～18列グリッドの前期後葉～末葉の集落跡に大半が分布する。前期後葉～末葉の集落跡に伴う焼土は、SI1029の北側の12B周辺、SI1029の西側の12D周辺、集落跡南部の17～18・E～G、SI1034・1035の西側などに多く分布する。住居跡や土坑の周辺でありながら、比較的遺構の少ない区域に分布している。焼土の平面形は多様であり、その規模は長径54・短径40・深さ5cmである(53基の平均値)。焼土範囲を見る限り地面が焼けただけのものであり、地面を掘り込んだりした痕跡は認められない。共伴する遺物は皆無であるが、所属時期は確認面が比較的明瞭なことから、およその時期は推定できた。調査区北西部の焼土はV～VI層で確認されたことから早期中葉～前期、中央やや西側の11～12D、12～13・E～Gの多くはV層から確認されたことから前期前葉～中葉に、前期後葉～末葉の集落跡周辺では、V層上面ないしは上位で確認されたことから前期後葉～末葉に所属するものと考えている。特徴的な事柄を個別に説明する(別表1参照)。

## 13E・5号焼土(図版21)

13E・1号遺物集中区と重複するが、遺物集中区の下に形成されていることからこれより古くなる。

## 16D・1号焼土、17C・1号焼土(図版21)

共にSI1054の覆土内で検出され、住居廃絶後の埋没過程で、焼土が形成されている。SI1054は前期後葉～末葉期と推定される住居であることから、16D・1号焼土、17C・1号焼土はこれより新しく前期末葉と考えている。

## 17C・3号焼土(図版21・87)

SI1035の周堤と重複するが、周堤直下のV層上面に形成されていることからこれより古くなる。

17F・2号・3号焼土、18F・1号・3号焼土、18G・1号焼土（図版22）

SB1063の範囲内で重複するものの柱穴と直接重複しない。しかし、焼土がV層上面で検出され、良好に遺存していたことからSB1063が古くなる。

## 6 集石

掘り込みを持たず礫が集中的に出土した遺構で、ほぼ同一レベル面から礫が出土する。総数7基検出した。分布は8Eに1基、14Fに1基、それ以外は17F～G・18Fに集中分布する。

8E・1号集石（図版22・87）

範囲が3mを超える大規模のものであり、焼礫1,373点（180.7kg）出土した。時期は確認層位、位置、周辺の出土遺物状況から前期前葉と考えている。

14F・1号集石（図版22・87）

径40cmの範囲に5～10cmの焼礫約60点が集中している。確認面、周辺の出土遺物の状況から前期前葉～中葉と考えている。

17F・1号～3号集石、17G・1号集石、18F・1号集石（図版22・87・88）

確認面、規模、焼礫が皆無であること（17G・1号集石で数点の焼礫を認める）などから、同一時期・同一性格の集石と推定される。SB1063と重複するものがあるが、集石に乱れがないことからこれより新しい。時期は確認面、分布位置、周辺の出土遺物の状況から前期後葉～末葉と考えている。

## 7 遺物集中地点

土器・石器が集中出土した地点である。多くは廃棄に伴うものと考えますが、明確には判断しかねる。同一個体の土器や同一母岩の石核・フレイク・チップが集中出土した地点などがある。

8D・2号遺物集中地点

早期中葉、田戸上層式の土器（129）がつぶれた状態で出土する。確認面はV層下位である。

13E・3号遺物集中地点（図版22）

一次調査のトレンチで一部破壊されているが、49×19cmの狭い範囲に同一母岩の石核4点・剥片277点・チップ3,194点の計3,475点がまとまって出土し、接合（243・247）している。敲磨石類も2点出土し、うち1点はD1類（敲石）である。石器製作が行われた場所と考えている。

17B・1号遺物集中、18D・2号遺物集中

それぞれSI1034、SI1035の周堤上に位置する。住居跡と同時期と考えている。

## 8 溝

SD1030（図版20・85）

下層で1条検出された遺構である。9E23から9F3・8に延び、長さ4.1m、幅20cm、深さ10cmを測る。底面はやや凹凸があるもののほぼ平坦で、側壁は垂直に近い状態で立ち上がる。遺物は出土していない。時期は確認面がV層上面であることから前期後葉～末葉と推定される。

## 9 ピット

竪穴住居や掘立柱建物・土坑などに伴わない単独のピットで、総数29基検出した。分布は6C・7C、13B、19～20Eにややまとまっている。他の遺構との関わり、性格、時期など不明な点が多い。

### 6C・P1 (図版20)

確認面はVI層で、覆土は黒褐色土の単層である。平面形は楕円形、底面はほぼ平坦、北西側はテラス状になる。側壁はやや急に立ち上がる。確認面、覆土、周辺の遺構や遺物の状況から、時期は早期中葉期と推定される。なお、ピットとして処理したが、大きさから土坑の可能性もある。

### 7C・P1 (図版20)

確認面はVII層上面で、覆土はしまりのある暗褐色土の単層である。平面形は不整形、底面はほぼ平坦、側壁はやや急に立ち上がる。遺物は土器(106)、石器(18)が出土している。時期は出土遺物から早期中葉である。なお、ピットとして処理したが、大きさから土坑の可能性もある。

### 7C・P2・P3

確認面はVII層上面で、覆土はしまりのある黒褐色土の単層である。遺物はP2から剥片1点、P3から剥片2点出土している。確認面、覆土、周辺の遺構・遺物の状況から、時期は早期中葉期と推定される。

### 8D・P1

確認面はVIII層上面で、覆土は黒褐色土の単層である。遺物は土器(107)が出土している。

### 12E・P1

確認面はVI層で、覆土はしまりのある暗赤褐色土の単層である。平面形は不整形、底面はほぼ平坦、側壁はやや急に立ち上がる。遺物は剥片1点出土する。時期は確認面、覆土、周辺の遺物・遺構から前期前葉～中葉と推定している。なお、ピットとして処理したが、大きさから土坑の可能性もある。

## 10 硬化面

### SX1062 (図版20・85)

1か所のみを検出である。前期後葉～末葉の集落跡の南東部、18E10に位置する。平面形は不定形、長さ71cm、幅54cm、厚さ2.5cmを測る。周囲の土質(確認面V層上位)とは明らかに異なり、砂を多く含み堅くしまった面で、人為的な遺構と判断した。遺物は出土していない。性格は不明であり、時期は確認面、周辺の遺物・遺構の状況から前期後葉～末葉と考えている。

# 第V章 遺 物

## 1 概 要

北野遺跡下層の遺物は、縄文時代早期に比定されるものから沼沢火山灰の二次堆積層に覆われる直前の前期末葉までの多時期に渡る。このうち、主体をなすのは前期後葉～末葉の集落に伴う土器・石器<sup>1)</sup>、次いで前期前葉～中葉の土器・石器、早期中葉の土器・石器である。調査で得られた遺物は、土器約40箱(約156kg)、石器7,716点(約963kg)、チップ10,646点(402g)<sup>2)</sup>、その他搬入礫8,682点(約2,988kg)以上を数える。

遺物・搬入礫の分布は、前期後葉～末葉の集落跡及びその周辺、前期前葉～中葉の住居・土坑などの遺構が存在する8～14列グリッドに多く分布する。なかでも、両者の範囲が重複する12～14・E～F及びその周辺に集中するほか、調査区北西部の早期中葉の住居や土坑の検出された7～8・D及びその周辺から9Fにかけての沢A沿い微高地からの出土も多い。

## 2 土器・土製品

### A 土 器

#### 1) 分類方法

大別は土器の所属時期を考慮して行い、Ⅰ群を早期、Ⅱ群を前期初頭から中葉、Ⅲ群を前期後葉から末葉、Ⅳ群を時期不明のものとした。細分に関しては、Ⅱ群としたものは残存率の低い個体が大半を占め、全形を把握できる個体が少ない。そのため、型式による分類は行わず、文様細分に重点を置いたが、細分の過程で型式として抽出できたものもある。一方、Ⅲ群としたものでは、器形を把握し得る個体が定量出土した。そこで、Ⅲ群中において主体的な大木5・6式と他型式との対比を明確にすべく、型式に重点を置いた分類を行った。また、大木5・6式については、器形の類型化を行い分類項目に含めた。

図版作成・観察に当たっては、破片同士が直接接合しない場合でも、胎土・文様・色調などから総合的に判断し、同一個体と考えられるものについては同一の番号を付して行った。図版には各同一個体片ごとに「一枝番号」を与え、この場合は出土地点(遺構の場合は出土層位)も付記した。

#### 2) 分 類

Ⅰ群…縄文時代早期の土器群である。型式・系統を中心に細分を行った。

Ⅰ類…押型文が施されたもの。



第11図 土器の部位名称

1) 石器は必ずしも時期別に区分できないが、土器の時期別出土量と分布、遺構の検出状況と分布を石器に当てはめると、時期別の石器出土量もある程度予測が可能である。

2) チップとしたものは大きさの目安が1.5cm以下の削片である。挿出だけにどまり、分析などは行っていない。

2類…貝殻沈線文系土器群に比定されるもの。

- a 田戸下層式に比定されるもの。
- b 田戸上層式に比定されるもの。
  - 1-沈線文により文様を描出するもの。
  - 2-沈線文と貝殻腹縁圧痕文により文様を描出するもの。
- c 《状押し文が施されたもの。明神裏Ⅲ式に類似している。

3類…残存部に文様が施されないもので、無文土器と考えられるもの。

4類…当該期の所産と考えられるもの。

Ⅱ群…縄文時代前期初頭から中葉の土器群である。一部、前期後葉に下る可能性のあるものを含む。以下、文様を重視して細分を行った。

1類…残存部に各種縄文が施され、縄文が主文様になると考えられるもの。用いられた原体・施文方法により、以下のように細分できる。

- a 非結束羽状縄文が施されたもの。原体により、以下のように細分できる。
  - 1-0段多条原体を用いるもの。
  - 2-単節原体を用いるもの。
- b 結束羽状縄文が施されたもの。
- c ループ文が施されたもの。ループ文を主文様として、重層施文されると思われる。燃りの方向の異なる2種類の末端還付原体を交互に重層施文したもの(93)、爪形文と併用されるもの(166)、ループ文により带状モチーフを描出するもの(172)、沈線文と併用されるもの(184)がある。
- d 斜行縄文が施されたもの。羽状縄文の片翼のみが残存したものを含む可能性がある。施文には単節原体が多用されるが、複節原体を用いるもの(36)もある。縄文施文後に結節回転文が加えられるもの(45、205、209)がある。
- e 組紐文が施されたもの。
- f 束縄文が施されたもの。
- g 燃糸文が施されたもの。絡糸体により、以下のように細分できる。
  - 1-網目状燃糸文が施されたもの。
  - 2-正整燃糸文が施されたもの。
- h 多段結節回転文が施されたもの。

2類…文様施文に縄以外の施文具を多用するもの。縄文と併用されるものを含む。

- a 刺突文が施されたもの。文様・施文具により、以下のように細分できる。
  - 1-半截(多截)竹管状工具によってC字形刺突文が施されたもの。沈線文と併用されるもの(233)がある。
  - 2-櫛歯状工具によって点列状刺突文が施されたもの。波状平行沈線文と併用されるもの(235)、コンパス文と併用されるもの(237、238)がある。
  - 3-横位の刺突列が施されたもの。
  - 4-底面、及び胴部に刺突が施されたもの。施文には主に棒状工具が用いられるが、爪形状工具が用いられるもの(253)もある。

- b 沈文が施されたもので、沈文が主文様になると考えられるもの。
    - 1-沈線文が施されたもの。コンパス文と併用されるもの(255~257)、爪形文と併用されるもの(260)がある。
    - 2-S字状連鎖沈文が施されたもの。
  - c 連続爪形文が施されたもの。
- 3類…当該期の所産と考えられる底部を一括した。
- 4類…上記により分類し得なかった当該期の所産と考えられるもの、および器面の風化が著しく文様を読み取れなかったものを一括した。

III群…縄文時代前期後葉から末葉の土器群である。以下、型式・系統を重視して細分を行った。

- 1類…諸磯a・b式に類似するもの。
- 2類…浮島式に類似するもの。
- 3類…文様施文に半截竹管状工具が多用されるもので、刈羽式と考えられるもの。
  - a 口縁部に平行沈線文が巡り、文様帯を形成するもの。
  - b 胴部に平行沈線による格子目文が施されたもの。
- 4類…興津式に類似するもの。
- 5類…大木式に比定されるもので、大木5式と考えられるもの
  - a 胴部が縄文のみのもの。
  - b 胴部に浮線文が施されたもの。
  - c 胴部に沈線文が施されたもの。
- 6類…大木式に比定されるもので、大木6式と考えられるもの。
  - a 鋸歯状文が施されるもの。大木5式のものに比べ、施文が連続的で「連続山形文」と呼ぶべきものも含む。
  - b 渦巻文、もしくは対弧状文といった曲線によるモチーフ文様が施されるもの。
  - c a・bに類するモチーフ文様を持たないもの。
  - d 鋸歯状印刻文が施されたもの。
  - e 口縁部に突起が施されたもの。形状により、以下のように細分できる。
    - 1-突起下端が鋸歯状のもの。
    - 2-球状のもの。
    - 3-双頭状のもの。
  - f 燃系側面圧痕文が施されたもの。
  - g 上記により分類できなかったものを一括した。
- 7類…刺突、または刻み加えられる隆帯が施されるもので、鍋屋町式に類似するもの。
- 8類…十三菩提式に類似するもの。
- 9類…残存部が縄文のみとなるもの。胎土などから5類および6類の胴部片が大半を占めると考えられる。さらに、結節回転文の有無により細分できる。
  - a 縄文のみが施されたもの。
  - b 縄文施文後に結節回転文が加えられるもの。

10類…上記により分類し得なかった当該期の所産と考えられるものを一括した。

IV群…時期により分類し得なかったものを一括した。

### 3) 器形 (第12図)

本遺跡において主体的に出土したⅢ群5・6類については、器形に複数のバリエーションが認められたことから、器形の類型化を行い分類項目として加えた。

### 4) 観察表の記載について

観察表の記載は以下の項目に沿って行った。  
No. …遺物実測図・遺物写真・観察表のNo.とそれぞれ対応している。

出土地点 …出土遺構名、もしくは出土グリッドを記載した。

出土層位 …包含層出土土器については、基本層序(第10図)と対応している。さらに各層位を上位(上面を含む)・中位・下位に細分するものがある。観察表には〈VI層→Ⅵ、V層上位→V上〉のように略して記載した。

文様 …分類項目としたものを含む。

胎土 …胎土から観察できる混入物・混和材を色調で表した。

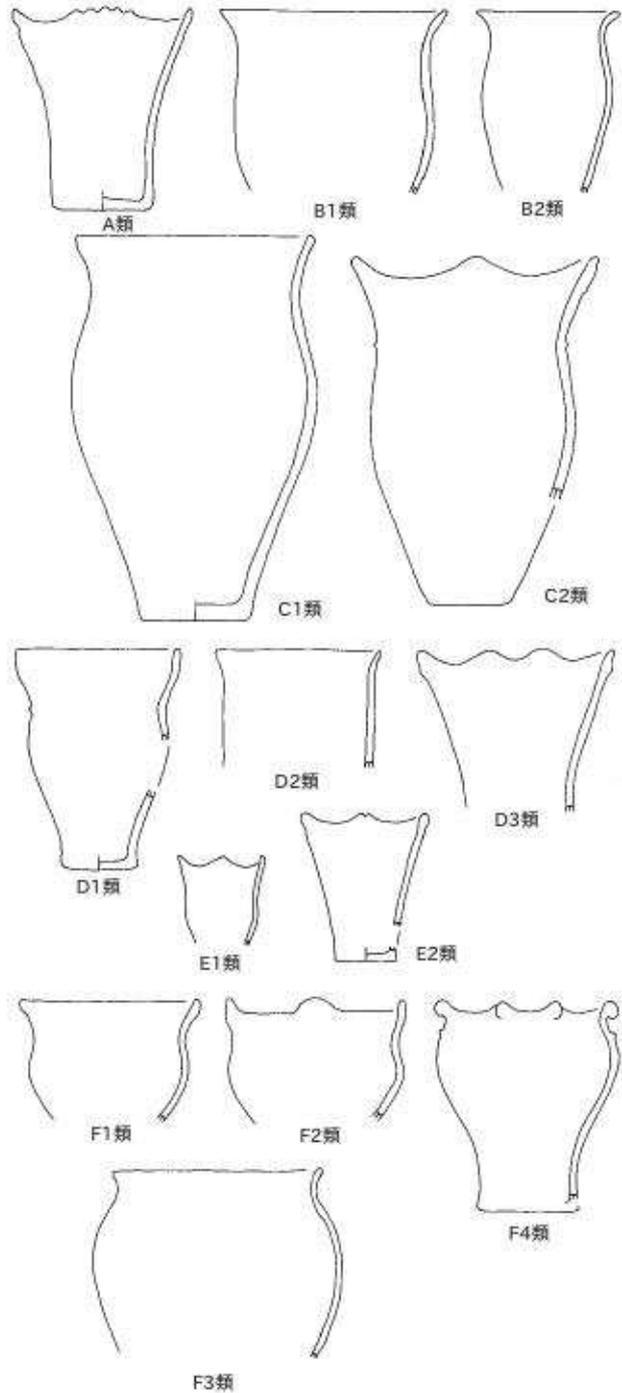
繊維の混入…観察結果を以下のように記号化した。また、混入が明確ではな

いが、わずかながらも混入すると思われるものについては備考に記載した。

◎…器面においても繊維の抜けた(炭化)痕跡を明瞭に観察できるもの。繊維が抜けたことにより器面が平滑さを失い凸凹するもの。

○…割れ口などの観察により繊維の抜けた(炭化)痕跡を観察できるもの。器面では繊維状炭化物の付着が観察できるもの。◎よりも相対的に繊維の混入量が少ないと考えられ、繊維の抜けが器面にまで影響を及ぼさないもの。

色調 …「新版標準土色帖1996年版」に基づいて記載した。



第12図 Ⅲ群5・6類器形分類図

備考…特記事項を記載した。また、(3)で示した器形分類と口径・器高・底径はこの欄に記載した。口径・器高・底径に用いた単位はいずれもcmで、( )内の数値は推定値である。

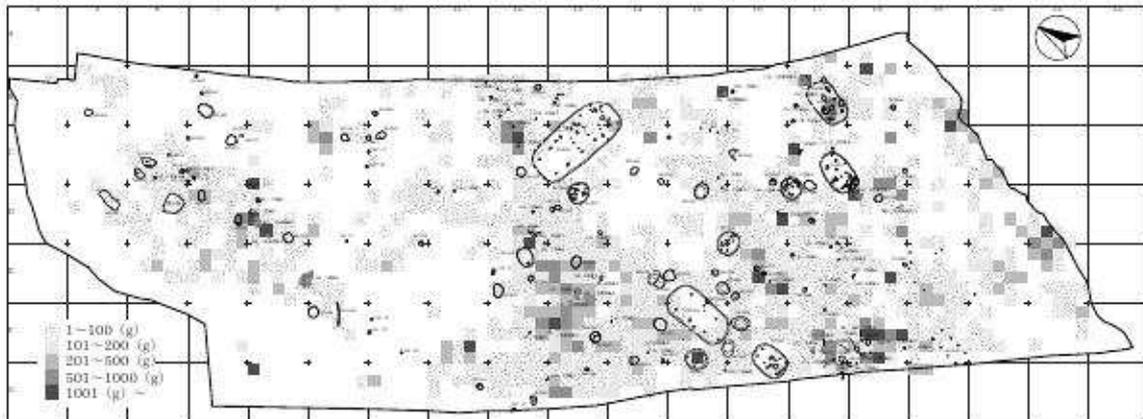
## 5) 出土状況 (第13図)

調査区のほぼ全域から出土しているが、土器の所属時期により出土傾向が異なる。

I群土器は、調査区の西側を南北に走る沢により形成された台地縁辺部に出土が限定している。II・III群土器と比べて出土量・個体数共に少なく、散発的であるが同一個体が近接する地点からある程度の一括性を持って出土する傾向がある。

II群土器は、調査区のほぼ全域から出土しており、I群のような出土範囲の明確な限定はできない。分布の中心は調査区のほぼ中央、12・13EFGの集中域周辺に移り、特にII群1類b・cでは顕著である。この集中域から離れるにつれ出土量は希薄になる。その一方で、II群1類a1のように調査区全域から散発的に出土するもの、II群2類a4のように調査区北西6～12グリッドの範囲で散発的に出土するものがあり、その傾向は一様ではない。

III群土器は、分布の中心が集落が構築される調査区南東へ移行する。本遺跡で主体的に出土しているIII群5・6類の出土傾向を比較すると、5類は11～18グリッドの範囲で広く分布しているのに対し、6類は集落中央の広場からの出土が希薄となり、17・18FGの集中域を中心とした集落の東南外縁部から多くが出土している。大木5・6式という連続した型式間の廃棄活動に関わる意識の違いが読み取れる。



第13図 包含層出土土器重量分布図

## 6) 土器各説

### a 遺構出土土器 (図版23～26・90～92)

各遺構から出土した土器について、前節で示した分類を元に概観する。また、細片で大まかな時期のみ把握できたものは各群の大別に止め、時期を特定できないものについてはIV群として扱った。

**SI1029 (1～7)** III群土器が出土している。1・6は連続刺突文が施されるIII群4類である。2は底径4cmの底部である。所属時期の判断はしかなる。3～5・7は縄文のみが施されるもので、いずれも前期後葉～末葉に比定されると思われる。

**SI1034 (8～21)** III群土器が出土している。住居の付属施設と考えられるP5から11・15が、P10から12～14・16～18が出土している。11は鋸歯状浮線文が施されている。12は連続刺突文が施さ

れ、Ⅲ群4類と考えられる。床面直上からはⅢ群6類cの10・19が出土している。10は口縁部が肥厚し、頸部には結節回転文が2本巡る。19は口縁部が小波状し、頸部には半截竹管状工具の押し引きによって爪形文が加えられた平行沈線（以下、連続爪形文とする）が間隔を置き2本施されている。Ⅲ群6類は覆土中からも8・9が出土している。8は連続爪形文で形成された口縁部文様帯内に鋸歯状沈線文が2本施されている。9は口縁部が波状し、連続爪形文で縁取られた文様帯内に渦巻沈線文が施されている。加えて、9は文様要素からⅢ群6類としたが、器壁が薄く堅緻な点などは北陸系の様相とも捉えられる。他は縄文のみが施される胴部・無文底部片であるが、いずれも前期後葉～末葉に比定されると思われる。

SI1035 (22・23) Ⅲ群土器が出土している。22はP1・P5間のやや堅穴中央部よりから一括出土したもので、復元できた土器の中で最大の法量となる。口縁部は、連続爪形文によって文様帯が2段形成され、内部はそれぞれ2本の鋸歯状沈線文が巡っている。以下、胴部は地縄文のみとなる。23は、口縁部が肥厚するⅢ群6類である。風化により撚糸側面圧痕文は確認できないものの、肥厚帯の形状が類似することから118と同一個体と考えられる。

SI1050 (24～42) Ⅱ・Ⅲ群土器が出土している。床面直上及び覆土下層からは、24～31が出土しており、いずれも前期後葉～末葉に比定される胴部・底部片と考えられる。覆土中層からはⅢ群に混じり、Ⅱ群と考えられる土器(32・35・36)が出土している。36は包含層出土片と接合し、器面には複節斜行縄文(原体LRL)が施される。覆土上層からは、細片のため時期の特定ができないものもあるが、おおむねⅢ群土器が出土している。42は口唇部に刻みが施されるもので、器面に文様は施されない。

SI1057 (43～56) Ⅱ・Ⅲ群土器が出土している。覆土中・下層からは、Ⅱ・Ⅲ群が混在して出土している(43・45～49)。45は胎土中に繊維を多量に含み、縄文施文後に結節回転文が加えられている。46はⅢ群期の底部と思われる。覆土上層及び周堤上層もⅡ・Ⅲ群が混在している(45・50～56)。50は胎土中に繊維を含み、器壁は薄い。器面には縄文が施され、Ⅱ群と考えられる。52・53は、対弧状沈線文が施されるⅢ群6類bである。55は鋸歯状工具のようなもので、沈線文を描出している。56は沈線文が施されるもので、器壁が薄く早期の可能性はある。

SI1027 (57～62) Ⅲ群土器が出土している。59は鋸歯状沈線文が施されるⅢ群5類c、60は連続刺突文が施されるⅢ群4類となる。

SI1036 (63～68) Ⅲ群土器が出土している。床面直上からは63～65が出土している。63は風化が著しいが、浮線文が施されていたと思われる。64は2本一対の鋸歯状浮線文が施されている。65はやや丸みを帯びた平底底部で、前期後葉～末葉に比定されると思われる。覆土からは、Ⅲ群5類cとなる66を含むⅢ群と考えられる土器が出土している。

SI1051 (69～75) Ⅲ群土器が出土している。床面直上からは69～71が出土している。69は口縁部が小波状し、波頂部に切り込みが加えられる。口縁部下は結節回転文が巡り、以下は縄文となる。覆土中・上層からは細片のみが出土しており、Ⅲ群と考えられる72を除き時期は明確でない。74・75は胎土中に繊維を含む。

SI1054 (76～78) Ⅲ群土器が出土している。床面直上からは78が出土しているが、風化が著しく時期は明確にし得ない。覆土からはⅢ群5類cとなる76と、結束羽状縄文が施される77が出土している。77は胎土などの特徴が包含層出土の281と類似しており、刈羽式期の胴部片の可能性はある。

SI1040 (85) Ⅱ群土器が出土している。器面の風化が著しいが、ループ文が施されている。

SK1001 (79) Ⅰ群土器が出土している。土坑覆土からは79-1が出土し、包含層からも同一個体片

が出土している(79-2~5)。器形は屈曲を有するキャリパー形となる。文様は口唇部に沈線文、口唇内端部に刻目文が施され、口縁部文様帯は沈線文と貝殻腹縁圧痕文、胴部文様帯は垂下する沈線文によって描出されている。

SK1004 (80~83) III群土器が出土している。いずれも縄文のみが施される細片である。

SK1007 (84) 時期不明の土器が出土している。細片で時期を明確にしえないが、条痕が観察できることから、早期の可能性があると考える。

SK1019 (86) II群土器が出土している。器面の風化が著しいが、ループ文が施されていると思われる。

SK1041 (87・88) III群土器が出土している。87はIII群6類cである。口縁部は肥厚した波状口縁となり、頸部には結節回転文が巡っている。

SK1044 (89~93) II・III群土器が出土している。90は浮島式に類似する土器である。口縁部は波状で、口縁外端部に刺突文が施されている。胴部文様は上位と下位で異なり、上位は波状口縁に沿った横位の波状沈線文、下位は施文具は断定はできないが波状貝殻文に類するものが施されている。また、胴上半に穿孔が2つ施されている。89・93はループ文が施されるものである。93は、燃りの方向の異なる末端環付原体を交互に重層施文する特徴を持つ。

SK1048 (94・95) II・III群土器が出土している。94は口縁部に鋸歯状突起が頸部には半截竹管状工具による刺突文が施されている。95は器面の風化が著しいが、組紐文が施されていると思われる。

SK1052 (96・97) II群土器が出土している。96は器壁が薄く、胎土に繊維を含む。

SK1058 (98・99) 時期不明の土器が出土している。どちらも胎土中に繊維を含む。

SK1065 (100・101) III群土器が出土している。100はIII群5類cで、胴部がわずかに張り出す長胴形である。口縁部は大きく外反し、本遺跡においては他に類例を見出せない特徴的なものである。文様は、頸部に施された沈線文下に鋸歯状沈線によるモチーフ文様が施される。また、地文に0段多条原体を用いるなど、包含層出土のIII群5類cとは差異が認められる。

7CP1 (106) I群土器が出土している。106は器面に調整時の擦痕が観察できるものの、文様は施されない。器形及び胎土などの特徴から、I群2類に伴う無文土器と思われる。

8DP1 (107) 時期不明の土器が出土している。107は縄文が施される土器で、横位の沈線文と波状沈線文により区画された胴上半は、非結束羽状縄文を磨り消すことで帯状のモチーフ文様を描出している。また、胎土には繊維及び多量の金雲母を含んでいる。

13E2号遺物集中 (109) III群土器が出土している。口縁部に刻みが施され、鋸歯状沈線文によるモチーフ文様が施されている。

13E3号遺物集中 (108) II群土器が出土している。器形は頸部に屈曲を有する深鉢で、口縁部は4単位と考えられる波状口縁となる。胴部は組紐文が全面に施されると思われる。

13F1号遺物集中 (110) II群土器が出土している。110は器形は屈曲を有さない直立した深鉢で、胴部には結束羽状縄文が施される。

15B1号遺物集中 (111) III群土器が出土している。111は口縁部が肥厚する深鉢で、胴部は縄文施文後に結節回転文が加えられている。

17B1号遺物集中 (112~115) III群土器が出土している。112は口縁部が肥厚する深鉢で、肥厚部以下には縄文が施される。頸部には隆帯を施し、上下に沈線文を沿わせることで強調している。113は連続爪形文が施されている。114は器壁が堅緻で、作りが丁寧な土器である。文様は沈線文と幅3mm前

後の連続刺突によるミミズ腫れ状の結節浮線文が施されている。115は口縁部の上端が「く」の字形に内屈した波状で、頂部には円筒状の突起が施される。文様は突起を中心に浮線文が半同心円状に施されている。器面には赤色顔料の付着が確認でき、表裏全面がわずかに赤みが掛っていることから、残存部においては全面に赤色顔料が塗布されていたと思われる。口縁部形態、ソーメン状浮線文などの特徴から真脇式に類似する土器と考える。

18D1号遺物集中(116・117) III群土器が出土している。116は口縁部が肥厚する波状口縁で肥厚口縁部には沈線で文様が描出され、波頂部下の文様は2種類の異なるモチーフ文様を用いる。波底部に対応する肥厚部下端には、鋸歯状陰刻文が3つ連続して施される。頸部には刻みが加えられた隆帯が巡り、以下は縄文となる。117は口縁部に肥厚帯が施され、その下部に鋸歯状沈線文が2本巡っている。

18D2号遺物集中(118・119) II・III群土器が出土している。118は口縁部が肥厚する波状口縁で、波頂部で肥厚帯は「逆U形となり、撚糸側面圧痕文が加えられる。頸部には連続爪形文が間隔を置いて2本巡り、内部に波状沈線文が施される。以下、胴部は縄文となる。119はC字形刺突文が施されている。

18F1号遺物集中(120・121) III群土器が出土している。120は頂部に切り込みが加えられる双頭状の突起が施され、頸部には刻みが加えられた隆帯が巡っている。121は丸みを帯びた胴部で、縄文施文後に結節回転文が加えられている。

出土遺構不明(102～105) 102・103は諸磯式に類似すると思われるものである。102は口唇部に刻目文が施され、口縁部には爪形文が施される。103は半截竹管状工具による平行沈線文が施されている。104は底部片で、底面に網代痕を観察できる。

## b 包含層出土土器(図版26～36・92～99)

### I 群(122～134)

縄文時代早期の所産と考えられる土器群である。

122は押型文が施された土器(1類)である。器形は外反する小波状口縁を呈し、胴部に施文幅3cmの綾杉状押型文が間隔をおいて上下2段施されている。胎土は繊維を含み、褐灰色を呈していることから他の土器との区別は容易である。押型文土器は、本遺跡ではこの1個体しか確認されていない。押型文のモチーフは日計式に用いられるものに類似する。推定口径は20cm前後になるものと思われる。

123～132は貝殻沈線文系に比定される土器群(2類)である。文様・胎土などの個体差が大きく、特徴的なことから同一個体の識別が可能であった。その結果、破片数は多いが個体数は多くなく、図化した数からそれほど前後しないと思われる。施文などの特徴から田戸下層式・田戸上層式・明神裏Ⅲ式に分類できる。124は貝殻沈線文系土器群の尖底部である。器壁は軟質で風化が著しいが、沈線がかろうじて確認できる。125は田戸下層式と考えられる。口縁部に爪形文が施され、胴部には幅約2mm前後の沈線が横位と斜位に施され、集合的な文様を描出している。126～129は田戸上層式と考えられる。126と129は沈線によって胴部に類似したモチーフ文様が施されているが、沈線区画文内の貝殻腹縁圧痕文の有無で差異が認められる。126は貝殻腹縁圧痕文が欠落しており、一部は沈線に置換されている。両者とも田戸下層式とした125に比べ器壁が薄く、堅緻で色調はにぶい黄燈褐色を呈す。また、129は文様モチーフから口縁部が波状する可能性がある。128も沈線区画文内に貝殻腹縁圧痕文が施されるという文様構成は129と同様であるが、口唇部にも貝殻腹縁圧痕文が施されている。また、胎土が126・129とは異なり若干軟質で、色調も暗い。ここで精粗の表現は適切ではないと思われるが、79(SK1001他)

と共に田戸上層式期の「粗」の土器という印象を受ける。また口唇部に刻目（圧痕）でも施される点でも共通している。130・131は明神裏皿式と考えられ、どちらも先端の尖った棒状工具（ペン先状工具）による押引文が施されている。130は126の沈線文による文様モチーフが押引文に置換されており、施文方法が異なるだけで、文様構成は126に類似すると思われる。131は130に比べ器壁が薄く、押引きの間隔も狭く精緻に施されている。胎土はどちらも田戸上層式の126・129に類似し、薄手で堅緻である。

133・134は縄文が施された土器（4類）である。原体は明確でないが、各条間に間隔が空くことから複段の縄が用いられている可能性が高く、前々段多条原体（RLr）が横位回転施文されていると思われる。内面には擦痕が観察できる。133・134は共に出土地点以外に積極的に早期とする確証を欠くものの、口縁部形態などに早期後半の羽状縄文系土器群〔工藤1989〕との類似点も認められる。

## II 群（135～270）

135～143は非結束羽状縄文が施された土器群（1類a）である。縄文原体により、0段多条原体が用いられるものと単節原体が用いられるものとに細分される。0段多条原体が用いられるものは、口縁部片が未確認であるが、器形は142-3が示すように丸底に近い尖底の深鉢となる。器厚は均一でなく、胎土中には多量の繊維が混入している。色調は明黄褐色、灰黄褐色など明るいものが多い。原体の条の本数を明確にできるものは限られるが、主に0段3条の原体を用いていると考えられる。一方、単節原体が用いられるものは、0段多条原体が用いられるものに比べ器壁が薄く、胎土中への繊維の混入量も少ない。138は口唇部に刻目文が施されている。

144～161は結束羽状縄文が施された土器群（1類b）である。結束羽状縄文は幅広い時期の多型式で用いられるため、複数時期の土器を含む可能性がある。145・153は他に比べ器壁が厚く、胎土には径2～3mmの白色粒が混入する。繊維の混入も少ない。147・148は口縁部が残存し、羽状縄文によって菱形モチーフを描出している。156も菱形モチーフを有している。これら薄手のものは、厚手のものに比べ繊維を多く含む傾向がある。ただ、146のように繊維の混入が観察できないものもある。

162～188はループ文が施された土器群（1類c）である。ループ文は基本的に1～3cm前後の施文幅で重層施文されている。ループ文を作出するために環が加えられる原体は、L撚り・R撚りの両者が存在する。L撚りが用いられるもの（169～172・174・177・181）は施文幅が狭く、環部をより強調する施文方法に用いられる傾向がある。162は本群で唯一、器形が復元できた個体である。器形は口縁部が直立し、4単位と考えられる小波状口縁となる。小波状口縁は163・177でも見られる。166は重層施文されるループ文の間に無文帯が設けられ、そこに爪形文が等間隔に施されている。また、他に比べ器壁が厚く堅緻で、胎土中に金雲母を含むなどの特徴を持つ。172はループ文を帯状に施し、モチーフ文様を描出するものである。残存部からモチーフを推定すれば三角形を基調としたモチーフを描いていると思われる。184はループ文と共に櫛歯状工具で沈線文が施されている。182・183は環部が明瞭でないが、原体端部の回転施文や重層施文の特徴が共通するため本群に含めた。

189～213は斜行縄文が施された土器群（1類d）である。193はLR単節原体を縦回転施文しているが、回転長・方向ともに不規則である。また、未貫通の穿孔が見られる。202は口縁部から底部まで残存しており、口縁部が開く浅鉢に近い器形になると考えられる。205・209は斜行縄文の施文後に結節回転文が加えられている。208は小波状口縁を呈し、口縁内面に沈線文が施されている。

214～216は組紐文が施された土器群（1類e）である。いずれも胎土中に繊維を含み、器壁は軟質である。214は他に比べ繊維の混入量が少なく、内面に炭化物の付着が観察できる。

217～223は束縄文が施された土器群（1類f）で、数本の縄の上下を結んだ原体の横位回転によって施文している。いずれも残存部には束縄文のみが施される。口縁部は平縁のもの（217・220）と口唇部に指頭押圧が加えられるもの（219）がある。束縄文は県内での類例は乏しいが、隣接する福島県会津地方では冑宮西遺跡などで定量が出土している。

224、225は燃糸文が施された土器（1類g）である。224は網目状燃糸文、225は正整燃糸文が施されている。共に絡状体の横位回転で施文されている。

226は多段結節回転文が施された土器（1類f）である。用いられた原体の結節単位数は不明であるが、残存部では5段以上の結節回転文を観察できる。

227～233はC字形刺突文が施された土器群（2類a-1）である。227は波状口縁に沿って刺突文列が巡り、頂部に突起が施されている。233はC字形刺突文が2段施され、その下部に4単位の櫛歯状工具で沈線文が施されている。

234～240は点列状刺突文が施された土器群（2類a-2）である。いずれも櫛歯状の工具が用いられていると考えられ、一部は点列間が押引状に連なっている部分がある。235は刺突文列の間に波状平行線文が施されている。237・238も235と同様の構成となるが、刺突文間にコンパス文が施されている。

241～243は横位の刺突列が施された土器群（2類a-3）である。241は口縁部と胴部に刺突列が施され、胴部の刺突列は沈線による区画帯内に施されている。刺突具は先端が尖った棒状工具で、下方向から押し当てるように施文している。胴部には非結束の羽状縄文が施される。243は口縁部に施された沈線区画帯内に刺突文が施されている。出土層位はVI層であるが、胎土中に繊維を含まず、中期以降の可能性もある。

244～254は底面及び胴部に刺突文が施された土器群（2類a-4）である。底面に施される刺突は、いずれも同心円状に施されると考えられる。色調は244・246・250を除き、灰白色に近い明るい色調を呈す。244は底面及び底部に刺突文が施され、胴部には斜行縄文が施されている。246は底面の縁がわずかに高く、上げ底状である。250は色調や胎土に金雲母を含む点が166と共通で、出土地点も近いことから同一個体の可能性がある。253は底面の刺突が爪形状工具によって施されており、他と施文具が異なる。

255～260は沈線文が施された土器群（2類b-1）である。いずれも器壁は薄く、堅緻である。255～257はコンパス文と併用されている。257は口縁部が波状で、頂部に突起が施されている。文様は頂部下の円形沈線文、胴部の沈線文、コンパス文で構成されている。259は横位の沈線文が施されている。残存部は沈線施文の始点・終点の接点となっており、本来は平行に施される各段の沈線が整合せず乱れている。また、257と259は胎土に金雲母を含み、他の土器と区別される。260は爪形文と併用されている。

261はS字状連鎖沈文が施された土器（2類b-2）である。口縁部は平縁になると考えられ、LR単節による縄文施文後にS字状連鎖沈文が施されている。

262、263は連続爪形文が施された土器（2類c）である。262は幅7mm前後の爪形文が横位に連続して施されている。263は幅5mm前後の爪形文が262に比べ、狭い間隔で施されている。さらに器壁は薄く、胎土に金雲母を含むなど、共通の文様構成ながら262との差異は大きい。これらの特徴から、263は北白川下層式に比定されると考えられ、時期も前期後葉にまで下る可能性がある。

264～267は当該期の所産と考えられる底部（3類）を一括した。底径はいずれも6cm以下である。264は底面の縁がやや高い上げ底状で、風化が著しく文様は確認できない。265は底径3cmと平底土器では最も底径が小さい。器面は風化しているが、残存部に施文されないものと思われる。

268～270は前節で示した項目により分類できなかった当該期のものを一括した。268は口唇外端部

に刻目文が施され、その下に施文長1cm前後の縄圧痕文が斜位に施されている。圧痕に用いられる原体は燃糸もしくは絡状体と考えられるが断定できない。絡状体が用いられているとすれば、早期の可能性がある。269はRL単節の地縄文に横位の沈線文が加えられている。沈線により区画帯を設けることで、重層施文に似せる効果を得ているとも考えられる。270は波状口縁の頂部である。胎土に繊維を多量に含み、器面は風化が著しい。文様はかろうじて波状平行線文を確認できる。

### Ⅲ 群 (271～395)

271～274は諸磯式に類似する土器群(1類)である。271～273は諸磯a式に類似している。いずれも沈線は細く、浅い。272は半截竹管状工具による連続爪形文と円形刺突文が加えられている。274は地縄文に半截竹管状工具による平行沈線文が加えられており、諸磯b式に類似するものとする。本遺跡における諸磯系の土器は図示したように、いずれも細片で、絶対的な出土量も極めて少ないものである。

275～283は刈羽式と考えられる土器群(3類)である。いずれも文様描出に半截竹管状工具が多用される。275～281は口縁部に半截竹管による平行沈線が巡るものである。281は地文に結束羽状縄文を用い、口縁部が外反し胴部に屈曲を有する。口縁部文様帯は上位の平行沈線が波状口縁沿いに巡ることで三角形に近い空間が作出され、内部には半截竹管による刺突文が施される。275はこの空間内に( )状平行沈線文が施される。本群の口唇部文様は棒状工具によって刻目文が施されるものが主体となるが、半截竹管による刺突文が用いられるもの(276・281)もある。282・283は半截竹管によって格子目文を描出する土器である。282は口縁部に連続刺突文帯と連続爪形文帯を交互に各2段施す。胴部は半截竹管による平行沈線を格子目状に施し、交点に円形竹管文を加えている。283は交点に円形竹管文が施されない。

284～288は興津式に類似する土器群(4類)である。いずれも櫛歯状工具による押し引きで、連続刺突文と沈線文が施されている。口縁部は波状口縁(284・285・287)と平口縁(286)がある。284-2・286-1は擬似貝殻腹縁文が施されている。

289～342は大木5式と考えられる土器群(5類)である。289・290は胴部が縄文のみになると考えられるもの(5類a)である。口縁部は波状を呈し、鋸歯状裝飾帯が施されるA類となる。

291～293は胴部に浮線文が施されるもの(5類b)である。292は口縁部が刻目文により小波状を呈し、胴部には縄文施文後に浮線文が鋸歯状に貼り付けられている。この鋸歯状浮線文は3段残存しており、下端の浮線文は、上2段に比べ太く環状部を有し刺突文が加えられている。胎土には金雲母を含む。大木5式の中でも古手の様相を呈するものとする。293は器形がA類となり、地文に縦回転の燃糸文が用いられている。口縁部に施される鋸歯状裝飾帯は、289・290に比べ器形と一体化し外傾している。胴部には2本で一对の鋸歯状浮線文を、間隔を開けて2段巡らすことで文様帯としている。この内部には横位の鋸歯状浮線文に加え、上下の鋸歯状浮線文を連結する浮線文が施されている。また、胎土中には他の土器に見られない径2mm前後の白色粒を多量に含んでいる。

294～342は胴部に沈線文が施されるもの(5類c)である。沈線文は大きくは縦横位の鋸歯状沈線文、横位の単・平行沈線文の2種で文様を構成している。この沈線施文には棒状工具もしくは竹管状工具の外表面(背)を用いていると思われるが、先端が二又の半截竹管状工具を用いるもの(317)もある。また、縦位の鋸歯状沈線文が曲線化する傾向が295・307・341などで認められる。器形は289・293と類似するA類に加え、口縁部が平縁で頸部が括れ、胴部が丸く張り出すB1類がある。器形がA類になるものとしては、304・339があげられる。304は鋸歯状裝飾帯の上面に刺突文が施され、胴部にはRL単節の縦回転によって地文が施された後に、2本一对の鋸歯状沈線文が3段施されている。一方の339は鋸歯状

装飾帯の上面に縄文が施され、胴部の鋸歯状沈線文も器壁を前周せず途切れ、その上下が連結することで独立した単位文を構成しており、両者には差異が認められる。器形がB1類となるものとしては294・303・328などがある。しかし、残存率が低く全形が不明なものについても、横位の沈線文を施すものには器形に屈曲をものも多く、大部分がB1類に類する器形になると思われる。本器形の特徴としては、器面に縄文を施した後に、1本もしくは2本一対の横走する沈線文を胴部に巡らすことで文様帯を明確にし、内部に鋸歯状沈線文を施す点があげられる。器形復元した294と303を比較すると、頸部以下を横位の沈線文によって区画帯化し、その内部に縦横位の鋸歯状沈線文を施文する（294は区画帯下にもう一段の沈線文が巡る）点は共通であるが、294はさらに口縁部文様帯に、半截竹管状工具による横位の刺突列を施し、両者の差異としている。この刺突列は325にも施されているが、こちらは爪形文となっている。また、器形に関しては残存率が低く全形は捉えきれないが、口縁部が波状のもの（299・314・327・340）があり、他と同様に横位の沈線文や鋸歯状沈線文が施されるものに加え、曲線によるモチーフが加えられるもの（314）がある。

343～383は大木6式と考えられる土器群（6類）である。343～345は鋸歯状文が施されるもの（6類a）で、沈線文（343、345）、もしくは連続爪形文（344）で描出されている。343は口縁部文様帯が貼付文によって構成され、ボタン状貼付文・円形貼付文・棒状貼付文が施されている。頸部以下、胴部文様帯は横位の沈線文によって区画帯が2段設けられ、それぞれの内部には2本一対の鋸歯状沈線文が巡っている。344は横走する連続爪形文によって区画帯と鋸歯状文が描出され、棒状貼付文と共に口縁部文様帯を構成している。345は鋸歯状沈線文のみが残存している。この場合、大木5式との分離は困難であるが、ここでは沈線の縦方向への集約を持って大木6式とした。

346～350は渦巻、対弧状文が施されるもの（6類b）である。346は渦巻沈線文を4単位（残存は2）施すと考えられ、その間に爪形文を連続的に直線・山形状に施すことで連結している。分類上本群に含めたが、文様構成などに鍋屋町式の要素を持つ土器である。348は胴部を2本一対の沈線文で区画して文様帯を設け、内部に対弧状沈線文を施す。また、胴部同一個体片がSI1057周堤上層から出土している。349は口縁部が波状で、胴部の屈曲はない。胴部には断面が三角形になる隆帯と連続爪形文が2本巡っている。口縁部文様は大部分剥離しているが、波状口縁により作出された空間に連続爪形文と沈線文で渦巻状のモチーフを描出していたと考えられる。350は肥厚した口縁部に2個一対の棒状貼付文と、上下に交互刺突が加えられた棒状の沈線によって文様帯が構成される。胴部は連続爪形文が施されており、同一個体片の観察から、棒状貼付文の下部では渦巻状を呈すると思われる。

351～372は大木6式で多用される鋸歯状・渦巻状・対弧状といったモチーフ文様を持たないもの（6類c）である。文様要素には、縄文・口縁部肥厚帯・連続爪形文・結節回転文がある。351は口縁部が4単位と考えられる波状口縁を呈し、胴部は屈曲している。文様は縄文のみで、LR単節の縦回転で施されている。また、未貫通の穿孔が施されている。353は口縁部が双頭状に波状している。357は頸部に屈曲を持つ器形で、文様は縄文のみとなる。器形はB1類に近く、大木5式に伴う粗製土器の可能性もある。361・370の器形は、口縁部幅が狭小で胴部が口径より大きく、丸く張り出すF3類となる。361は口縁部が無文帯となり、胴部は地縄文施文後に結節回転文が加えられている。370はこれらに加え、連続爪形文が頸部に施されている。362は口縁部が4単位の波状口縁となり、波頂部に切り込みが加えられる。胴部は、縄文施文後に結節回転文が加えられている。371は口縁部が外反する肥厚口縁部となる。胴部は屈曲が見られない円筒形となり、縄文施文後に結節回転文が加えられている。372は口縁部が一段高

い波状口縁となり、口唇部に刻目文が施される。頸部には結節回転文が施され、以下は縄文となる。

373は鋸歯状陰刻文が施されるもの(6類d)である。鋸歯状陰刻文は口縁部肥厚帯の下端に施され、この上部には陰刻文に沿うように細沈線が鋸歯状に施されている。頸部には連続爪形文が施される。

374～379は口縁部に突起が施されるもの(6類e)である。374は口縁部に球状の突起が2個一対で施されている。器形は胴上半が球形で、胴下半がすぼまる金魚鉢状のF4類となる。胴部には胴上半に縄圧痕文が加えられる隆帯を巡らし、以下にLR単節による縄文が施されている。378も球状突起+隆帯という構成から374に類する器形と考えられる。375は口縁部に下端が鋸歯状となる突起が施され、頸部に連続爪形文を巡らし、以下は縄文となる。

380～382は撚糸側面圧痕文が施されるもの(6類f)である。380は口縁部が肥厚し、2個一対で双頭状の波状口縁となる。肥厚部に設けられた口縁部文様帯は、波頂部下に指頭による円形押圧文が施される。撚糸側面圧痕文は円形押圧文を二重に囲むように配置され、波底部下でも3本一対で垂下している。胴部がわずかに屈曲して外反する器形となり、LR単節により縄文が施されている。381は口縁部に双頭状の突起が設けられ、撚糸側面圧痕文が山形・直線状に施される。382は頸部に撚糸側面圧痕文が施される。

383は口縁部が波状し、大きく外反する器形となり、隆帯には縄圧痕文が加えられる。384は口縁部に断面が三角形になる貼付文と連続爪形文で隅丸方形の枠状区画文が施され、その交点部分に半円形の把手が付く。この把手は、6単位で口縁部文様帯を構成していたと思われる。頸部には連続爪形文が3段連続して施されるが、各段の始点と終点が整合せずずれが生じている。

385～387は刺突もしくは刻みを加えた粘土紐の貼付文が施されるもので、鍋屋町式に類似する土器群(7類)である。385は口縁部に粘土紐による貼付文が施され、胴上半には半截竹管状工具による刺突を加えた凸帯が2段巡る。胴部文様帯は集合平行沈線文によって渦巻文を描出すると思われる。386は口縁部が波状で、縄文施文後に半截竹管状工具による刺突を加えた凸帯を3段巡らし、凸帯間の縄文は磨り消されている。さらに、部分的な残存であるが、凸帯と直行するように波頂口唇部から3本の粘土紐が垂下し、貼り付けられていたと思われる。この粘土紐には刻みが加えられる。鍋屋町式でも古段階と考えるが刈羽式の可能性もある。387は縄文施文後に、刺突を加えた粘土紐が貼り付けられ、渦巻文とそれを連結するモチーフ文様を描出していると思われる。

388は十三菩提式に類似する土器(8類)である。器形はいわゆる「台付き鉢」となり、口縁部は大きく内屈している。口縁上面の文様は、陰刻文と刻目文によって施される。胴部は、横位の沈線文と陰刻文による連続波状帯で形成された区画帯内に、鋸歯状の集合沈線文と陰刻文が施される。胴部に施される沈線は細く、浅い繊細なものである。

389～391は残存部に縄文のみが施されるもの(9類)で、大木5・6式の胴・底部片と考えられる。390はF類に類する器形になると思われるが、器形、時期ともに検討の余地を残すものである。391は底面に木葉痕を観察できる。

392～395は前節で示した項目により分類し得なかった当該期のものを一括した。392・393は刻みを加えた隆帯が施されるもので、大木6式の可能性が高い。394・395は撚糸側面圧痕文が施されるもので、大木5式もしくは6式と考えられる。また、395のように口縁部に直線状に施すものは大木5式の可能性が高いと思われる。

#### IV 群 (396～399)

所属時期により分類し得なかったものである。396・397は縄文が施されていたと考えられるが、器

面の風化が著しく原体は不明（396は熟糸文の可能性あり）である。398は胎土に繊維を含み、沈線文が施される。399は外面文様は不明で、内面に縦方向の条痕文が施される。398・399は早期の可能性はある。

### B 土 製 品 (400)

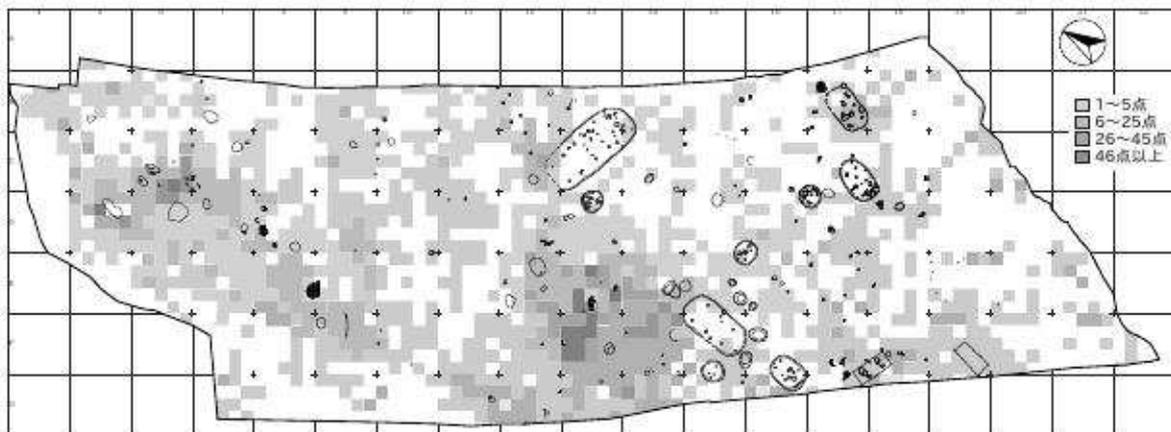
6C24グリッドから出土したもので、形状はスタンプ型土製品に近いが、欠損しているため詳細は不明である。以下、スタンプ型土製品の部位名称を用いて概述する。

色調は灰黄褐色で、印面の最大径は約2.5cm、風化により印面への施文は不明である。つまみ部は最大径1cm前後の円筒形となるが、成形時の稜線がかすかに残る。つまみ部上端は大部分が欠けているが、わずかに端部を残しており、中央部がわずかに窪んでいる。つまみ部上端から印面までの高さは約2.8cmである。胎土は黄・橙色粒に加え、白色粒の混入が目立つ。繊維は混入しないものと思われる。

## 3 石 器

出土した石器は第9表のとおり、合計で7,716点、重量で約963kgである。遺構内からは643点（8.3%）で、遺構外7,072点（91.7%）からの出土が圧倒的に多い。この出土比率は縄文時代中期以降の集落と比べても大きく異なる。これは中期以降の集落跡では、竪穴住居などの窪地に多くの遺物が廃棄されるのに対して、北野遺跡（下層）では竪穴住居跡や土坑の窪地に遺物が廃棄されなかったことによる。石器の出土分布傾向は、調査区北西部の早期中葉と推定される遺構が多く検出された6C・D周辺から沢A沿いの微高地にかけてと、調査区中央部の前期前葉～中葉の遺構及び前期後葉～末葉の集落跡の西側（12～14・E～G）にかけて集中する。また、前期後葉～末葉の集落跡周辺からもやや多く出土し、前期後葉から末葉の集落跡の広場（14～16・B～D）と推定される部分では少ない。

器種別の出土数を見ると、石製品がほとんど認められないことを除けば、一般的な縄文時代の遺跡から出土する器種をほぼ網羅する。この中で不定形石器・石錘・敲磨石類が多く出土し、石匙・石皿・砥石が一定量認められる。石鏃・尖頭器・石錐・両極剥離痕のある石器・篋状石器・打製石斧・磨製石斧は少ない。以下、器種ごとに分類・出土分布状況を中心に特徴的な事柄について説明する。



第14図 石器出土分布図

## A 石 鏃 (1～13)

尖頭状の狩猟具の一つで尖頭部・側縁部・基部(脚部)が作出され、左右がほぼ対称のものを石鏃とした。後述する尖頭器とは平面形態で分類した。一部(1)尖頭器よりやや大きくても石鏃に分類したものもあるが、大きさは基本的に石鏃が尖頭器より小さい。総数20点出土している。

### 分 類

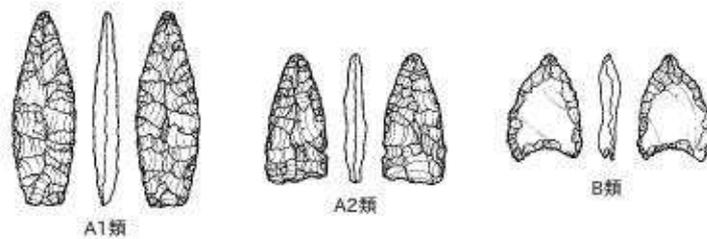
すべて無茎鏃である。細分類は基部形態〔鈴木道1981〕を基準とし、これに側縁形状を加味して細分類を行った。総数20点のうち、A1類5点、A2類6点、B類7点、分類不可能2点である。

A類(1～8) 平基鏃で、円基鏃に近いもの(5)も含まれる。A類はさらに側縁形状で2分した。

A1類(1～4) 側縁が大きく弧を描き、最大幅が長さのほぼ中間にあるもの。側縁の弧は1・2のように滑らかなものと3・4のようにややきつく湾曲し、3のように屈曲するものもある。

A2類(5～8) 側縁はやや内湾する程度か直線状に開くもの。最大幅は基部側にある。

B類(9～13) 凹基無茎鏃である。9・10・12のように扶入が浅いものと11・13のように深いものがある。



第15図 石鏃分類図

### 分 布

調査区北西部の6C・7C～D、ほぼ中央部の12～13列にやや集中化の傾向が見られる。分類別ではA1類が北西部の6C・7C～Dに集中している。

### 法 量

大きさ・厚さが多様であるものの、概してA1類が大きく重い傾向にある。

### 石 材

頁岩11点、鉄石英(緑)3点、メノウ・黒曜石各2点、凝灰岩・鉄石英(赤)各1点である。後述するが、前期前葉～中葉期に多用される。鉄石英(緑)は調査区中央部の12～13列から出土している。分類別ではA1類がすべて頁岩で占められていることが特筆される。

### そ の 他

A1類は平面形態、分布、石材選択、法量などにおいて、他の分類と区分される。分布が集中する6C・7C～D周辺の出土土器は、早期中葉が多い。したがって、A1類は早期中葉の所産と推定される。

## B 石鏃失敗品 (14～22)

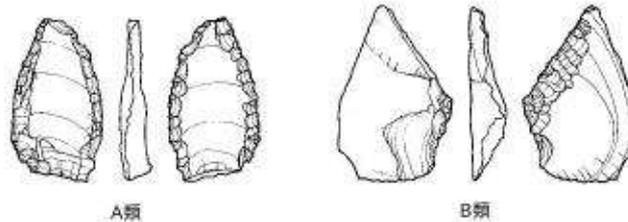
小型の剥片に押圧剥離の二次調整が施されたもので、定形石器以外を石鏃失敗品とした。不定形石器とは大きさ・厚さ・二次調整・使用痕の有無などで、ある程度区別される。また、石鏃完成品と比べた場合、素材・大きさ・二次調整などから、石鏃を意図して製作されたと推定されるが、何らかの理由で製作を断念(失敗)したと考えられるものである。総数28点抽出した。

## 分 類

二次調整の進行の程度で細分類した。いずれも素材の形状を大きく残すが、B類はA類に比べより素材獲得時の形状をよく残す。A類11点、B類6点、破損のため分類できないもの11点である。

A類 (14～19) 周縁の二次調整が半周以上に及ぶもの。

B類 (20～22) 周縁の二次調整が一部のみのももの。



第16図 石鎌失敗品分類図

## 分 布

石鎌の分布とほぼ同じく5～7・C～D、12E～Fにやや集中する。

## 法 量

長さ・幅・厚さ・重さの平均値は、いずれも石鎌に比べやや大きい。

## 石 材

石鎌の石材選択とほぼ同じく、頁岩14点、鉄石英(緑)・流紋岩・凝灰岩各3点、メノウ2点、鉄石英(赤)・緑色凝灰岩・黒曜石各1点である。

## そ の 他

打瘤が完全に除去されていないものが多いことから、打瘤除去の失敗が主たる原因と考えられる。

## C 尖 頭 器 (23～30)

尖頭状で尖頭部・側縁部・基部が作出され、左右がほぼ対称のものである。石鎌とは平面形態で分類した。石鎌は基部が平基または凹基であるのに対し、尖頭器は基部がすぼまる尖基・円基のものである。基部が欠損して基部形態が不明なものもあるが、遺存部分の大きさから尖頭器と判断できる。長さにおいて石鎌より小さいもの1点(26)あったが、基本的には石鎌より大きい。10点出土した。

## 分 類

基部形態により二分した。A類4点、B類1点、C類5点である。

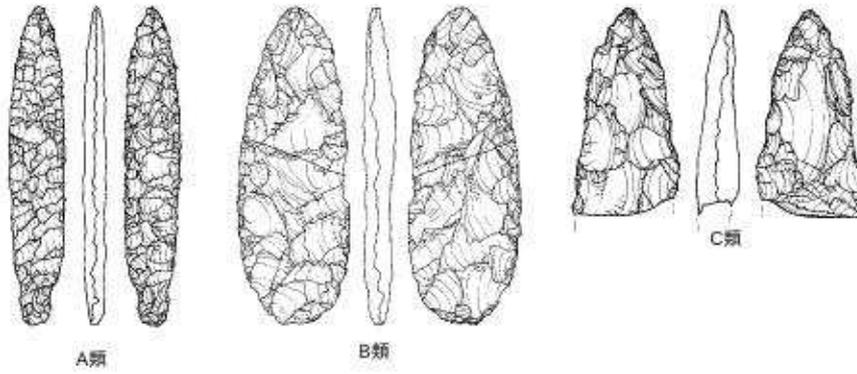
A類 (23～26) 全体形が細身に作出され、基部がくびれ、つまみ状の突起を持つものである。24・26はくびれてはいないが、基部に向かってのすぼまりかたが緩くなり、つまみ状の基部になる。山形県押出遺跡で多し、いわゆる「押出型ポイント」[佐々木・佐藤1986]と呼称されているものである。

B類 (27) 全体形が幅広に作出され、基部が円くすぼまるものである。

C類 (28～30) いずれも欠損品であるため分類不可能なものである。図示した3点は尖頭部と仮定したが、尖頭部か基部か判断し難い。

## 分 布

出土数が少ないため顕著な集中化傾向は認められないが、他器種の分布と同様に、調査区北西部の6～7列、中央部の12～14列にやや多く分布する。押出型ポイントとしたA類は、すべて前期後葉～末葉の集落跡周辺からの出土である。25は出土層位に問題があるものの、A類は前期後葉～末葉の時期に所属



第17図 尖頭器分類図

するものと考えている。

石 材

1点（緑色凝灰岩）を除き、すべて硬質・緻密・珪質化された良質な頁岩が用いられている。

D 石 錐 (31～41)

剥片の一部または全面に二次調整を加え、錐部を作出した石器である。錐部の多くは磨耗痕が認められる。総数26点出土している。

分 類

錐部形状・素材・つまみ部の形状などから細分した。A類4点、B類1点、C1類5点、C2類8点、D類5点、錐部が破損し分類できないもの3点である。

A類 (31・32) 錐部とつまみ部が明瞭に区分され、錐部が長いもの。素材はほぼ縦長剥片である。

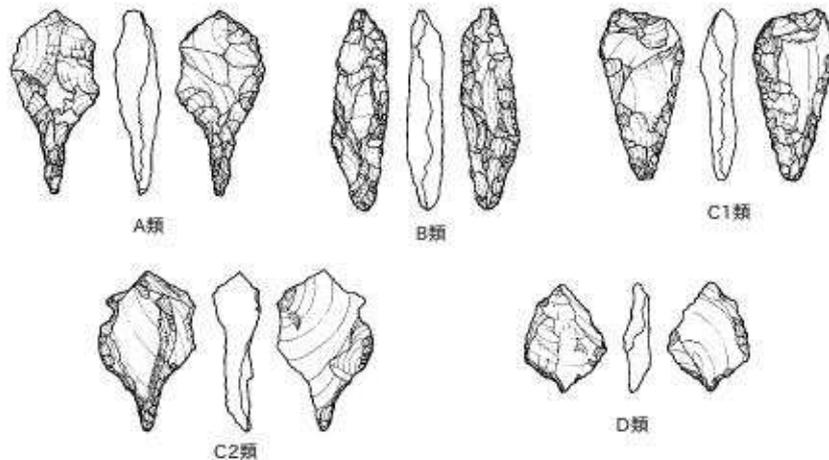
B類 (33) 棒状で両端に錐部を持つもの。厚手で幅狭な素材の全面に二次調整が施される。

C類 (34～38) 錐部とつまみ部の境が不明瞭で緩やかに広がるもの。素材形状からさらに細分した。

C1類 (34・35) 長さに対して幅の比率が小さいもの。錐部からつまみ部への開き角は小さい。

C2類 (36～38) 長さに対して幅の比率が大きいもの。錐部からつまみ部への開き角は大きい。

D類 (39～41) 素材端部の一部に二次調整が加えられ、ピック状の短い錐部が作出されるもの。



第18図 石錐分類図

分 布

調査区北西部の6C～D・7D、中央部の12～14・E～Fにやや多く分布する。分類別の片寄りは認められない。

石 材

頁岩11点、メノウ・緑色凝灰岩各3点、凝灰岩・鉄石英(赤)・鉄石英(緑)各2点、鉄石英(黄)・流紋岩・石英各1点である。

素 材

A類がほぼ縦長剥片を使用しているのに対し、他の分類は著しい偏りが認められない。

E 石 匙 (42～64)

挟りのあるつまみと刃部を有する剥片石器である。尖頭器A類とは幅の広さ、左右の対称性により区別される。総数50点出土している。

分 類

つまみ部を上置き、刃部とつまみ部の関係及び刃部形状で細分した。A1類5点、A2類5点、A3類6点、A4類11点、B類7点、C類3点、破損し分類不可能なもの13点である。

A類(42～57) 刃部が縦に長いいわゆる「縦型石匙」である。刃部が斜めにある「斜刃型」も、長さが幅より大きい場合は縦型石匙に含めた。刃部の二次調整でさらに細分した。

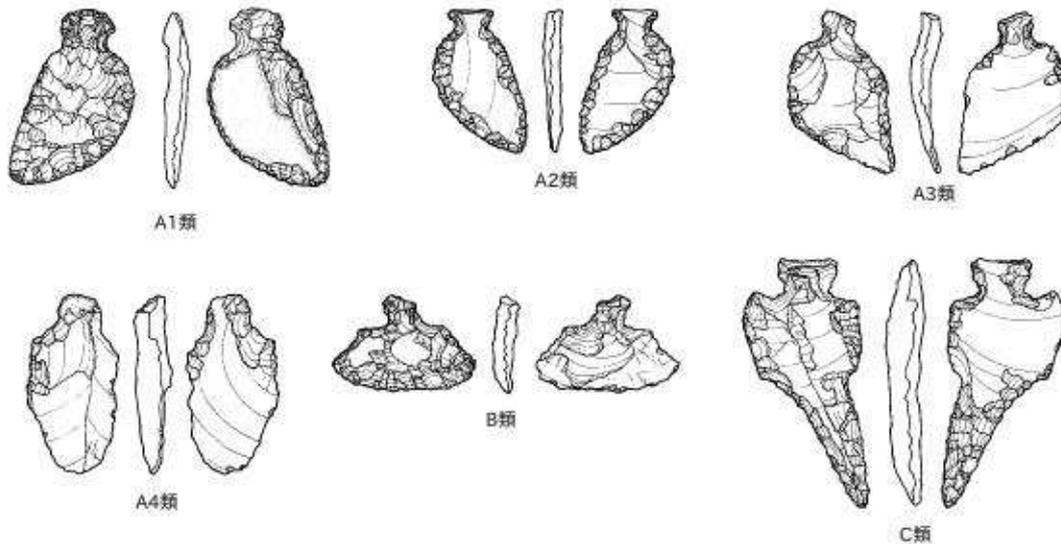
A1類(42～45) 両面調整で、正面はほぼ全面調整されるもの。いわゆる「松原型石匙」<sup>1)</sup> [秦昭1991] である。

A2類(46～49) 両面調整が周縁だけに限られ、両面とも素材面を大きく残すもの。

A3類(50～53) 片面調整のもの。

A4類(54～57) つまみ部の挟りのみ作出され、刃部は無調整または一部のみ調整されるもの。

B類(58～61) 刃部が横に長いいわゆる「横型石匙」である。刃部が斜めにある「斜刃型」も、幅が



第19図 石匙分類図

1) 松原型石匙とは、剥片の背面右側辺に打面となる調整剥離を施し、その面を打面として正面に調整剥離が施されているもの。早期最終末から前期前葉に製作された。

長さより大きい場合は横型石匙に含めた。

**C類** (62～64) 刃部が石錐状に細長く伸び尖るもの。両面調整であるが両面とも素材面を残す。異形石器・石錐の一部か判断し兼ねるが、ここでは抉りのあるつまみ部から石匙に含めた。

#### 分 布

調査区北西部の8E、中央部の12～13・E～Fにやや集中する。分類別では、A1類が5点中1点を除き13～14・E～Fの比較的狭い範囲に集中する。

#### 石 材

頁岩22点、緑色凝灰岩・鉄石英(緑)各7点、メノウ・凝灰岩各4点、鉄石英(赤)3点、鉄石英(黄)2点、流紋岩1点である。いずれも硬質で緻密な石材を使用するが、緑色凝灰岩・鉄石英(緑)の使用頻度が高い。

また、鉄石英(緑)は2点を除き13F・14Eに集中する。

#### 素 材

分類基準を反映しA・C類はほとんどが縦長剥片、B類はすべて横長剥片を使用している。したがって、つまみ部に打点・打面を持つものが多い。

### F 不定形石器 (65～103)

剥片を素材とし、刃部と思われる部分に二次調整や使用痕が認められる不定形な石器である。総数781点を数え、器種石器の中で最も多い。

#### 分 類

刃部形状の違いにより細分類した。刃部が2か所以上あり、それぞれの形状が異なる場合は、より主要と思われる刃部を優先した。A類39点、B類58点、C類32点、D類68点、E類49点、F類328点、G類83点、分類不可124点である。

**A類** (65～70) 連続的な押圧剥離による滑らかで長い刃部を持つもの。片面・半両面調整のため、刃部断面形は片刃が主体となる。スクレイパー、搔・削器と呼称されていたものに相当する。

**B類** (71～76) 連続または連続状の剥離による鋸歯状の刃部を持つもの。片面・半両面調整のため、刃部断面形は片刃が主体となる。鋸歯縁石器、デンティキュレイトと呼称されていたものに相当する。

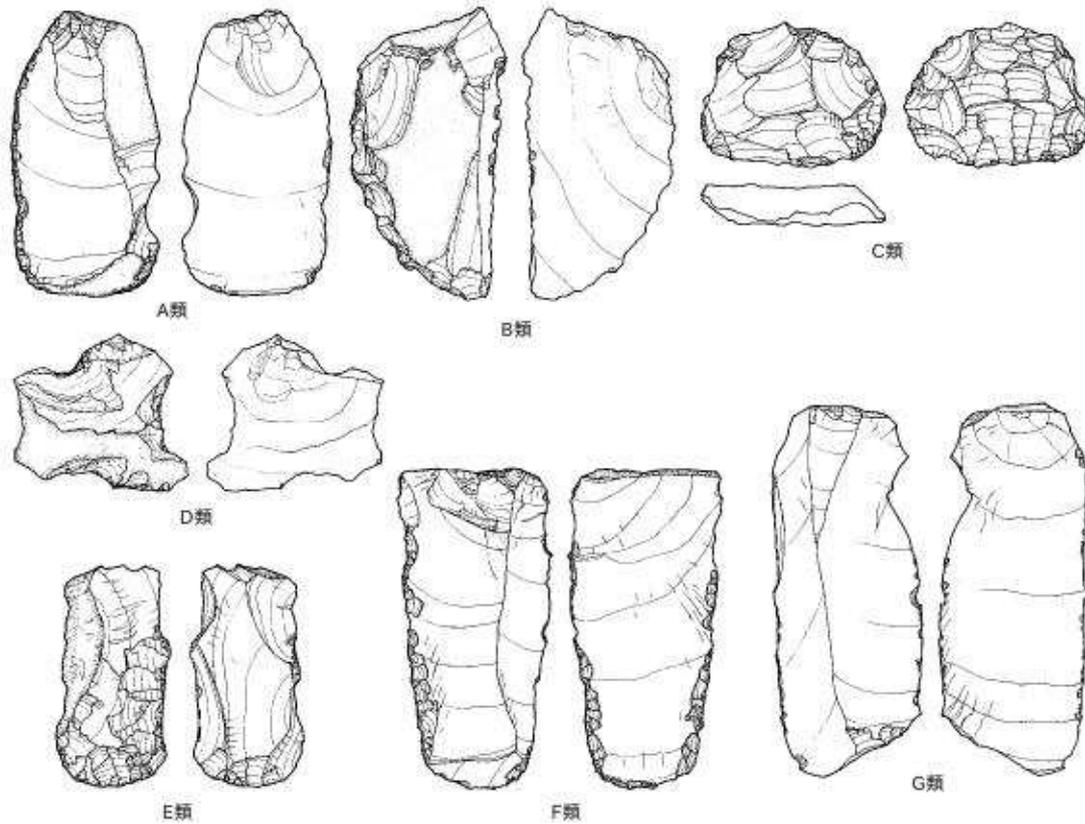
**C類** (77～80) 両面に連続または連続状の剥離のあるもの。両面調整のため両刃が主体となり、側面観もジグザグ状のものが多い。調整には①交互剥離のほか、②片面の連続剥離後に一方の片面に連続剥離するものがある。②はA類の刃部再生の可能性もあるが、明確に判断できないためC類に含めた。

**D類** (81～84) 抉入状の刃部を持つもの。抉入石器、ノッチと呼称されていたものに相当する。片面・両面のいずれの調整も存在するが、片面調整のものが多い。

**E類** (85～89) 素材の端部に連続または連続状の剥離による刃部を持つもの。エンドスクレイパー、搔器と呼称されていたものを含む。A類が側縁から端部という刃部が長いのに対し、E類の刃部は比較的端部に限られる点で区別される。

**F類** (90～97) 不連続な剥離の刃部を持つもの。

**G類** (98～103) 明らかに刃部の調整がないものの、使用の結果と思われる微細剥離・磨耗・光沢などの使用痕が認められるもの。



第20図 不定形石器分類図

## 分 布

調査区北西部の4～5Bから9Fにかけての沢A沿いの微高地、12～18列の前期後葉～末葉の集落跡周辺にやや多く分布する。中でも5D・6C～D、12～13E・13～14Fに多く分布する。分類別の片寄りには認められない。

## 石 材

分類不可を除いた657点を対象とした。頁岩349点、流紋岩119点、緑色凝灰岩67点、凝灰岩46点、鉄石英(緑)45点、鉄石英(赤)9点、鉄石英(黄)8点、メノウ3点、安山岩・硬砂岩各1点である。頁岩が極めて多く、流紋岩・緑色凝灰岩・凝灰岩・鉄石英(緑)も一定量使用されている。

なお、鉄石英(緑)は前期前葉～中葉の遺構・遺物が分布する12～14・E～Fにほぼ集中することから、前期前葉～中葉に使用された石材とほぼ断定できる。

## G 両極剥離痕のある石器(104～106)

総数16点出土している。2個一対の刃部を持つもの(104・105)14点、4個二対の刃部を持つもの(106)2点である。出土数が少なく分布は散漫であるが、8Dの3点を含み調査区北西部にやや多い。石材は頁岩6点、流紋岩3点、鉄石英(緑)・鉄石英(赤)各2点、メノウ・凝灰岩・緑色凝灰岩各1点である。

## H 篋状石器(107～114)

硬質で緻密な剥片を用い、両面調整により片刃の斧状に仕上げた石器である。打製石斧と区別しにくい。打製石斧A・C類とは形状で区別され、B類とは素材・石材で区別される。総数15点出土している。

平面形は刃部幅と基部幅が同じのもの(109)も存在するが、これ以外はすべて刃部が広く基部が狭くなる撥形を呈する。また、109の側縁部は、稜がややつぶれているが、109以外は稜が鋭くなっている。刃部の磨耗・光沢も109は著しく、他の筥状石器とは違和感がある。

#### 分 布

出土数が少なく散漫に分布するが、すべて14列より北西側からの出土である。

#### 石 材

頁岩8点、流紋岩3点、緑色凝灰岩2点、鉄石英(黄)・凝灰岩各1点で、硬質で緻密な石材が使用されている。

#### 刃部断面形

刃部が欠損する1点を除き、弱強片刃〔佐原1977〕を含めすべて片刃である。

#### そ の 他

小型品のため筥状石器に含めたが、113のように刃部に自然面や古い剥離面を残し、直刃に近い緩い曲刃を呈する「トランシェ様石器」<sup>1)</sup>〔富樫1976〕に近似するものが2点認められる。

### I 打製石斧(115~119)

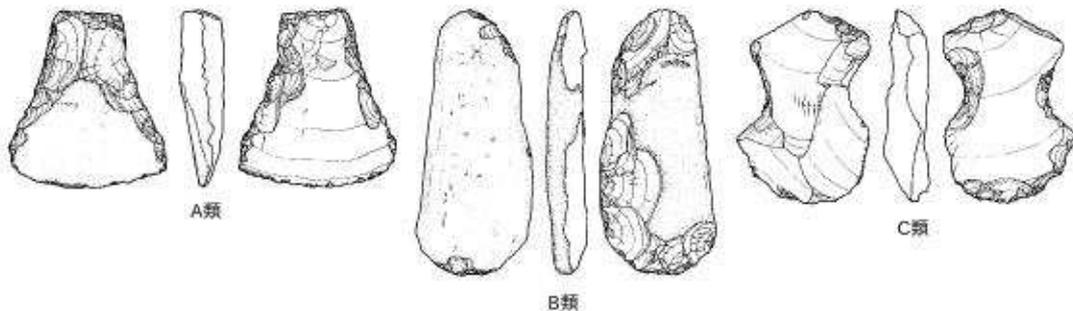
比較的大型の扁平礫や剥片を素材とし、両面調整により斧状に仕上げた石器である。筥状石器とは前述のように素材・石材・形状などにより区別される。総数11点出土している。

#### 分 類

形状・石材・素材などで細分した。A類1点、B類8点、C類2点である。

**A類(115)** いわゆる「トランシェ様石器」である。硬質で緻密な剥片を用いている。刃部は無加工で両面に素材面を残す。平面形は台形(撥形)、刃部は片刃で直刃状を呈する。1点のみの出土であるが、小型品のため筥状石器に含めたものが2点存在する。

**B類(116・117)** 扁平な長大礫を素材とするもの。素材の形状を生かすものが多く、調整は概して少ない。しかし、側縁には稜をつぶすための調整がほとんどに認められ、筥状石器の側縁の稜が明瞭に残されていることに比べると大きく異なる。石材は火成岩や粘板岩などやや軟質で粗い石質であるものの、折れにくい石材を使用し、この点で筥状石器と異なる。B類は中期以降に多出する打製石斧に石材・形状



第21図 打製石斧分類図

1) この他トランシェ様石器の特徴として、石器の形態は台形または二等辺三角形をなすこと、縄文時代早期の貝殻文土器に特徴的に伴うこと、分布地域は東北部から北海道南部であること、ヨーロッパのトランシェと製作技術などが同様であること、機能はナイフ的な働きをなすと考えられることなどを指摘している。

などが近似する。

**C類 (118・119)** 側縁が大きく抉れる分銅型の石斧である。硬質で緻密な剥片を素材とし、側縁の抉りはつぶれず、稜が明瞭に残る。

#### 分 布

出土数が少なく散漫に分布する。

#### 石 材

閃緑岩・流紋岩・ホルンフェルス各2点、頁岩・緑色凝灰岩・粘板岩・安山岩各1点、不明1点である。A・C類は硬質で緻密な石材、B類はやや軟質で粗いが折れにくい石材を使用している。

#### 素 材

分類基準で述べたようにA・C類は剥片、B類は扁平な長大礫である。

### J 石 錘 (120～141)

扁平礫の両端を剥離・敲打・擦りにより、抉りが付けられたものである。総数318点を数え、器種石器の中では不定形石器・敲磨石類に次いで多く出土している。

#### 分 類

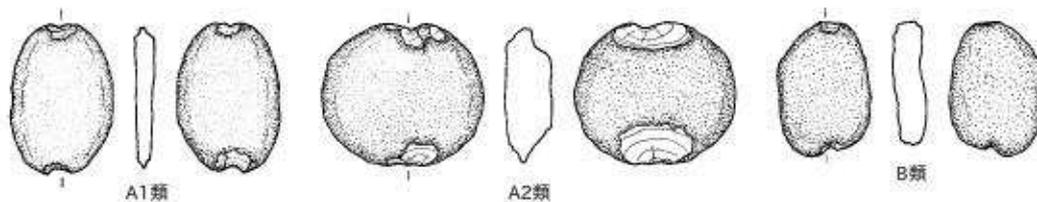
抉りの製作技術により細分した。A1類258点、A2類15点、B類1点、破損品・破片44点である。

**A類 (120～140)** 剥離・敲打により抉りが付けられたもの。いわゆる「礫石錘」と称されているもので、抉りの場所によりさらに細分した。

**A1類 (120～133・137)** 長軸の両端に抉りが付けられたもの。

**A2類 (134～136・138～140)** 短軸の両端に抉りがつけられたもの。134は長軸の両端に抉りがつけられるが、抉りが深く抉り部の長さで短軸が逆転するためA2類に含めた。

**B類 (141)** 剥離・敲打後に擦りによる抉りが付けられたものである。1点のみの出土である。中期後半から出現する「切目石錘」[渡辺1984]に近似するが、剥離・敲打が行われる点で異なる。A類の特異例と考えている。



第22図 石錘分類図

#### 分 布

出土数が多いものの極めて特徴的な分布傾向が認められた。調査区北西部の8列から中央部の14列にかけて「逆U字状」に分布し、中でも8E、12～13E・13～14F・13Gに集中する。この逆U字状の範囲は、早期中葉・前期後葉～末葉の遺構・遺物の分布範囲と重なる部分もあるが、前期前葉～中葉の遺構・遺物の分布範囲とほぼ一致する。したがって、石錘の所属時期は前期前葉～中葉とほぼ断定できる。

#### 重 さ (第2表)

完形品274点を対象とした。50～100gまでが62点と最も多く、200g未満が148点で全体の54%を占める。以後、200～1000g未満までほぼ横ばいで、1000g以上になると急減する。

石 材

安山岩 143 点で最もよく利用されている。このほか凝灰岩 42 点、流紋岩 37 点、石英安山岩 35 点、砂岩 17 点となる。火成岩系の扁平礫を用いている。

そ の 他

石錘の分布傾向によりその所属時期を前期前葉～中葉とほぼ断定したが、既に早期末～前期前葉には石錘の比率が高まる遺跡が多い〔鈴木俊 1999〕ことが指摘されていることと矛盾しない。

重さ (g)	A1類 (点)	A2類 (点)	B類 (点)	合計 (点)
～50未満	24	1	1	26
50～100未満	62			62
100～150未満	34	3		37
150～200未満	22	1		23
200～300未満	10	1		11
300～400未満	17	1		18
400～500未満	15			15
500～600未満	14	1		15
600～700未満	16	4		20
700～800未満	13			13
800～900未満	9			9
900～1000未満	7			7
1000～	15	3		18
合 計	258	15	1	274

第2表 石錘分類別重量分布表

K 石錘失敗品・石錘素材 (142～147)

礫の形状や製作痕から石錘を作出しようと意図したが、何らかの理由により断念（失敗）したもの。また、礫の形状から石錘を作る目的のために遺跡に搬入された素材である。総数 22 点を数える。なお、石錘の破損品・破片とした 47 点の中には、石錘失敗品が多く含まれていることが予想される。

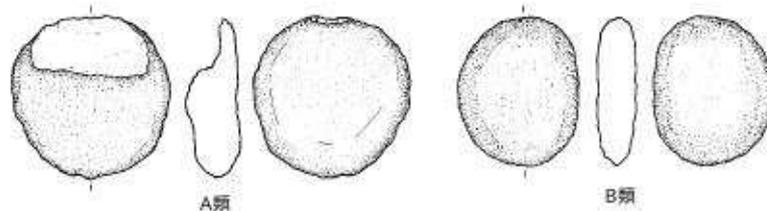
分 類

製作痕の有無により細分した。

**A類 (142～144)** 扁平礫の端部に調整が加えられているが、挟りが作出されていないもの。1 点を除き、142～144 のように一端部に剥離が施されたが紐かけ部の挟りが未完成なものである。しかも、調整のための剥離が大き過ぎ（破損）、製作を断念したと考えられるものが多い。

**B類 (145～147)** 石錘と同様の扁平礫であるが、無加工のもの。調査で得られた器種を見る限り、石錘以外の器種は想定できない。石錘の素材として遺跡内に搬入されたものと考えている。

総数 22 点のうち、A・B類各 11 点<sup>1)</sup>である。



第23図 石錘失敗品・石錘素材分類図

分 布

石錘の分布域にほぼ収まり、集中域も 13～14・E～F で一致する。

重 さ

分析数は少ないが石錘に比べやや大きい傾向にある。

L 磨製石斧 (148～155)

総数 16 点出土している。小型品から大型品、ほぼ全面が研磨されたものから刃部を中心に一部のみ研

1) 包含層は礫を含まないため無加工の礫はすべて搬入礫と考えられる。しかし、単なる搬入礫として処理された礫が多い。したがって、B類は抽出数よりもさらに多くなると予想される。

磨されたものまで様々である。

### 分 類

研磨の状況、大きさにより細分した。

A類 (148～151・154) ほぼ全面が研磨されたもの。大きさによりさらに細分した。

A1類 (148～150・154) 長さ6.5cm以上のもの。3点を数え、いずれも撚形にある程度形が整えられ、明瞭ではないが側面と主面の間に弱い稜を持つ。中期以降に一般化する定角式磨製石斧の祖形のようにも推定される。

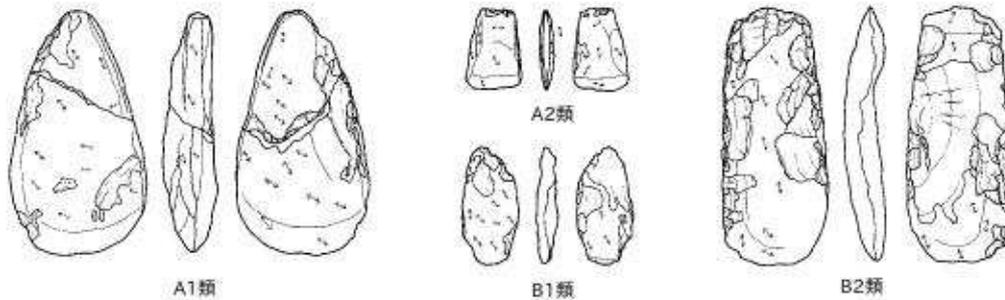
A2類 (151) 長さ6.5cm未満のもの。1点のみの出土である。左側面の状況から擦り切り石斧の可能性がある。

B類 (152・153・155) 主に刃部を中心に一部を研磨するもの。したがって、素材獲得時の形状や剥離・敲打の調整痕を多く残す。大きさによりさらに細分した。

B1類 (153) 長さ6.5cm以上のもの。5点を数え、すべて側面は研磨されていない。

B2類 (152・155) 長さ6.5cm未満のもの。3点を数え、すべて磨製石斧の再生品または剥片素材と推定される。

分類不可としたものが3点あるが、主面と側面に明瞭な稜を持つ定角式磨製石斧の破片が2点存在する。



第24図 磨製石斧分類図

### 分 布

出土数が少なく、しかも様々な形状のものが含まれているため、集中域は見られない。

### 石 材

蛇紋岩・緑色凝灰岩各4点、輝緑岩・ひん岩各2点、ホルンフェルス1点、不明2点である。折れにくい石材を使用している。糸魚川産の蛇紋岩が4点出土していることが注目される。

### そ の 他

基端に敲打痕が認められるものが9点を数え、楔状に使用された痕跡も推定できる。

## M 敲磨石類 (156～194)

片手ないしは両手で把持できる大きさの礫の表面に、調整や使用の結果と推定される敲打痕や磨痕が認められる石器を一括した。凹痕は敲打痕の集中と理解し、敲打痕に含めた。総数443点出土している。器種石器の中では不定形石器に次いで多く、礫石器の中では最も多い。

### 分 類

早期中葉～後葉に多出するといわれ〔八木1976〕、いわゆる「特殊磨石」と呼称されている石器と縄文時代の各期に一般的に認められる磨石を分け、さらに形状・使用痕の状況により細分した。なお、特殊

磨石と一般的な磨石との区別は〔八木前掲・神村1999〕に従ったが、一部区別できないものも存在する。A1類96点、A2類29点、B1類12点、B2類35点、C1類102点、C2a類25点、C2b類52点、D1類23点、D2類26点、D3類4点、E類1点、分類不可38点である。

**A類** (156～165) いわゆる「特殊磨石」と呼称されているもので、長さ10～20cm前後の円柱・角柱状の転石の側縁部に磨痕・敲打痕により面をなすもの（以後、「磨・敲打面」とする）である。B～D類に比べやや長い。断面形状は一般的に楕円形・方形・三角形を呈する。側縁部の磨・敲打面と他の面には明瞭な稜を有し、稜付近に細かな剥離痕が見られる。端部の敲打痕の有無によりさらに細分した。

**A1類** (156～161) 側縁部の磨・敲打面のみのものである。

**A2類** (162～165) 側縁の磨・敲打面と端部に敲打痕が認められるもの。端部の敲打痕は使用頻度状況により面をなす。面は必ずしも敲打だけによるものでなく、磨りによることも想定できる。

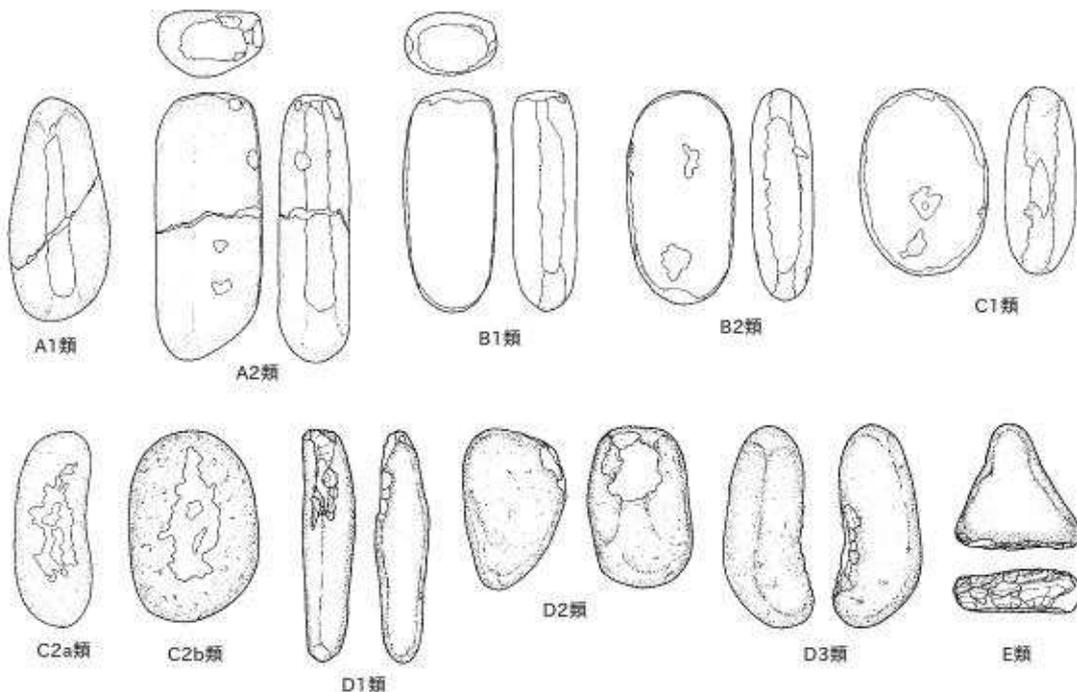
A類には正裏面に磨痕や敲打痕及び敲打痕による凹痕が認められるものもある。磨痕は側縁部を作出するため〔八木前掲〕の調整、敲打痕及び敲打痕による凹痕は使用の結果と推定される。またA類には側縁部のほぼ中央からの打撃により破損したもの（156～158・162～165）がある。使用の結果と推定されるが、礫の大きさを考えるとかなり強い衝撃（敲打）が想定される。しかも、156・162・164のように破損＝廃棄ではなく、より大きく残った方をその後も使用している。

**B類** (166～172) 側縁部の磨・敲打面以外に正裏面にも磨面が認められるもので、特殊磨石と一般的な磨石との区別がつきにくく中間の特徴を兼ね備えたものである。素材の形状によりさらに細分した。

**B1類** (166・167) 素材がやや太い棒状・長楕円形で、一般的にやや厚手のもの。使用の頻度にもよるが、使い込まれた成品は長い長方形になる。

**B2類** (168～172) 素材が円形・楕円形のもの。側縁部の使用の頻度により、成品は円形・楕円形・短い長方形（石輪型）になる。

B1類は特殊磨石に近似し、B2類は一般的な磨石類に近似する。168・169・172のように正裏面は



第25図 敲磨石類分類図

磨痕だけでなく、敲打痕・敲打による凹痕が認められるものもあり、166～168・171・172のように端部に敲打痕または磨・敲打面が認められるものもある。

**C類** (173～183) 側縁部に磨・敲打痕は認められず、特殊磨石の定義から外れるものである。175・176のように敲打痕が認められるものもあるが、面的な広がりをもたない。一部(C2a類)を除き、縄文時代の各期に一般的に認められる磨石類である。

**C1類** (173～176) 正裏面の磨痕だけのもの、正裏面の磨痕に敲打痕・敲打による凹痕が認められるものである。平面形は円形・楕円形である。

**C2類** (177～183) 正裏面に敲打痕・敲打による凹痕だけが認められるものである。従来、「凹石」と呼称されていたものに相当する。素材の長幅比によりさらに細分した。

**C2a類** (177～180) 素材の長さが幅の2倍以上のもの。棒状・長楕円形礫の素材である。

**C2b類** (181～183) 素材の長さが幅の2倍未満のもの。円形・楕円形礫の素材である。

**D類** (184～193) 端部や側縁部に面をもたない不連続な敲打痕が認められるもので、従来から「敲石」「叩き石」「ハンマー」などと呼称されているものである。素材・敲打痕の状況により細分した。

**D1類** (184～186) 長さが幅に対し大幅に長いもの。長幅比は目安として1.5～2倍以上になる。敲打痕は端部または端部付近に多く認められる。

**D2類** (187～189) 長さが幅に対しやや長いもの。長幅比は目安として1.5倍未満になる。垂角礫状のものも多く、端部や端部付近に敲打痕が認められる。D1類に比べ重量感があり、角張っている。

**D3類** (190～193) 主に扁平楕円礫・棒状垂角礫の側縁部に、敲打痕や敲打に伴う剥離が認められるものである。

**E類** (194) 1点のみの出土である。扁平礫の下半を打ち欠き、底面を作出し、この底面に弱い敲打痕が認められる。いわゆる「スタンプ形石器」「凡字形石器」[鈴木前掲]と呼称されている石器である。

### 分 布

全体的に見ると前期後葉～末葉の集落跡の広場と推定される14～16・B～D、近世墓地の攪乱のあった調査区南東寄りの18A～22Fにかけてはほぼ皆無であるが、これ以外からは満遍なく出土している。特に8E周辺、13E～G周辺多く分布する。

分類別では、各分類で分布傾向に特徴が認められる。特殊磨石のA類は調査区北西部の5C～D、中央部の14E～Gにかけて分布する。早期中葉・前期前葉～中葉の遺構・遺物範囲とほぼ一致し、前期後葉～末葉の集落跡とは一致しない。このことから特殊磨石は早期中葉・前期前葉～前期中葉の所産と推定される。特殊磨石に近似するB1類もA類の分布範囲に収まることから同様の時期と推定される。C類はC2a類を除き全体的な分布傾向とほぼ一致する。したがって、早期中葉・前期前葉～中葉・前期後葉～末葉の各期に使用された結果を反映している。細身の凹石であるC2a類は、調査区中央部の11～12列に多く分布することから、前期前葉～中葉に所属するものと推定される。D類は調査区北西部ではほとんど出土せず、前期前葉～中葉・前期後葉～末葉の集落跡周辺から多く出土している。D類とした敲石系の石器は、前期以降に増加するものと推定している。

### 石 材

安山岩251点で半数以上を占める。次いで石英安山岩46点、流紋岩38点、輝緑岩22点、花崗岩・凝灰岩各19点、砂岩12点、ひん岩11点となる。粒子の粗い火成岩系の石材が多く使用されている。

## N 石 皿 (195～204)

扁平大型の円・楕円形礫の正面または正裏面に、使用の結果と推定される磨面や敲打痕が認められるもの。使用面は磨面の場合、滑らかな平面または緩やかな曲面をなす。また、使用面の滑らかさはほぼ均質、または中心部の滑らかさが強く、周辺は漸次弱くなる。これらの諸特徴から砥石とはほぼ区別される。接合後の総数51点出土している。A類7点、B類38点、分類不可6点である。

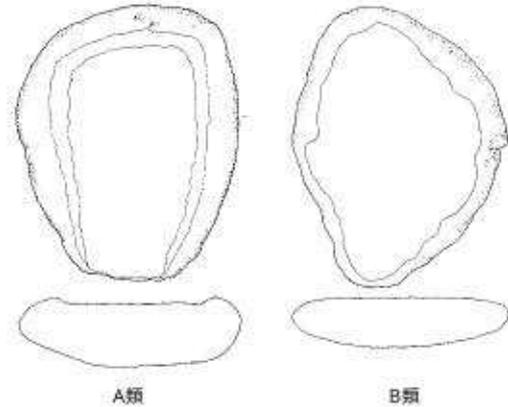
### 分 類

使用面の加工の有無により細分した。

**A類 (195～198)** 敲打により使用面が作出されているもの。使用面作出→使用・摩滅→使用面再生を繰り返すことにより、周縁に縁が形成される。

**B類 (199～204)** 使用面が作出されず、素材獲得時の礫面を無加工のまま使用しているもの。

A・B類とも198～200・202のように敲打痕または敲打による凹痕が認められるものもある。磨る(擦る)以外に敲く機能が窺える。



第26図 石皿分類図

### 分 布

A類で特徴的な分布が認められた。出土地点不明の1点を除き、6点中すべて17列より南東寄りに分布する。この範囲は前期後葉～末葉の集落跡のみであり、A類は前期後葉～末葉に所属する。B類は散漫に分布し、早期中葉～前期末葉まで各期において満遍なく使用されたものと推定される。

### 石 材

安山岩38点、砂岩7点、凝灰岩5点、流紋岩1点である。粒子の粗い礫面の凹凸が激しい石材を使用している。

### そ の 他

敲磨石類と石皿の分布から、敲磨石類A類(特殊磨石)は前期中葉まで存続し、石皿A類(加工石皿)は前期後葉より出現すると推定した。特殊磨石と石皿は時期的に相反する関係にある。特殊磨石は素材の形状が長く、側縁の磨面が長いという特徴から、有縁の加工石皿とはセットのならないものであり、無加工の石皿とセットになる。

## O 砥 石 (204～224)

主に砂岩などの粒子構造を持つ礫の表面に、使用による磨面(砥面)が認められる石器である。総数60点出土し、石皿に近似するものもあるが次の相違点により区別される。

石皿に比べ形が不整形なものが多く、砥面も正裏面だけに限らず側縁部・端部など一定していない。砥面は石皿ほど広くなく、また滑らかさも均質でない。带状・筋状の砥面が見られるなどである。

### 分 類

砥面の種類により細分した。A類16点、B類10点、C類16点、D類4点、分類不可14点である。

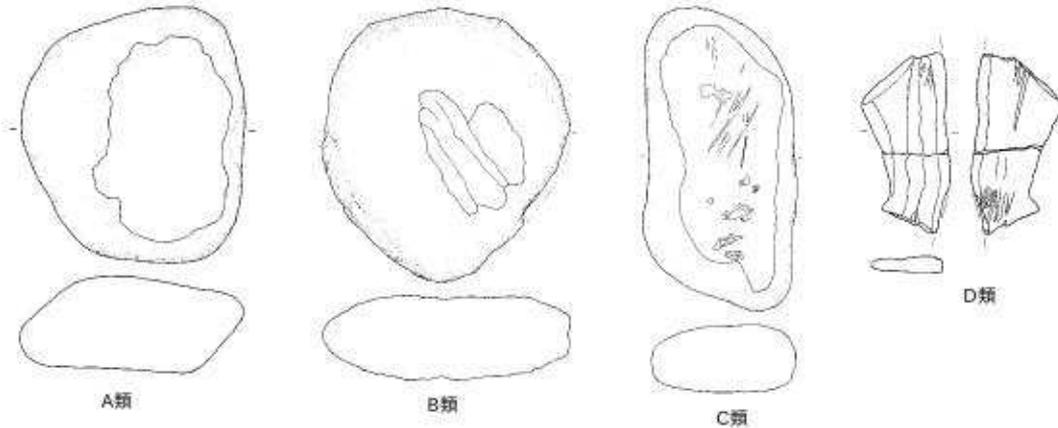
**A類 (205～208)** 面状砥面のもの。主に扁平礫の正面または正裏面に、ある程度の広がりをもつ面

的な砥面が残されているもの。石皿に比べ砥面は狭く、砥面の形も不整形で、滑らかさも均質でない。

**B類** (209～213) 帯状砥面のもの。砥面が帯状に細長く、横断面は極めて緩く窪んでいる。A類の中に帯状砥面がある場合はB類とした。

**C類** (214～220) 線状砥面のもの。砥面が幅1～3mm程度の線状に細長くなる。A・B類の中に線状砥面が見られる場合はC類とした。

**D類** (221～224) 内磨き状砥石。扁平で薄手な素材の側縁部が砥面となっている。玉作り遺跡では多出する。A・B・C類と兼ねる場合はD類とする。



第27図 砥石分類図

#### 分 布

全体的に見ると13E～Fに多く分布し、A類は調査区北西部でも出土しているが、B～D類は皆無である。D類は4点しかないため判然としないが、13列より東からの出土になる。分布からA類は早期中葉～前期末葉の各期、B～D類は前期以降に所属し、D類は前期後葉～末葉に伴う可能性が高い。

#### 石 材

砂岩が28点で多く、全体のほぼ半数を占める。次いで安山岩14点、凝灰岩6点、礫の粒子の細かい礫岩4点などである。粒子構造を持つ石材が使用されている。

#### P 器種分類不明石器 (225～227)

3点のみ出土した。225は円礫の正裏面に磨面が認められるもので、元の素材は断面楕円形と推定されるが、極めてよく使い込まれ扁平になっている。226・227は剥片素材に抉りを入れたもので226は2か所、227は4か所認められる。異形石器の一種とも思われるが断定できない。石材は225安山岩、226緑色凝灰岩、227流紋岩である。

#### Q 石 核 (228～238)

剥片剥離作業中に何らかの理由により剥離作業を断念した残核、剥片剥離作業終了後の残核である。総数128点出土している。全体的に概観すると素材は自然礫・荒割礫・剥片と様々であり、剥離作業の前段階となる打面調整などは見出せない。

#### 分 類

石核に残された剥離の痕跡から剥離作業に着目し分類した。剥離作業は、剥離作業面数、打面数、剥離

方法により様々であるが、10細分し7分類にまとめた。

**A類 (剥離作業1) (228・229)** 同一打面から同一剥離作業面に同方向の剥離作業が行われるもの。したがって、打面が1面、剥離作業面が1面である。

**B類 (230)** 同一剥離作業面に別々の打面(約90°・180°ずれる)から剥離作業が行われるもの。したがって、打面は2面以上で、剥離作業面は1面である。打面と剥離作業面との関係からさらに細分される。

(剥離作業2) 同一剥離作業面に約90°ずれた打面からの剥離作業。

(剥離作業3) 同一剥離作業面に約180°ずれた打面からの剥離作業。

(剥離作業4) 同一剥離作業面に約90°・180°ずれた打面からの剥離作業。

**C類 (剥離作業5) (231)** 同一打面から別々の剥離作業面に同方向の剥離作業が行われるもの。したがって、打面が1面で、剥離作業面が2面以上ある。

**D類 (剥離作業6) (232・233)** 石核の稜線上からの交互剥離による剥離作業。稜線上の片面を剥離後、その剥離面を打面として残りの片面に剥離を行う剥離作業。剥離作業は全周しない。剥離作業面は正裏の2面で、打面は剥離作業により更新される。

**E類 (剥離作業7) (234)** 石核の稜線上からの交互剥離による剥離作業。稜線上の片面を剥離後、その剥離面を打面として残りの片面に剥離を行う剥離作業。剥離作業は全周する。剥離作業面は正裏の2面で、打面は剥離作業により更新される。D類とE類の剥離作業は同じであり、剥離作業が全周するかしないかの違いだけである。

**F類 (235～237)** 別々の打面と別々の剥離作業面で剥離作業が行われるもの。したがって、打面が2面で、剥離作業面が2面である。打面と剥離作業面との関係からさらに細分される。

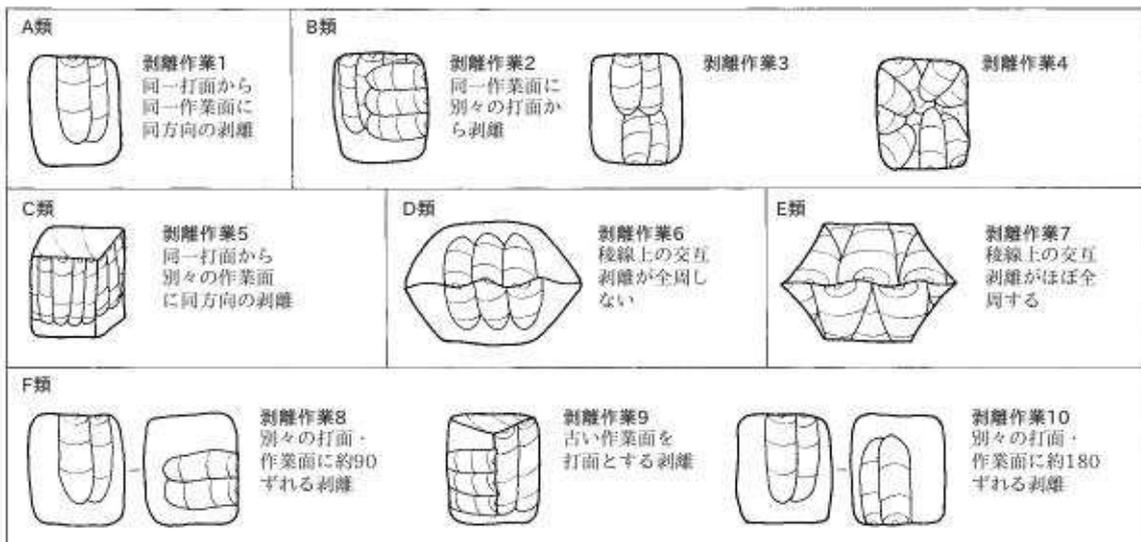
(剥離作業8) (235) 剥離方向が約90°ずれる剥離作業のもの。

(剥離作業9) (236) 片方の打面は古い剥離作業面を利用する。

(剥離作業10) (237) 剥離方向が約180°ずれる剥離作業のもの。

**分類不可** A～F類以外の剥離作業。そのほとんどはA～F類の剥離作業の組み合わせである。

総数128点のうち、A類19点、B類10点、C類12点、D類28点、E類10点、F類6点、分類不可42点である。剥離作業には打面が固定し打点が移動するものと打面転移を頻繁に行うものがある。A～C・



第28図 石核分類図

F類は前者に、D・E類・分類不可のほとんどは後者に含まれる。圧倒的にD・E類・分類不可が多い。このことは、打面転移を頻繁に繰り返し剥片剥離作業を行ったことを意味する。

### 分 布

A類は調査区中央部より北西寄りにやや多く分布し、D・E類は調査区北西部に少ない。調査区北西部は早期中葉の遺構・遺物の分布範囲であり、剥片剥離技術は早期中葉から前期後葉～末葉にかけて剥離作業面・打面がある程度固定され打点を移動しながら剥離作業を行う方法から、適当な剥離作業面があれば打面を転移しながら剥離作業を行う方法が主体になっていくものと推定される。

## R 石核素材 (238)

剥片石器の素材になり得る硬質緻密な石材の荒割礫、大型剥片である。総数11点を数えるが、硬質で緻密な石材であっても、無加工の自然礫は搬入石材として処理している。大型剥片も剥片として処理されたものが多い。したがって、実数はこれより多くなる。238は荒割礫である。荒割り後、何らかの理由により廃棄されたため、剥離面が打面になるのか、剥離作業面になるのか不明である。

## S 接合資料 (238～247)

時間的な制約はあったものの剥片類5,645点、石核・石核素材201点を対象に接合を試みた。接合の結果、剥片同士や剥片と石核などの接合例は114例である。多くは2～3点程度の接合である。接合例が比較的多いのは、遺跡が沼沢火山灰層で覆われていたため、後世の攪乱がほとんどなかったこと、石材の種類や色調が豊富で母岩別に石材の区分が容易だったことなどによる。また、早期中葉、前期前葉～中葉、前期後葉～末葉の遺構・遺物の分布がある程度区別でき、出土量も適度であったことなども一因である。以下、図示したものについて剥離順序などの説明を加える。

239は剥片3点の接合例である。

- ① 239aが剥離される前は、同一剥離作業面上を180°(239aの打点から見て)次いで90°ずれた剥離作業を行っている。しかし、剥離作業面を見る限り得られた剥片は小型である。
- ② 同一剥離作業面で、90°打面を転移し239aを剥離している。
- ③ 同一打面、同一剥離作業面で打点を移動し239bを剥離している。
- ④ 同一剥離作業面で、90°打面を転移し239cを剥離している。

ここまでの剥離作業を見る限り、石核分類の剥離作業2に相当する。

240は剥片4点の接合例である。

- ① 240aが剥離される前は、同一剥離作業面で90°(240aの打点から見て)、次いで同一打面上に打面を転移し剥離作業を行っている。
- ② 同一打面上で打点を移動し、同一剥離作業面に剥離作業を行い240aを剥離している。
- ③ この後、240bが剥離されるまでの剥離作業は、打面・打点の位置・方向が大きく異なることから、何回かの剥離作業が行われたことが予想できるが、剥離作業方法は不明である。
- ④ 240bの剥離の1回前から同一打面で打点を移動し、同一剥離作業面で剥離作業を行っている。観察する限り6回の剥離作業が行われ、240b～dの剥片が得られている。剥片はいずれも縦長剥片である。途中の剥離作業方法が不明なため、剥離作業は不明である。

241は剥片3点の接合例である。

① 241aの剥離の前、4回ほどは同一打面で打点を移動し、同一剥離作業面で剥離作業を行っている。

②引き続き同様の剥離作業を3回行い、241a・bの剥片を得ている。

③ 90° 打面を転移し、同一剥離作業面上で241cを得ている。

ここまでの剥離作業を見る限り、石核分類の剥離作業2に相当する。

242は剥片2点の接合例である。

① 242aが剥離される前、同一作業面で同方向（242aの打点から見て）の剥離作業が3回行われ、4回目に242aが剥離されている。

②この後、242bの打面の位置が低いことから打面再生、または打面転移を行い242aの打面を剥離作業面にした剥離作業が行われたものと推定される。

③ 242bが剥離される前、同一作業面で同方向（242bの打点から見て）の剥離作業が2回行われ、3回目に242bが剥離されている。得られた剥片はいずれも縦長剥片である。

ここまでの剥離作業を見る限り、②が打面再生ならば石核分類の剥離作業1に近似する剥離作業、そうでないならば剥離作業不明である。

243は石核1点と剥片6点の接合資料である。

①まず243b～eの塊を剥離する。

②次いでこの塊を石核とし243e・243d・243cの順に剥離が行われ、243bが残る。

③一方の残り、243の正面を剥離作業面とし、同一打面（243正面の上端）から6回程度の剥離作業が行われ、2回目の剥離作業で243aを剥離している。剥離作業面や243aを見る限り、得られた剥片は小型の横長剥片と推定される。

④その後、同一打面で同一剥離作業面に剥離が加えられ、243fの剥片が得られる。

⑤ 243gが残核として残される。

これまでの剥離作業を見る限り、②の剥離作業を除けば、石核分類の剥離作業2に相当する。

244は剥片7点の接合例である。

① 244の正面は同一剥離作業面の周辺に打面を転移しながら剥離作業が行われている。

② 244の正面を剥離作業面とし、上端から剥離作業を行い、244b・d・c・eを剥離している。

③ 90° 打面転移し、244f・gを剥離する。244f・gは244から剥離後、節理面で割れている。

ここまでの剥離作業を見る限り、石核分類の剥離作業4に近似する剥離作業と考えている。

245は石核1点と剥片6点の接合例である。

交互剥離に近い形での剥離方法（石核分類の剥離作業7）である。剥離順序は新245a→245b→245c古、新245d→245f古、新245e→245f古、残核が245gになる。

246は剥片・石核各1点の接合例である。

典型的な交互剥離が行われる過程（石核分類の剥離作業7）で246aが剥離され、残核246bが残された。

247は石核2点と剥片15点の接合例である。

同一剥離作業面で打面を頻りに転移しながら剥離作業を行っている。大型厚手の剥片を分割し247a・b・c・d・k・hを剥離し、残核247mを残している。一方は247e・f・gを交互剥離で、また同一剥離作業面で打面を転移しながら、247o・i・j（i・jは節理面での割れ）を剥離し、引き続き247n・pを剥離し、残核247qを残している。剥離作業面は同一であるが、剥離作業に規則性は見られない。

## 第VI章 自然科学分析

### 1 地質とテフラ

#### A はじめに

河岸段丘面上に位置する北野遺跡の発掘調査では、縄文時代前期後葉～末葉にかけての集落が検出された。そこで地質調査を実施して土層についての記載を行うとともに、テフラ検出分析と屈折率測定を合わせて実施し、すでに噴出年代が明らかにされている示標テフラの検出と、それらとの層位関係から遺構や遺物包含層の層位に関する資料を収集した。また、集落跡とその周辺域における環境復原を目的とし、微化石分析のために試料の採取を行った。

#### B 試料採取地点の層序 (第29図)

テフラ分析の試料採取は、本遺跡の基本的な土層断面が認められた12B5で実施した。下位より灰色砂礫層 (層厚84cm以上、礫の最大径261mm, IX層)、黄色砂層 (層厚12cm)、褐色砂質土 (層厚4cm)、黄色砂層 (層厚15cm, 以上VII層)、暗褐色砂質土 (層厚5cm, VII層)、黒褐色土 (層厚12cm)、暗褐色土 (層厚2cm, 以上VI層)、黒色土 (層厚8cm, V層)、淘汰のよい灰色砂層 (層厚78cm, IV層)、黄灰色土 (層厚15cm, III層)、黒褐色土 (層厚15cm, II層)、暗褐色土 (層厚16cm, I層)、盛土 (層厚10cm) が認められた。このうち、V層上部からは縄文前期後葉～末葉の土器が検出されている。

#### C テフラ検出分析

##### 試料と分析方法

基本的な土層断面が認められた12B5のVII層～V層について、基本的に5cmごとに採取された試料のうち、5cmおきの試料4点を対象にテフラ検出分析を行って示標テフラの検出を試みた。テフラ検出分析の手順は、次の通りである。

① 試料10gを秤量。② 超音波洗浄装置により泥分を除去。③ 80°Cで恒温乾燥。④ 実体顕微鏡下、テフラ粒子の特徴を観察。

##### 分析結果 (第3表)

いずれの試料にも、透明の繊維束状に発泡した軽石型ガラスや平板状のバブル型ガラスが認められた。特に試料3からは、ごくわずかながら褐色のバブル型ガラスも検出された。

#### D 屈折率測定

##### 試料と測定方法

褐色のバブル型ガラスが検出された12B5の試料3について、位相差法 [新井1972] によりテフラ粒子の屈折率の測定を行った。

##### 測定結果 (第4表)

本試料中の火山ガラスの大半を占める透明あるいは淡褐色ガラスの屈折率 (n) は、1.498-1.505であ

試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
	量	色調	最大径	量	形態	色調
1	-	-	-	+	pm>bw	透明
3	-	-	-	+	pm>bw	透明, 褐
5	-	-	-	+	pm>bw	透明
6	-	-	-	++	pm>bw	透明

++++: とくに多い, ++++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない, -: 認められない, bw: バブル型, pm: 軽石型

第3表 12B5のテフラ検出分析結果

地点	試料	火山ガラスの屈折率 (n)
12B5グリッド	3	1.498-1.505

第4表 屈折率測定結果

る。褐色のバブル型ガラスについては、量的に非常に少なく測定対象にできなかった。

### E 考 察

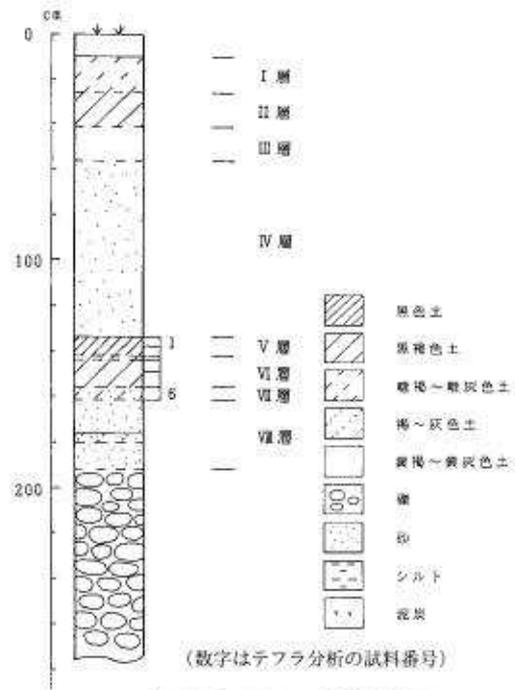
試料3 (VI層最上部) に含まれる火山ガラスは、その形態や色調などから約6,300年前に南九州の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah) [町田・新井1978] に由来している可能性が考えられる。またIV層の洪水砂層については、その層相から約5,000年前に会津地方沼沢火山から噴出した沼沢1テフラ (Nm-1) [只見川第四紀研究グループ1966a・1966b] とそれに伴って噴出した火砕流堆積物に起因する洪水堆積物に対比される。したがって、本遺跡において検出された縄文前期後半の遺物検出層準は、K-Ahより上位にあり、Nm-1と洪水堆積物の下位にあると考えられる。

### F 小 結

地質調査とテフラ検出分析及び屈折率測定の結果、鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah, 約6,300年前) に由来すると思われる火山ガラスと沼沢1テフラ (Nm-1, 約5,000年前) の噴出に由来する洪水堆積物が検出された。本地域において、より詳細な編年研究を行うために、今後さらにテフラの保存状態のよい泥炭層などを対象に調査分析を行い、K-Ahや約5,300年前に十和田火山から噴出し東北地方一帯に降灰した十和田中叡テフラ (To-Cu) [大池ほか1966, 早田・八木1991] の一次堆積層を検出する必要がある。

### 引用文献

新井房夫 1972 「斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究—」『第四紀研究』11。  
 町田 洋・新井房夫 1978 「南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ—アカホヤ火山灰—」『第四紀研究』17。  
 大池昭二ほか 1966 「馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰」『第四紀研究』5。  
 早田 勉・八木浩司 1991 「東北地方の第四紀テフラ研究」『第四紀研究』30。  
 只見川第四紀研究グループ 1966a 「福島県野沢盆地の浮石質砂層の基底部より産出した木材の<sup>14</sup>C年代—日本の第四紀層の<sup>14</sup>C年代XXVI—」『地球科学』82。  
 只見川第四紀研究グループ 1966b 「只見川・阿賀野川流域の第四系の編年—とくに沼沢浮石層の層位学的諸問題について—」『第四紀』8, p.76-79。



第29図 12B5の土層柱状図

## 2 放射性炭素年代測定結果

測定結果を第5表に示すが、年代値は1950年よりの年数(B.P.)である。年代値の算出には、 $^{14}\text{C}$ の半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用している。また、付記した誤差は $\beta$ 線の計数値の標準偏差 $\sigma$ にもとづいて算出した年数で、標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代である。

試料No	種類	年代値	コードNo
No.1	炭化物	4,810 ± 110 (2860B.C.)	Gak-18396
No.2	炭化物	3,960 ± 110 (2010B.C.)	Gak-18397
No.3	炭化物	4,610 ± 100 (2660B.C.)	Gak-18398
No.4	炭化物	2,370 ± 210 (420B.C.)	Gak-18399

(学習院大学理学部年代測定室)

第5表 放射性炭素年代測定結果

## 3 植物珪酸体分析

### A 試料

調査地点は13地点であり、試料は沼沢1テフラ(Nm-1, 約5,000年前)の噴出に由来する洪水堆積物(IV層)の直下層(V層, 縄文前期後葉~末葉)を中心に、計24点が採取された。試料採取位置は、分析結果の柱状図(第30・31図)に示す。

### B 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法[藤原1976]をもとに、次の手順で行った。

① 試料の絶乾(105℃・24時間)。② 試料約1gを秤量、ガラスビーズ添加(直径約40 $\mu\text{m}$ , 約0.02g)、電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量。③ 電気炉灰化法による脱有機物処理。④ 超音波による分散(300W・42KHz・10分間)。⑤ 沈底法による微粒子(20 $\mu\text{m}$ 以下)除去、乾燥。⑥ 封入剤(オイキッド)中に分散、プレパラート作成。⑦ 検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を主な対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、主な分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重, 単位: 10<sup>-5</sup>g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、キビ族はヒエ、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はススキの値を用いた。その値は8.40、6.31、1.24である。タケ亜科については数種の平均値を用いた。ネザサ節の値は0.48、クマザサ属は0.75である。

### C 分析結果

検出された植物珪酸体の分類群は、第6表・第30・31図の通りであるが、いずれの試料でも主な分類群の推定生産量では、クマザサ属型が圧倒的に卓越していることが分かる。主要な分類群について顕微鏡写真(第32図)を示す。

## 12B5

VII層（試料8）からV層（試料4）までの層準について分析を行った。下位のVIII層及びVII層（試料7）では、クマザサ属型や棒状珪酸体などが検出されたが、いずれも少量である。VI層（試料6）からV層にかけては、クマザサ属型が急激に増加しており、V層では密度が9万個/g以上にも達している。また、ウシクサ族型なども少量検出された。

## 7F

IV層直下層（試料1・2）について分析を行った。クマザサ属型や棒状珪酸体が、極めて多量に検出された。また、ヨシ属やウシクサ族型、モクレン科なども少量検出された。

## IV層直下

9G21・10G20・11G20・12G19・14G15・16G9・18G4・19G5のIV層直下層を対象に分析を行ったが、ほとんどの試料からクマザサ属型や棒状珪酸体が多量に検出されたほか、ウシクサ族型なども少量検出されている。

## SI1029

竪穴住居跡の中央部・南部・北部において、床面直上の埋土（黒褐色土）について分析を行った。いずれの試料からもクマザサ属型や棒状珪酸体が多量に検出され、ウシクサ族型なども少量検出された。

## D 植物珪酸体分析からみた植生・環境

以上の結果から、縄文時代前期後葉～末期ころの遺跡周辺は、クマザサ属が多く生育するイネ科の植生であったものと推定される。クマザサ属には、チシマザサ節やチマキザサ節・スズタケ節・ミヤコザサ節など含まれるが、植物珪酸体の形態からここで検出されたものは、その大部分がチシマザサ節及びチマキザサ節に由来するものと考えられる [杉山1987b]。これらの植物は現在でも日本海側の寒冷地などに

検出密度（単位：×100個/g）

分類群	12B5グリッド					7Fグリッド		9G	10G	11G	12G	14G	16G	18G	19G	SI1029中央部			SI1029南部			SI1029北部				
	4	5	6	7	8	1	2	21	20	20	19	15	9	4	5	1	2	3	1	2	3	1	2	3		
イネ科																										
ヨシ属							16		8								8	7							7	
キビ族型							8			8				8	8		15	7	7			8				
ウシクサ族型	70	8		8		28	39	15	23	39	32	48	55	55	122	31	149	44		38	24			76	121	104
ウシクサ族型(大型)																		7							8	
Aタイプ	8																								15	
タケ類																										
クマザサ属型	938	348	217	64	7	712	883	184	229	400	702	583	403	553	481	540	659	423		685	520	243		582	680	358
未分類など	101	70	8	16		120	133	23	15	102	150	62	24	103	46	46	136	30		69	38	24		60	38	30
その他のイネ科																										
表皮毛起源	85	8	8	15		14	78	8	15	24	55	27	32	71	46	69	20	37		38	31	16		30	53	37
棒状珪酸体	829	310	31	22		451	672	69	8	306	434	329	505	711	679	594	571	311		769	398	47		619	756	381
茎部起源																					8					
未分類など	798	441	46	40	15	635	812	184	23	526	781	631	640	656	648	648	686	645		807	589	39		733	771	612
シダ類																										7
樹木起源																										
モクレン科						7		8																		
その他																					8				8	
(海綿体計)					30	63	39	15	8	18	16	7									7			8		
植物珪酸体総数	2829	1185	310	127	60	1967	2640	489	321	1404	2155	1681	1658	2158	2029	1951	2235	1506		2421	1575	400		2100	2449	1538

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/ml・cm）

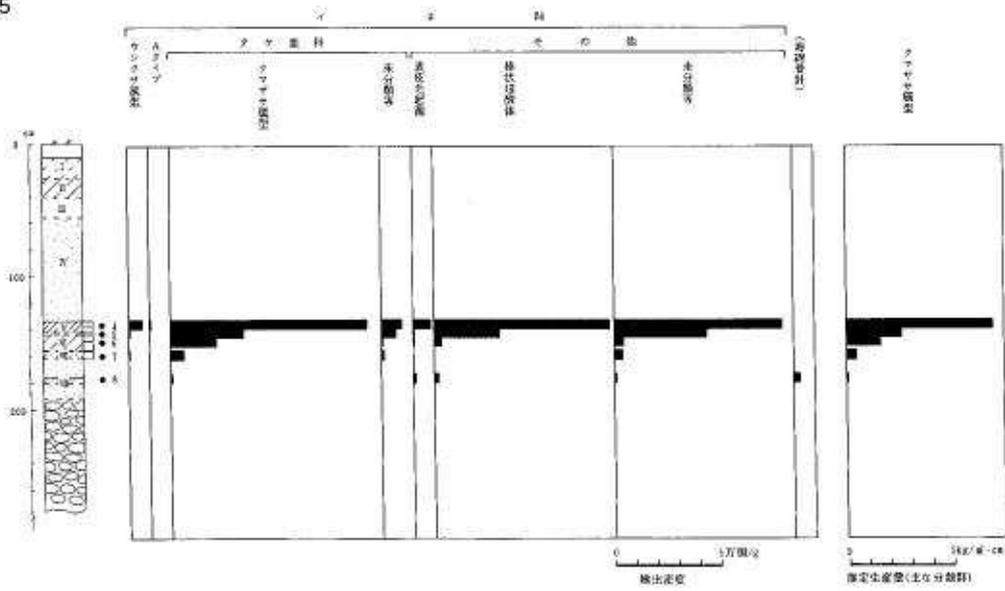
ヨシ属						0.99	0.48									0.49	0.43									0.47
クマザサ属型	7.03	2.61	1.63	0.48	0.06	5.34	6.62	1.38	1.72	3.00	5.27	4.37	3.02	4.15	3.60	4.05	4.94	3.17		5.14	3.90	1.82		4.36	5.10	2.69

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

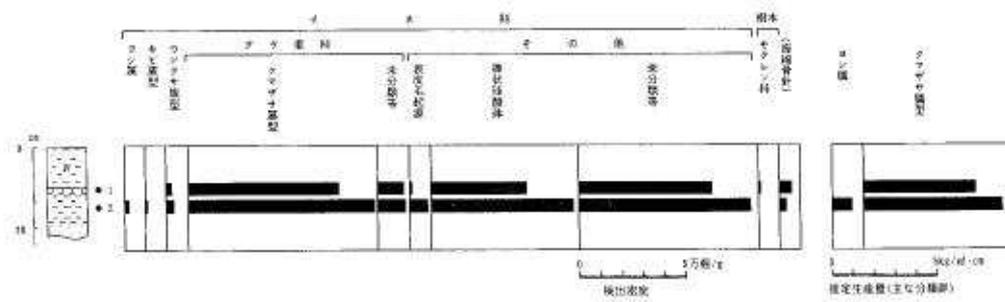
第6表 植物珪酸体分析結果

3 植物珪酸体分析

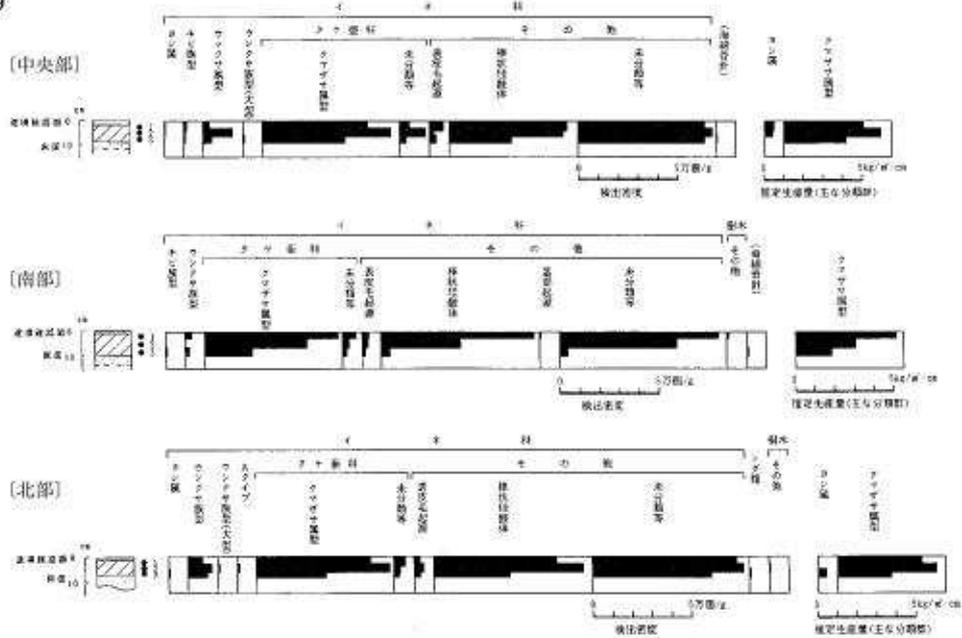
12B5



7F

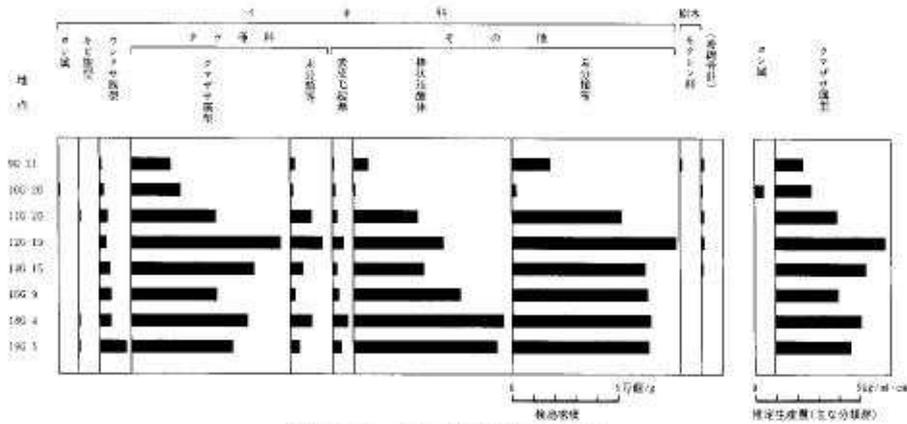


SI1029



第30図 植物珪酸体分布図(1)

## IV層直下層



第31図 植物珪酸体分布図(2)

広く分布しており、積雪に対する適応性が高いとされている〔室井1960〕。また、クマザサ属は常緑性であり、大半の植物が落葉または枯死する秋から冬にかけてはシカの重要な食物となっている〔高槻1992〕。

花粉分析の結果によると、堆積地の周辺はトチノキやクリ・ミズナラなどの森林が分布していたと考えられることから、これらの森林の林床植生などとしてクマザサ属が繁茂していたものと推定される。

## 引用文献

- 杉山貞二 1987 「タケ亜科植物の機動細胞珪酸体」『富士竹類植物園報告』第31号  
 高槻成紀 1992 『北に生きるシカたち—シカ、ササそして雪をめぐる生態学—』 どうぶつ社  
 藤原宏志 1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) —数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—」『考古学と自然科学』9  
 室井 綏 1960 「竹笹の生態を中心とした分布」『富士竹類植物園報告』5

## 4 花粉分析

## A 試 料

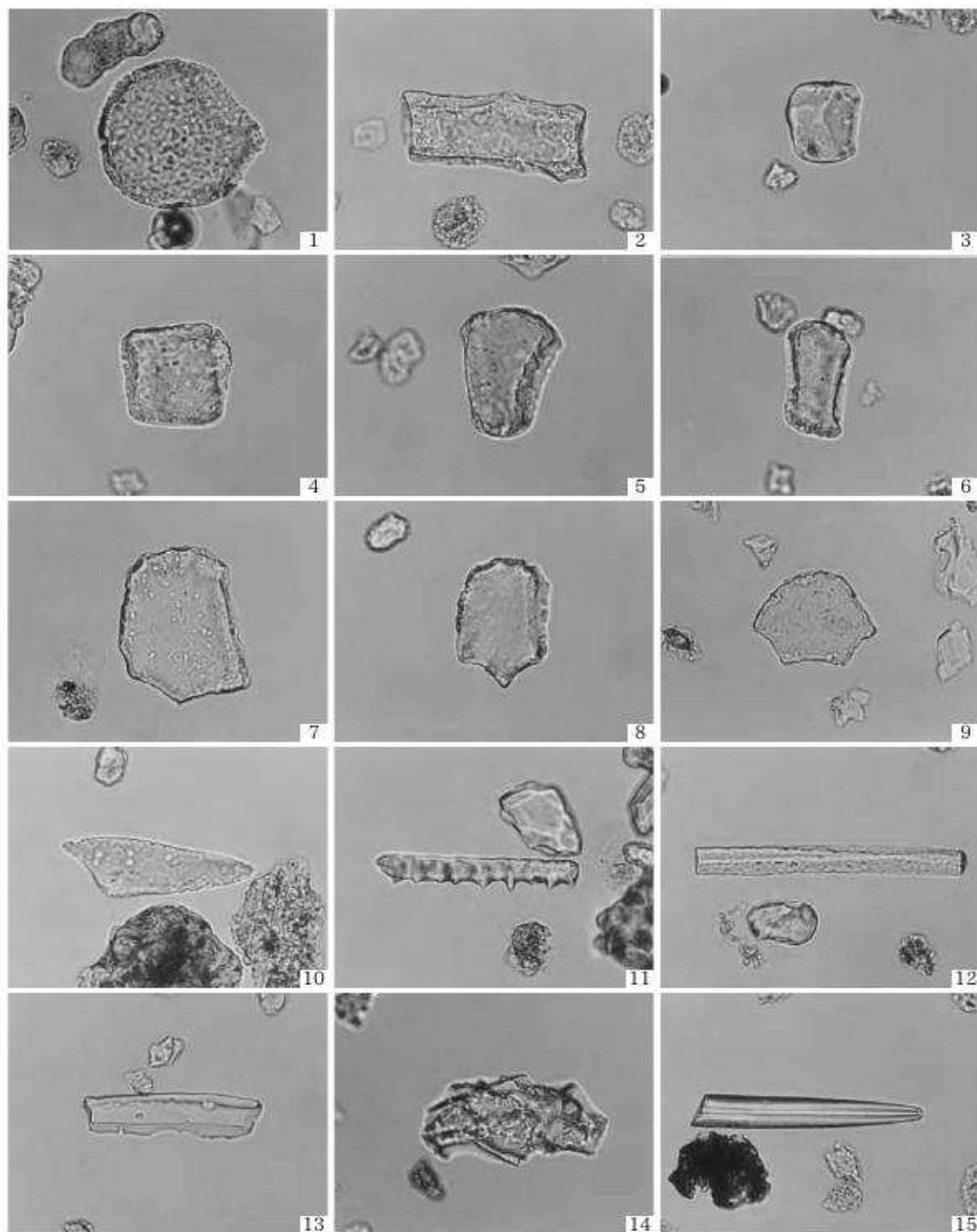
試料は7Fで2点、9G21で1点、10G20で1点、14G15で1点の計5点である。これらは、いずれも沼沢1テフラ(Nm-1, 約5,000年前)の噴出に由来する洪水堆積物(IV層)の直下層である。

## B 方 法

花粉粒の分離抽出は基本的に中村[1973]を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

- ① 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- ② 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- ③ 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- ④ 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す。
- ⑤ 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- ⑥ 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm・2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。



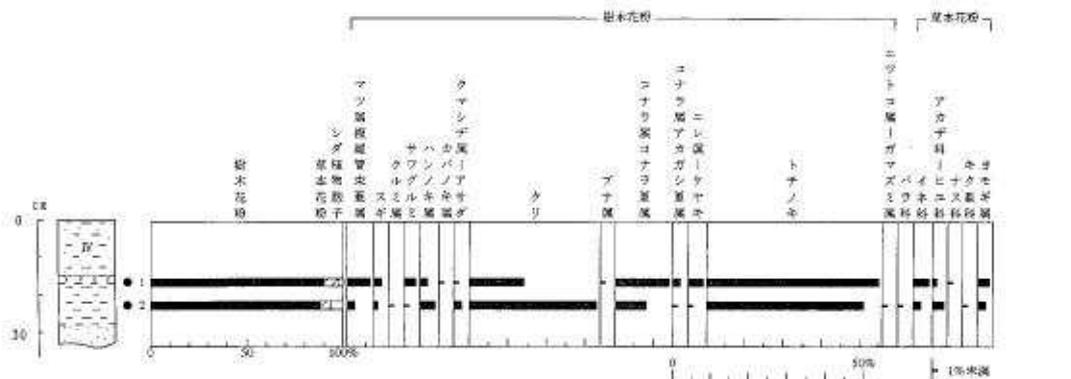
(倍率は400倍撮影を1/2に縮小)

No	分類群	地点	試料名	No	分類群	地点	試料名
1	ヨシ属	SI1029中央部	2	9	クマザサ属型	12B5グリッド	4
2	キビ族型	SI1029中央部	3	10	表皮毛起源	18G4グリッド	1
3	ウシクサ族型	7Fグリッド	1	11	棒状球酸体	SI1029中央部	1
4	ウシクサ族型	SI1029北部	3	12	棒状球酸体	SI1029南部	1
5	ウシクサ族型(大型)	SI1029中央部	3	13	シダ類	SI1029北部	3
6	イネ科Aタイプ	12B5グリッド	4	14	モクレン科	7Fグリッド	1
7	クマザサ属型	14G5グリッド	1	15	海綿骨針	7Fグリッド	1
8	クマザサ属型	SI1029南部	2				

第32図 植物球酸体顕微鏡写真

分類群		7Fグリッド		9G21	10G20	14G15
学名	和名	試料1	試料2	埋没谷	埋没谷斜面	グリッド
Arboreal pollen	樹木花粉					
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	23	7			
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	7	4			
<i>Juglans</i>	クルミ属		3			
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ	10	2			
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	9	14			
<i>Betula</i>	カバノキ属	1				
<i>Carpinus-Ostrya</i>	クマシデ属-アサダ	1	7			
<i>Castanea</i>	クリ	57	123			
<i>Fagus</i>	ブナ属	1				
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	56	28	2		
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	7	2			
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ	17	2			
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ	182	149	5		1
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属		1			
Arboreal - Nonarboreal	樹木・草本花粉					
Rosaceae	バラ科		1			
Nonarboreal pollen	草本花粉					
Gramineae	イネ科	14	6			2
<i>Rumex</i>	ギンギン属					1
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	4	10			
Solanaceae	ナス科	1				
Asteroidae	キク亜科		2			2
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	11	7			
Fern spore	シダ植物胞子					
Monolate type spore	単条溝胞子	2	21	8	1	
Trilate type spore	三条溝胞子	4	7			
Arboreal pollen	樹木花粉	371	342	7	0	1
Arboreal - Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	1	0	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	30	25	0	0	5
Total pollen	花粉総数	401	368	7	0	6
Unknown pollen	未同定花粉	1	4	0	0	1
Fern spore	シダ植物胞子	6	28	8	1	0

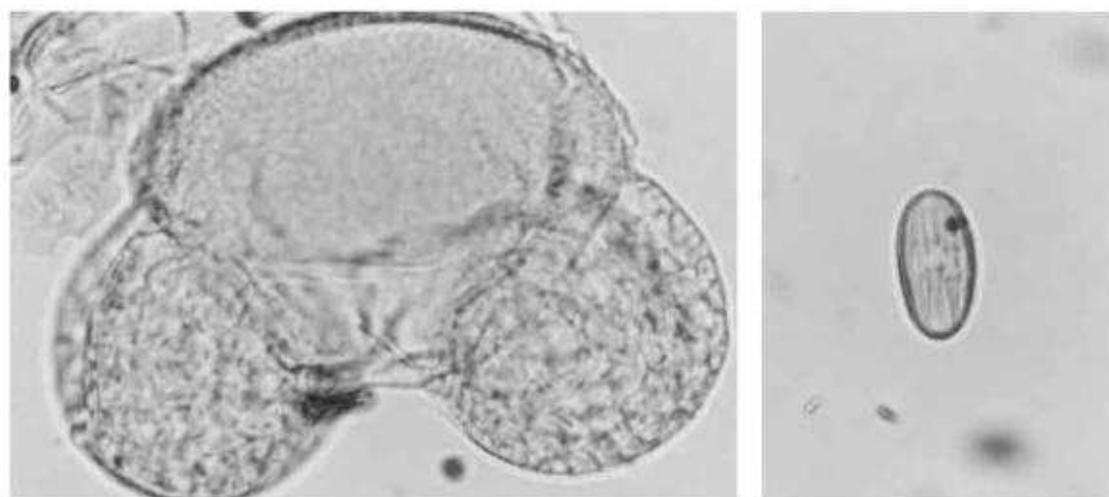
第7表 花粉分析結果



第33図 花粉組成図

(花粉総数が基数)

検鏡はプレパラート作製後、直ちに生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、[島倉1973]及び[中村1980]を基本とし、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科・亜科・属・亜属・節及び種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合は、それらを別の分類群とした。



1 マツ属複維管束亜属

2 クリ



3 スギ



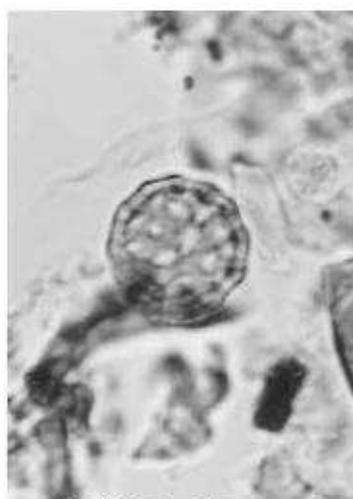
4 ハンノキ属



5 コナラ属コナラ亜属



6 トチノキ



7 アカザ科-ヒコ科



8 ヨモギ属

30μm

第34図 花粉・胞子顕微鏡写真

## C 結 果

分析の結果、樹木花粉14、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉6、シダ植物胞子2形態の計

23分類群が同定された。結果を花粉遺体一覧表（第7表）にまとめ、花粉総数が200個以上である試料は花粉総数を基数とする百分率を算定して花粉組成図（第33図）を示した。主要な分類群を写真に示した。

#### 7F

試料1と試料2は同じ傾向を示し、樹木花粉の割合が草本花粉より極めて高い。樹木花粉ではトチノキの出現率が高く、クリ・コナラ属コナラ亜属の出現率も高い。他にハンノキ属・サワグルミ・エノキ属・ムクノキ・マツ属複雑管束亜属なども出現する。草本花粉ではイネ科・ヨモギ属・アカザ科・ヒユ科などがわずかに出現する。

#### 9G21・10G20・14G15

花粉が含まれていないか極めて少量であり、傾向がわからない。

### D 花粉分析からみた植生・環境

縄文時代前期後葉～末葉期ころの遺跡周辺は、コナラ属コナラ亜属を主とする冷温帯落葉広葉樹林が分布していたと考えられ、ブナ属がほとんど出現していないため、ミズナラなどを主とする冷温帯落葉広葉樹林の下部の様相であったと推定される。堆積地の周辺は、トチノキとクリを主とする森林が分布し、トチノキが好む肥沃な適潤地の状態であったと推定される。ハンノキ属・サワグルミ・エノキ属・ムクノキ・マツ属複雑管束亜属などは冷温帯落葉広葉樹林の中の微量な構成要素として混在していたとみなされる。なお、草本のイネ科・ヨモギ属・アカザ科・ヒユ科が生育する日当たりのよいところも多少あったものと考えられる。

#### 引用文献

- 中村 純 1973 『花粉分析』 古今書院  
 島倉巳三郎 1973 「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第5集  
 中村 純 1980 「日本産花粉の標徴」『大阪自然史博物館収蔵目録』第13集

## 5 寄生虫卵分析

### A 試料及び方法

試料は花粉分析に供したものと同一の5点であり、微化石分析法を基本に下記のように分析を行った。

① サンプルをそれぞれ1cm<sup>3</sup>ずつ採量する。② 脱イオン水を加え攪拌する。③ 篩別により大きな砂粒や木片などを除去し、沈澱法を施す。④ 25%フッ化水素酸を加え30分静置（2・3度混和）。⑤ 水洗後サンプルを2分する。⑥ 片方にアセトリシス処理を施す。⑦ 両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入し、それぞれ標本を作製する。⑧ 検鏡・計数し密度を算出する。

### B 結果と考察

分析の結果、寄生虫卵はいずれの試料からも検出されなかった。花粉分析では7Fから花粉遺体が検出されていることから、寄生虫卵のみが分解されたことは考えにくい。したがって対象となった堆積物は、当初から寄生虫卵に汚染されていなかったものとみなされる。

# 第Ⅶ章 ま と め

## 1 遺構について

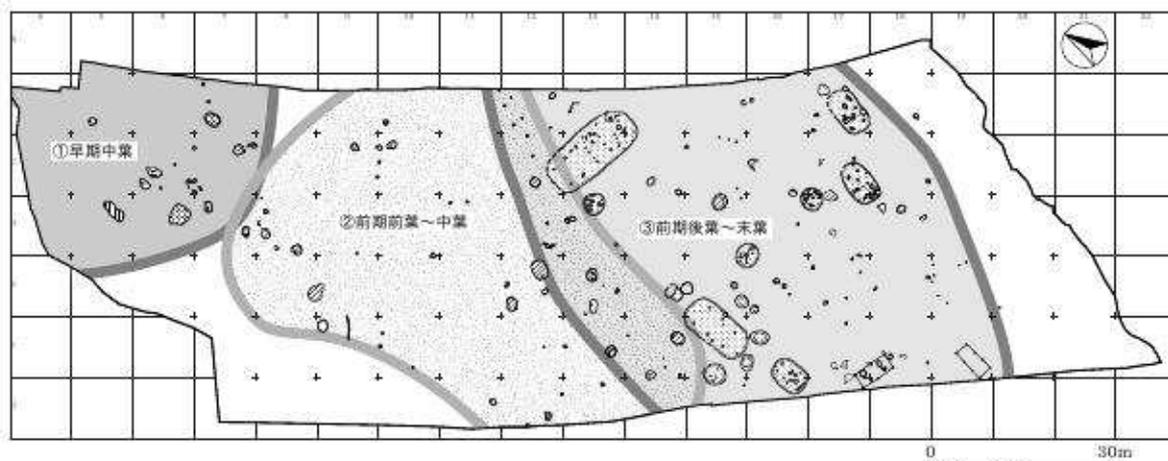
### A 所属時期の検討

下層で検出された遺構は、竪穴住居18基、掘立柱建物2棟、土坑53基、焼土53基、集石7基、遺物集中地点11か所、溝1条、硬化面1基、ピット29基である。これらの遺構は、その多くが遺物を伴わないため詳細な時期決定が難しい。しかし、遺構周辺から出土する遺物とその分布は地点ごとにある程度区分され、遺構の確認面・覆土などから不明確ながらある程度、それぞれの所属時期が推定できた。

所属時期の最も大きい決め手は遺構に共伴する土器で、次いで遺構周辺に分布する土器である。既述のように早期中葉の土器は主に調査区北西部から、前期前葉～中葉の土器は中央部からやや北西部にかけて、前期後葉～末葉の土器は中央部から南東寄りに分布する。したがって、それぞれの地点に存在する遺構の多くも地点ごとに時期が異なってくる。また、石器は時期決定が難しいものの石錘・敲磨石類A類（特殊磨石）・石皿A類（加工石皿）・尖頭器A類（押出型ポイント）・石匙A1類（松原型石匙）などは分布と所属時期を照らし合わせると一致する（第35図・第10表）。特に石錘・敲磨石類A類（特殊磨石）は出土量も多く、分布と所属時期の関係は信頼できる。このように土器を伴う遺構や遺構周辺に分布する土器の時期別検討、石器の分布と時期別検討、遺物を伴わない遺構の時期別検討の結果から第35図のように時期別の分布域が作成できる。第35図の調査区北西部は早期中葉の集落跡、中央部からやや北西部にかけて前期前葉～中葉の集落跡、中央部から南東にかけて前期後葉～末葉の集落跡が存在したものと推定できる。なお、第8表は遺構の所属時期の一覧表である。

### B 各集落跡の比較

北野遺跡下層で検出された各集落跡を比較すると、早期中葉・前期前葉～中葉までの集落跡と前期後葉～末葉の集落跡では大きな違いがある。ここでは、それらの違いをまとめる。



第35図 遺構・遺物の時期別分布図（分布域はおおよその傾向をあらわす）

遺構種別	時 期			時期不明	備 考
	早期中葉	前期前葉～中葉	前期後葉～末葉		
竪穴住居(SI) 計18基	1003・1008 1011・1012 1016	1037・1039 1040・1071	1029・1034・1035 1050・1027・1036 1051・1054・1057		
擬立柱建物(SB) 計2棟			1045・1063		
土坑(SK) 計53基	1001・1002 1006・1007? 1013・1014 1015・1017 1018	1005・1019 1021・1022 1023・1024 1025・1031 1032・1033 1038・1042 1046?・1047? 1066?・1067? 1069?・1073?	1004・1041・1043 1044・1048・1049 1052・1053・1055 1056・1058・1059 1065・1068・1072? 1075・1076 1077	1020・1026 1028・1060 1061・1064 1070・1074 1075・1076	1019前期前葉。住居の可能性あり。 古1028→SI1027新。1007は早期後半か。 1044前期後葉。1060早期中葉～前期中葉? 1025住居の可能性あり。 1065前期後葉。
焼土 計53基		11D・1号? 12D・3号? 12F・1号? 12G・1号? 13B・1号? 13E・4号? 13E・5号? 14F・1号? 14F・2号?	11B・1号、12B・1号 12B・2号、12B・3号 12B・4号、12B・5号 12C・1号、12C・2号 12D・1号、12D・2号 12E・1号、13D・1号 15C・1号、15D・1号 15G・1号、16B・1号 16D・1号、16D・2号 16E・1号、17B・2号 17B・3号、17C・1号 17C・2号、17C・3号 17D・1号、17E・1号 17E・2号、17E・3号 17E・4号?、17E・5号 17F・1号、17F・2号 17F・3号、18C・1号 18E・1号、18E・2号 18F・1号、18F・2号 18F・3号、18G・1号	6C・1号 7C・1号 8D・1号 8D・2号	16D・1号焼土は前期末葉。 17C・1号焼土は前期末葉。
集石 計7基		8E・1号? 14F・1号?	17F・1号、17F・2号 17F・3号、17G・1号 18F・1号		8E・1号集石は前期前葉?
遺物集中地点 計11か所	8D・1号 8D・2号	13E・3号 13F・1号	13E・1号、13E・2号 15B・1号、17B・1号 18D・1号、18D・2号 18F・1号		13E・1号、13E・2号は前期後葉。 13E・3号、13F・1号は前期中葉。 16B・1号、17B・1号、18D・1号、 18D・2号、18F・1号は前期末葉。

第8表 遺構の所属時期一覧表

集落規模とまとまり 最も大きな違いは早期中葉・前期前葉～中葉までの集落跡と前期後葉～末葉の集落跡のまとまりである。早期中葉の集落跡は調査区北西部の約30×30mの範囲に収まり、竪穴住居と土坑で構成される。広場や土器捨て場は明確でない。

これに比べると前期前葉～中葉の集落跡は格段に集落規模の大きくなり、約60×40mを範囲とし、竪穴住居・土坑・小フラスコ状土坑などで構成される。遺物が集中する土器捨て場は存在するが、遺構の分布と重なり明確に分離されていない。竪穴住居ではないが、遺構が環状に配置されているように見え、環状の中を広場(10～11・D～E周辺)と考えることも可能である。

これに対し、前期後葉～末葉の集落跡は約70×50mの規模をもち、遺構の配置は広場と推定される

空間（14～16・B～C）を中心に環状（馬蹄形？）に配置される。集落の西外側に土器捨場も形成されている。広場・竪穴住居群・掘立柱建物群・焼土群・土坑・土器捨場など、諸施設がまとまりを持って配置されている。このように北野遺跡では、前期後葉～末葉の集落跡の保存状態が良いことにもよるが、集落を構成する諸施設が増加し、整然と配置されるようになるのは前期後葉からである。

**竪穴住居** 早期中葉・前期前葉～中葉までの竪穴住居は、規模約2～3m、掘り込みも浅く、形も不整形である。床面は凹凸があり、柱穴は掘り込みの浅いものが多い。炉跡はすべてに認められなかった。規模が小さく、粗雑なつくりの竪穴住居が多いといえる。これに対して前期後葉～末葉の竪穴住居は、明確な形で構築されている。すなわち、住居の大型化と機能分化である。規模的には、長軸6.2～16.4mの大型住居と径3.5～4.0mの小型住居がほぼ同数存在する。大型住居はしっかりした掘り込みをもち、柱穴は太く大きくなり、長軸に沿って2本1対の柱穴が並ぶ。炉跡の出現も北野遺跡ではこの頃である。小型住居は前代の竪穴住居にやや近似するものの、それよりやや大型で掘り込みも深く、床面を平坦に仕上げている点で大きく異なる。また、掘立柱建物の出現も前代と大きく異なることである。

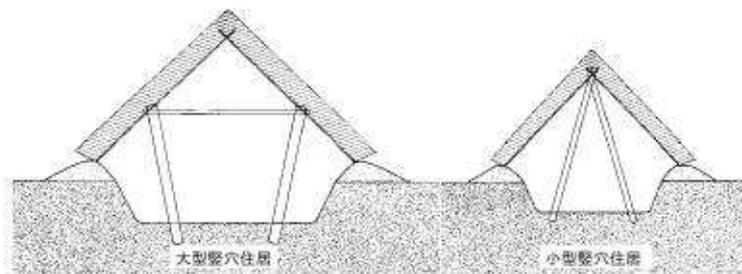
**その他の遺構** 土坑・フラスコ状土坑などは前代から存在するが、前期後葉～末葉の土坑は一般的に大型化する。また、屋外炉も格段に多く検出されている。

### C 大型住居と小型住居の構造

前期後葉～末葉の集落跡では、大型住居5基、小型住居4基が検出された。SI1050をはじめとする西側の竪穴住居は東～西に緩く傾斜する斜面に構築されている。しかし、標高の高いほうを深く、低いほうを浅く掘り込み、床面を平坦に仕上げている。住居の掘り込み土は、壁外側周囲に盛り上げ周堤としているが、SI1050・1057に見られるように標高が高いほうには薄く、低いほうには厚く盛土されている。竪穴住居を構築するにあたり、住居の中や周辺を平坦にしようとする意識が窺える。このことはフラスコ状土坑であるSK1052の排土でも認められ、標高に低いほうに多く盛土されていた。壁はすべて緩やかに立ち上がり、壁溝や壁柱穴なども認められないことから、壁立式でなかった〔宮本1996〕ものと推定できる。また、壁溝がないのは遺跡が段丘上に立地し、床面下は砂・砂礫層で極めて排水がよく、しかも周辺からの地下水の進入・浸透がないためと推定される。

柱穴は大型住居と小型住居では大きく異なる。大型住居の柱穴は大きく深いしっかりした掘り込みを持つ柱穴が2本1対となり、長軸の長さに応じて何対か長軸に沿って並ぶ。しかもSI1029・1034に見られるように掘形は外側に向く。一方、小型住居の柱穴は細く浅いものも多く、配置はやや壁寄りである以外に規則性は見られないが、1027に見られるように柱掘形は内向きに穿たれている（第36図）。大型住居は柱がやや外側を向くことにより屋根の過重を内側に押されることなく効果的に支え、小型住居は細い柱が集合することにより屋根の過重を支える役目を果たしている。

覆土はいずれも周辺からの流れ込み土で自然堆積であることから、屋根は土葺きでなく草葺きと推定される。すべての竪穴住居から周堤が検出されたにもかかわらず、垂木尻は検出されなかった。



第36図 竪穴住居の構造模式図

住居の廃絶後、周堤土の多くが流出したため、その痕跡を残さなかったものとも考えられるが、それ以上に垂木尻が周堤上に接する程度で乗っていたか、浅く刺さっていた程度ものと推定している。

### D 前期後葉～末葉の集落内の変遷

大型住居5基、小型住居4基、掘立柱建物2棟は、SI1034・1035以外伴出遺物は少ない。したがって遺物から時期を決定することは難しいものの、確認面・埋没状態・覆土の状況からすべて前期後葉～末葉の集落跡に所属する遺構である。これらの遺構の埋没状態・主軸方位から、時期的な細分を試みた。

主軸方位からの分類 長軸方向が判明する遺構を見ると、主軸方向で3分される。

- ①東西方向に主軸がある遺構
 

SI1029	N-72°	-W
SB1063	N-64°	-W
- ②南北方向に主軸がある遺構(1)
 

SI1050	N-12°	-E	
(北方向に近い)	SI1057	N-13°	-E
	SB1045	N-11.5°	-E
- ③南北方向に主軸がある遺構(2)
 

SI1034	N-26°	-E	
(北東方向に近い)	SI1035	N-24°	-E

埋没状況からの検討 すべて半埋没状態で検出されたが、沼沢火山灰層の厚薄に違いが見られた。

- ① SI1029は沼沢火山灰層下の覆土はやや薄い。これは他の住居跡に比べSI1029が極めて大きいことや、主軸方向が地形の傾斜に平行していることも原因と推定できる。
- ② SI1050・1057は、沼沢火山灰層下の覆土はやや厚い。これはSI1029に比べ面積が小さいことによる(特にSI1057は小さく覆土は厚い)ものである。また、主軸方向が地形の傾斜に直交していることも覆土が厚い原因と推定できる。
- ③ SI1034・1035は、沼沢火山灰層下の覆土が極めて薄い。特にSI1034は柱穴や住居に伴うピット(土坑)が完全に埋まりきらないうちに沼沢火山灰層に覆われていた。また、SI1035の周堤は最も保存状態がよい(流失が遅く、盛土が厚かった)。沼沢火山灰層に覆われる時期に、最も時間的に近いものと推定される。

#### 出土遺物からの検討

- ① SI1029は床面直上で土器も出土するが、いずれも細片で確実に前期末葉に下るものはない。
- ② SI1050では確実に前期末葉に下る土器は出土していない。SI1057の覆土上層からは細片ながら前期末葉(大木6式)の土器が出土している。
- ③ SI1034・1035には確実に前期末葉(大木6式)に所属する土器が出土している。



第37図 前期後葉～末葉集落跡の遺構変遷図

小型住居・焼土の所属 大型住居に比べさらに出土遺物は少なく、細片になるものの、SI1027・1036・1054の覆土・床面直上からは前期後葉の大木5式・興津式、1036の床面直上では前期末葉の大木6式の土器が出土している。したがって、小型住居は大型住居と同じく前期後葉～末葉に所属するものと断定できる。大型住居と小型住居が共伴する例は、前期後葉（大木5式）の集落跡である福島県会津高田町鹿島遺跡〔丹野・本間1991〕や冨宮西遺跡〔芳賀<sup>ほか</sup>1990〕で認められている。

大型住居と小型住居のセット関係を考えると、4基の小型住居は埋没状況や出土遺物から時期別に区分できず、不明確と言わざるを得ない。しかし、大型住居と小型住居の検出数がほぼ同じで、しかもそれぞれがほぼ隣り合うように存在しているという事実から、次のようなセット関係を推考することが可能と考える（第37図）。また、屋外炉と推定される焼土も同様に近くの竪穴住居に所属するものと思われる。

- ① （大型住居）SI1029と（小型住居）SI1027、（焼土）12B～Cの焼土
- ② （大型住居）SI1050・1057と（小型住居）SI1036・1051、（焼土）17～18・E～Gの焼土
- ③ （大型住居）SI1034・1035と（小型住居）SI1054、（焼土）17B～C、15～16・C～Dの焼土

## 2 土器について

V章で概観したように、北野遺跡下層からは、縄文時代早期から前期末葉までの土器が出土している。ここでは分類上、前期初頭から中葉までの幅広い時期を一括したⅡ群土器の編年的位置付けを整理すると共に、主体的に出土した大木5・6式土器を中心にⅢ群土器の検討を行う。

### A 前期初頭から中葉の土器

Ⅱ群とした土器は細片が多く資料的な制約から、全てに的確な時間的位置付けを与えるのは困難であるが、特徴的なものに関しては県内を中心とした類似資料との対比を試みたい。

前期初頭に位置付けられるものとしては、0段多条原体によって非結束羽状縄文を描出する1類aが該当すると思われる。0段多条原体の多用は花積下層式期において顕著であり、本遺跡の南西約15kmに位置する室谷洞窟遺跡においても類例が知られている。県内ではさらに、1段階とする津南町神山遺跡出土の土器群〔芹沢・中村・麻生1959、佐藤<sup>ほか</sup>1994〕、2段階とする中里村干溝遺跡第6群1～4・8類〔佐藤1997〕をそれぞれ標識資料として2期に細分されている〔寺崎1999〕。本遺跡では花積下層式に特徴的な撚糸側面圧痕文が施される口縁部が未確認であり、さらなる細分は困難であるが、本遺跡例は羽状縄文の描出に異方向施文を用いず、横位に整然と原体を回転施文する点で2段階の様相に近い。これは室谷洞窟遺跡例との類似点でもある。

前期前葉に位置付けられるものとしては、2類a4が該当すると思われる。これは布目式に後続し、巻町新谷遺跡〔前山1994〕に標識資料を求めることができる。2類a4は、底面への刺突がいずれも同心円状に配されることに特徴があり、新谷遺跡例との最大の共通項でもある。新谷遺跡ではこれらの底部に伴う胴部文様として、口縁部文様が各種刺突や沈線によって施文されるもの（1）、全面に刺突が加えられるもの（2）、口縁部に幅狭の文様帯を持ち以下は縄文が施されるもの（3）、全面に縄文が施されるもの（4）があげられている〔寺崎1999〕。本遺跡では、このうち明確に（1）・（3）といえるものを欠き、（2）と考えられるものも爪形文が施された1点（262）に留まる。そのため胴部文様は（4）となるものが多いと考えられる。新谷遺跡の（4）はLR単節による斜行縄文、非結束羽状縄文を主体にループ文・結束羽

状縄文・組紐文・結節回転文・付加条原体が用いられる。その施文幅は「大半が均一かつ2cm未満で、いわゆる幅狭等間隔施文の範疇」〔前山前掲〕にあることを特徴とする。本遺跡でも不加条原体を除く各種縄文が出土しているが、幅狭等間隔施文を用いるものはループ文(1類c)に限定される。さらに、2類a4と1類cの出土範囲に重なりがみられること、2類a4に多い器面が灰白色を呈するものが1類cでも大部分を占める点などから、1類cの大半が2類a4に伴うものと考えられる。布目式に後続する時期におけるループ文の多用は、朝日村アチャ平遺跡中段の様相〔滝沢・富樫1998〕とも一致する。両遺跡とも、新谷遺跡の位置する海岸部を離れた山間部に位置するという共通点を持つことから、ループ文の多用は山間部における布目式後続期の様相として捉えられると考える。

前期中葉に入り、全県的な様相としては、「前段階とは異なり東北系の土器が激減し、それに変わって北関東や長野県に分布する有尾式が中心となる」〔寺崎1999〕との指摘があるが、県北山間部の朝日村アチャ平遺跡、津川町猿額遺跡においては、東北系の大木2式の出土がみられようになる。北野遺跡においても、大木2a式のまとまった資料を出土している冑宮西遺跡例との比較から、網目状燃糸文(1類g1)、束縄文(1類f)、複節斜縄文(36)などから大木2式の様相を看取できる。さらには、大木2b式と考えられるS字状連鎖沈文(2類b2)も出土しており、本遺跡での大木2式の存在は間違いないものであろう。しかし、いずれも出土量が少なく、断片的な資料とせざるを得ない。そのため、大木2式以外においても多用される結束羽状縄文やコンパス文などに明確な型式名を与えることは困難であり、有尾式・根小屋式の存在を否定することはできない。また、中葉に入り東北系の影響を受けながらも、257・259・260のように器壁が薄手で堅緻な土器は、異なる系統の存在を示唆する。なかでも、257は巻町豊原遺跡〔小野1994〕、石川県中島町小牧大杉谷内遺跡〔西野1995〕に類例が求められることから、海岸部、引いては北陸地方との関連も指摘できる。このように、本遺跡における前期中葉は東北系の大木2式の影響を受けつつも、さまざまな系統の土器が併存しており、系統が複雑に入り組む時期といえるだろう。

## B 前期後葉から末葉の土器

### 1) 大木5式について

大木5式については、これまで興野義一氏による解説と5b式の提唱〔興野1969・1970〕、芳賀英一氏による東北地方南部の地域性について〔芳賀1985〕などの論稿がある。興野氏による大木5式の細分は、鋸歯状装飾帯の小形化、胴部文様帯の圧縮と、それに伴う区画帯の成立をもって「後半形式」の5b式を提唱した。また、「前半形式」では胴部文様帯は浮線文が主体となり、沈線文は浮線文の置換によって「後半形式」に用いられることを指摘する。一方の芳賀氏は、興野氏の5a、5b細分を踏まえながらも、東北一円の大木5式の実体を捉えるものではないとし、東北地方南部における大木5式の様相を検討した。福島県を中心とした東北地方南部では、胴部文様帯での浮線文から沈線文への置換が大木5a式段階からかなり進むなどの実体を指摘し、仙台湾周辺と地域差があることを明確にした。ここでは、これら先学の成果を踏まえ、本遺跡の大木5式に検討を加える。

本遺跡の大木5式は鋸歯状装飾帯を有するA類と、口縁部が平縁になり、頸部が括れ胴部が丸く張り出すB1類、B1類に比べ胴部の張り出しが弱く円筒形に近いB2類の3種の器形で構成されている。A類は、いずれも各鋸歯状装飾帯が単位文としての独立性を保ち、鋸歯数の増加、小形化もみられないことから5a式段階のものと考えられる。胴部文様帯は、地文のみ浮線文に加え沈線文を用いるもの(304ほか)があり、芳賀氏が示した東北地方南部と同様の様相を呈している。一方、B1類・B2類の胴部文様帯では

沈線文のみが用いられる。沈線文は鋸歯状を基本とするが、胴部文様帯の上端（100）もしくは上下端（294・303）に横位の沈線文を施すことによって明確な区画帯を作出することを特徴とする。大木5式は、大木3式以来の鋸歯状文に代表されるように、横方向への施文意識が強い型式であるが、沈線によって明確な区画帯を設けるものは後続する6式で盛行する。この区画帯の成立を興野氏は5b式段階とするが、芳賀氏は類似資料の出土している冑宮西遺跡の分析から、区画帯内部のモチーフが5a式と共通の要素を持つことを指摘している。さらに、5b式のメルクマールを文様帯の狭小化に置くならば、294・303共に胴部文様帯の施文幅は広く、5a式の様相を持つ土器とすることができる。また、303は冑宮西遺跡のB類d種に類似しており、口縁部文様帯に刺突列を施すものは「会津地方・中通り南部に特徴的な資料であり、興津式土器の口縁部の条線帯あるいは刺突の影響を受けて成立した文様」[芳賀1985]との指摘がある。本遺跡においても興津式がわずかではあるが出土していることと合わせ、注目されるものである。

このように本遺跡における大木5式の様相は、芳賀氏の論稿で示された東北地方南部、なかでも地理的に近接している福島県会津地方との共通点が多く、結びつきが深いと考えられる。会津地方における大木5式は冑宮西遺跡、鹿島遺跡[丹野・本間1991]などに良好な資料を求めることができる。両遺跡とも北野遺跡と同様に5a式段階から沈線文が卓越し、浮線文が施されるものが少ない点が共通する。しかし、沈線文によって描かれるモチーフは、北野遺跡では鋸歯状が主体であるのに対して、冑宮西遺跡では曲線文・区画文によるモチーフ文様、鹿島遺跡では同心円状のモチーフ文様を施すものが鋸歯状沈線文と共に多用されるなどの差異があり、遺跡によって異なる様相も持ち合わせている。

以上のように北野遺跡の大木5式は、いわゆる大木5a式の範疇におさまるもので占められており、5b式は確認できなかった。その様相は福島県会津地方との共通項が多い一方で、会津地方で大木5式に伴うとされる諸磯c式が北野遺跡では確認されないといった、地理的要因に起因するであろう差異も存在する。このような、地理的要因は土器群にどのように反映されているのか。さらなる考察は資料の増加と、新潟県における大木5式の様相の把握を待って、今後の課題としたい。

## 2) 大木6式について

本遺跡における大木6式は、大木5式にもみられる長胴形の深鉢に、胴部が丸く張り出す金魚鉢形の深鉢（器形F類）が加わり、器形のバリエーションが増加する。大木6式で新たに加わる金魚鉢形の器形には、大木5式以来の鋸歯状文や曲線文といったモチーフ文様が施されず、装飾は口縁部の肥厚帯、頸部の連続爪形文列に止まる。また、胴部には地縄文が施された後に結節回転文が加えられるものが多い。結節回転文には、無節の縄に結節を加えた原体が用いられており、地文に多い単節の縄は用いられない。このように、大木6式で新しい要素を取り込みつつも、大木5式から継続して鋸歯状文を施す一群（6類a）がある。鋸歯状文は沈線文によって描出されるものに加え、大木6式で多用される連続爪形文で描出されるもの（344）もあり、いずれも連続爪形文・貼付文といった大木6式に特徴的な文様と併用されている。この鋸歯状文が施される文様帯幅は大木5式に比べ狭く、口縁部への集約化が進む。しかし、343のように口縁部文様帯に大木6式的な貼付文を用いながらも、胴部文様帯では5式のように区画帯を施し、内部に鋸歯状沈線文を巡らすものがある。本群は、いわゆる5b式と6式の狭間で型式的位置付けに苦慮する部分がある。

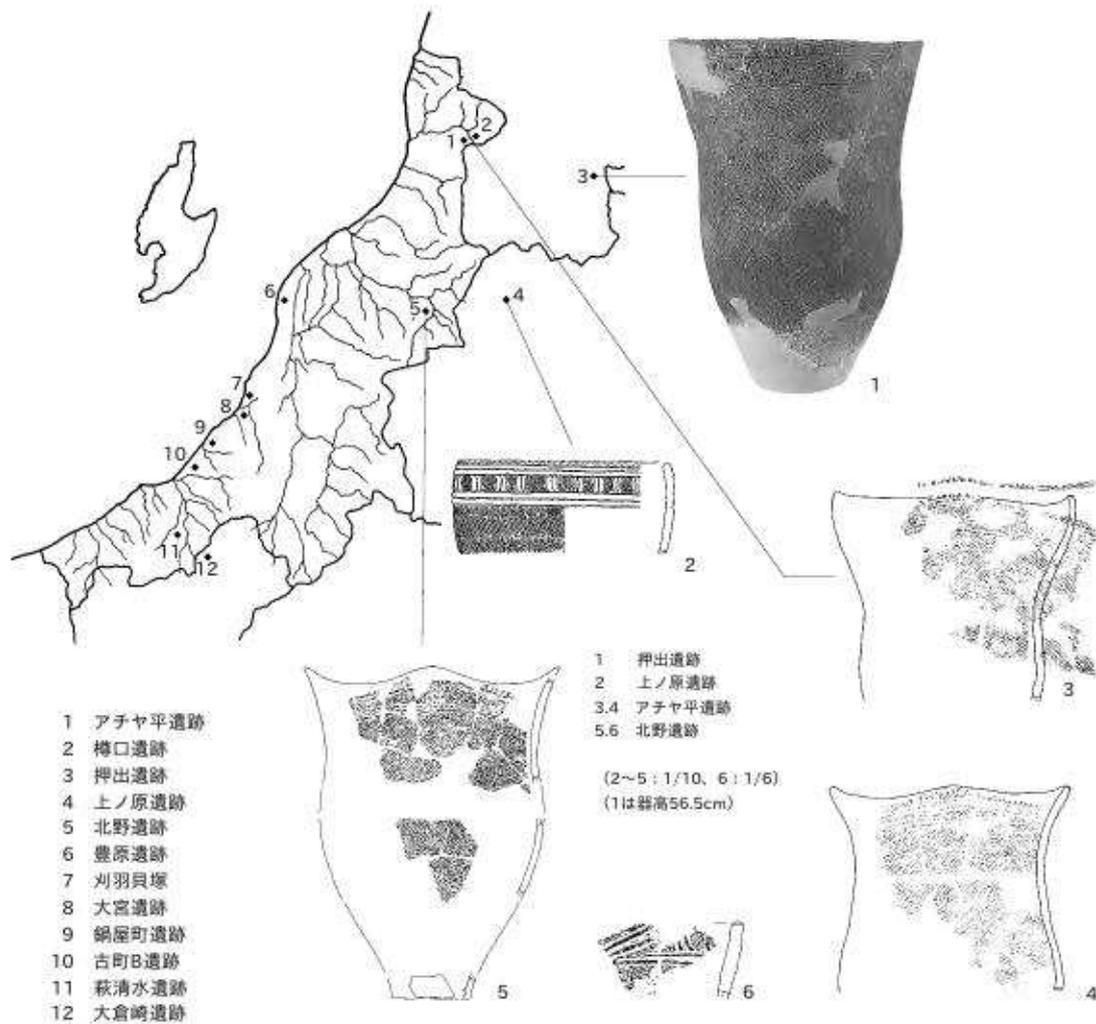
北野遺跡の大木6式の様相を、新古に2細分されている福島県法正尻遺跡例と比較すると、「爪形文を施した幅5mm程の太い隆線を、横位・斜位を基本に施す」[松本ほか1991]一群を欠落するものの、文

様の施文方法、モチーフなどには古段階とされたものとの類似点が多い。これは、他の沼沢火山灰層下に埋没した遺跡から出土する大木6式の様相ともおおむね共通するものであり、すでに多くの指摘があるように、北野遺跡の下層を埋没させた沼沢火山灰の堆積開始時期を大木6式古段階に置くことができるものとする。

3) 刈羽式について (第38図)

本遺跡における刈羽式は、口縁部に平行沈線文が巡り、文様帯を形成する3類aと口縁部文様帯が「半截竹管などによる沈線の組合せを基調とした菱形を呈する」、いわゆる格子目文土器〔寺崎1991〕の3類bで構成されている。両類とも本遺跡においては客体的な存在で絶対的な出土量は少ないものの、山間部における刈羽式の様相を提示する資料と考える。

3類aは、口縁部に半截竹管状工具による平行沈線文によって文様帯を作出しており、「刈羽式を構成する有文土器のひとつのタイプになり得る」〔寺崎1997〕との指摘がある一群に類似している。この一群は長野県大倉崎遺跡〔高橋・中島・金井1976、高橋桂ほか1990〕例から、口縁部において「( )」状の区画文や分銅状の意匠を配する文様構成〔鈴木徳1996〕は刈羽式において普遍的とされ、「大倉崎類型」と仮称されている〔中野1997a・1997b・1998・1999〕。県内における類似資料は、海岸部では巻町



第38図 3類aと類似する土器出土遺跡

### 3 石器について

豊原遺跡、刈羽村刈羽貝塚〔八幡 1958〕、柏崎市大宮遺跡〔中野 1999〕、柿崎町鍋屋町遺跡〔室岡・寺村 1960〕、吉川町古町 B 遺跡〔秦ほか 1992〕、新井市萩清水遺跡〔立木・寺崎 1997〕、山間部では朝日村アチャ平遺跡、同樽口遺跡〔立木ほか 1996〕などで確認されている。さらには県外でも山形県押出遺跡〔うきたむ風土記の丘考古資料館 1996〕、福島県上ノ原遺跡〔芳賀ほか 1983〕などで類例を見ることができることから、刈羽式を構成する類型の中でも広範囲に分布、拡散する一群といえるだろう。本遺跡では、275 が該当する。その一方で、半截竹管による口縁部文様帯描出などに大倉崎類型との共通点を持ちながら、文様帯内に刺突文を方形に施す 281 がある。これは他遺跡に類例を見出し難く、現時点では本遺跡における独自の土器といえよう。さらに器形も、胴部が丸く張り出す特徴的なもので、山間部のアチャ平遺跡出土土器（第 38 図・4）に類似している。

本遺跡における刈羽式は、いずれも胎土中に繊維を痕跡的ながらも含んでいる。刈羽式は、その設定当初から胎土中に繊維を含むものがある〔八幡前掲〕とされているが、近年では「繊維が混入しているかいないかの再確認が必要」〔寺崎 1988〕、さらには「繊維混入の事実自体が疑問視されている」〔中野 1997a〕との指摘もあり、「刈羽式＝繊維土器」という認識からの脱却が図られている。しかしながら、繊維の混入については、本遺跡と同じ山間部に位置するアチャ平遺跡においても指摘されている<sup>1)</sup>。類例の少ない現状で言及はできないものの、刈羽式における繊維の混入は、分布の中心とされる北陸地方の海岸部を離れた地域における特徴、あるいは地域性を示す要素として再評価される余地を残すものと考えられる。

## 3 石器について

### A 石器組成

北野遺跡（下層）から出土した石器は、第 9 表のとおり総数 7,716 点である。このうち器種石器の失敗品・素材・石核・剥片類を除いた器種石器は 1,820 点である。これらの石器は、伴出土器から早期中葉、前期前葉～中葉、前期後葉～末葉のいずれかの時期にほとんどが所属する。第 9 表の石器組成は早期中葉～前期末葉という極めて広範囲の時期を含んだ組成である。この組成によれば、不定形石器 781 点（43.0%）・敲磨石類 443 点（24.3%）・石錘 318 点（17.5%）で 1,542 点（84.7%）を占め、主要な石器といえる。次いで石匙 50 点（2.7%）・石皿 51 点（2.8%）・砥石 60 点（3.3%）が一定量を占める。残りの石鏃・尖頭器・石錘・両極剥離痕のある石器・篋状石器・打製石斧・磨製石斧は、いずれも 1.4% 以下で

出土区分	器種名	石鏃	尖頭器	石錘	石匙	不定形石器	両極剥離痕のある石器	篋状石器	打製石斧	石錘	磨製石斧	敲磨石類	石皿	砥石	器種分類不明石器	小計	石鏃未完成品	石鏃素材	石核・石核素材	剥片類	合計
遺構内出土			1	1	2	38	2		1	6	1	17	4	3		76	2	4	13	548	643
遺構外出土		20	9	25	48	743	14	15	10	312	15	426	47	57	3	1,744	26	18	188	5,097	7,072
合計		20	10	26	50	781	16	15	11	318	16	443	51	60	3	1,820	28	22	201	5,645	7,716
百分率 (%)		1.1	0.5	1.4	2.7	43.0	0.9	0.8	0.6	17.5	0.9	24.3	2.8	3.3	0.2	100.0					

\* 接合品は、接合後の数量。

第 9 表 器種別石器出土数

1) 押出遺跡出土土器を実見し、大倉崎類型類似土器（第 38 図・1）についても、胎土中への繊維の痕跡的な混入を確認している。

種別	細分類	分布傾向	時期			備考
			①早期中葉	②前期前葉～中葉	③前期後葉～末葉	
石鏃	A1	①				尖頭器状の石鏃、 平基・凹基鏃。
	A2・B	①・②・③				
石鏃失敗品		①・②・③				
尖頭器	A	③				押出型ポイント。文献[佐々木前期]による。 出土数少ない。
	B					
石鏃		①・②・③				
石匙	A1	②				松原型石匙。  石材に鉄石英（緑）あり。
	A2	②				
	A3・A4・B	①・②				
	C	②				
不定形石器		①・②・③				
両極剥離痕のある石器		①・②・③				出土数少ない。
篋状石器		①・②				出土数少ない。
打製石斧	A					出土数少ない。文献[富樫前期]による。 中期的な形状が、 出土数少ない。大谷原遺跡では早期より有り。
	B	③				
	C					
石錘		②				文献[鈴木前期]による。
石錘素材		②				
磨製石斧		①・②・③				出土数少ない。
敲磨石類	A	①・②				特殊磨石。 特殊磨石と通常磨石の中間系。 C2a類を除く。 細身の凹石。 敲石。
	B1	②				
	B2・C	①・②・③				
	C2a	②				
	D	②・③				
石皿	A	③				加工石皿。
	B	①・②・③				無加工石皿。
砥石	A	①・②・③				
	B・C・D	②・③				

\*分布傾向の番号は時期とほぼ一致し、第35図の分布域の番号とも一致する。

第10表 石器の分布と所属時期表

極めて少ない比率である。

しかし、前述のように早期中葉～前期末葉までの多時期を含んだ石器組成であり、各時期の組成の特徴を表していない。第10表は北野遺跡下層の器種別・細分類別の石器分布を中心に早期中葉を主体とする集落跡の上川村大谷原遺跡<sup>1)</sup>、前期前葉の土器捨場を調査した中条町二軒茶屋遺跡<sup>2)</sup>及び各種文献を参考に作成した石器の所属時期表である。

検討する余地も多いが、北野遺跡下層の各時期の石器様相の特徴は、以下のようにまとめられる。

- ① 石鏃A1類（尖頭器状の石鏃）は、早期中葉に所属する。
- ② 尖頭器A類（押出型ポイント）、打製石斧B類、石皿A類（加工）は、前期後葉～末葉に所属する。
- ③ 石匙A1類（松原型石匙）・A2類・C類、石錘、敲磨石類B1類・C2a類は、前期前葉～中葉に所属する。
- ④ 敲磨石類A類（特殊磨石）は前期前葉～中葉まで存続し、石皿B類（無加工）とセット関係にある。石皿A類とはセット関係はなく、敲磨石類A類の消滅に伴い、石皿A類が出現する。

## B 器種と石材選択

器種別の石材選択は第11表のとおりである。剥片石器（石鏃・尖頭器・石錘・石匙・不定形石器・両極剥離痕のある石器・篋状石器）では頁岩が主体となり約50%を占める。次いで凝灰岩・鉄石英（緑）・流紋岩・

1) 現在整理中である。早期中葉以降の早期の土器が約75%を占める。

2) 現在整理中である。前期前葉の遺物がほぼ100%を占める。

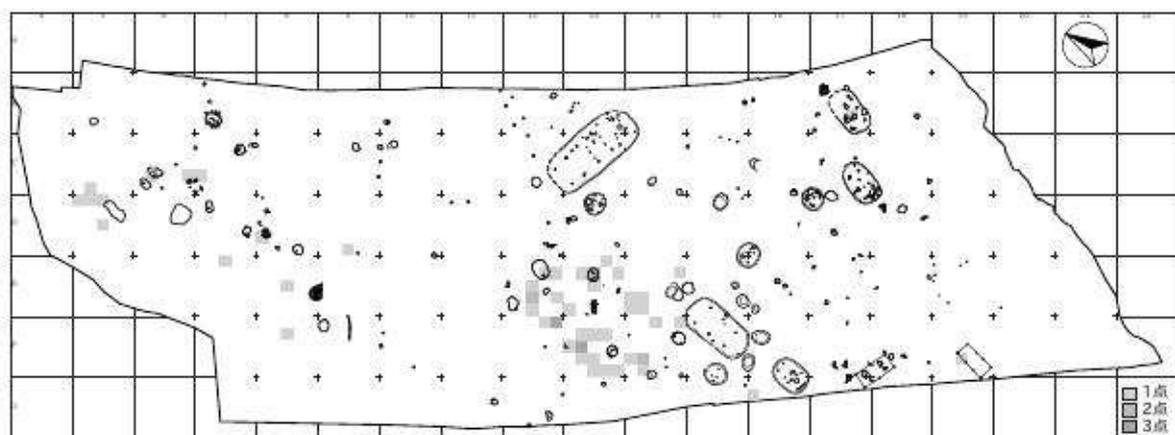
### 3 石器について

緑色凝灰岩が一定量用いられている。硬質緻密な石材である。明らかに搬入石材と推定される黒曜石は、非常に少ない。また、鉄石英（緑）はその出土分布（第39図）から、前期前葉～中葉の限られた時期に使用された石材と推定できる。搬入石材と考えられるが、入手先は不明である。礫石器の石錘・敲磨石類は、安山岩が主体となり約50%を占める。次いで凝灰岩・石英安山岩・流紋岩など火成岩系の石材が用いられている。また、同じく礫石器の石皿・砥石では、粒子構造を持つ安山岩・砂岩が多く用いられている。この他、磨製石斧の蛇紋岩4点は搬入石材であり、原産地は糸魚川地方と推定される。全体的に見ると石材選択はほぼ地元産で占められる。石材環境に恵まれた地に遺跡が立地していたものといえる。

器種 \ 石材	安山岩	圧砕岩	花崗岩	凝灰岩	輝緑岩	頁岩	結晶片岩	硬砂岩	黒曜石	砂岩	石英	蛇紋岩	石英安山岩	閃緑岩	泥岩	鉄石英(赤)	鉄石英(黄)	鉄石英(緑)	ホルンフェルス	粘板岩	メノウ	珉岩	砂ん岩	流紋岩	緑色凝灰岩	礫岩	不明	合計
石錘				1	11			2								1	3				2							20
石錘未完成品				2	15			1								1	3				2			3	1			28
尖頭器					9																				1			10
石錐				2	11					1						2	1	2			3			1	3			26
石匙				4	22											3	2	7			4			1	7			50
不定形石器	1			46	349		1									9	8	45			3			119	67	9	657	
両極石器				1	6											2		2			1			3	1			16
筒状石器				1	8												1							3	2			15
打製石斧	1				1									2					2	1				2	1	1	11	
石錘	143		2	42	9	7	1		17			35	2					1	1				6	37	9	4	2	318
石錘素材	12	1		1	1	1						4	1											1				22
磨製石斧					2							4							1				2		4	3		16
敲磨石類	251	6	19	19	22	4			12			46	1	1				1			1	11	38	4	4	4	3	443
石皿	38			5					7															1				51
砥石	14		2	6		1			28			1	1											2	1	4		60
分類不可	1																								1		1	3
合計	461	7	23	130	34	445	1	1	3	64	1	4	86	6	2	18	15	59	5	2	15	1	19	211	102	12	19	1746

\*不定形石器は、分類不可を除いた石材集計である。

第11表 器種別石材表



第39図 鉄石英（緑）出土分布図

(石錘3・石錘未完成品3・石錐2・石匙7・不定形石器45・両極剥離痕のある石器2点の計62点を対象とした)

## 要 約

- 1 北野遺跡は、新潟県東蒲原郡上川村大字九島字長木3,429番地ほか（通称北野）に所在する。遺跡は阿賀野川の支流、常浪川左岸の段丘に立地し、標高68mを測る。
- 2 調査は磐越自動車道の建設に伴い、平成5～7年の3か年にわたり実施した。調査面積は上・下層それぞれ8,900㎡である。上・下層の区分は縄文時代前期末葉（約5,000年前）に噴出したとされる沼沢火山灰の二次堆積層を間層とし、これより上を上層、下を下層とした。
- 3 調査の結果、下層では縄文時代早期前葉～前期末葉までの遺構・遺物が発見された。上層では縄文時代中期前葉以降の遺構・遺物が発見されている。なお、上層の発掘調査記録は、平成16年度に刊行を予定している。
- 4 遺構は竪穴住居18基、掘立柱建物2棟、土坑53基、焼土53基、集石7基、遺物集中地点11か所、溝1条、ピット29基である。これらの遺構は、主に早期中葉、前期前葉～中葉、前期後葉～末葉の集落跡を構成する。
- 5 前期後葉～末葉の集落跡は、沼沢火山灰層に覆われていたため、良好な状態で保存されていた。環状集落や竪穴住居の周堤などを含め、沼沢火山灰層に覆われる直前の遺跡・地形が調査された。
- 6 遺物は土器・石器である。縄文土器は早期に比定されるものから前期末葉の大木6式古段階の多時期に渡る。主体は前期後葉～末葉であり、次いで前期前葉～中葉、早期中葉である。土器群の系統は前期中葉期から東北地方の大木式の影響が見られ、後葉～末葉は大木5～6式が大半を占める。土器様相は福島県会津地方との共通項が多い。石器は、遺構・土器が多時期に渡ることから、多様な石器群で占められる。
- 7 遺構・土器の出土分布から、ある程度早期中葉～前期末葉までの石器群の変遷過程が追える。

## 引用文献

- 阿部朝衛 2000 「先史時代人の失敗と練習」『考古学雑誌』第86巻 第1号 日本考古学会
- 天野和孝ほか 1995 『地学のガイドシリーズ21 新潟県地学のガイド（下）新潟県北部・佐渡の地質と化石をめぐる』コロナ社
- 稲葉 明ほか 1976 「津川・野沢間の阿賀野川沿岸の第四系について」『研究報告』第9号 新潟県立教育センター
- うきたむ風土記の丘考古資料館 1996 『第3回特別展 縄文のタイムカプセル 押出遺跡』
- 遠藤 佐 1995 『よみがえる縄文時代 ～村内遺跡発掘調査概要1～』上川村教育委員会
- 小野 昭 1986 『上川村文化財調査報告書2 人ヶ谷岩陰』上川村教育委員会
- 小野 昭 1994 「豊原遺跡」『巻町史』資料編1 考古 巻町
- 小野 昭・鈴木俊成編 1994 『環日本海地域の土器出現期の様相』雄山閣出版
- 神村 透 1999 「特殊磨石・折損特殊磨石」『信濃』第51巻 第10号 信濃史学会
- 興野義一 1969 「大木式土器理解のために（V）」『考古学ジャーナル』No.32
- 興野義一 1970 「大木5b式の提唱」『古代文化』22-4 財団法人古代学協会
- 工藤竹久 1989 「縄文尖底系土器様式」『縄文土器大観 草創期 早期 前期』小学館
- 坂井陽一 1981 「新潟砂丘における腐植層と砂丘砂の鉱物組成」『研究報告』第49号 新潟県立教育センター
- 佐々木洋治・佐藤正俊 1986 「山形県・押出遺跡」『月間文化財 第278号』第一法規出版株式会社
- 佐藤雅一ほか 1994 『中里村文化財調査報告書6 榎 干溝遺跡』中里村教育委員会
- 佐藤雅一 1997 『津南町文化財調査報告第21 榎 神山遺跡群遺跡確認調査概要報告書』津南町教育委員会
- 佐原 真 1977 「石斧論一横斧から縦斧へ」『考古論集一慶祝松崎寿和先生六十三歳記念論文集』
- 沢田 敦 1996 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第73集 上ノ平遺跡C地点』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山武考古学研究所 1985 『原遺跡発掘調査報告書』津川町教育委員会
- 鈴鹿良一ほか 1996 『福島県文化財調査報告書第320集 獅子内遺跡（第1次調査）』福島県教育委員会・（財）福島県文化センター・建設省東北地方建設局槽上川ダム工事事務所
- 鈴木俊成 1999 「早期から晩期の石器組成」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 鈴木徳雄 1996 「諸磯b式の変化と型式間交渉一文様変化の継起的累積性と型式間関係の諸相一」『縄文時代』第7号 縄文時代文化研究会
- 鈴木道之助 1981 『図録石器の基礎知識 III』柏書房
- 芹沢長介・中村一明・麻生 優 1959 『神山』大門町教育委員会
- 只見川第四紀研究グループ 1966a 「福島県野沢盆地の浮石質砂層の基底部からより産出した木材のC14年代 —日本の第四紀層のC14年代XXVI—」『地球科学』第20号
- 只見川第四紀研究グループ 1966b 「只見川・阿賀野川流域の第四系の編年—とくに沼沢浮石層の層位学的諸問題について—」『第四紀総合研究連絡誌』8
- 高橋 桂・中島庄一・金井正三 1976 「北信濃大倉崎遺跡調査報告」『信濃』第28巻第4号 信濃史学会
- 高橋 桂ほか 1990 『飯山市埋蔵文化財調査報告書第21集 小沼湯滝ハイパス関係遺跡発掘調査II』飯山市教育委員会
- 高橋保雄 1995 「東蒲原郡上川村北野遺跡の調査概要」『研究紀要』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋保雄 1996 「新潟県上川村北野遺跡の調査概要」『すまいの考古学』山梨県考古学会
- 滝沢規朗ほか 1995 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第68集 大坂上道遺跡・猿額遺跡・中棚遺跡・牧ノ沢遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 滝沢規朗・富樫秀之 1998 『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書VII アチャ平遺跡中・下段』新潟県朝日村教育委員会

- 谷口康浩 1996 「室谷洞窟出土土器の再検討」『新潟県上川村神谷地域学術総合調査報告書 かみたに（人文編）』上川村
- 丹野隆明・本間 宏 1991 『福島県文化財調査報告書第266集 鹿島遺跡・平林B遺跡・権現山下遺跡』福島県教育委員会・（財）福島県文化センター
- 立木宏明<sup>ほか</sup> 1996 『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書V 樽口遺跡』新潟県朝日村教育委員会
- 立木由理子・寺崎裕助 1997 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第83集 萩清水遺跡・三本木新田B遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 寺崎裕助 1988 「刈羽式土器について（予察）」『新潟考古学談話会会報』第1号 新潟考古学談話会
- 寺崎裕助 1991 「縄文時代前期後半の格子目文土器について」『新潟考古学談話会会報』第8号 新潟考古学談話会
- 寺崎裕助 1997 「吉川町古町B遺跡について」『新潟考古学談話会会報』第17号 新潟考古学談話会
- 寺崎裕助 1999 「新潟県における縄文時代前期の土器 ―その標識資料と編年―」『縄文土器論集 ―縄文セミナー10周年記念論文集―』
- 富樫泰時 1976 「トランシェ様石器について」『東北考古学の諸問題』東北考古学会
- 中野 純 1997a 「刈羽式土器の再検討」『新潟考古学談話会会報』第17号 新潟考古学談話会
- 中野 純 1997b 「北陸における縄文時代前期後葉の土器様相(上) ―地域的様相把握に向けての資料集成―」『柏崎市立博物館館報』第11号 柏崎市立博物館館報
- 中野 純 1998 「北陸における縄文時代前期後葉の土器様相(下) ―地域的様相把握と分析による問題提起―」『柏崎市立博物館館報』第12号 柏崎市立博物館館報
- 中野 純 1999 「新潟県における縄文時代前期後半の土器群について―刈羽式土器の変遷と様相の把握に向けて―」『第12回縄文セミナー 前期後半の再検討』縄文セミナーの会
- 中村孝三郎 1960 『小瀬が沢洞窟』長岡市立科学博物館
- 中村孝三郎・小片 保 1962 『室谷洞窟』長岡市立科学博物館
- 西野秀和 1995 「小牧大杉谷内遺跡」『中島町史 資料編上巻』中島町
- 芳賀英一 1985 「大木式土器と東部関東との関係」『古代』第80号 早稲田大学考古学会
- 芳賀英一・藤谷 誠 1986 『福島県文化財調査報告書第164集 腰巻遺跡・下谷ヶ地平B・C遺跡』福島県教育委員会
- 芳賀英一<sup>ほか</sup> 1983 『福島県山都町文化財調査報告第4集 上ノ原遺跡』福島県山都町教育委員会
- 芳賀英一<sup>ほか</sup> 1984 『福島県会津高田町文化財調査報告書第5集 青宮西遺跡』福島県会津高田町教育委員会
- 芳賀英一<sup>ほか</sup> 1990 『福島県文化財調査報告書第227集 中冨遺跡・上冨A遺跡・青宮西遺跡・三十刈遺跡・水上遺跡』福島県教育委員会・（財）福島県文化センター
- 秦 昭繁 1991 「特殊な剥離技法をもつ東日本の石匙」『考古学雑誌』第76巻 第4号 日本考古学会
- 秦 繁治<sup>ほか</sup> 1992 『古町B遺跡発掘調査報告書』吉川町教育委員会
- 前山精明 1994 「新谷遺跡」『巻町史』資料編1 考古 巻町
- 松本 茂<sup>ほか</sup> 1987 『福島県文化財調査報告書第183集 岩下向A遺跡』福島県教育委員会・（財）福島県文化センター
- 松本 茂<sup>ほか</sup> 1991 『福島県文化財調査報告書第243集 法正尻遺跡』福島県教育委員会・（財）福島県文化センター
- 宮本長二郎 1996 『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版
- 室岡 博・寺村光晴 1960 『鍋屋町遺跡』柿崎町教育委員会
- 八木光則 1976 「いわゆる「特殊磨石」について」『信濃』第28巻 第4号 信濃史学会
- 柳田 誠 1979 「阿賀野川中流域の地形発達史」『地理学評論』52-12
- 八幡一郎 1958 『刈羽貝塚』新潟県教育委員会
- 渡辺 誠 1984 『縄文時代の漁業』雄山閣

## 遺構一覧表

## 土坑

No.	図版	位置 (グリッド)	平面形	確認層位	規模 (cm)			出土遺物	時期
					長径	短径	深さ		
1001	15・72	7B12	不整楕円形	VI	66	50	7	土器5・石器3・鏝1	早期中葉
1002	15・73	7B1・6	不整楕円形	VI	64	46	10	鏝24	早期中葉
1004	15・73	12B9・10・14・15	楕円形	VI	120	84	20	土器4・鏝3	前期後葉～末葉
1005	15・73	10B16・21	円形	VI	92	80	22		前期前葉～後葉
1006	15・73	5B7・18・22・23	不整形	VI	148	128	25		早期中葉
1007	15・74	5D3・4・8・9・10・14・15	不整形	VI	434	184	41	土器3・石器6・鏝1	早期後半?
1013	15・74	6C20・25	不整形	VI	96	75	27	銅片3	早期中葉
1014	15・74	6C14	楕円形	VI	48	34	18		早期中葉
1015	15・74	6C10, 7C8	楕円形	VI	66	58	12	土器1	早期中葉
1017	15・75	7C5・10, 8C16	不整形	VI	98	88	7		早期中葉
1018	15・75	7C5・10	不整形	VI	92	80	20		早期中葉
1019	15・75	7D14・15・19・20	不整形	V	194	128	27	土器多・石器9・鏝1	前期前葉
1020	16・75	7D1・2・6・7	不整形	VI	188	128	17		
1021	15・75	9C3・4・8・9	不整楕円形	VI	148	124	29	土器2・鏝2	前期前葉
1022	16・76	12C18・19・23・24	不整形	VI	180	164	10		前期前葉～中葉
1023	16・76	10C1・2・6・7	不整楕円形	VI	178	120	34		前期前葉～中葉
1024	16・76	9C5・10, 10C1・6	不整楕円形	VI	104	76	25		前期前葉～中葉
1025	16・76	8D23・24	不整形	VI	186	172	7	銅片5	前期前葉～中葉
1026	16・77	9F1・6	不整楕円形	V上面	212	168	13		前期後葉～末葉
1028	16・77	13D2・3	不整形	SI1027床	154	110	13		
1031	16・77	11G10・15	楕円形	VI	116	96	24		前期前葉～中葉
1032	16・77	12G14・15・19・20	不整形	VI	156	100	8		前期前葉～中葉
1033	16・77・78	10D25, 10E5	不整楕円形	VI	108	92	28		前期前葉～中葉
1038	16・78	12E14・19	不整形	VI	112	80	12		前期前葉～中葉
1041	16・78	18D3・8	楕円形	V上面	156	128	28	土器2・石器9	前期後葉～末葉
1042	17・78	13F14・15・19・20	円形	V	134	116	48	土器3・石器5・鏝2	前期前葉～中葉
1043	17・78	14C17・18・22・27	楕円形	V上面	168	116	24		前期後葉～末葉
1044	17・79	14F22・23, 14G2・3	不整楕円形	V	162	144	24	土器多数	前期後葉
1046	17・79	13G4	円形	V	72	61	51	鏝9	前期前葉～中葉?
1047	17・78	13F14・15・19・20	不整楕円形	VI	208	176	15		前期前葉～中葉?
1048	18・79	14E14・15・19・20		V上面		197	30	土器2	前期後葉～末葉
1049	17・79・80	15E20・25, 16E16・21	楕円形	V上面	232	196	54		前期後葉～末葉
1052	17・80	15F20・25, 16F16・21	楕円形	V上面	280	204	109	土器2・石器17・鏝4	前期後葉～末葉
1053	17・80	16E21	楕円形	V上面	152	124	22		前期後葉～末葉
1055	18・79	14E14・15・19・20	楕円形	V上面	264	156	39	鏝2	前期後葉～末葉
1056	17・80	15E14・15	楕円形	V上面	128	112	23		前期後葉～末葉
1058	18・80	16F6・7・11・12	楕円形	V上面	312	226	50	土器8・石器5・鏝12	前期後葉～末葉
1059	18・81	17D12・13・17・18	楕円形	V上面	122	88	59		前期後葉～末葉
1060	18・81	18B19	円形	VI	88	82	22		早期中葉・前期前半?
1061	18・81	18F17	楕円形	VI	108	92	11	土器・石器14・鏝9	
1064	18・81・82	16C11					8		
1065	18・82	16C24・25, 16D4・5	不整楕円形	VI	132	110	31	土器1・鏝1	前期後葉
1066	18・82	17C22・23, 17D2・3	不整楕円形	V	222	164	13	石器1・焼礫多数	前期前葉～中葉?
1067	19・82・83	15C23, 15D3・4・8・9	不整楕円形	V	290	236	15	石器2・焼礫多数	前期前葉～中葉?
1068	19・83	17E17・22		V		70	14		前期後葉～末葉
1069	19・83	14C25, 14D5	不整形	V	107	94	9	焼礫多数	前期前葉～中葉?
1070	19・83	14F25, 14G5	不整楕円形	V	80	52	5		
1072	19・84	16E13・14	円形	V	78	72	11		前期後葉～末葉?
1073	19・84	16E8・13	不整楕円形	V	108	88	12	焼礫多数	前期前葉～中葉?
1074	19・84	15E24, 15F4	不整楕円形	VI	76	70	12		
1075	19・84・85	14E15・20, 15E11・16	不整楕円形	VI	208	200	11		
1076	19・85	13D6・11	楕円形	VI	104	66	9		
1077	19・85	13D6・7・11・12	楕円形	VI	116	80	14		

## 焼土

No.	図版	位置 (グリッド)	確認層位	焼土範囲 (cm)			時期
				長径	短径	深さ	
6C・1号焼土	20	6C25	V			4	
7C・1号焼土	20・86	6C20・25, 7C16・21	V	80	64	9	
8D・1号焼土	20・86	8D6・7	V	96	80	9	
8D・2号焼土	20	8D11	VI			12	
11B・1号焼土	20	11B10	V上面	38	26	2	前期後葉～末葉
11D・1号焼土	20・86	11D3	V	48	38	4	前期前葉～中葉?
12B・1号焼土	20	12B6・11	V上面	36	20	4	前期後葉～末葉
12B・2号焼土	20	12B11	V上面	48	40	3	前期後葉～末葉
12B・3号焼土	20・86	12B21・22	V上面	48	40	5	前期後葉～末葉
12B・4号焼土	20	12B17	V上面	38	30	4	前期後葉～末葉
12B・5号焼土	20	12B24・25	V上面	28	20	2	前期後葉～末葉
12C・1号焼土	20	12C3	V上面	44	40	4	前期後葉～末葉
12C・2号焼土	20	12C8	V上面	44	40	5	前期後葉～末葉
12D・1号焼土	20	12D14	V上面	40	30	3	前期後葉～末葉
12D・2号焼土	20	12D19・24	V上面	36	32	3	前期後葉～末葉
12D・3号焼土	20	12D19・24・25	V	120以上	76	9	前期前葉～中葉?
12E・1号焼土	20	12D25, 12E5	V上面	36	32	3	前期後葉～末葉
12F・1号焼土	20・86	12F14	V	37	30	9	前期前葉～中葉?
12G・1号焼土	20	12G10, 13G6	V	62	24	8	前期前葉～中葉?
13B・1号焼土	20	13B16	V	50	34	2	前期前葉～中葉?
13D・1号焼土	20・86	13D20・25	V上面	76	55	9	前期後葉～末葉
13E・4号焼土	21	13E15・20	V	96	48	6	前期前葉～中葉?

## 焼土

No.	図版	位置 (グリッド)	確認層位	焼土範囲 (cm)			時期
				長径	短径	深さ	
13E・5号焼土	21	13E23	V	30	25	5	前期前葉～中葉?
14F・1号焼土	21・86	14F24	V	30	24	4	前期前葉～中葉?
14F・2号焼土	21	14F6	V	27	19	4	前期前葉～中葉?
15C・1号焼土	21	15C25	V上面	39	21	2	前期後葉～末葉
15D・1号焼土	21・86	15D5	V上面	24	18	4	前期後葉～末葉
15G・1号焼土	21	15G5	V上面	42	29	7	前期後葉～末葉
16B・1号焼土	21	16B11	V上面	67	44	5	前期後葉～末葉
16D・1号焼土	21	16D5, 17D1	SI1054覆土	88	59	3	前期末葉
16D・2号焼土	21	16D15	V			2	前期後葉～末葉
16E・1号焼土	21・87	16E19	V上面	36	27	3	前期後葉～末葉
17B・2号焼土	21	17B16	V上面	80	48	4	前期後葉～末葉
17B・3号焼土	21	17B21	V上面	72	60	4	前期後葉～末葉
17C・1号焼土	21	17C21	SI1054覆土	50	41	4	前期末葉
17C・2号焼土	21	17C11・12	V上面	104	48	4	前期後葉～末葉
17C・3号焼土	21・87	17C9・14	SI1035周壁下	48	48	2	前期後葉～末葉
17D・1号焼土	21	17D25, 17E4	V上面			4	前期後葉～末葉
17E・1号焼土	21	17E1・6	V上面	65	43	5	前期後葉～末葉
17E・2号焼土	21・87	17E4	V上面	52	38	2	前期後葉～末葉
17E・3号焼土	21	17E10	V上面			4	前期後葉～末葉
17E・4号焼土	21	17E19	V	38	17	3	前期後葉～末葉?
17E・5号焼土	21	17E5	V上面			4	前期後葉～末葉
17F・1号焼土	21	17F4	V上面			5	前期後葉～末葉
17F・2号焼土	22	17F25	V上面	111	95	9	前期後葉～末葉
17F・3号焼土	22	17F25, 17G5	V上面	48	32	5	前期後葉～末葉
18C・1号焼土	22	18C20・25	V上面	80	72	8	前期後葉～末葉
18E・1号焼土	22	18E11	V上面	24	19	4	前期後葉～末葉
18E・2号焼土	22	18E11	V上面	36	23	4	前期後葉～末葉
18F・1号焼土	22	18F16・21	V上面	104	72	4	前期後葉～末葉
18F・2号焼土	22・87	18F20	V上面	47	33	4	前期後葉～末葉
18F・3号焼土	22	18F22	V上面	68	56	3	前期後葉～末葉
18G・1号焼土	22	18G1	V上面	32	28	3	前期後葉～末葉

## 集石

No.	図版	位置 (グリッド)	確認層位	範囲 (cm)		出土遺物 (点)	時期
				長径	短径		
8E・1号集石	22・87	8E15・20, 9E1・116	V	310	255	焼礫1373・石器5	前期前葉?
14F・1号集石	22・87	14F19	V	44	39	焼礫60	前期前葉～中葉?
17F・1号集石	22・87・88	17F17・18・22・23	V上位	127	108	礫30	前期後葉～末葉
17F・2号集石	22・88	17F18・19・23・24	V上位	129	123	礫87	前期後葉～末葉
17F・3号集石	22・88	17F20・25, 18F16・21	V上位	106	48	礫25	前期後葉～末葉
17G・1号集石	22・88	17G24, 17G4	V上位	175	125	礫多数 (焼礫数点)	前期後葉～末葉
18F・1号集石	22・88	18F12・17	V上位	70	48	礫25	前期後葉～末葉

## 遺物集中地点

No.	図版	位置 (グリッド)	確認層位	範囲 (cm)		出土遺物・点数 (掲載遺物%)	時期
				長径	短径		
8D・1号遺物集中		8D11・12・16・17	V	184	148	土器多数 (79)・石器7・礫1	早期中葉
8D・2号遺物集中		8D22	V下位	80	62	土器多数 (129)	早期中葉
13E・1号遺物集中		13E18・23	V上面	242	152	土器多数 (308)・石器25・礫3	前期後葉
13E・2号土器集中		13E22・23	V上位	124	68	土器多数 (109)・石器5	前期後葉
13E・3号遺物集中	22	13E14	V下位	45	19	土器2 (108)・石器3477 (243・247)	前期中葉
13F・1号遺物集中		13F11	V中位	97	53	土器多数 (110)・石器・礫	前期中葉
15B・1号遺物集中	22	15B15	V上面	86	80	土器多数 (111)	前期末葉
17B・1号遺物集中		17B1・2・6・7	SI1034周壁土	190	176	土器多数 (112)・石器10・礫	前期末葉
18D・1号遺物集中		18D10・15	V上面	134	106	土器多数 (116・117)・礫	前期末葉
18D・2号遺物集中		18D1・2・6・7	SI1035周壁土	180	156	土器多数 (118・119)	前期末葉
18F・1号遺物集中	22	18F18・19	V上位	136	86	土器多数 (120・121)	前期末葉

## ピット

No.	図版	位置 (グリッド)	平面形	規模 (cm)			出土遺物・点数 (掲載%)	特記事項
				長径	短径	深さ		
6C・P1	20	6C23	楕円形	55	36	16	石器2	土坑の可能性あり
7C・P1	20	6C25・7C21	不整形	72	56	16	石器6 (106)・石器9 (18)	土坑の可能性あり
7C・P2		7C21	不整形楕円形	54	31	11	石器1	
7C・P3		7C21	楕円形	36	27	11	石器3	
8D・P1		8D1	楕円形	31	25	18	石器1 (107)・礫1	
9D・P1		9D24	楕円形	48	40	—	石器1・礫1	
10C・P1		10C11	楕円形	62	39	—		
10C・P2		9C20・10C16	楕円形	56	46	14		
10F・P1		10F6	円形	44	36	—		
10F・P2		10F23	不整形円形	42	40	—		
10F・P3		10F11	円形	66	62	28		
11D・P1		11D1	不整形楕円形	50	38	23		
12E・P1		12E16	不整形	100	60	16	石器2	土坑の可能性あり
12G・P1		12G18・22・23	—	—	—	26		

遺構一覧表・土器観察表

ピット

No	図版	位置 (グリッド)	平面形	規模 (cm)			出土遺物・点数 (掲載No)	特記事項
				長径	短径	深さ		
13B・P1		13B12	円形	21	19	—		
13B・P2		13B11	楕円形	32	23	—		
13B・P3		13B11	楕円形	36	22	—		
15C・P1		15C3	円形	25	24	7	石器1 (119)	
15C・P2		15C4	円形	26	26	13		
15C・P3		15C5	楕円形	34	20	7		
15C・P4		15C6	円形	67	60	—		
19E・P1		19E1	楕円形	23	18	3		
19E・P2		19E3	楕円形	21	16	4		
19E・P3		19E3	楕円形	26	18	6		
19E・P4		19E6	楕円形	34	22	8		
19E・P5		19E11	円形	18	16	7		
19E・P6		19E16	楕円形	17	13	9		
19E・P7		19E17	不整形楕円形	24	18	14		
20E・P1		20E21	楕円形	30	20	4		

土器観察表

No	分類	出土位置	出土層位	文様	胎土	繊維	外面色調	内面色調	備考
1	Ⅲ群4類	SI1029	P2覆土	連続斜交文	白粒		7.5YR5/4	7.5YR4/3	
2	Ⅳ群	SI1029	床直土	屈文	白粒		10YR7/4	10YR6/3	底径 (4)
3	Ⅲ群9類a	SI1029	床直土	縄文	白粒		10YR4/2	7.5YR5/6	
4	Ⅲ群9類a	SI1029	床直土	縄文	白、橙粒		7.5YR4/3	7.5YR3/3	
5	Ⅲ群9類a	SI1029	覆土下層	縄文	白粒		7.5YR3/3	7.5YR7/4	
6	Ⅲ群4類	SI1029	覆土下層	連続斜交文	白粒		10YR7/4	10YR4/3	
7	Ⅲ群9類a	SI1029	覆土上層	縄文	白粒		10YR3/1	10YR4/3	
8	Ⅲ群6類a	SI1034/17B-(T40)、18B11	覆土/覆瓦	連続爪形文、断歯状沈線文	白、橙粒		7.5YR3/1	10YR4/3	口径 (22)
9	Ⅲ群6類b	SI1034	覆土	連続爪形文、渦巻沈線文	白粒		10YR3/3	7.5YR4/6	
10	Ⅲ群6類c	SI1034/17B15	床直上/V土	縄文+結節回転文、口縁部肥厚帯	白粒		10YR6/1	10YR5/2	(器形F1類)/口径24
11	Ⅲ群5類b	SI1034	P5覆土	縄文、断歯状浮線文	白粒多		10YR6/6	10YR5/3	
12	Ⅲ群4類	SI1034	P10覆土	連続斜交文	白、黒粒		10YR8/3	10YR5/2	
13	Ⅲ群9類b	SI1034	P10覆土	縄文+結節回転文	白、橙粒		10YR4/4	7.5YR6/4	
14	Ⅲ群9類a	SI1034	P10覆土	縄文	白粒		5YR6/6	7.5YR3/2	
15	Ⅲ群9類	SI1034	P5覆土	結節羽状縄文?	白粒		7.5YR6/6	10YR5/1	
16	Ⅲ群9類a	SI1034	P10覆土	縄文	白粒		5YR4/6	5YR4/2	
17	Ⅲ群9類a	SI1034	P10覆土	縄文	白粒		10YR7/2	10YR8/2	観察簿少量記入
18	Ⅲ群9類a	SI1034	P10覆土	縄文	白、黒粒		10YR8/3	10YR5/2	
19	Ⅲ群6類c	SI1034	床直土	縄文、連続爪形文	白、黒、橙粒		10YR4/1	10YR4/1	
20	Ⅲ群	SI1034	覆土	屈文	白、橙粒		10YR4/6	10YR6/4	
21	Ⅲ群9類a	SI1034	覆土	縄文	砂粒		10YR6/2	10YR8/3	
22	Ⅲ群6類a	SI1035	床直土	縄文、口縁部肥厚帯、連続爪形文、断歯状沈線文	白、橙粒		10YR6/3	10YR7/3	(器形C1類)/器高52、口径31、底径12/床面一括出土
23	Ⅲ群6類	SI1035	覆土	口縁部肥厚帯、断歯状沈線文?	橙、透明粒		10YR3/1	5YR4/6	
24	Ⅲ群9類b	SI1050	床直土	縄文+結節回転文	白粒		10YR5/2	10YR7/4	
25	Ⅲ群9類a	SI1050	床直土	縄文	黒粒		10YR7/6	10YR7/3	
26	Ⅳ群	SI1050	床直土	縄文+結節回転文	白粒	○	5YR5/4	5YR4/4	
27	Ⅲ群	SI1050	床直土、覆土上層	屈文	黒粒	○	10YR7/4	10YR7/2	底径 (12)
28	Ⅲ群9類b	SI1050	床直土	縄文+結節回転文	黒粒		10YR7/4	10YR7/4	
29	Ⅲ群9類a	SI1050	覆土下層	縄文	白粒		7.5YR5/2	7.5YR7/4	
30	Ⅲ群9類a	SI1050	覆土下層	縄文	白粒		10YR7/3	10YR6/2	
31	Ⅲ群9類b	SI1050	覆土下層	縄文	白、黒、橙粒		10YR7/3	5YR6/6	
32	Ⅲ群1類d	SI1050	覆土中層	縄文	白、橙粒	◎	10YR6/2	10YR5/3	
33	Ⅲ群9類b	SI1050	覆土中層	縄文+結節回転文	黒、橙粒		10YR7/3	10YR6/2	
34	Ⅲ群9類a	SI1050	覆土中層	縄文	黒粒		10YR6/3	10YR7/4	
35	Ⅲ群1類a2	SI1050	覆土中層	非結節羽状縄文	白、橙粒	◎	10YR7/3	10YR7/2	
36	Ⅲ群1類d	SI1050/12E25、13F6、14E9、13他	覆土中層/V、V土	縄文 (複節斜行縄文)	白、橙粒	◎	7.5YR6/4	5YR6/6	口径 (26)
37	Ⅳ群	SI1050	覆土中・上層	縄文	白粒	○	5YR5/4	5YR4/4	
38	Ⅲ群9類a	SI1050	覆土中層	縄文	白、橙粒		7.5YR7/6	7.5YR4/2	
39	Ⅳ群	SI1050	覆土上層	屈文	白粒	○	7.5YR6/4	7.5YR2/2	
40	Ⅲ群9類a	SI1050	覆土上層	縄文	黒、橙粒		10YR6/2	10YR6/2	
41	Ⅲ群?	SI1050	覆土上層	屈文	黒粒		10YR5/1	10YR6/2	
42	Ⅳ群	SI1050	覆土	口唇部刻目文	黒、橙粒		10YR6/2	10YR6/2	
43	Ⅲ群?	SI1057	覆土下層	縄文	白粒	○	7.5YR5/4	7.5YR4/4	
44	Ⅳ群	SI1057	覆土上層	縄文?	白粒		2.5YR5/6	7.5YR4/1	
45	Ⅲ群1類d	SI1057	覆土下~上層	縄文+結節回転文	白、黒粒	◎	10YR6/4	10YR7/4	
46	Ⅲ群9類a	SI1057	覆土下層、中層	縄文	白、黒、橙粒		10YR5/3	10YR4/2	底径9
47	Ⅳ群	SI1057	覆土下層	縄文+結節回転文	白粒	○	10YR3/2	7.5YR6/6	
48	Ⅲ群1類d	SI1057	覆土中層	縄文	白、橙粒	◎	2.5Y4/3	2.5Y5/2	
49	Ⅳ群	SI1057	覆土中層	不明	黒粒	○	10YR7/4	10YR6/3	
50	Ⅲ群1類d	SI1057	覆土上層	縄文	白、黒、透明粒	◎	7.5YR4/6	7.5YR4/6	
51	Ⅲ群9類a	SI1057	覆土上層、覆瓦上層	縄文	白粒		7.5YR5/4	10YR6/3	

No.	分類	出土位置	出土層位	文様	胎土	繊維	外面色調	内面色調	備考
52	Ⅲ群6類b	SI1057	覆土上層	縄文、対称状沈線文	白、橙粒		10YR6/3	10YR5/1	
53	Ⅲ群6類b	SI1057	覆土上層	縄文、対称状沈線文	白、黒粒		10YR3/2	10YR6/3	
54	Ⅲ群9類a	SI1057	覆土上層	縄文	白、透明粒		7.5YR5/2	7.5YR4/1	
55	Ⅳ群	SI1057	覆土上層	沈線文	白粒	○	10YR5/4	10YR5/4	
56	Ⅳ群	SI1057	覆土上層	沈線文	白粒	○	10YR7/4	10YR8/2	
57	Ⅳ群	SI1027	P6覆土	縄文、沈線文	白、橙粒		7.5YR5/3	7.5YR2/3	
58	Ⅲ群9類a	SI1027	覆土下層	縄文	白粒		7.5YR3/2	5YR4/3	
59	Ⅲ群5類c	SI1027	覆土中層	縄文、鋸歯状沈線文、沈線文	白粒		7.5YR4/6	10YR6/4	
60	Ⅲ群4類	SI1027	覆土上層	連続刺突文、平截竹管沈文	黒粒		7.5YR6/6	7.5YR3/2	
61	Ⅲ群9類a	SI1027	覆土上層	縄文	白、黒、透明粒		10YR3/1	10YR4/3	
62	Ⅳ群	SI1027	覆土上層	縄文	橙粒	○	10YR6/6	10YR3/2	
63	Ⅲ群	SI1036	床直上	浮線文	白粒		7.5YR5/3	10YR7/6	
64	Ⅲ群5類b	SI1036	床直上	縄文、鋸歯状浮線文	白粒多		7.5YR3/3	7.5YR3/4	
65	Ⅲ群9類a	SI1036	床直上	縄文	白粒		7.5YR5/3	7.5YR7/6	口径10
66	Ⅲ群5類c	SI1036	覆土	鋸歯状沈線文、沈線文	黒粒		10YR5/2	10YR5/4	
67	Ⅲ群	SI1036	覆土	羽状縄文?	白粒		7.5YR5/3	10YR5/2	
68	Ⅲ群	SI1036	覆土	沈線文	白、黒、橙粒、金雲母		7.5YR5/4	7.5YR4/2	
69	Ⅲ群6類c	SI1051	床直上	縄文+結節回転文	白、黒、橙粒		10YR6/3	10YR7/3	
70	Ⅲ群9類a	SI1051	床直上	縄文	白、橙粒		10YR8/4	10YR7/3	
71	Ⅲ群	SI1051	床直上	不明	白、黒、橙粒		10YR5/3	10YR6/4	
72	Ⅲ群9類a	SI1051	覆土中層	縄文	黒粒		10YR5/2	10YR6/3	
73	Ⅳ群	SI1051	覆土中層	不明	白、橙粒		10YR2/1	10YR2/2	
74	Ⅳ群	SI1051	覆土中層	縄文	白、赤粒	◎	10YR6/3	10YR4/1	
75	Ⅳ群	SI1051	覆土上層	縄文	黒、橙粒	◎	10YR7/4	10YR7/4	
76	Ⅲ群5類c	SI1054	覆土	縄文、鋸歯状沈線文	白、橙粒		7.5YR6/4	7.5YR4/1	
77	Ⅲ群	SI1054	覆土	結束羽状縄文	白、黒、橙粒		7.5YR4/1	5YR4/6	
78	Ⅳ群	SI1054	床直上	不明	黒粒		10YR4/3	10YR4/3	
79	Ⅰ群2類b2	SK1001/6D9、7B12、7E5、8D22、8E1	覆土/V中、V下、VI上、VI	口縁部沈線文、口縁内端部刻目文、沈線文、貝殻線刻文	白粒		7.5YR5/6	7.5YR5/4	
80	Ⅲ群9類a	SK1004	覆土下層	縄文	黒粒		10YR6/4	10YR6/4	
81	Ⅲ群9類a	SK1004	覆土下層	縄文	白、透明粒		5YR4/8	5YR2/2	
82	Ⅲ群9類a	SK1004	覆土下層	縄文	白、透明粒		10YR3/2	10YR5/4	
83	Ⅲ群9類a	SK1004	覆土上層	縄文	白粒		10YR3/2	10YR5/4	
84	Ⅳ群	SK1007	覆土下層	条痕文	白粒	◎	7.5YR7/6	7.5YR4/1	
85	Ⅲ群1類c	SK1040	覆土	ループ文	白、橙粒	◎	10YR7/4	10YR7/3	
86	Ⅲ群1類c	SK1019	覆土	ループ文	白粒	◎	10YR7/4	10YR7/4	
87	Ⅲ群6類c	SK1041/18D3	覆土/V上	縄文+結節回転文、口縁部肥厚帯	白、透明粒		10YR5/2	10YR3/1	(器形F2類) / 口径 (24)
88	Ⅲ群9類a	SK1041	覆土	縄文	白粒		7.5YR4/1	7.5YR4/2	
89	Ⅲ群1類c	SK1044	覆土上層	ループ文	白、橙粒	◎	7.5YR6/4	5YR6/6	
90	Ⅲ群2類	SK1044	覆土、覆土上層	口縁外端部刻目文、波状沈線文、波状貝殻文	白、黒粒		5YR5/6	7.5YR3/2	口径 (30) / 穿孔2
91	Ⅲ群4類	SK1044	覆土	不明	白、橙粒	◎	10YR6/4	10YR6/4	
92	Ⅲ群1類d	SK1044	覆土上層	縄文	白、黒、橙粒	◎	10YR7/3	10YR5/3	
93	Ⅲ群1類c	SK1044	覆土、覆土上層	ループ文	白、橙粒	◎	10YR5/2	10YR6/2	照りの異なる環付き原体の交互重層施文
94	Ⅲ群6類e1	SK1048	覆土	鋸歯状突起、刺突文	白、黒、橙粒		10YR7/4	7.5YR6/4	
95	Ⅲ群1類e	SK1048	覆土	細刺文	白、橙粒	◎	7.5YR6/4	7.5YR6/4	
96	Ⅲ群1類d	SK1052	覆土	縄文	白粒	◎	10YR5/2	10YR4/2	
97	Ⅳ群	SK1052	覆土	不明	白、橙粒	○	7.5YR6/4	7.5YR5/6	
98	Ⅳ群	SK1058	覆土	縄文	白粒	○	7.5YR6/4	7.5YR4/1	
99	Ⅳ群	SK1058	覆土	不明	白、黒、橙粒	◎	10YR6/4	10YR6/3	
100	Ⅲ群5類c	SK1065	覆土下層	縄文、鋸歯状沈線文、沈線文	白粒		5YR6/6	10YR5/3	(器形B2類) / 口径 (19)
101	Ⅲ群9類a	SK1065	覆土下層	縄文	白粒	○	10YR4/2	10YR6/3	
102	Ⅲ群1類	不明	覆土	沈線文、爪形文、口唇部刻目文	黒粒		7.5YR8/2	7.5YR8/1	
103	Ⅲ群1類	不明	覆土	縄文、平行沈線文	白、黒粒		10YR8/3	10YR8/3	
104	Ⅲ群	不明	覆土		白粒		5YR6/6	5YR6/6	表面削り板
105	Ⅲ群9類a	不明	覆土	縄文	白粒		10YR6/2	10YR5/2	
106	Ⅰ群3類	7CP1/7C21	覆土/VI (遺構上面)	無文	白、黒粒		10YR6/3	10YR7/3	口径 (24) / 遺構覆土及び上面から出土
107	Ⅳ群	8DP1/8D16他	覆土/V上	非結束羽状縄文、波状沈線文、沈線文	白、黒粒、金雲母	○	5YR5/4	5YR5/4	同一個体と思われる破片周辺から多数出土
108	Ⅲ群1類e	13E3号遺物集中/12D19、13E5.13他	V	細刺文	白、黒、橙粒	◎	10YR4/2	10YR6/4	口径 (31) / 同一個体と思われる破片周辺から多数出土
109	Ⅲ群5類c	13E2号遺物集中	V	縄文、口唇部刻目文、鋸歯状沈線文、沈線文	白、黒、橙粒		10YR6/2	10YR6/2	繊維極少量混入
110	Ⅲ群1類b	13F1号遺物集中	V	結束羽状縄文	白、黒、透明粒	◎	7.5YR4/2	7.5YR5/4	
111	Ⅲ群6類c	15B1号遺物集中	V	縄文+結節回転文、口縁部肥厚帯	白、黒、橙粒		10YR6/2	10YR4/1	
112	Ⅲ群6類c	17B1号遺物集中	V上	縄文、口縁部肥厚帯、條帯、沈線文	白、橙粒		10YR5/3	7.5YR6/4	(器形D1類) / 口径 (22) / 口径10
113	Ⅲ群	17B1号遺物集中	V上	連続爪形文	黒、透明粒		10YR4/3	5YR6/6	
114	Ⅲ群	17B1号遺物集中/17B6	V上	沈線文、結節沈線文	白粒		7.5YR4/3	7.5YR3/2	
115	Ⅲ群	17B1号遺物集中	V上	凹溝状突起、脊線文	白粒		10YR6/2	10YR4/2	赤色顔料付着
116	Ⅲ群6類d	18D1号遺物集中/18D3.15	V上、V	縄文、口縁部肥厚帯、沈線文、鋸歯状印刻文、條帯+刻目文	白、透明粒		10YR7/3	10YR8/3	(器形C2類) / 口径 (34)
117	Ⅲ群6類a	18D1号遺物集中/19C4	V上、覆土	縄文、口縁部肥厚帯、鋸歯状沈線文	白、橙粒		10YR3/1、10YR7/3	10YR6/3	
118	Ⅲ群6類e	18D2号遺物集中	V上	縄文、口縁部肥厚帯、沈線文、懸垂部面圧痕文、連続爪形文	橙、透明粒		10YR3/1	5YR4/6	(器形F2類?) / 口径 (24)

## 土器観察表

No.	分類	出土位置	出土層位	文様	胎土	織物	外面色調	内面色調	備考
119	Ⅱ群2類a1	18D2号遺物集中	V上, V	縄文、C字形刺突文	橙、透明粒	◎	10YR7/4	10YR7/4	
120	Ⅲ群6類c3	18F1号遺物集中	V	双頭状突起、隆帯十刻目文	白、橙粒		10YR7/3	10YR7/4	口径(38)
121	Ⅲ群9類b	18F1号遺物集中	V	縄文+結部回転文	白、橙、透明粒		10YR4/1	10YR7/4	
122	I群1類	11G3.4	Ⅵ, V	押型文	白、橙粒	○	10YR4/1	10YR5/1	
123	I群2類a	5B15	Ⅵ	沈線文	白、橙粒		10YR7/6	10YR7/4	
124	I群2類	7E8.12	V中	沈線文	白、黒、橙粒	○	5YR7/6	10YR5/2	
125	I群2類a	7E7, 7E (T20)	V下	爪形文、沈線文	白、黒、橙粒	○	7.5YR7/6	7.5YR5/3	穿孔
126	I群2類b1	6D5, 7D6.7	V	沈線文	白粒	○	10YR6/3	7.5YR7/4	
127	I群2類b1	7D6.7	V	沈線文	橙粒	○	10YR8/4	10YR8/4	
128	I群2類b2	7C22	V上	沈線文、凹線線状刺突文	白粒		10YR5/3	10YR4/2	
129	I群2類b2	8D22	V下	沈線文、凹線線状刺突文	白粒		10YR7/3	10YR4/1	口径(34)
130	I群2類C	5D3	V	<伏押し引き文	白、黒、橙粒		10YR6/4	10YR8/4	
131	I群2類C	6D10	V中	<伏押し引き文	白粒		10YR7/3	10YR5/1	
132	I群	8C1	不明	不明	白粒	○	7.5YR4/3	7.5YR4/1	
133	I群3類	8E16	V上	縄文	白、橙粒	○	5YR4/4	5YR3/2	134と同一個体の可能性あり
134	I群3類	8E16	V上	縄文	白粒	○	7.5YR6/6	10YR7/4	133と同一個体の可能性あり
135	Ⅱ群1類a1	5B9	V上	非結束羽状縄文	赤、透明粒	◎	10YR6/2	10YR6/3	
136	Ⅱ群1類a1	5B (T3)	V	非結束羽状縄文	赤、透明粒	◎	10YR7/3	10YR7/3	
137	Ⅱ群1類a1	12D16	V上	非結束羽状縄文	白粒	◎	10YR8/2	10YR8/3	
138	Ⅱ群1類a2	7D7	V	凹線線状刺突文、非結束羽状縄文	白、透明粒	○	10YR5/2	10YR7/3	
139	Ⅱ群1類a1	6D4.21.22, 6E13	V, V中	非結束羽状縄文	白、黄粒	◎	7.5YR7/6	10YR6/2	
140	Ⅱ群1類a	10D5.9.10	V	非結束羽状縄文	橙、透明粒	○	10YR8/4	10YR7/3	
141	Ⅱ群1類a2	13F12	V上	非結束羽状縄文	黒粒	◎	10YR8/2	10YR7/2	
142	Ⅱ群1類a1	13G16	V上	非結束羽状縄文	白、赤、透明粒	◎	10YR8/4	7.5YR5/6	
143	Ⅱ群1類a1	19F2	V上	非結束羽状縄文	白、橙粒	◎	10YR8/4	10YR6/1	
144	Ⅱ群1類b	12C2	V上	結束羽状縄文	白粒	○	2.5Y5/2	10YR5/2	
145	Ⅱ群1類b	12C2	V上	結束羽状縄文	白粒	○	2.5Y6/2	10YR6/2	
146	Ⅱ群1類b	12D3	V上	結束羽状縄文	白、橙粒		10YR6/3	10YR7/3	
147	Ⅱ群1類b	12E24	V	結束羽状縄文	白、橙粒	◎	10YR4/1	10YR6/3	
148	Ⅱ群1類b	12F9, 13F16	V上	結束羽状縄文	白、橙粒	◎	10YR5/2	10YR7/3	
149	Ⅱ群1類b	12F10.15, 13F11	V中, V上	結束羽状縄文	赤粒	◎	10YR4/2	7.5YR6/4	
150	Ⅱ群1類b	12F10	V上	結束羽状縄文	白、黒、橙粒	◎	10YR4/3	10YR8/4	
151	Ⅱ群1類b	12F10.15	V中, V上	結束羽状縄文	白、橙粒	◎	10YR4/2	7.5YR6/4	
152	Ⅱ群1類b	13F4	V上	結束羽状縄文	赤粒	◎	2.5Y5/3	10YR7/4	
153	Ⅱ群1類b	14F13	V上	結束羽状縄文	白粒	○	10YR6/2	10YR5/1	
154	Ⅱ群1類b	13E19	V	結束羽状縄文	白、黒粒	○	10YR6/2	10YR5/1	
155	Ⅱ群1類b	13E20	不明	結束羽状縄文	白粒	○	10YR4/1	10YR6/4	
156	Ⅱ群1類b	13F11	V中	結束羽状縄文	白、橙、透明粒	◎	10YR5/4	10YR6/3	
157	Ⅱ群1類b	13F12	V上	結束羽状縄文	橙、透明粒	◎	7.5YR7/4	10YR7/3	
158	Ⅱ群1類b	15E25	V上	結束羽状縄文	白、黒、透明粒	◎	7.5YR6/4	10YR5/3	
159	Ⅱ群1類b	16E19.24	V上	結束羽状縄文	白粒	○	10YR4/2	10YR6/3	
160	Ⅱ群1類b	17D17	Ⅵ	結束羽状縄文	白粒	○	10YR4/2	10YR6/3	
161	Ⅱ群1類b	15E21	不明	結束羽状縄文	白、黒粒、金雲母	○	10YR3/3	10YR5/1	
162	Ⅱ群1類c	7D15~20	V	ループ文	白、橙粒	◎	10YR5/3	10YR7/6	口径(18)/SK1019確認
163	Ⅱ群1類c	7D15~20	V	ループ文	白、黒、橙粒	◎	10YR5/3	7.5YR7/8	SK1019確認面
164	Ⅱ群1類c	7D15~20	V	ループ文	白、橙粒	◎	10YR7/2	10YR7/3	SK1019確認面
165	Ⅱ群1類c	6C23	V	ループ文	白粒	◎	10YR6/2	10YR7/3	
166	Ⅱ群1類c	7F25, 8G6	不明	ループ文、爪形文	白、透明粒、金雲母	○	10YR6/3	10YR6/2	
167	Ⅱ群1類c	出土地点不明	不明	ループ文	白、橙粒	◎	10YR6/2	10YR6/2	
168	Ⅱ群1類c	13G10	V上	ループ文	白粒	◎	10YR6/2	10YR6/2	
169	Ⅱ群1類c	9C7	V中	ループ文	赤、黒粒	◎	10YR7/4	10YR7/4	
170	Ⅱ群1類c	9C1	V中	ループ文	白、黒、橙粒	◎	10YR7/4	10YR7/4	
171	Ⅱ群1類c	9C7	V中	ループ文	白、黒、橙粒	◎	10YR7/4	10YR7/4	
172	Ⅱ群1類c	9C6.7.12	V中	ループ文	白、黒、橙粒	◎	10YR6/2	10YR7/4	
173	Ⅱ群1類c	9D16	V中	ループ文	白、黒、橙粒	◎	10YR6/2	10YR7/3	
174	Ⅱ群1類c	10B14	V中	ループ文	白、橙粒	◎	10YR7/4	10YR7/4	
175	Ⅱ群1類c	12F4.15.20	V上, V下	ループ文	白、黒、橙粒	◎	10YR6/2	10YR7/2	
176	Ⅱ群1類c	12F15	V上, V中	ループ文	白、黒、橙粒	◎	7.5YR6/4	7.5YR6/4	
177	Ⅱ群1類c	12G3.4.7	V上	ループ文	白粒	○	10YR7/2	10YR4/2	
178	Ⅱ群1類c	13G7	V中	ループ文	白、橙粒	○	7.5YR7/6	7.5YR7/6	
179	Ⅱ群1類c	12G13, 13G1	V中, V下	ループ文	白、橙粒	○	10YR7/2	10YR5/2	
180	Ⅱ群1類c	13F11.13.23, 14F23	V上, 中	ループ文	白、黒、橙粒	◎	10YR6/3	7.5YR7/4	
181	Ⅱ群1類c	12G16	V上	ループ文	白、黒粒	○	10YR7/2	10YR7/3	
182	Ⅱ群1類c	13F23	V上	ループ文	黒、橙粒	◎	10YR7/2	10YR8/2	
183	Ⅱ群1類c	13F23	V上	ループ文	白粒	◎	7.5YR5/3	10YR6/3	
184	Ⅱ群1類c	13G4	V中	ループ文、沈線文	白、黒粒	○	10YR7/2	7.5YR5/2	
185	Ⅱ群1類c	14F14.21	V上, 中	ループ文	白粒	○	7.5YR6/4	10YR8/2	
186	Ⅱ群1類c	17F3	V上	ループ文	白、橙粒	◎	10YR7/3	10YR7/4	
187	Ⅱ群1類c	6C23	V	ループ文	白、黒、橙粒	◎	10YR8/4	10YR6/2	
188	Ⅱ群1類c	17E1	V上	ループ文	白、黒、橙粒	◎	10YR8/3	10YR7/3	
189	Ⅱ群1類d	12E5	V上	縄文	白、黒、橙、透明粒	○	7.5YR7/6	7.5YR4/1	
190	Ⅱ群1類d	12E8	V	縄文	白、黒、橙、透明粒	◎	10YR6/2	10YR7/3	
191	Ⅱ群1類d	13E16	V中	縄文	白、黒、橙粒	◎	10YR4/3	7.5YR5/3	
192	Ⅱ群1類d	13F1	V上	縄文	白、橙、透明粒	○	10YR5/2	10YR6/3	

No.	分類	出土位置	出土層位	文様	胎土	織維	外面色調	内面色調	備考
193	Ⅱ群1類d	13F4, 14E22, 14F2	V, V上	縄文	白, 黒, 黄, 橙, 透明粒	◎	10YR4/1	10YR5/3	穿孔2 (未貫通)
194	Ⅱ群1類d	13F25	V上	縄文	白粒	◎	10YR6/3	10YR6/3	
195	Ⅱ群1類d	14E (T51)	V	縄文	白, 橙粒	◎	10YR7/3	10YR7/4	
196	Ⅱ群1類d	14F15	V上	縄文	白, 黒, 透明粒	◎	7.5YR4/2	5YR5/4	
197	Ⅱ群1類d	13F8, 13	V上	縄文	白, 橙粒	◎	7.5YR4/2	7.5YR6/4	
198	Ⅱ群1類d	14E19	V	縄文, 口縁内面に沈線文	白, 黒, 橙粒	○	10YR7/3	10YR7/4	
199	Ⅱ群1類d	15D5	VI	縄文	白, 黒, 橙, 透明粒	○	10YR6/3	10YR5/2	
200	Ⅱ群1類d	15E (T53)	V	縄文	白, 黒粒		10YR5/2	10YR6/3	織維極少量混入。
201	Ⅱ群1類d	15G14	V中	縄文	白, 透明粒	◎	10YR4/1	10YR5/3	
202	Ⅱ群1類d	16F15, 16G1	V上	縄文	白, 黒粒	◎	7.5YR5/4	7.5YR6/4	浅緑?
203	Ⅱ群1類d	16C25	V上	縄文	白, 黒, 橙粒		10YR7/3	10YR7/2	織維極少量混入?
204	Ⅱ群1類d	16F15	V上	縄文	白, 橙, 透明粒	○	7.5YR7/6	10YR5/2	
205	Ⅱ群1類d	16F18	V下	縄文+結節回転文	白, 黒粒	◎	10YR6/3	10YR7/3	
206	Ⅱ群1類d	17D20	V上	縄文	白, 黒粒		10YR7/4	10YR6/3	織維極少量混入?
207	Ⅱ群1類d	17D24	VI	縄文	白, 黒, 橙粒	◎	10YR6/3	10YR7/3	
208	Ⅱ群1類d	17F5	V上	縄文, 口縁内面に沈線文	白, 黒, 橙粒	◎	10YR6/3	10YR4/1	
209	Ⅱ群1類d	17F11	V上	縄文+結節回転文	白, 黒, 橙, 透明粒	◎	10YR6/4	10YR7/4	
210	Ⅱ群1類d	19E18, 23	V	縄文	白, 黒, 透明粒	◎	7.5YR5/4	10YR8/4	
211	Ⅱ群1類d	19E24	V	縄文	白, 黒, 赤粒	◎	10YR5/4	10YR5/2	
212	Ⅱ群1類d	19F3, 10	V上	縄文	白, 橙, 透明粒	◎	7.5YR5/4	7.5YR5/4	
213	Ⅱ群1類d	20F23	V上	縄文	白, 黒, 橙粒	◎	10YR4/1	10YR4/1	
214	Ⅱ群1類e	7D25	V上	胡組文	白粒	◎	10YR5/3	10YR5/2	
215	Ⅱ群1類e	14E (T51)	V	胡組文	白, 黒粒	◎	7.5YR6/3	10YR6/4	
216	Ⅱ群1類e	13E16, 21	V上, VI	胡組文	白, 黒粒	◎	10YR6/2	10YR6/2	
217	Ⅱ群1類f	12F9, 13E8, 13F23	V上, V	束縛文	白, 黒, 橙粒	◎	10YR5/2	10YR5/3	
218	Ⅱ群1類f	13F17, 18, 22	V上	束縛文	白, 橙粒	○	10YR5/2	10YR5/2	
219	Ⅱ群1類f	14E11	V	束縛文, 口唇部指頭押圧文	白, 黒, 透明粒	○	7.5YR5/2	7.5YR4/3	
220	Ⅱ群1類f	16D16	V上	束縛文	白, 橙粒	◎	10YR6/3	10YR7/3	
221	Ⅱ群1類f	14E17	V	束縛文	白, 橙粒	◎	10YR5/3	10YR8/4	
222	Ⅱ群1類f	14E17	V	束縛文	白, 黒, 橙粒	◎	10YR7/4	10YR7/3	
223	Ⅱ群1類f	出土地点不明	不明	束縛文	白, 橙粒	◎	7.5YR7/4	10YR5/2	
224	Ⅱ群1類g1	16F9	V上	網目状蒸気文	白粒	○	10YR4/1	10YR4/1	
225	Ⅱ群1類g2	14E1, 14F23	V上	正整蒸気文	白, 橙粒	◎	10YR4/1	10YR4/2	
226	Ⅱ群1類h	14G8	V上	多段節節回転文	白, 黒, 透明粒	○	10YR4/2	10YR6/3	
227	Ⅱ群2類a1	17G1, 19E22	V上, V	縄文, C字形刺突文	白, 黒, 透明粒	◎	7.5YR3/2	5YR4/4	
228	Ⅱ群2類a1	14B18	V	縄文, C字形刺突文	白, 透明粒	○	5YR4/4	5YR4/6	
229	Ⅱ群2類a1	15E (T52)	V	C字形刺突文	白, 黒粒	◎	10YR5/3	10YR5/4	
230	Ⅱ群2類a1	15G10	V上	C字形刺突文	白, 黒, 橙粒	◎	7.5YR4/3	7.5YR6/4	
231	Ⅱ群2類a1	16F22	V上	縄文, C字形刺突文	白粒	◎	10YR5/2	10YR5/3	
232	Ⅱ群2類a1	16G7	V上	縄文, C字形刺突文	白, 黒, 橙粒	◎	10YR5/2	10YR7/3	
233	Ⅱ群2類a1	19F17	V上	C字形刺突文, 沈線文	白, 黒, 橙, 透明粒	◎	10YR7/4	10YR5/2	
234	Ⅱ群2類a2	11C2	V上	点列状刺突文	白, 黒粒	○	10YR7/3	10YR7/2	
235	Ⅱ群2類a2	13E24, 13F4	V上, V	点列状刺突文, 波状平行沈線文	白粒	○	10YR5/3	10YR4/1	
236	Ⅱ群2類a2	13F4	V上	点列状刺突文	白, 橙粒	○	10YR7/4	10YR7/2	
237	Ⅱ群2類a2	13F11	V上	点列状刺突文, コンパス文	白, 黒, 橙粒, 金雲母	○	10YR6/2	10YR5/2	
238	Ⅱ群2類a2	13F23	V上	点列状刺突文, コンパス文	白粒	○	10YR4/2	10YR5/2	
239	Ⅱ群2類a2	13F25	V中	点列状刺突文	白, 橙粒	○	7.5YR5/2	7.5YR4/2	
240	Ⅱ群2類a2	15F17	V上	点列状刺突文	白, 黒, 透明粒	○	10YR7/4	10YR5/2	
241	Ⅱ群2類a3	12C6, 14F20, 15F12, 17, 21	V上, V	刺突文, 沈線文	白, 黒, 橙, 透明粒	◎	10YR7/3	10YR6/3	
242	Ⅱ群2類a3	13F23	V上	刺突文	白, 黒, 橙粒	◎	10YR6/2	10YR7/2	
243	Ⅱ群2類a3	18E19	VI	刺突文, 沈線文	白, 黒粒		10YR7/4	10YR4/2	中期以降の可能性あり。
244	Ⅱ群2類a4	6C25	V上	刺突文, 縄文	白, 橙粒, 金雲母	◎	7.5YR5/4	7.5YR4/3	
245	Ⅱ群2類a4	6D16	V中	刺突文	白, 黒, 赤粒	○	10YR6/3	10YR8/2	
246	Ⅱ群2類a4	7D25	V	刺突文	白粒	○	10YR5/2	7.5YR5/4	
247	Ⅱ群2類a4	7E5	V中	刺突文	白, 黒粒	◎	10YR6/2	10YR8/2	
248	Ⅱ群2類a4	8D1	V	刺突文	白, 橙粒	◎	10YR7/3	10YR4/1	
249	Ⅱ群2類a4	8E4	V下	刺突文	白, 黒, 橙粒	○	10YR6/2	10YR6/2	
250	Ⅱ群2類a4	8G6	不明	刺突文	白, 黒粒, 金雲母	○	10YR6/2	10YR6/3	
251	Ⅱ群2類a4	9B22, 9C1	V上, V中	刺突文	黒, 赤粒	◎	10YR8/3	10YR8/4	
252	Ⅱ群2類a4	11D12	V	刺突文	白, 赤, 橙粒	◎	10YR8/3	10YR8/2	
253	Ⅱ群2類a4	12F13	V上	刺突文	白粒	◎	10YR8/2	10YR8/3	口径7
254	Ⅱ群2類a4	19B24	VI	刺突文	白, 黒粒, 金雲母	◎	7.5YR6/4	7.5YR6/2	
255	Ⅱ群2類b1	13G5	V中	沈線文, コンパス文	白, 橙粒	◎	10YR7/2	10YR8/3	
256	Ⅱ群2類b1	14F12, 17	V上, V下	沈線文, コンパス文	白粒	○	7.5YR5/3	7.5YR4/3	
257	Ⅱ群2類b1	15E16, 15F20, 16F22	V上	沈線文, コンパス文	白粒, 金雲母		7.5YR5/3	7.5YR4/1	織維極少量混入
258	Ⅱ群2類b1	17D24	VI	沈線文	白, 透明粒	◎	10YR7/3	10YR5/2	
259	Ⅱ群2類b1	17E (T54)	V	沈線文	白, 黄泥, 金雲母	◎	7.5YR5/3	7.5YR4/1	
260	Ⅱ群2類b1	17G3, 19E19, 19F23	V中, V	沈線文, 爪形文	白, 黒, 橙粒	◎	10YR7/3	10YR4/1	
261	Ⅱ群2類b2	8D11	V	縄文, S字状連続沈文	白粒	○	7.5YR5/4	7.5YR6/6	
262	Ⅱ群2類c	13E25	V	爪形文	白, 黒粒	○	7.5YR6/4	10YR4/2	
263	Ⅱ群2類c	14E24, 15E24	V上, V	爪形文	白, 黒粒, 金雲母		10YR3/2	7.5YR6/4	

## 土器観察表

No.	分類	出土位置	出土層位	文様	胎土	織維	外面色調	内面色調	備考
264	Ⅱ群3類	5D13	V	不明	白、橙粒	◎	5YR5/6	7.5YR4/1	口径(5)ノ器面非常に荒れている。
265	Ⅱ群3類	5D風刺木	不明	無文?	白、橙粒	◎	10YR6/4	10YR6/4	口径3
266	Ⅱ群3類	14F25	Ⅵ上	無文	白、黒、橙、透明粒	○	10YR5/2	10YR7/3	口径5
267	Ⅱ群3類	16D14	Ⅵ	無文	白、黒粒、金雲母		10YR5/2	10YR4/1	口径6
268	Ⅱ群4類	11C2.7	V上、V	縦圧氣文、口縁外端部刻目文	白粒	◎	10YR6/2	7.5YR5/3	
269	Ⅱ群4類	14G16	V上	縄文、沈線文	白、黒、橙、透明粒		10YR6/3	10YR7/2	織維極少量混入
270	Ⅱ群4類	13E24	V	波状平行沈線文	白、黒、橙粒	◎	10YR4/2	10YR4/1	
271	Ⅲ群1類	9E10	V下	沈線文、口唇部刻目文	白粒		10YR6/2	7.5YR6/4	
272	Ⅲ群1類	10D15	V	連腕爪形文、沈線文、凹形刺突文	白粒		10YR5/3	10YR6/4	
273	Ⅲ群1類	17F25	V中	沈線文	白、黒粒		7.5YR6/8	7.5YR7/8	織維極少量混入?
274	Ⅲ群1類	7E11	V中	縄文、平行沈線文	白、赤粒		10YR7/3	10YR5/4	織維極少量混入?
275	Ⅲ群3類a	13F2	V上	縄文、平行沈線文、口唇部刻目文	白粒		10YR6/2	10YR6/3	織維極少量混入?
276	Ⅲ群3類a	13F4	V上	縄文、平行沈線文、口唇部刺突文	白粒		10YR5/2	10YR6/4	織維極少量混入
277	Ⅲ群3類a	13F4	V上	結束羽状縄文、平行沈線文、口唇部刻目文	白粒、金雲母		10YR3/1	10YR5/2	織維極少量混入
278	Ⅲ群3類a	15B23、16C1	V	結束羽状縄文、平行沈線文、口唇部刻目文	白粒		10YR5/2	10YR5/2	織維極少量混入
279	Ⅲ群3類a	16F8	V上	縄文、平行沈線文	白粒		10YR5/3	7.5YR6/4	織維極少量混入
280	Ⅲ群3類a	14G6	V上	縄文、平行沈線文、口唇部刻目文	白、黒、透明粒		10YR4/2	10YR5/1	織維極少量混入
281	Ⅲ群3類a	12D18.24.25、15F16.19、16E8.14.18.25、17D19、17E10、17F3	V上、V中、Ⅵ	結束羽状縄文、平行沈線文、刺突文、口唇部刺突文	白、黒、橙粒		5YR5/4	7.5YR4/1	口径(34)・口径(10)ノ織維極少量混入
282	Ⅲ群3類b	9C12	V中	爪形文、刺突文、平行沈線文、凹形竹管文	白、橙粒		10YR5/1	10YR6/2	織維極少量混入
283	Ⅲ群3類b	9E23	V上	平行沈線文	白粒		10YR6/2	10YR6/2	織維極少量混入
284	Ⅲ群4類	12B23、13D13	V上	連続刺突文、沈線文、爪形文	白粒		10YR6/3	10YR4/2	
285	Ⅲ群4類	12E5、13F8	V中、V	連続刺突文	白、黒、透明粒	○	7.5YR5/3	7.5YR5/3	織維極少量混入
286	Ⅲ群4類	13F16、17.25	V上、V中	連続刺突文、波状爪形文	白、橙、透明粒	○	7.5YR6/4	7.5YR5/2	織維極少量混入
287	Ⅲ群4類	14C9.20、14F4	V上	連続刺突文、沈線文	白粒		10YR6/3	10YR4/1	
288	Ⅲ群4類	13D13	V上	連続刺突文、沈線文	白粒	○	7.5YR5/4	7.5YR4/1	
289	Ⅲ群5類a	15E10、16E7.18.25、17E16	V上、V	縄文、鋸歯状裝飾帯	白、赤粒、金雲母		7.5YR6/4	7.5YR6/4	[器形A類]ノ口径(26)
290	Ⅲ群5類a	12D24	V上	縄文、鋸歯状裝飾帯	白、黒、橙粒		7.5YR4/2	7.5YR5/2	[器形A類?]
291	Ⅲ群5類b	16E24	V上	鋸歯状浮線文	白、橙粒		10YR4/2	10YR7/2	地文不明
292	Ⅲ群5類b	17D15	V上	縄文、鋸歯状浮線文+刺突文、口唇部刻目文	白、黒粒、金雲母		10YR6/2	10YR6/3	金雲母多く含む。
293	Ⅲ群5類b	15F17、16E18.22.25、16F2	V上、V中	縄文、鋸歯状裝飾帯、鋸歯状浮線文	白、橙粒		10YR5/3	10YR5/2	[器形A類]ノ口径(24)・口径(13)ノ大径の白粒含む。
294	Ⅲ群5類c	11B10	V上	縄文、鋸歯状沈線文、沈線文、刺突文	白、黒、橙粒	○	10YR7/3	10YR8/3	[器形B1類]ノ口径(30)
295	Ⅲ群5類c	12C13	V上	縄文、鋸歯状沈線文、沈線文	白、黒粒		10YR5/4	10YR4/2	
296	Ⅲ群5類c	11C20	V下	縄文、鋸歯状沈線文	白、黒粒		10YR3/2	10YR5/2	織維極少量混入
297	Ⅲ群5類c	12B16	V上	縄文、沈線文	白、黒粒		10YR8/4	7.5YR7/6	
298	Ⅲ群5類c	12C8	不明	不明?、沈線文	白、黒粒		10YR5/3	10YR4/1	
299	Ⅲ群5類c	12B23	V上	縄文、沈線文	白、黒、橙粒		10YR6/4	10YR7/3	
300	Ⅲ群5類c	12C3.7.8	V上	縄文、鋸歯状沈線文	白、黒、橙、透明粒		10YR8/4	10YR7/4	
301	Ⅲ群5類c	12C8	V上	縄文、鋸歯状沈線文	白、黒粒		10YR5/2	10YR6/4	
302	Ⅲ群5類c	12D9	V上	縄文、鋸歯状沈線文	白、黒、橙粒		10YR6/4	10YR5/2	
303	Ⅲ群5類c	12D9	V上	縄文、鋸歯状沈線文、沈線文	白、黒粒		7.5YR6/4	10YR7/4	[器形B1類]ノ口径30
304	Ⅲ群5類c	12C18、12E5、14B19	V、V上	縄文、鋸歯状裝飾帯+刺突文、鋸歯状沈線文	橙粒		10YR6/3	10YR7/3	[器形A類]ノ口径(34)
305	Ⅲ群5類c	12C8、14C4	V上、V	縄文、沈線文	白、黒、橙粒		7.5YR6/4	7.5YR5/4	
306	Ⅲ群5類c	12C3	V上	縄文、沈線文	白、黒粒		10YR7/3	10YR5/3	
307	Ⅲ群5類c	12C13	V上	縄文、鋸歯状沈線文、沈線文	白、黒、橙粒		10YR7/4	10YR6/4	織維極少量混入
308	Ⅲ群5類c	13E21.22.23	V	縄文、鋸歯状沈線文、沈線文	白、黒、橙粒		10YR5/2	10YR7/3	
309	Ⅲ群5類c	13B16	V	縄文、鋸歯状沈線文	白、黒粒		10YR5/3	10YR4/1	
310	Ⅲ群5類c	13E16	V	縄文、鋸歯状沈線文	白、黒、橙粒		10YR6/3	10YR5/2	
311	Ⅲ群5類c	14F25	V上	縄文、鋸歯状沈線文、沈線文	白、黒、橙粒		10YR5/2	10YR6/4	
312	Ⅲ群5類c	14B18	V	不明?、沈線文	白、橙粒		10YR7/6	10YR6/3	
313	Ⅲ群5類c	14B23	V上	縄文、沈線文	白、黒、橙粒	○	10YR7/4	10YR6/3	
314	Ⅲ群5類c	16D16、17F2.12	V上、Ⅵ	縄文、沈線文	白、黒、橙粒	○	10YR6/4	10YR4/2	
315	Ⅲ群5類c	14C11	V	縄文、鋸歯状沈線文	白、黒、橙粒		7.5YR6/6	10YR7/4	
316	Ⅲ群5類c	14B18	V上	縄文、鋸歯状沈線文、沈線文	白、黒、橙粒		10YR6/3	10YR8/2	
317	Ⅲ群5類c	14G4	V上	縄文、鋸歯状半截竹管沈文	白、黒、橙粒		10YR7/3	10YR8/3	
318	Ⅲ群5類c	15G3	V上	縄文、鋸歯状沈線文、沈線文	白、橙粒	○	10YR6/3	10YR8/4	
319	Ⅲ群5類c	14C4	V	縄文、鋸歯状沈線文	白粒		7.5YR5/4	7.5YR5/3	
320	Ⅲ群5類c	14C25	V	縄文、陸帯、鋸歯状沈線文、沈線文	白、黒、橙粒		10YR6/3	10YR5/2	織維極少量混入
321	Ⅲ群5類c	15D10	V上	縄文、鋸歯状沈線文	白、黒、赤、透明粒		10YR8/4	10YR6/2	織維極少量混入
322	Ⅲ群5類c	15F(T57)	V	縄文、鋸歯状沈線文、沈線文	白、黒、橙粒		7.5YR6/4	10YR6/2	織維極少量混入
323	Ⅲ群5類c	15C24	V	縄文、鋸歯状沈線文	白、黒、透明粒		10YR5/3	10YR7/4	織維極少量混入
324	Ⅲ群5類c	17A24、18E19	V、Ⅵ	縄文、鋸歯状沈線文	白、黒粒		10YR5/2	10YR5/1	

No.	分類	出土位置	出土層位	文様	胎土	織維	外面色調	内面色調	備考
325	Ⅲ群5類c	16D20	Ⅵ	縄文、刺突文、沈線文	白、黒、赤、透明粒		10YR8/3	7.5YR6/6	
326	Ⅲ群5類c	16E25	V上	縄文、沈線文	白、黒、橙粒		10YR7/4	10YR7/3	
327	Ⅲ群5類c	16E25	V上	縄文、沈線文	白、黒、赤粒		10YR6/4	7.5YR6/6	
328	Ⅲ群5類c	16E25	V上	縄文、鋸歯状沈線文、沈線文	白、黒、橙粒		10YR7/4	7.5YR7/6	(器形B1類?)
329	Ⅲ群5類c	16E8	V上	縄文、鋸歯状沈線文、沈線文	白、黒粒		10YR7/3	10YR5/2	
330	Ⅲ群5類c	16E25	V上	縄文、鋸歯状沈線文	白、黒粒		10YR6/4	10YR6/4	
331	Ⅲ群5類c	17D9	V上	縄文、鋸歯状沈線文、沈線文	白、黒、橙粒		10YR8/4	7.5YR8/4	
332	Ⅲ群5類c	17E1	V上	縄文、鋸歯状沈線文、沈線文	白、黒粒		10YR7/3	10YR4/2	
333	Ⅲ群5類c	17D25	V	縄文、鋸歯状沈線文	白、橙粒	○	10YR8/4	10YR5/2	
334	Ⅲ群5類c	17D17	V上	縄文、鋸歯状沈線文、沈線文	白、黒、橙粒		10YR7/3	10YR5/2	
335	Ⅲ群5類c	17D18	V上	縄文、鋸歯状沈線文、沈線文	白、黒、橙、透明粒		10YR7/4	10YR6/2	
336	Ⅲ群5類c	17D24	Ⅵ	縄文、鋸歯状沈線文、沈線文	白、黒、橙粒		10YR6/3	10YR6/3	
337	Ⅲ群5類c	17D20	Ⅵ	縄文、鋸歯状沈線文、沈線文	白、黒、赤粒		10YR5/2	10YR4/1	
338	Ⅲ群5類c	17F8.9	V上	縄文、鋸歯状沈線文	白粒、金葉母	○	7.5YR5/4	5YR5/4	突起部剥落
339	Ⅲ群5類c	18E6	Ⅵ	縄文、鋸歯状裝飾帯+縄文、鋸歯状沈線文	白、橙粒	○	10YR8/4	7.5YR4/2	(器形A類?)
340	Ⅲ群5類c	18E16	V	縄文、鋸歯状沈線文、沈線文	白、黒、橙粒		10YR7/3	10YR5/4	
341	Ⅲ群5類c	18G4	V	縄文、沈線文	白、黒粒		10YR5/2	10YR4/1	
342	Ⅲ群5類c	14F2	V上	縄文、沈線文、口唇部刻目文	白、黒、橙、透明粒		10YR6/3	10YR5/2	
343	Ⅲ群6類a	11F22~23, 11G2~3	V上	縄文、貼付文、鋸歯状沈線文、沈線文	白粒		10YR6/3	10YR6/3	(器形F1類) / 口径 (26) / 織維極少量混入
344	Ⅲ群6類a	19C4.9	V攪乱	連続爪形文、貼付文	白、黒、橙粒		10YR4/1	7.5YR5/2	口径 (20) / 織維極少量混入
345	Ⅲ群6類a	16F22	V上	縄文、鋸歯状沈線文	白、黒、橙粒		7.5YR5/2	7.5YR4/2	織維極少量混入
346	Ⅲ群6類b	18D1	V	縄文、渦巻沈線文、爪形文	白、黒、赤粒		7.5YR5/3	10YR5/1	口径 (6) / 織維極少量混入
347	Ⅲ群6類b	16F22	V上	対弧状沈線文	白、黒、橙粒		7.5YR5/2	7.5YR4/2	織維極少量混入
348	Ⅲ群6類b	15F16, 16F2.4.10.11.14	V上, V中	縄文、対弧状沈線文、沈線文	白、橙粒		10YR4/3	10YR7/3	(器形C1類) / 口径 (28) / 口径 (10)
349	Ⅲ群6類b	11F24	V上	縄文、連続爪形文、沈線文、隆帯	白、黒、橙粒		10YR6/2	10YR7/3	
350	Ⅲ群6類b	18C24, 18D9	V上	連続爪形文、沈線文、貼付文	白、黒粒		10YR8/2	10YR7/3	口径 (32)
351	Ⅲ群6類c	13E21.24, 13F4	V上, V	縄文	白、黒粒		7.5YR6/4	7.5YR4/2	(器形E1類) / 口径 (11) / 穿孔 (未貫通)
352	Ⅲ群6類c	12E4	V	縄文	白、黒粒		10YR4/2	10YR6/1	
353	Ⅲ群6類c	14F14	V上	縄文	白、黒、橙粒		7.5YR7/4	7.5YR7/3	
354	Ⅲ群6類c	14F25	V上	縄文	白、黒粒		10YR7/2	10YR5/3	織維極少量混入
355	Ⅲ群6類c	15C20	V	縄文	白、黒、橙粒		7.5YR6/4	7.5YR6/4	織維極少量混入
356	Ⅲ群6類c	15C19	V上	縄文	白、黒、橙粒		10YR7/3	7.5YR6/4	織維極少量混入
357	Ⅲ群6類c	15C20	V	縄文	白、黒、橙粒		10YR5/2	10YR7/3	口径 (24)
358	Ⅲ群6類c	15E (T53)	V	縄文	白、黒粒	○	5YR5/6	5YR5/6	
359	Ⅲ群6類c	15F (T57)	V	縄文	白粒		7.5YR4/1	7.5YR3/2	
360	Ⅲ群6類c	15F (T57)	V	縄文	白粒		7.5YR5/4	7.5YR4/1	
361	Ⅲ群6類c	15F (T57)	V	縄文+結節回転文	白、黒、橙粒		10YR7/4	10YR7/3	(器形F3類) / 口径 (24)
362	Ⅲ群6類c	17F14, 17F (T59)	V上	縄文+結節回転文	白、黒粒		10YR7/4	10YR6/2	(器形E2類) / 口径 (17) / 口径 (8) / 織維極少量混入
363	Ⅲ群6類c	15F (T57)	V	結節回転文	白、黒、橙粒		7.5YR7/6	10YR5/2	
364	Ⅲ群6類c	17F14.16.18	V上	縄文+結節回転文	白、黒粒		10YR7/3	10YR5/1	
365	Ⅲ群6類c	18D4	V上	縄文、口縁部肥厚帯、平行沈線文	白、黒、橙粒		10YR3/2	7.5YR5/4	
366	Ⅲ群6類c	18D9	V	口縁部肥厚帯	白粒		10YR7/3	10YR6/3	
367	Ⅲ群6類c	18F18	V上	口縁部肥厚帯、連続爪形文	白、黒、橙粒		10YR4/2	7.5YR6/3	
368	Ⅲ群6類c	18F23	V上	縄文+結節回転文	白、橙粒		10YR7/2	10YR7/3	
369	Ⅲ群6類c	18F20	V上	縄文、口縁部肥厚帯	白、黒粒		7.5YR4/1	10YR7/4	織維極少量混入
370	Ⅲ群6類c	18F12.17	V中, V下	縄文、連続爪形文	白粒		10YR5/2	10YR8/2	(器形F3類) / 口径 (28)
371	Ⅲ群6類c	18F19.20	V上	縄文、口縁部肥厚帯	白粒		10YR5/2	10YR8/2	(器形D2類) / 口径 (24)
372	Ⅲ群6類c	19B18	V上	縄文+結節回転文、口唇部刻目文	白粒	○	10YR5/2	10YR6/2	
373	Ⅲ群6類d	18D9	V上	口縁部肥厚帯、沈線文、鋸歯状陰刻文、連続爪形文	白粒	○	10YR7/3	10YR5/3	
374	Ⅲ群6類e2	18F18.19.23.24, 18G3, 19B21	V上	縄文、球状突起、隆帯+縄圧刻文	白、黒粒		7.5YR8/6	7.5YR8/3	(器形F4類) / 口径 (24)
375	Ⅲ群6類e1	18C25, 18G2	V上	縄文、鋸歯状突起、連続爪形文	白、黒、赤粒		10YR7/3	10YR7/4	口径 (36)
376	Ⅲ群6類e2	17F20	V上	球状突起	白、黒、橙粒		10YR8/4	10YR8/3	
377	Ⅲ群6類e2	18F12.24	V上, V下	球状突起	白、黒、橙粒		10YR5/1	10YR5/2	口径 (29) / 織維極少量混入
378	Ⅲ群6類e2	18F17	V下	球状突起、隆帯	白、黒、透明粒		10YR7/4	10YR7/3	口径 (32)
379	Ⅲ群6類e1	15E (T52)	V	鋸歯状突起	白、黒、橙粒		10YR7/3	10YR6/3	
380	Ⅲ群6類f	17B	不明	縄文、口縁部肥厚帯、内形押圧文、沈線文、懸糸側面圧痕文	白、黒、橙粒		10YR7/2	10YR5/2	(器形D3類) 口径 (26)
381	Ⅲ群6類f	18G1.3.7	V上, V中	縄文、懸糸側面圧痕文	白、黒、赤粒		7.5YR7/4	10YR5/1	
382	Ⅲ群6類f	18B2	V中	縄文、沈線文、懸糸側面圧痕文	白、黒、透明粒		10YR7/2	10YR8/3	
383	Ⅲ群6類g	17F24	V上, V中	隆帯+縄圧刻文	白、黒、橙粒	○	7.5YR7/4	7.5YR7/6	
384	Ⅲ群6類g	6C2.19.22, 6D2, 8C16	V上, Ⅵ	縄文、連続爪形文	白、黒、赤粒		7.5YR4/3	10YR5/2	口径 (24)
385	Ⅲ群7類	12E5, 16C25, 17A23, 18D7.9	V上, V	貼付文、凸帯+刺突文、平行沈線文	白、橙粒		5YR5/4	5YR4/1	口径 (25)
386	Ⅲ群7類	12C8.16, 13D17	V上, V	縄文、凸帯+刺突文、垂下貼付文	白粒		7.5YR6/4	7.5YR7/6	織維極少量混入
387	Ⅲ群7類	17D24	V上	縄文、貼付文+刺突文	白、黒粒		10YR4/1	10YR7/2	
388	Ⅲ群8類	17G5, 18G1	V上	鋸歯状陰刻文、沈線文、刻目文	白粒		7.5YR6/4	10YR6/3	口径 (23) / 口径 (11)
389	Ⅲ群9類	12B21	V上	縄文	白粒		10YR6/3	10YR4/2	口径 (10)

土器観察表・石器観察表

No.	分類	出土位置	出土層位	文様	胎土	織維	外面色調	内面色調	備考
390	Ⅲ群9類	12B21	V上	縄文	白粒		10YR8/3	10YR8/3	
391	Ⅲ群9類	14F5.25	V上	縄文	白、黒粒		10YR6/4	10YR7/4	底径(10)ノ底面木葉痕
392	Ⅲ群10類	17F24	V上	縄文、隆帯+縄文	白、黒粒	○	10YR7/3	10YR8/3	
393	Ⅲ群10類	16E9	V上	縄文、隆帯+黒目文	白、黒粒		10YR7/3	10YR6/2	
394	Ⅲ群10類	19F2	V上	熱系前面圧紋文	白、黒、橙粒	○	10YR5/3	10YR7/4	
395	Ⅲ群10類	14C9	V	熱系前面圧紋文	白、黒粒		7.5YR5/3	10YR7/3	
396	Ⅳ群	12B21	不明	縄文?	白、橙粒		10YR6/3	10YR8/2	
397	Ⅳ群	7D25	V	熱系文?	白、黒粒	◎	10YR6/3	10YR5/2	
398	Ⅳ群	17G6	V中	沈線文	白、黒、橙粒	◎	7.5YR7/4	10YR8/4	
399	Ⅳ群	5D20	V	内面条痕文	白、黒粒	◎	7.5YR6/4	10YR6/3	

石鏃

番号	グリッド	層位	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	素材	遺存状態	備考
1	7C23	VI	A1	4.43	1.58	0.56	3.75	頁岩		完形	
2	6C24	V	A1	3.81	1.20	0.49	1.96	頁岩		完形	
3	15G6	VI下	A1	(2.85)	1.23	0.48	(1.49)	頁岩		先端欠	
4	7D9	V下	A1	2.25	1.22	0.37	1.04	頁岩	縦長	完形	
5	6C25	V・VI	A2	2.94	1.27	0.34	0.99	頁岩		完形	
6	5D3		A2	2.56	1.21	0.39	0.66	頁岩		完形	
7	9C12	V中	A2	(2.12)	1.32	0.34	(0.91)	メノウ		先端欠	
8	13E10	V上	A2	1.99	1.19	0.32	0.68	鉄石英(緑)	縦長?	完形	
9	7D9	V上	B	2.91	1.54	0.29	1.10	頁岩	縦長?	完形	
10	12F5	V上	B	2.12	1.46	0.40	0.95	頁岩	縦長	完形	
11	12C15	V上	B	2.66	(1.61)	0.42	(1.00)	鉄石英(赤)		片脚欠	
12	7C18	VI	B	3.40	(1.94)	0.42	(2.36)	頁岩	縦長?	片脚欠	
13	13F16		B	1.92	1.41	0.27	(0.41)	黒曜石	縦長?	片脚欠	

石鏃失敗品

番号	グリッド	層位	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	素材	遺存状態	備考
14	5D1	V	A	3.84	2.61	0.75	5.72	頁岩	縦長		
15	7C22	V上	A	3.14	1.76	0.51	2.47	頁岩	縦長		
16	14F21	V上	A	3.75	2.35	0.43	3.39	頁岩	縦長		
17	13E22	V	A	3.07	2.67	0.52	4.04	緑色凝灰岩	縦長		
18	7C21 (7C・P1)	覆土	A	2.60	1.88	0.72	3.23	メノウ	縦長?		
19	14F21	V	A	3.75	2.52	0.38	3.87	頁岩	縦長?		
20	19F16	V上	B	3.43	2.30	0.67	3.40	鉄石英(赤)	縦長		
21	5D3	視乱	B	2.83	1.89	0.48	1.16	頁岩	縦長	面割木	
22	7D9	VI	B	2.68	2.00	0.61	2.40	頁岩	縦長		

尖頭器

番号	グリッド	層位	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	素材	遺存状態	備考
23	14E1	V	A	8.47	1.52	6.60	9.11	頁岩		完形	
24	14E20	V	A	(7.16)	1.88	0.63	(8.82)	頁岩		尖頭部欠	
25	18E16	VI下	A	(4.77)	1.29	0.84	(2.83)	頁岩		尖頭部欠	
26	19G2	V上	A	4.05	1.02	0.49	1.50	頁岩		完形	
27	5D15	V	B	11.62	4.06	1.26	55.78	頁岩		接合完形	面割木
28	11F19	V中	C	(4.85)	3.85	1.05	(16.24)	頁岩		基部欠	
29	13F22	V中	C	(5.55)	2.81	1.14	(14.69)	頁岩		基部欠	
30	14B21 (SH1029)	覆土	C	(5.85)	2.09	0.66	(7.15)	緑色凝灰岩		基部欠	壁際より出土

石錐

番号	グリッド	層位	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	素材	遺存状態	備考
31	13G10	V中	A	4.83	2.28	1.07	7.62	凝灰岩	縦長?	完形	
32	12F14	V上	A	3.63	1.37	0.35	1.47	頁岩	縦長?	完形	
33	6C24	V下	B	5.30	1.47	0.94	7.24	頁岩	棒状?	完形	基部2か所あり
34	6D5	V下	C1	4.18	1.93	0.80	5.19	頁岩	縦長?	完形	
35	7D8	VI	C1	4.57	2.17	0.97	6.09	頁岩	縦長	完形	
36	14E	V	C2	4.26	2.52	1.03	6.10	鉄石英(赤)	縦長	完形	一次調査トレンチ51
37	12F14	V上	C2	2.71	1.58	0.48	1.68	頁岩	縦長	完形	
38	4B		C2	5.80	3.66	1.34	24.28	メノウ	縦長	完形	一次調査トレンチ2
39	6D4	V下	D	6.50	2.73	1.56	20.99	頁岩	縦長	完形	基部2か所あり
40	9E21	VI	D	2.93	1.37	0.47	2.00	メノウ		完形	
41	14E17	V上	D	2.85	2.1	0.58	3.08	鉄石英(緑)	縦長	完形	

## 石匙

番号	グリッド	層位	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	素材	遺存状態	備考
42	12F10	V上	A1	4.78	3.13	0.61	7.75	頁岩		完形	
43	13F23	V上	A1	4.75	2.71	0.81	6.6	頁岩	縦長	完形	
44	13E16	V	A1	5.1	2.25	0.77	8.48	頁岩	縦長	つまみ部欠	
45	12F13	V上	A1	8.7	3.58	0.59	20.21	頁岩	縦長	完形	
46	13B16~18		A2	6.75	4.38	0.98	17.2	頁岩	縦長	完形	
47	8E19	V下	A2	4.59	2.14	0.68	6.22	緑色凝灰岩	縦長	完形	
48	13E6	V上	A2	3.82	2.44	0.43	3.94	鉄石英(黄)	横長	完形	
49	13C17 (SI1029)	覆上下層	A2	4.93	2.17	0.61	4.24	頁岩	縦長	完形	
50	13F19	V上	A3	4.32	2.80	0.71	5.14	メノウ	縦長	完形	
51	12B20	V上	A3	4.71	2.81	0.95	6.89	頁岩	縦長	完形	
52	8E11	V	A3	6.72	2.99	0.68	11.62	頁岩	縦長	完形	
53	10D13	V	A3	9.39	4.09	2.32	83.95	凝灰岩	縦長	完形	
54	13F6	V上	A4	6.07	2.26	0.78	8.20	頁岩	縦長	先端部欠	
55	12E13	V上	A4	5.92	3.70	1.33	21.37	凝灰岩	縦長	完形	
56	8E17	V	A4	5.69	2.03	0.85	7.27	緑色凝灰岩	横長	完形	
57	13F20	V上	A4	4.80	2.33	0.86	8.44	鉄石英(緑)	縦長	完形	
58	12F17	V上	B	6.90	8.47	1.60	68.63	凝灰岩	横長	完形	
59	13G21	V・VI	B	4.52	4.67	0.63	9.19	凝灰岩	横長	完形	メインセク3
60	8E3	V上	B	2.52	3.75	0.55	4.05	鉄石英(黄)	横長	完形	
61	7E20	V下	B	2.96	3.28	0.57	3.27	頁岩	横長	完形	
62	13F7	V上	C	6.61	3.09	1.02	13.64	鉄石英(緑)	縦長	完形	
63	13G17	V上	C	4.82	3.24	0.67	5.90	頁岩	横長	先端部欠	
64	12E3	V	C	5.02	3.14	0.79	5.37	メノウ	縦長	完形	石薄より

## 不定形石器

番号	グリッド	層位	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	素材	二次調査部位	切所	備考
65	14E11	V	A	8.42	8.00	1.80	93.98	凝灰岩	縦長	下縁	横	
66	6D4	V上	A	6.66	5.30	7.50	92.91	頁岩			横	
67	18G2	V上	A	8.04	4.50	2.30	55.89	緑色凝灰岩	縦長	左側縁~下縁	右	
68	12C18	V上	A	7.67	3.90	1.80	40.63	頁岩	縦長	左側縁~下縁	横	
69	16E22	V下	A	6.26	3.20	0.90	20.91	頁岩	縦長	両側縁~下縁	横	
70	6E11	V	A	5.07	4.00	1.05	29.85	頁岩	縦長	両側縁~下縁	横	
71	18F12	V中	B	6.54	8.90	2.10	98.40	凝灰岩	縦長	両側縁	横	
72	14G4	V上	B	10.24	4.85	1.85	73.19	頁岩	縦長	両側縁	横	
73	17B4	VI	B	64.00	8.40	2.60	95.25	凝灰岩	横長	右側縁~下縁	横	
74	18E6	VI	B	8.62	4.50	2.60	98.00	緑色凝灰岩	横長	両側縁~下縁	右	
75	12C1	V下	B	5.55	6.10	2.03	63.25	頁岩	横長	右側縁	横	
76	10F15	V中	B	4.77	6.00	1.60	31.22	凝灰岩	横長	右側縁	横	
77	7D9	V下	C	4.03	8.40	1.40	39.85	頁岩		ほぼ全周		
78	5D13	V	C	4.61	6.20	1.60	43.82	頁岩		ほぼ全周		
79	17B20	床	C	4.59	5.85	1.30	28.86	頁岩	横長	左側縁~下縁	横	
80	13D15	V上	C	3.90	4.90	1.10	21.16	頁岩		ほぼ全周		
81	14F7	V上	D	5.24	4.20	1.85	31.94	緑色凝灰岩		右側縁	横	
82	9E8	V上	D	4.64	5.20	1.25	16.29	頁岩	横長	右側縁、下縁		
83	12E15	V	D	7.70	5.61	1.72	44.90	頁岩	横長	左側縁		
84	19F15	V上	D	6.81	4.60	1.30	35.90	頁岩	横長	両側縁、上縁		
85	18F	V	E	4.70	3.86	1.60	21.55	緑色凝灰岩	縦長	下縁	横	トレンチ60
86	14E3	V	E	8.57	4.80	2.00	44.38	頁岩	縦長	下縁	横	
87	6C25	V	E	6.02	3.00	1.35	20.79	凝灰岩	横長	下縁	横	
88	9B13	V上	E	5.43	3.90	1.40	22.55	頁岩	横長	両側縁~下縁	横	
89	15B24	V上	E	5.05	3.20	1.05	14.46	頁岩	縦長	下縁	横	
90	12F9	V上	F	7.54	2.90	0.94	19.55	鉄石英(黄)	縦長	右側縁	横	
91	12C23	V下~VI	F	7.58	5.30	2.13	68.88	頁岩	縦長	右側縁~下縁	横	
92	17B16	V上	F	8.56	4.10	1.35	39.27	頁岩	縦長	両側縁~下縁	横	
93	5D3	V	F	7.51	3.38	1.68	34.78	鉄石英(黄)	縦長	右側縁	横	
94	8E	V	F	7.83	5.60	2.00	59.13	頁岩	横長	ほぼ全周	横	トレンチ21
95	14F18	V上	F	5.39	5.70	1.20	34.48	頁岩	横長	下縁	横	
96	7G20 (沢A)		F	8.21	13.20	2.50	310.50	硬砂岩	横長	両側縁~下縁	横	
97	8E8	V	F	6.43	6.45	2.20	63.87	頁岩	横長	左側縁	横	
98	12B6	V上	G	3.54	2.40	0.55	3.60	頁岩	縦長	両側縁~下縁	横	
99	15E19	V上	G	7.27	2.70	1.70	14.27	凝灰岩	縦長	両側縁~下縁	横	
100	8F23 (沢A)		G	10.57	4.70	3.35	110.40	凝灰岩	縦長	左側縁	横	
101	13E9 (沢A)	V	G	10.04	3.90	1.85	59.44	凝灰岩	縦長	両側縁	横	
102	13D25	V上	G	6.02	6.80	1.70	83.26	頁岩	横長	下縁	横	
103	13G3	V上	G	8.53	8.00	2.75	106.08	頁岩	横長	下縁	横	

## 両極別離痕のある石器

番号	グリッド	層位	内部形状	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	素材	備考
104	5D1		2個1対	2.25	3.12	0.80	5.77	鉄石英(緑)	横長?	
105	13F11	V下	2個1対	3.28	2.45	1.47	11.83	鉄石英(赤)		
106	11C12	V下	4個2対?	2.24	2.30	0.52	2.71	頁岩	横長?	

石器観察表

篋状石器

番号	グリッド	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	刃部断面形	遺存状態	備考
107	14C11	V	10.43	5.03	2.56	118.95	頁岩	弱強片刃	完形	左右不対称
108	4B		10.73	5.22	2.14	121.08	頁岩	弱強片刃	完形	一次調査トレンチ2
109	12E18	V上	7.61	2.58	1.28	24.96	緑色凝灰岩	弱強片刃	完形	
110	8D1	V上	6.65	4.27	1.42	39.95	頁岩	片刃	完形	
111	6C23	V下	8.19	4.29	2.23	73.62	頁岩	弱強片刃	完形	
112	10E22	V下	10.18	3.91	2.04	78.78	鉄石英(黄)	片刃	完形	
113	13F23	V上	5.49	3.93	1.54	27.4	凝灰岩	片刃	完形	
114	11G15	V	7.07	2.97	1.83	25.41	流紋岩	片刃	完形	

打製石斧

番号	グリッド	層位	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	素材	刃部断面形	遺存状態	備考
115	不明		A	8.49	7.55	2.09	120.57	流紋岩	縦長	片刃	完形	
116	4B		B	14.03	5.87	2.72	295.15	ホルンフェルス	扁平礫	両刃	完形	一次調査トレンチ2
117	12D5	V	B	13.07	5.56	1.80	178.95	ホルンフェルス	扁平礫	両刃	完形	
118	15E1	V上	C	9.53	6.56	2.31	106.00	緑色凝灰岩	縦長?	弱強片刃	完形	
119	15C3 (P1)		C	11.62	7.77	2.26	139.56	流紋岩	横長	両刃	基部欠	

石錘

番号	グリッド	層位	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	遺存状態	備考
120	13G4	V中	A1	15.62	13.26	4.66	1150.0	安山岩	完形	
121	6E2	V	A1	14.81	10.27	3.78	724.0	安山岩	完形	
122	8E14	V	A1	15.45	7.52	3.22	379.0	安山岩	完形	
123	7D15・20 (SK1019)	覆土	A1	11.32	7.40	2.41	227.0	安山岩	完形	
124	9F	V	A1	9.69	7.55	2.41	230.0	安山岩	完形	一次調査トレンチ24
125	13F11	V中	A1	8.74	5.61	2.32	160.0	流紋岩	完形	
126	13F11	V上	A1	8.63	7.01	2.00	163.0	安山岩	完形	
127	12E24	V	A1	7.80	5.75	1.94	108.3	砂岩	完形	
128	13F2	V中	A1	6.85	5.75	1.23	89.0	緑色凝灰岩	完形	
129	13F9	不明	A1	6.31	5.07	1.99	83.6	安山岩	完形	
130	13F11	V中	A1	6.61	4.35	1.09	48.3	安山岩	完形	
131	13F11	V中	A1	5.56	3.90	1.69	52.0	流紋岩	完形	
132	14F17	V下	A1	4.41	3.48	1.32	24.0	石英安山岩	完形	
133	13E8	不明	A1	4.29	4.12	1.00	26.0	安山岩	完形	
134	13E8	V中	A2	15.34	14.25	3.28	1031.0	安山岩	完形	
135	8E19	V上	A2	12.15	13.43	3.50	537.0	安山岩	完形	
136	13G7	V中	A2	11.44	12.22	3.22	643.0	安山岩	完形	
137	13F15	V中	A1	12.50	10.01	4.80	838.0	安山岩	完形	
138	9C17	V中	A2	7.50	8.34	2.00	148.0	安山岩	完形	
139	12D18	V	A2	6.31	8.20	2.44	175.0	石英安山岩	完形	
140	9D16	V上	A2	6.30	7.05	2.24	143.0	砂岩	完形	
141	18E		B	6.85	3.98	1.35	30.0	凝灰岩	完形	一次調査トレンチ35

石錘素材

番号	グリッド	層位	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	備考
142	13E23 (1号遺物集中)	不明	A	8.3	8.2	2.7	223.0	安山岩	
143	13F11	V中	A	7.5	5.7	2.2	83.0	安山岩	
144	13E4	V上	A	10.1	7.7	2.8	213.0	石英安山岩	
145	14E2	V	B	20.1	15.7	4.3	1789.0	安山岩	
146	13B	不明	B	8.0	6.5	2.3	162.0	安山岩	一次調査トレンチ30
147	13E25	不明	B	6.2	5.1	1.3	49.0	安山岩	

磨製石斧

番号	グリッド	層位	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	刃部断面形	遺存状態	基礎敲打	備考
148	14G2	V上	A1	17.0	7.2	3.3	567.3	輝緑岩	両刃	完形	有	
149	8E20	V上	A1	10.5	5.1	2.5	191.3	蛇紋岩	両刃			
150	10B20	VI.V	A1	9.8	5.3	2.1	142.3	蛇紋岩	両刃	接合完形	有	11C2%3と接合
151	18F18	V下	A2	3.3	2.2	0.5	6.5	蛇紋岩	両刃	完形	有	
152	12G9	VI	B2	4.7	2.2	0.8	9.8	蛇紋岩	片刃	基部欠	有	破片の再製品
153	11G11	VI	B1	10.2	4.2	1.4	82.7		両刃	完形		剥離面多く残す
154	12F10	V中	A1	7.0	4.5	1.8	85.7	ホルンフェルス		刃部欠	有	
155	7E19	V下	B2	5.7	2.3	0.7	12.6		両刃	完形?		剥離面多く残す

## 敲磨石類

番号	グリッド	層位	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	表面			側縁			遺存状態	備考
									磨	蝕	磨	蝕	磨	蝕		
156	9E17	V上-V中	A1	18.9	5.11	8.2	1037.7	安山岩	×	×	○	×	×	×	接合完形	11F13No.21と接合
157	13F1	V上-V中	A1	15.5	7.3	5.8	708.6	凝灰岩	×	×	○	×	×	×	接合完形	13F1No.1339と接合
158	9E16	V中	A1	14.8	6.8	7.8	851.3	凝灰岩	×	×	○	×	×	×	完形	
159	11G15	VI	A1	9.9	4.2	6.5	400.9	安山岩	×	×	○	×	×	×	完形	
160	8E20	V上	A1	14.2	5.7	7.8	747.2	石英安山岩	×	×	◎	×	×	×	完形	
161	6C		A1	19.0	9.8	6.0	1249.3	安山岩	×	×	○	×	×	×	完形	トレンチ9
162	11F18	V中-V	A2	18.2	7.9	5.5	867.8	安山岩	×	×	◎	×	◎	◎	接合完形	11G15No.184と接合
163	13E13	V上-V中	A2	18.0	7.2	4.8	928.7	安山岩	×	○	◎	×	○	◎	接合完形	13F25No.1313と接合
164	7D25	V中-V下	A2	14.7	7.7	6.7	885.3	安山岩	×	×	◎	×	○	◎	接合完形	7E5No.53と接合
165	13E24	V	A2	10.5	6.3	6.0	448.7	安山岩	×	×	○	×	○	◎	完形	
166	8E15	V	B1	14.8	6.3	4.4	585.7	安山岩	◎	×	◎	×	◎	◎	完形	
167	12F9	V上-V上	B1	20.0	6.0	4.9	881.1	安山岩	◎	×	◎	×	○	◎	接合完形	12F12No.158と接合
168	14F14	V上	B2	11.2	8.6	6.3	790.9	安山岩	◎	◎	○	◎	◎	◎	完形	
169	13F17	V上	B2	14.2	7.3	4.2	651.6	安山岩	◎	◎	◎	×	×	◎	完形	
170	7D22	V上	B2	12.7	7.8	5.1	689.2	安山岩	◎	×	◎	×	×	◎	完形	
171	9F7	V中	B2	11.7	10.4	5.0	916.7	花崗岩	◎	×	◎	×	○	◎	完形	
172	8E18	V下	B2	10.4	8.7	4.1	546.8	石英安山岩	◎	◎	○	◎	◎	◎	完形	
173	13F24	V上	C1	10.9	8.5	4.1	559.1	凝灰岩	◎	○	×	×	×	◎	完形	
174	13D24	V	C1	13.1	10.2	4.6	836.2	安山岩	◎	×	×	×	×	◎	完形	
175	8F19		C1	12.3	8.5	4.8	618.3	凝灰岩	◎	○	×	○	×	◎	完形	
176	7E14	V中	C1	9.6	8.1	4.3	469.9	石英安山岩	◎	×	×	×	×	◎	完形	
177	12C14	V上	C2a	15.5	5.7	3.0	398.8	輝緑岩	×	◎	×	×	×	◎	完形	
178	16F	V	C2a	15.0	6.7	3.4	427.3	安山岩	×	◎	×	×	×	◎	完形	トレンチ58
179	11E22	V	C2a	13.0	5.4	3.0	246.7	安山岩	×	◎	×	×	×	◎	完形	
180	12D15	V	C2a	12.5	3.9	3.3	214.1	片岩	×	◎	×	×	×	◎	完形	
181	13C20	V上面	C2b	10.5	6.8	3.6	344.8	安山岩	×	◎	×	×	×	◎	完形	
182	5B12	V	C2b	14.0	11.4	3.8	581.5	凝灰岩	×	◎	×	×	×	◎	完形	
183	14E17	V	C2b	8.0	6.7	2.4	167.2	安山岩	×	◎	×	×	×	◎	完形	
184	21F4	攪乱	D1	9.2	3.2	3.1	147.4	凝灰岩	×	×	×	×	○	◎	完形	
185	12F17	V上	D1	12.4	2.1	2.9	97.9	安山岩	×	×	×	×	◎	◎	完形	
186	14F20	V上	D1	11.5	3.4	2.6	150.6	凝灰岩	×	◎	×	○	◎	◎	完形	
187	14G8	V上	D2	10.1	6.4	4.3	432.3	凝灰岩	×	×	×	×	◎	◎	完形	
188	17B25	床	D2	8.6	5.5	5.7	385.0	安山岩	×	×	×	×	○	◎	完形	
189	18D2	V上	D2	7.7	4.8	4.3	195.3	安山岩	×	×	×	×	◎	◎	完形	
190	11D9	V上	D3	10.8	4.7	3.0	195.8	輝緑岩	×	×	×	○	×	◎	完形	
191	19D14	V中	D3	14.9	7.8	2.0	253.3	凝灰岩	×	×	×	○	×	◎	完形	
192	17F19	V下	D3	13.5	7.2	2.6	365.0	輝緑岩	×	×	×	○	×	◎	完形	
193	13F12	V中	D3	9.9	5.8	2.6	163.4	安山岩	×	×	×	○	×	◎	完形	
194	18F4	V中	E	6.7	6.7	2.3	112.5	真岩	×	×	×	×	○	◎	完形	スタンプ形石器

## 石皿

番号	グリッド	層位	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	遺存状態	備考
195	17E19	V中	A	38.1	38.1	6.5	9,500	安山岩	完形	
196	(S11035)	不明	A	35.0	27.6	9.3	10,000	安山岩	完形	
197	17G4	V上	A	19.2	23.4	6.5	4,000	安山岩	1/2	
198	不明	不明	A	32.3	29.6	7.4	8,500	安山岩	完形	
199	6C21, 22 (SK1011)	不明	B	35.1	28.1	5.7	6,250	砂岩	完形	
200	20E9	不明	B	31.7	26.4	7.0	8,500	安山岩	完形	カクラン
201	6C24	V下	B	34.6	26.5	6.1	7,000	安山岩	完形	
202	13F15	V上	B	35.7	30.8	9.0	12,000	安山岩	完形	
203	13F25	V中,V上	B	38.0	23.0	4.0	3,690	凝灰岩	破片	14F17No.472, 14E16No.426, 14E1No.1と接合
204	8F10	V下	B	29.5	24.2	6.5	6,500	安山岩	完形	

## 砥石

番号	グリッド	層位	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	遺存状態	備考
205	15D20	V上	A	42.7	24.4	9.8	13.5	安山岩	完形	
206	7D4	V	A	17.1	14.7	6.4	2.4	凝灰岩	完形	
207	6D4	V上	A	18.8	9.5	5.6	14.3	安山岩	完形	
208	17D10	VI	A	33.4	22.2	6.9	6.5	安山岩	完形	
209	12F14	V中	B	29.8	14.6	6.0	2.7	砂岩	完形	
210	9F1	V上	B	24.0	18.4	6.9	3.2	凝灰岩	完形	
211	19B20	V	B	11.6	9.4	3.5	0.5	安山岩	完形	
212	8E19	V	B	22.2	20.8	7.5	3.6	輝岩	略完形	
213	13G2	V中	B	26.5	23.4	8.0	5.5	砂岩	略完形	
214	13F17	V上	C	29.9	26.5	5.8	4.0	砂岩	完形	
215	14F18	V上	C	20.4	9.6	4.8	1.6	砂岩	完形	石鏝からの転用品
216	12C8	V上	C	25.9	13.3	6.3	2.9	安山岩	完形	
217	13F2	V上	C	8.4	9.0	4.9	2.6	凝灰岩	破片	
218	14F16	V上	C	6.0	5.9	2.4	8.9	石英安山岩	完形	
219	12E10	V	C	8.1	3.5	2.5	8.0	砂岩	完形	
220	20F11	V上	C	4.4	5.5	6.3	2.7	泥岩	破片	
221	13F23	VI	D	2.7	3.1	0.5	0.4	砂岩	破片	
222	13E23	V上	D	4.2	4.4	1.1	2.6	砂岩	破片	
223	17F24	V中	D	8.2	7.4	1.8	8.3	砂岩	破片	
224	16G2	V上	D	5.1	10.5	0.9	5.4	砂岩	破片	

石器観察表

器種分類不明石器

番号	グリッド	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	遺存状態	石材	備考
225	6E4	V	8.40	7.90	1.70	315.23	完形		
226	12E14	V	4.34	2.36	0.41	4.27	完形	緑色凝灰岩	
227	7D8	VI	3.24	2.99	0.89	4.62	完形	安山岩	敲磨石類?

石核・石核素材

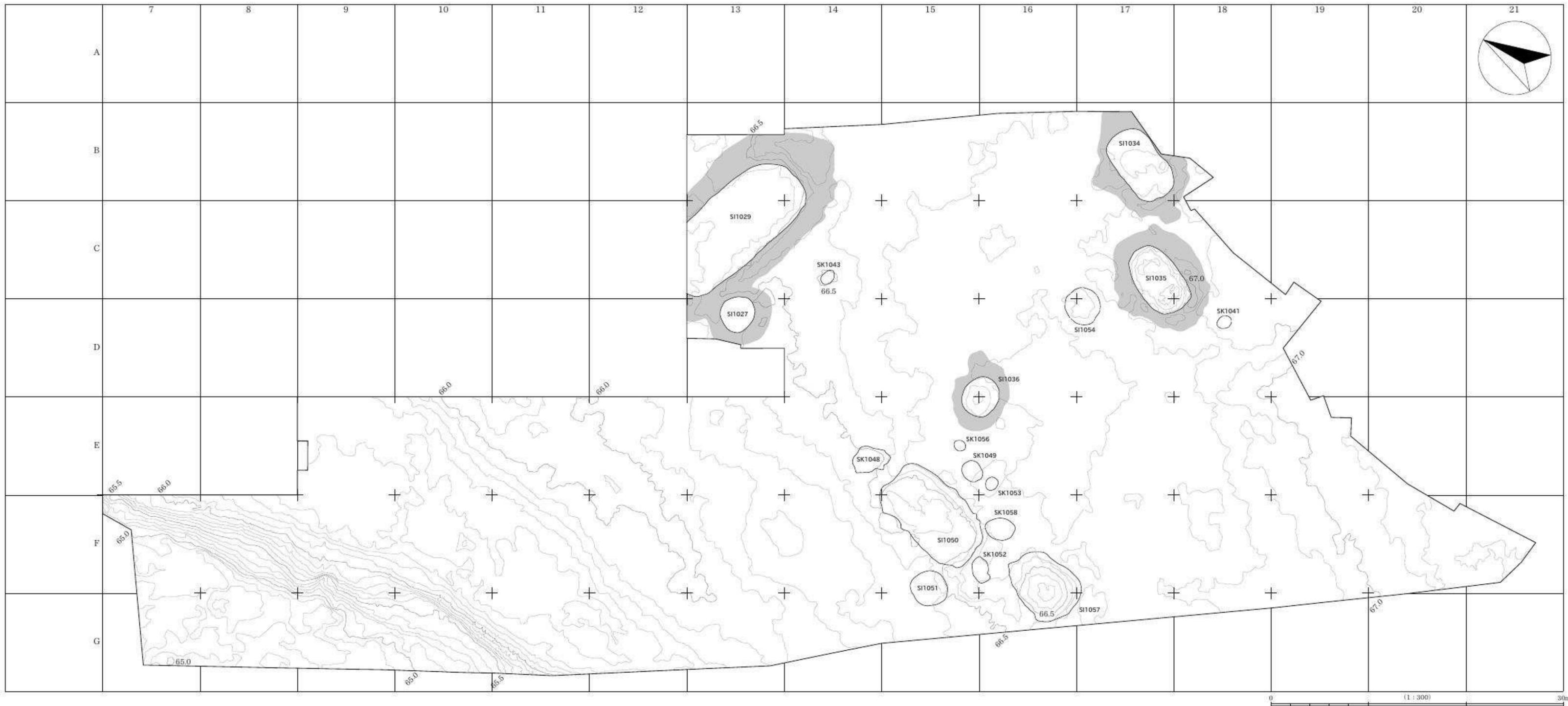
番号	グリッド	層位	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	備考
228	9C18	V中	A	15.2	14.9	6.7	1746.7	頁岩	
229	5C13	VI	A	9.0	4.0	1.5	82.5	頁岩	
230	8E3	V下	B	8.1	6.2	3.0	128.9	頁岩	
231	16C10	V上	C	8.0	5.6	3.4	96.3	流紋岩	
232	10C24	覆土	D	8.8	6.2	5.0	236.7	緑色凝灰岩	フク土
233	15D3, 4, 8, 9 (SK1067)	V下	D	9.8	8.9	3.0	273.4	頁岩	
234	14D22	V	E	9.4	8.2	4.9	263.4	流紋岩	
235	13F16	V中	F	5.2	4.0	2.1	43.5	流紋岩	
236	9E	不明	F	12.3	8.5	6.8	780.5	頁岩	トレンチ22
237	8G4 (別A)		F	11.2	8.7	7.8	652.9	頁岩	
238	14E17	V		13.1	9.7	6.5	962.7	頁岩	石核素材

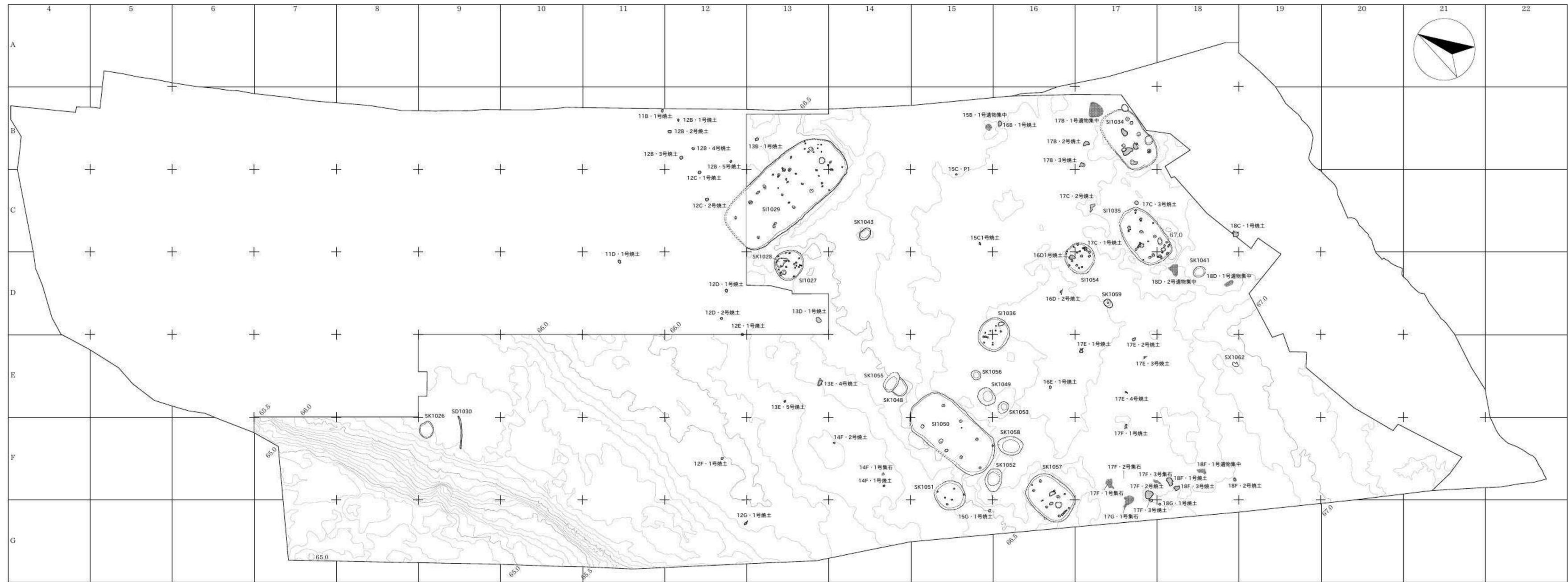
## 接合資料

No.	グリッド	遺構名	層位	器種名	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
239				接合資料	9.4	11.3	4.8	375.9	
239a	14E17 No181		V	銅片	8.9	9.2	2.5	198.1	
239b	14E18 No340		V	銅片	7.4	6.9	2.4	88.6	
239c	13F22 No1141		V上	銅片	10.8	7.3	2.3	89.2	
240				接合資料	6.9	8.0	2.9	67.0	
240a	不明			銅片	4.8	5.7	1.2	22.3	
240b	13F7 No58		V上	銅片	6.4	4.1	0.9	15.6	
240c	不明			銅片	6.0	3.8	1.1	12.4	
240d	13F23 No171		V上	銅片	5.8	4.7	0.9	16.7	
241				接合資料	6.1	7.9	2.9	108.5	
241a	8D2 No19		V上	銅片	3.7	5.3	0.7	9.7	
241b	7D13 No86		V上	銅片	3.8	4.5	1.0	11.7	
241c	7D18 No109		V下	銅片	7.6	7.0	2.5	87.0	
242				接合資料	12.5	7.6	3.4	240.9	
242a	12G18 No237		IV	銅片	9.7	5.9	1.9	95.5	
242b	12G11 No113		V	銅片	10.1	7.1	1.2	144.8	
243				接合資料	6.3	9.8	7.8	336.7	
243a	13E14	3号遺物集中		銅片	2.4	3.9	0.6	3.5	
243b	不明			銅片	7.1	4.6	1.9	46.8	
243c	13E14 No610	3号遺物集中	V	銅片	1.9	2.2	0.7	2.2	
243d	不明			銅片	5.8	4.1	1.7	28.3	
243e	13E14 No610	3号遺物集中	V	銅片	5.2	1.9	1.3	6.9	
243f	不明			銅片	3.9	3.5	1.2	13.5	
243g	13E14	3号遺物集中		銅片	7.7	8.5	5.6	235.8	
244				接合資料	8.9	18.5	5.0	528.3	
244a	14E17 No172		V	銅片	3.8	2.0	1.1	6.5	
244b	13E20 No570		V中	銅片	6.5	5.8	2.6	46.4	
244c	13E21 No47		V上	銅片	5.7	6.0	1.6	41.2	
244d	14E13 No316		V	銅片	8.5	7.7	2.0	96.7	
244e	14E17 No244		V	銅片	6.7	10.4	3.8	196.7	
244f	14E17 No197		V	銅片	8.8	6.0	2.0	92.7	
244g	14E17 No180		V	銅片	8.9	3.9	1.6	48.1	
245				接合資料	6.8	15.6	7.1	1455.1	
245a	12F10 No138		V上	銅片	3.3	4.7	1.2	15.1	
245b	12F10 No145		V中	銅片	5.8	4.3	2.2	31.0	
245c	12F15 No203		V上	銅片	8.2	7.1	1.6	72.9	
245d	12F15 No215		V上	銅片	5.0	8.8	2.8	95.2	
245e	12F15 No204		V中	銅片	11.5	5.0	4.3	187.7	
245f	12F15 No202		V上	銅片	14.0	6.5	4.7	363.0	
245g	不明			銅片	14.3	10.7	6.7	690.2	
246				接合資料	8.8	9.8	4.1	286.7	
246a	9E			銅片	4.0	5.3	1.1	13.7	一次調査トレンチ22
246b	8E21 No200		V上	銅片	8.7	9.8	4.5	273.0	
247				接合資料	11.9	16.4	5.2	684.9	
247a	不明			銅片	4.0	2.1	1.0	5.0	
247b	14E11 No88		V	銅片	1.6	3.5	1.0	3.5	
247c	13E14	3号遺物集中		銅片	2.0	2.8	0.6	2.6	
247d	不明			銅片	1.6	2.0	0.7	1.7	
247e	14E23 No869		V	銅片	2.6	3.8	0.7	4.2	
247f	13E13 No608	3号遺物集中	V	銅片	5.5	5.2	1.7	25.8	
247g	13E14	3号遺物集中		銅片	3.8	3.5	1.5	9.1	
247h	13E14	3号遺物集中		銅片	4.0	2.6	1.1	6.9	一次調査トレンチ
247i	13F			銅片	3.3	4.9	2.9	34.0	
247j	13E			銅片	3.8	4.6	3.2	52.0	一次調査トレンチ34
247k	13E14	3号遺物集中		銅片	3.9	2.0	0.8	2.7	一次調査トレンチ
247l	14F3 No169		V上	銅片	5.7	3.2	1.6	15.7	
247m	14E21 No149		V	銅片	6.9	10.3	3.3	198.6	
247n	13E14	3号遺物集中		銅片	3.7	3.4	1.3	14.9	一次調査トレンチ
247o	14E17 No247		V	銅片	3.9	5.3	0.9	11.4	
247p	13E13 No332		V中	銅片	4.5	7.5	2.7	59.1	
247q	13E11 No280		V中	銅片	8.0	8.2	4.6	237.4	

版 圖

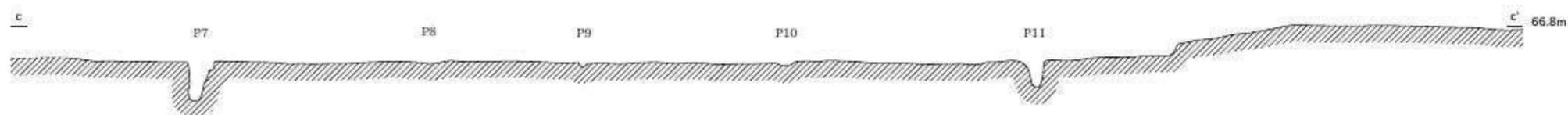
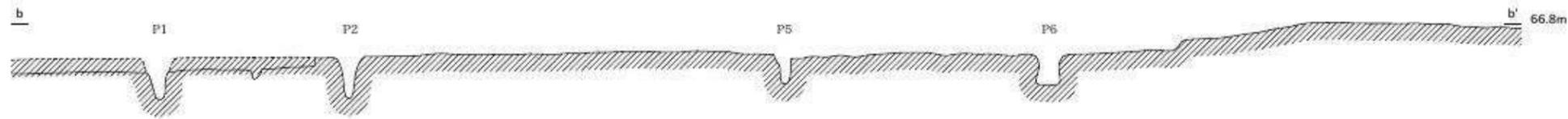
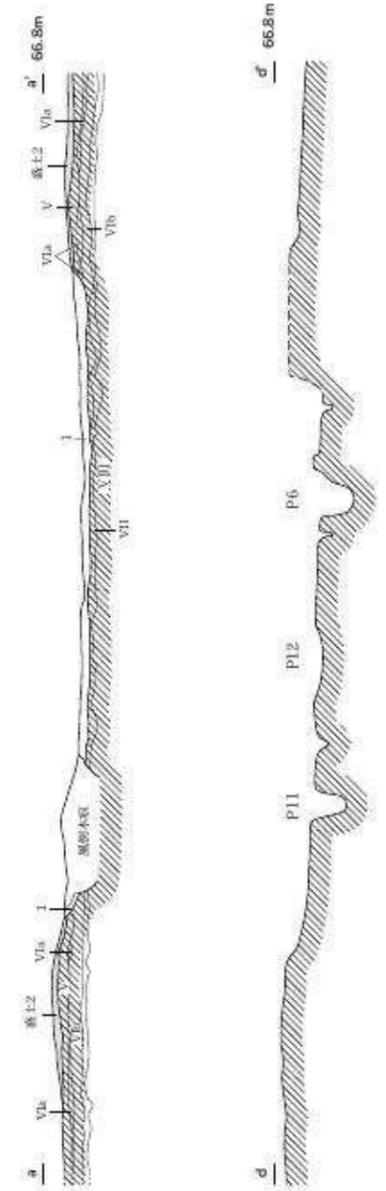
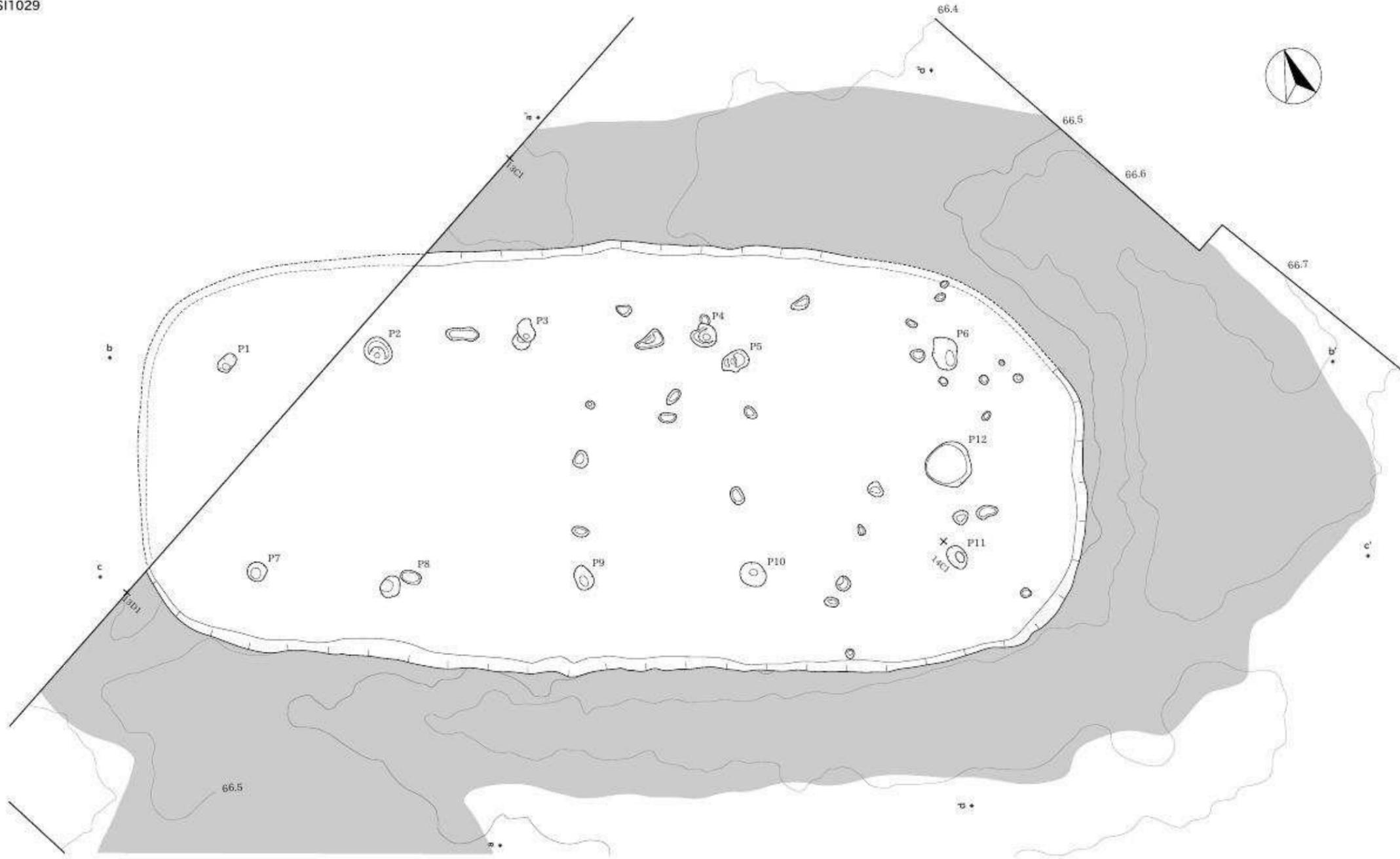








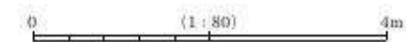
SI1029



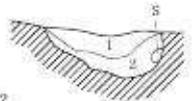
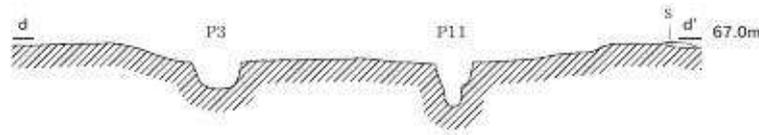
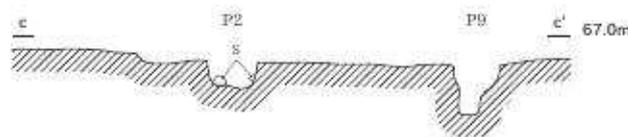
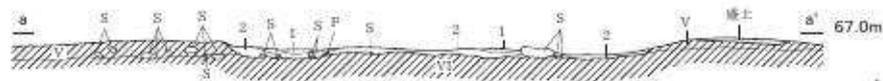
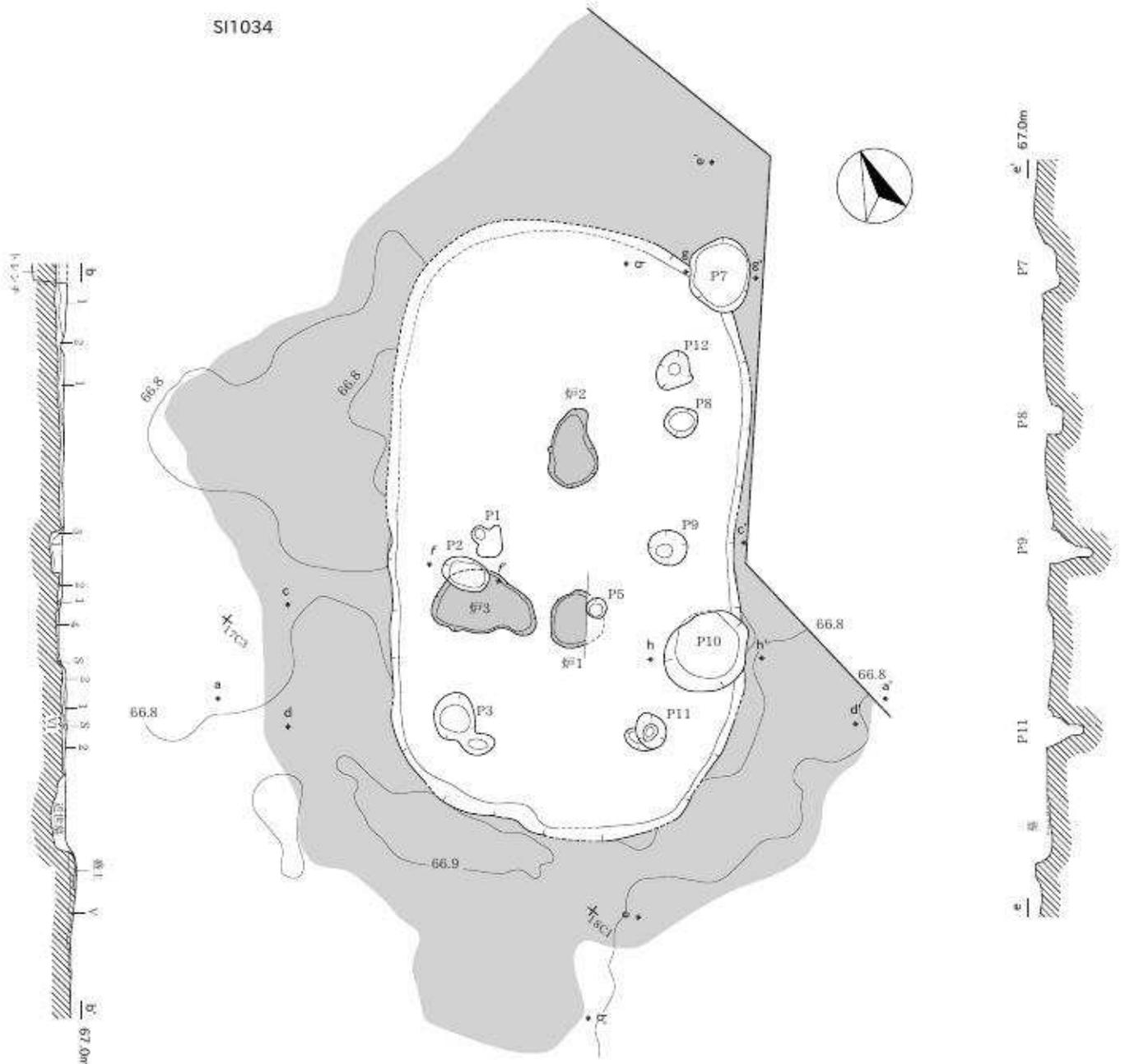
SI1029  
 盛土 V・VI・VII層の混合土  
 1 黒褐色シルト V層に近似する。

SI1029 ビット深度表 (cm)

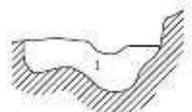
No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
深さ	36	54	56	46	40	46	56	38	50	52	42	8



SI1034



P2  
1 黒褐色シルト 炭化粒を多く含む。  
2 暗褐色シルト 炭化粒を少量含む。



P7  
1 黒褐色シルト 炭化粒を少量含む。  
P10  
1 黒褐色シルト 炭化粒をやや多く含む。  
2 暗褐色砂質土  
3 褐色砂質土  
4 暗褐色砂質土 炭化粒をやや多く含む。  
5 VII層の崩落土  
6 VII・VIII層の混合土 炭化粒を少量含む。  
7 VIII層の前縁土 炭化粒を少量含む。

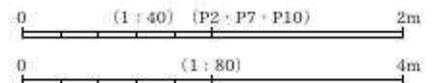
SI1034

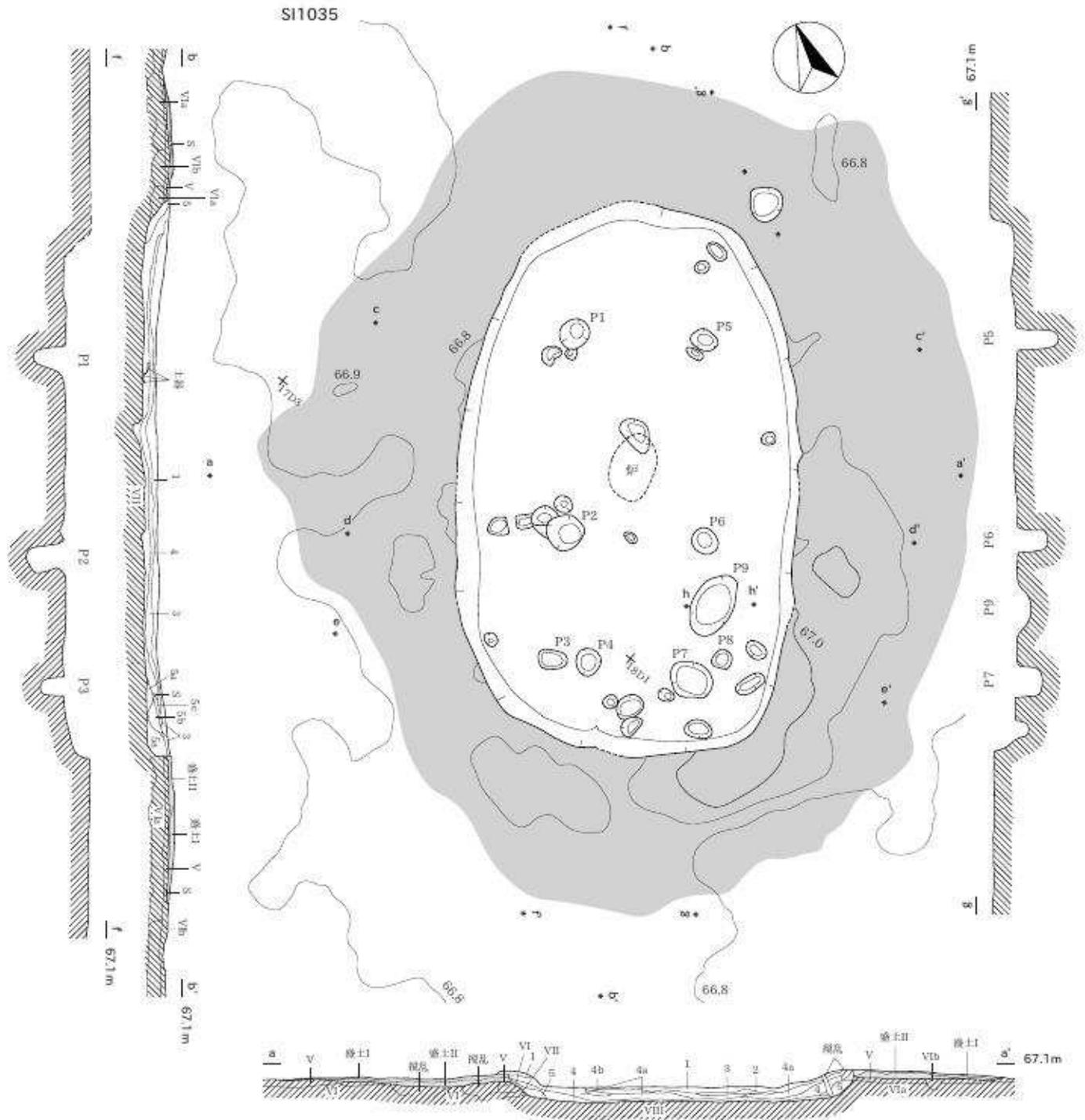
盛土 V・VI層の混合土

- 1 沼沢火山灰層 基本層IV層と同じ。
- 2 黒褐色シルト 炭化粒を非常に多く含む。
- 3 黒褐色シルト 炭化粒を少量含む。
- 4 黒褐色シルト 焼土を多く含む。印跡。

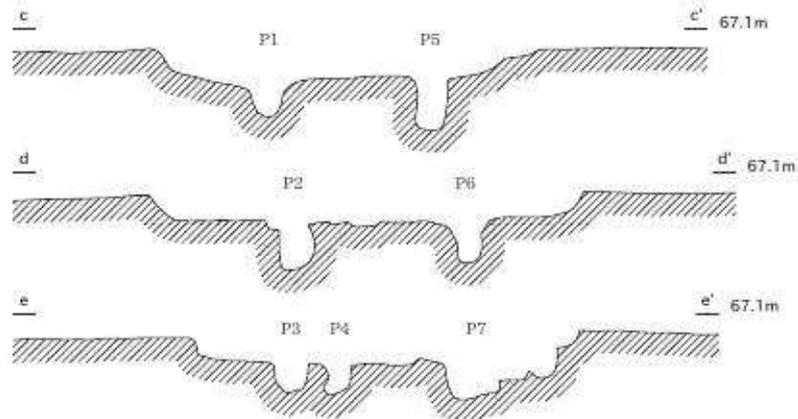
SI1034 ビット深度表 (cm)

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
深さ	50	30	80	-	22	-	22	22	52	70	46	42



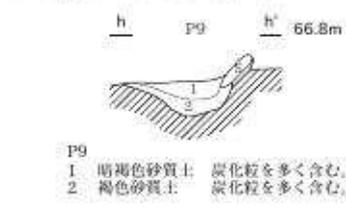


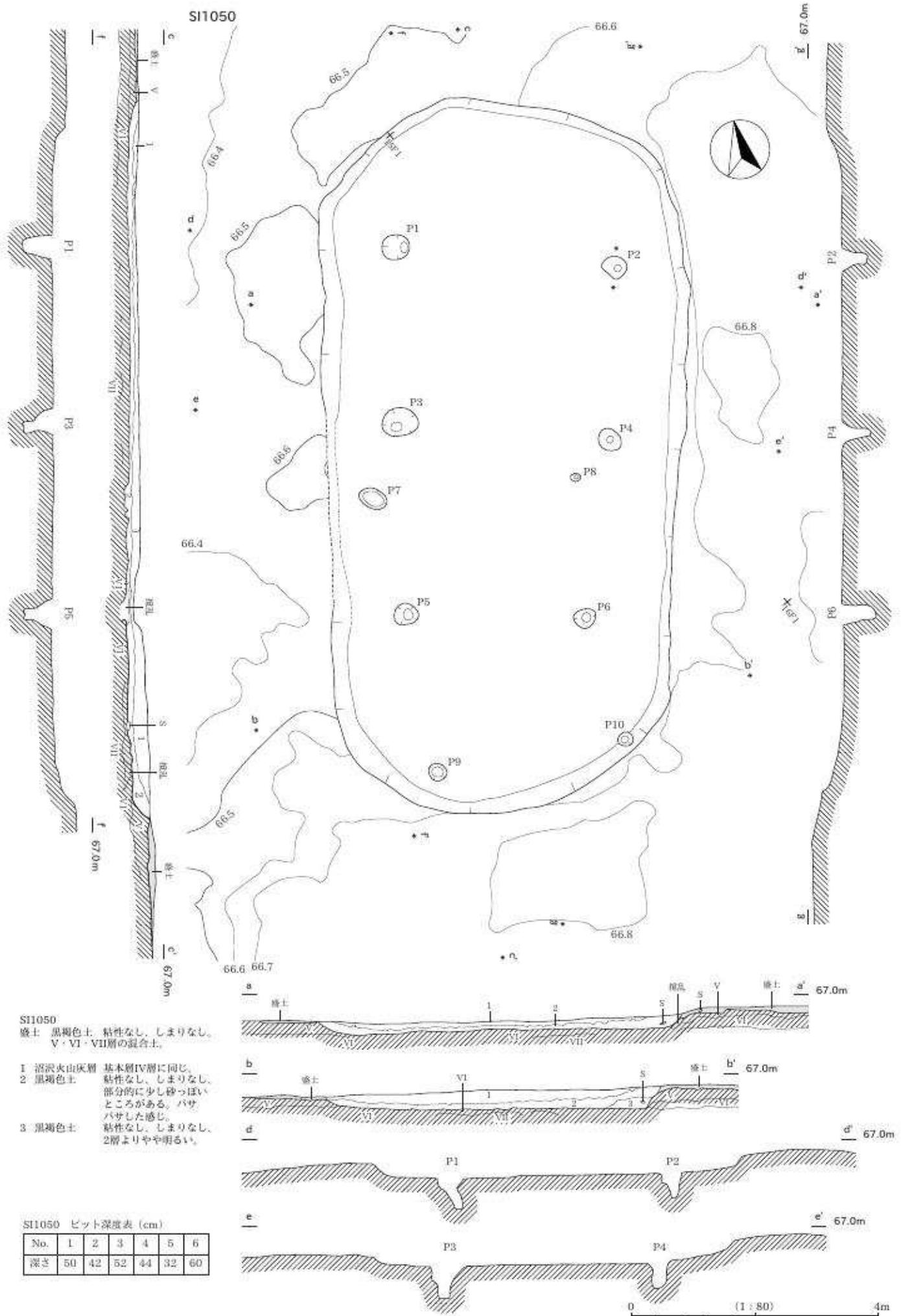
- SI1035  
 盛土I 基本層V・VI・VII・VIII層の混合土。VIII層を多く含む。  
 盛土II 基本層V・VI・VII層の混合土。V・VI層を多く含む。
- 1 沼沢火山灰層 基本層IV層と同じ。
  - 2 褐灰色シルト IV層と2層の間に薄く認められる腐植土層。砂が少量混じる。炭化粒を少量含む。しまりなし、粘性ややあり。ブロック状に入る。
  - 3 明褐色シルト 2層とほとんど同じだが、2層より暗い。
  - 4 明褐色シルト しまりあり、粘性ややあり、黄色砂が混じる。炭化粒を少量含む。
  - 4a 暗褐色シルト VIII層の流れ込み土。2層が少量混じる。
  - 5 黒褐色シルト 粘性。しまりあり。壁面の黒色土が流れて堆積したもの。
  - 5a 暗褐色シルト 炭化粒を少量含む。ところどころにV層VII・VIII層も混入する。埋まり始めの頃の盛土が流れ込んだもの。
  - 5b 4a層にVIII層がかなり多く混入する。
  - 5c 明褐色シルト 2層より明るい。

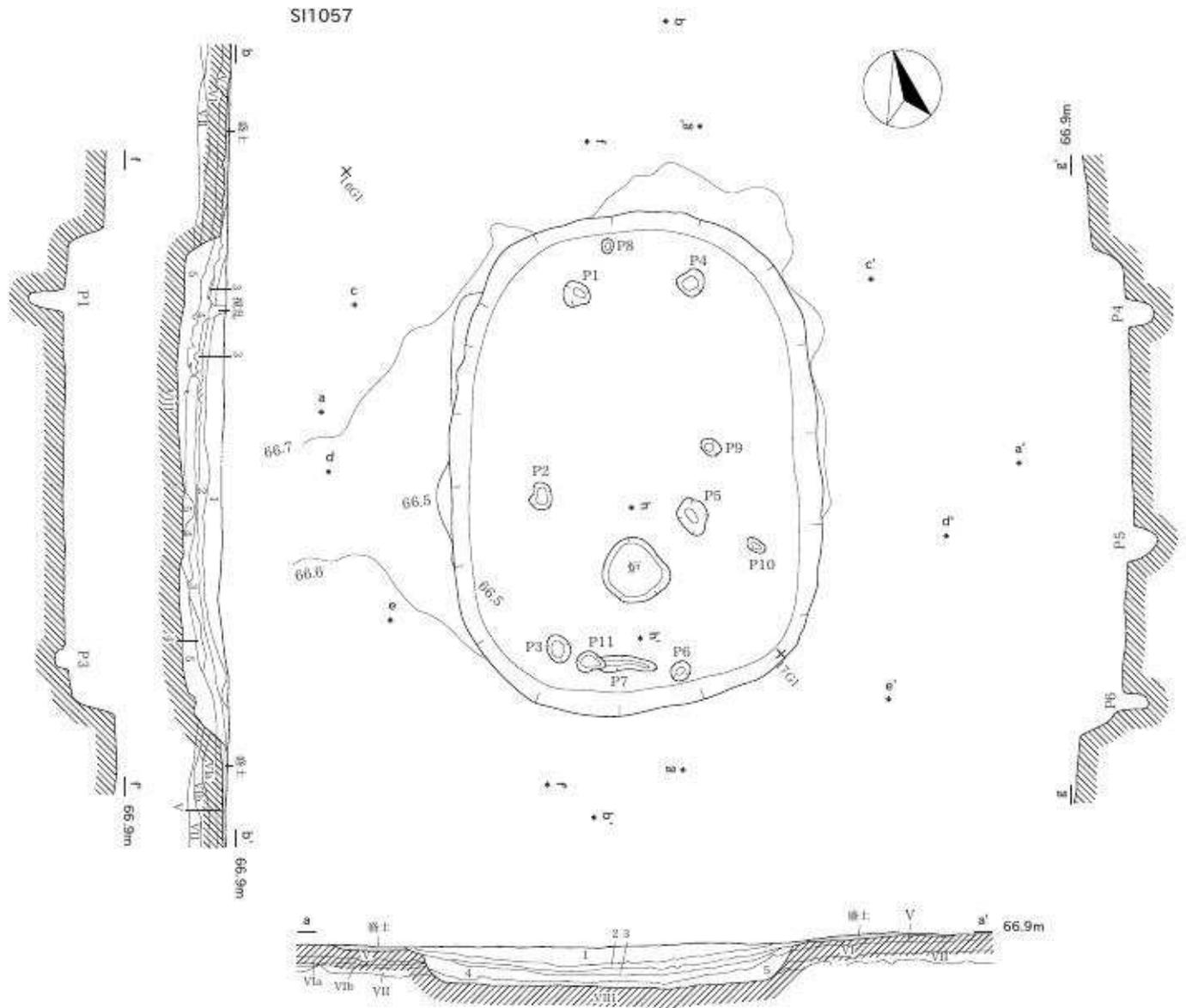


SI1035 ビット深度表 (cm)

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9
深さ	38	52	34	34	58	46	40	22	20







- SI1057  
 1 沼沢火山灰層 基本層IV層に同じ。  
 2 沼沢火山灰層 基本層IV層下部層(オレンジ色の沼沢層)に同じ。  
 3 黒褐色シルト 炭化粒を多少含む。  
 4 黒褐色シルト 1層よりやや暗い。炭化粒を多少含む。  
 5 暗褐色砂質土 炭化粒を多少含む。

- P1  
 1 黒褐色土  
 2 暗褐色砂質土

- P4  
 1 黒褐色土  
 2 暗褐色砂質土

- P2  
 1 黒褐色土  
 2 暗褐色砂質土

- P5  
 1 黒褐色土  
 2 明褐色砂質土  
 3 暗褐色砂質土  
 4 暗褐色土  
 5 褐色砂質土

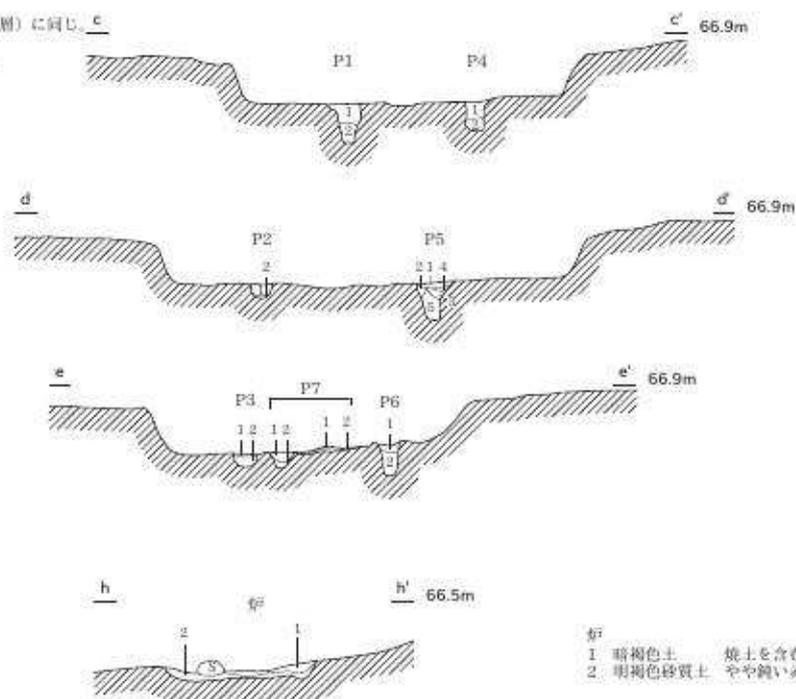
- P3  
 1 黒色土  
 2 暗褐色土 褐色砂をやや多く含む。

- P7  
 1 暗褐色土 炭化粒を含む。  
 2 褐色土

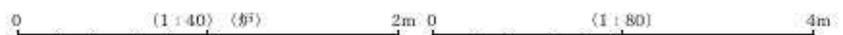
- P6  
 1 暗褐色土  
 2 褐色土

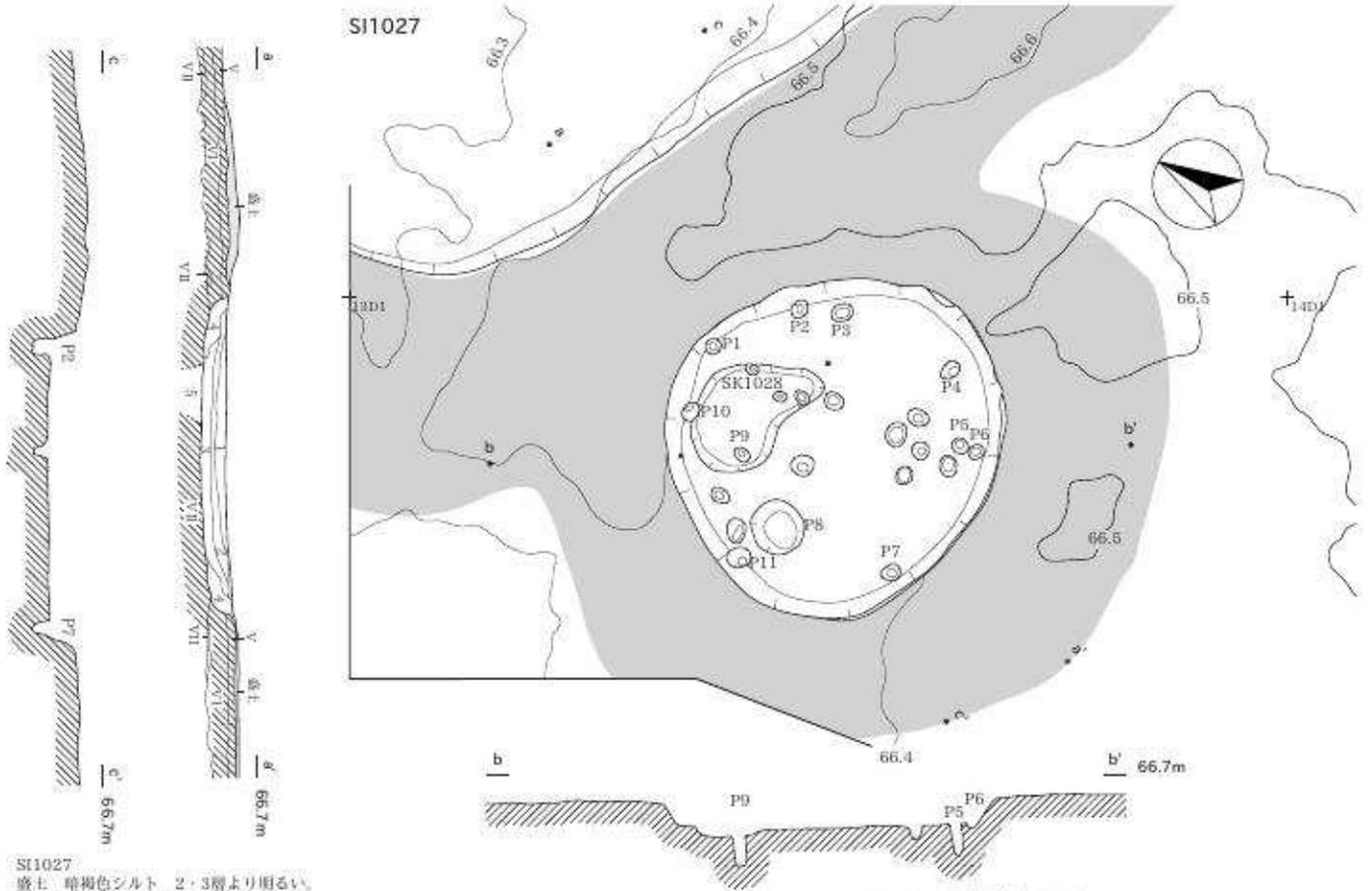
SI1057 ビット深度表 (cm)

No.	1	2	3	4	5	6	7
深さ	44	16	16	34	38	32	6



- 炉  
 1 暗褐色土 焼土を含む。  
 2 明褐色砂質土 やや鈍い赤色の砂粒を含む。



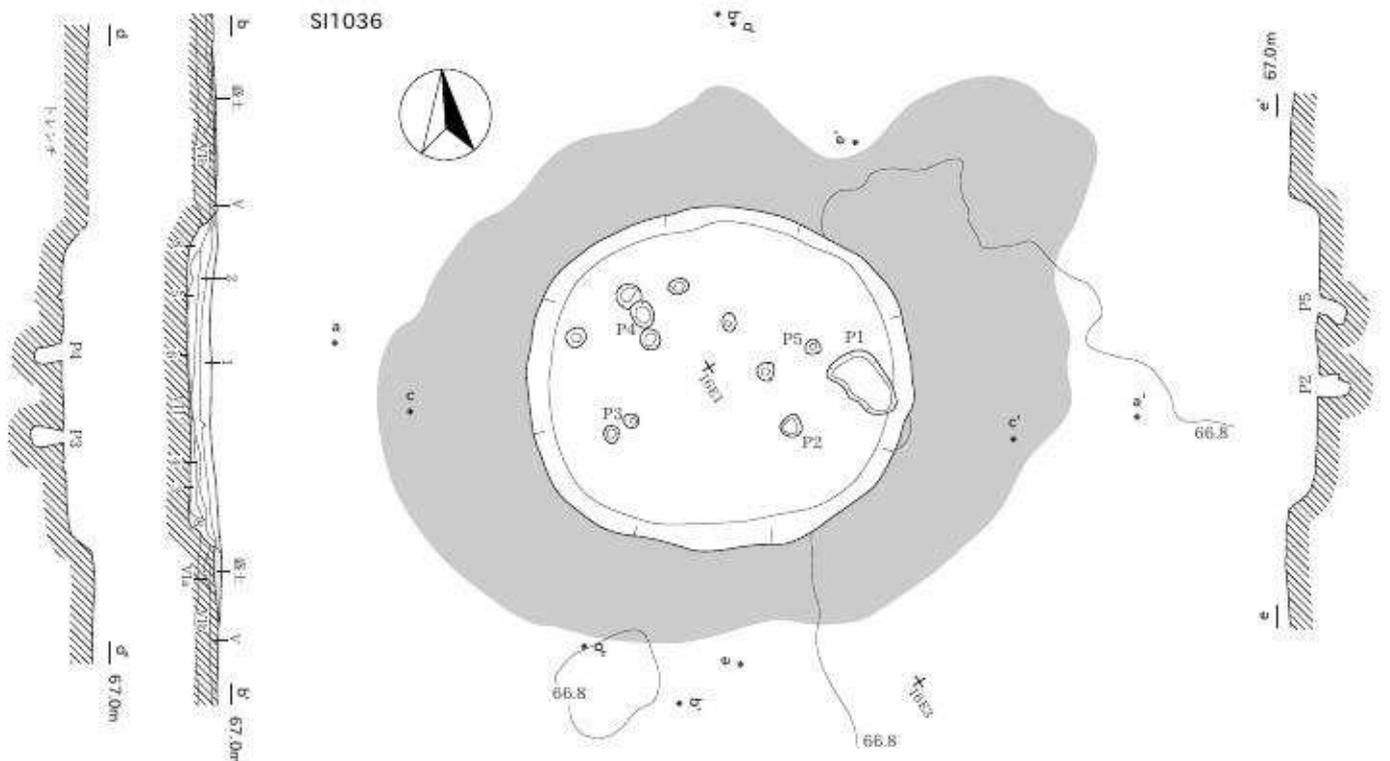


SI1027

- 盛土 暗褐色シルト 2・3層より明るい。  
 1 沼沢火山灰層 基本層IV層と同じ。  
 2 黒褐色シルト 粘性あり、炭化粒を多く含む。  
 3 暗褐色シルト 砂質土を少量含む。床面付近に炭化粒がやや多く認められる。粘性ややあり。  
 4 暗褐色シルト 2層より砂質土が多く、やや明るい。粘性ややあり。床面付近に炭化粒がやや多く認められる。  
 5 暗褐色シルト 3層より明るい。VIII層の砂質土が少量混じり、層を形成するところもある。

SI1027 ビット深度表 (cm)

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
深さ	18	20	19	13	36	8	20	29	40	10	28

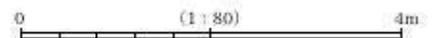


SI1036

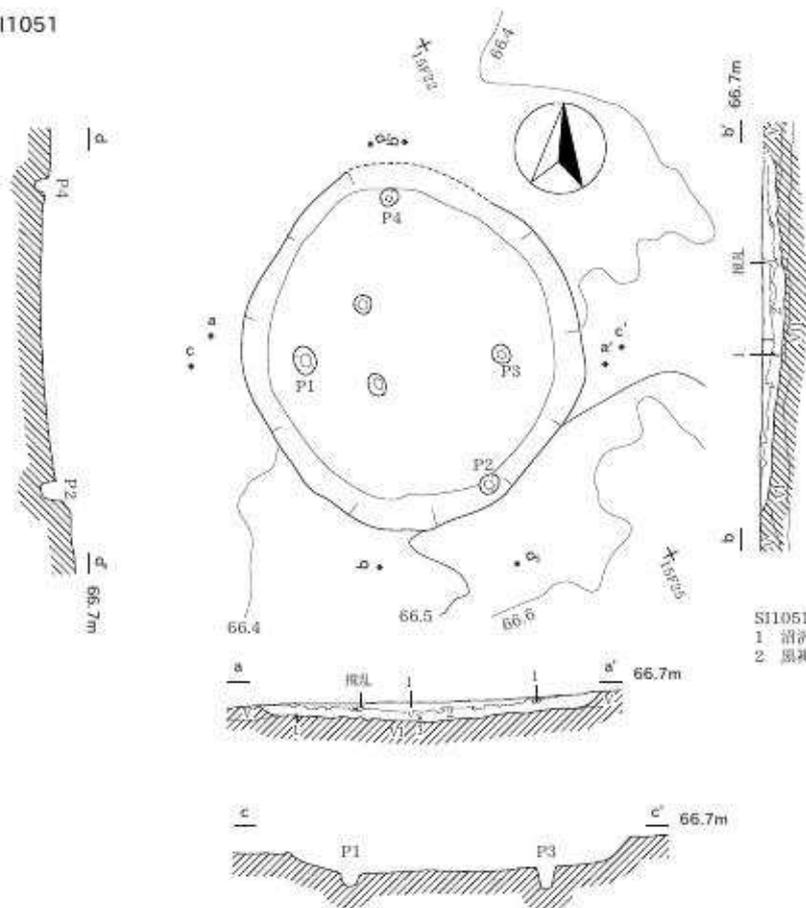
- 盛土 V・VIa・VIb・VII層の混合土。  
 1 沼沢火山灰層 基本層IV層と同じ。  
 2 黒褐色シルト 炭化粒を少量含む。  
 3 暗褐色シルト 盛土の流れ込みが多い。  
 4 暗褐色シルト 3層より暗い。  
 5 暗褐色シルト 盛土の流れ込みが多い。3・4層より暗い。  
 6 黒褐色シルト 盛土の流れ込みが多い。炭化粒をやや多く含む。  
 7 褐色砂質土 VII層のブロック状の流れ込み。  
 8 暗褐色シルト 下層に炭化粒をやや多く含む。盛土の流れ込みが多い。

SI1036 ビット深度表 (cm)

No.	1	2	3	4	5
深さ	38	34	38	28	30



SI1051

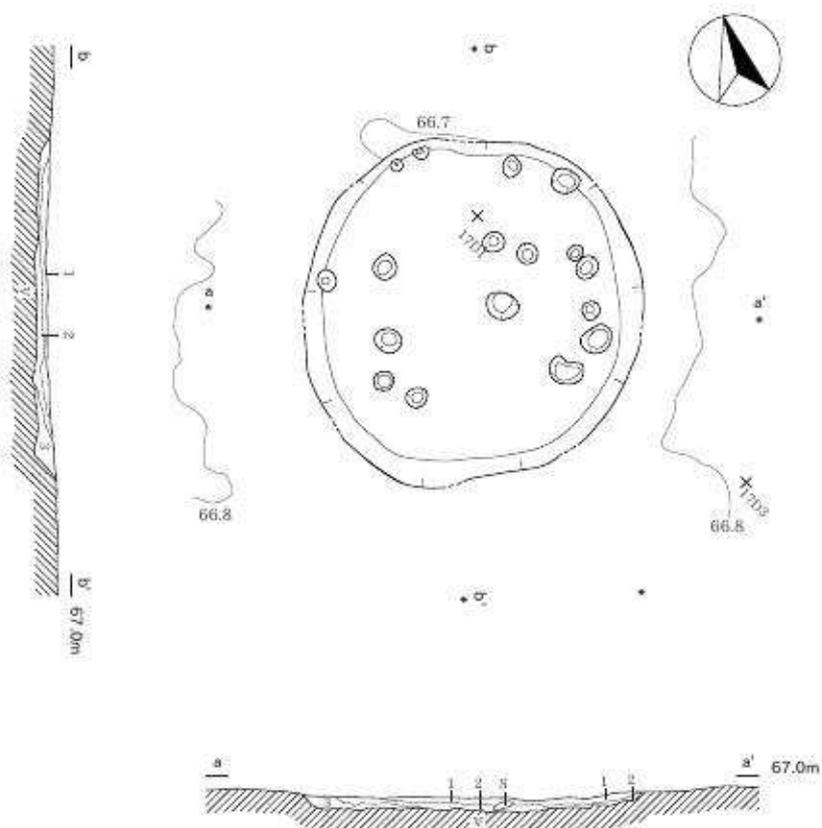


SI1051  
 1 沼沢火山灰層 基本層IV層に同じ。  
 2 黒褐色土 粘性なし。しまりややなし。

SI1051 ビット深度表 (cm)

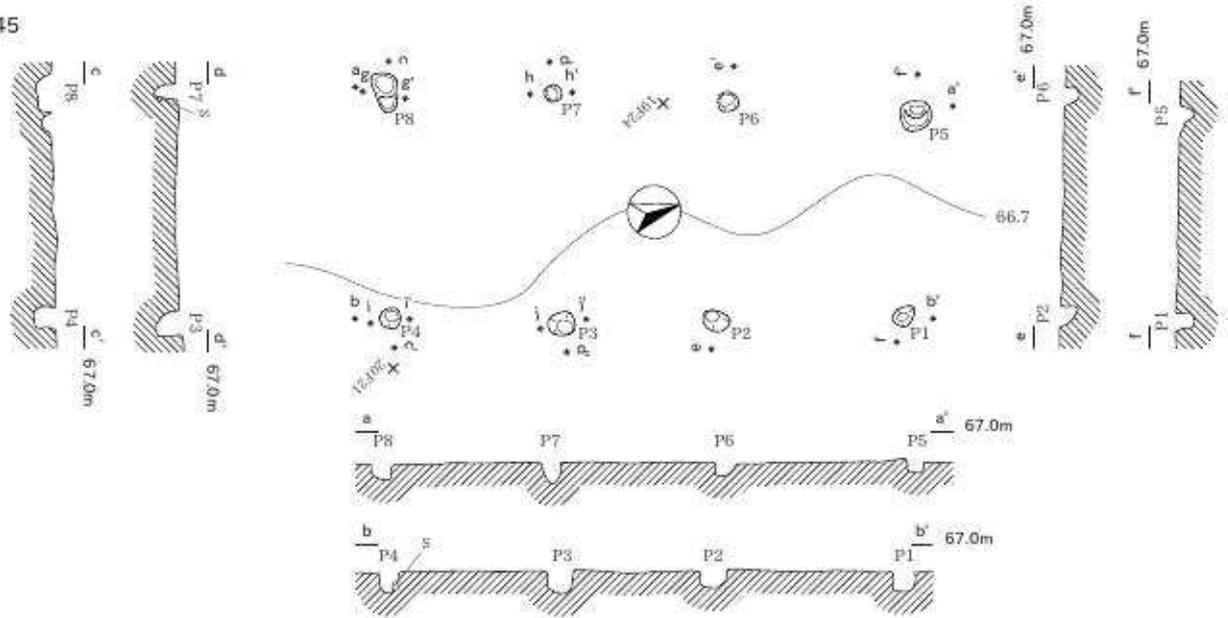
No.	1	2	3	4
深さ	14	23	24	16

SI1054



SI1054  
 1 黒褐色シルト 炭化粒を少量含む。IV層がブロック状に入る。白く粒子の細かい砂質土がブロック状に入る。  
 2 黒褐色シルト 炭化粒を少量含む。1層よりやや暗い。  
 3 暗褐色シルト 1・2層よりやや明るい。1・2層に比べしまりがない。

SB1045



SB1045 ビット深度表 (cm)

No.	1	2	3	4	5	6	7	8
深さ	19	20	26	22	13	15	23	17

P8

- 1 黒褐色シルト やや砂っぽい。VII層の崩落土が混入する。
- 2 暗褐色シルトと黄色砂の混合土。
- 3 黒褐色シルト 1層と近似するがやや暗い。
- 4 暗褐色シルトと黄色砂の混合土 2層と近似するがやや暗い。

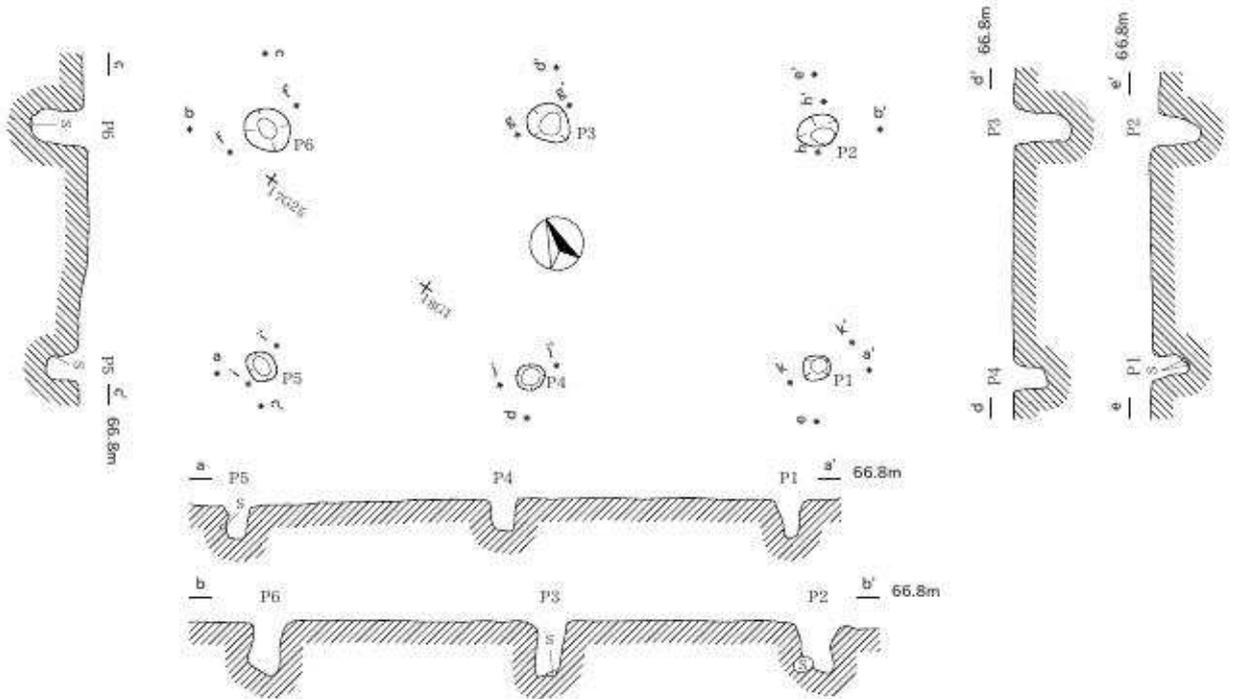
P7

- 1 黒褐色シルト やや砂っぽい。VII層の崩落土が混入する。
- 2 暗褐色シルトと黄色砂の混合土。

P3

- 1 黒褐色シルト 黄褐色粘土がブロック状に入る。
- 2 暗褐色シルト 黄褐色粘土を少量含む。

SB1063



SB1063 ビット深度表 (cm)

No.	1	2	3	4	5	6
深さ	42	61	61	36	38	61

P6

- 1 黒褐色砂質土 粘性なし、しまりなし。炭化粒がブロック状に混入する。
- 2 褐色砂質土 粘性なし、しまりなし。小礫をやや多く含む。

P3

- 1 黒褐色シルト 粘性なし、しまりなし。炭化粒がブロック状に混入する。径約1cm程の礫が全体に混入する。

P2

- 1 黒褐色砂質土 粘性なし、しまりなし。炭化粒を少量含む。
- 2 褐色砂礫 粘性なし、しまりなし。底部付近では礫が多く混じる。VIII層と1層の混合土。

P5

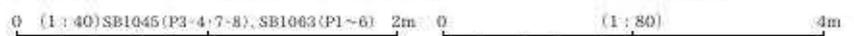
- 1 黒褐色砂質土 粘性なし、しまりなし。炭化粒をブロック状に少量含む。

P4

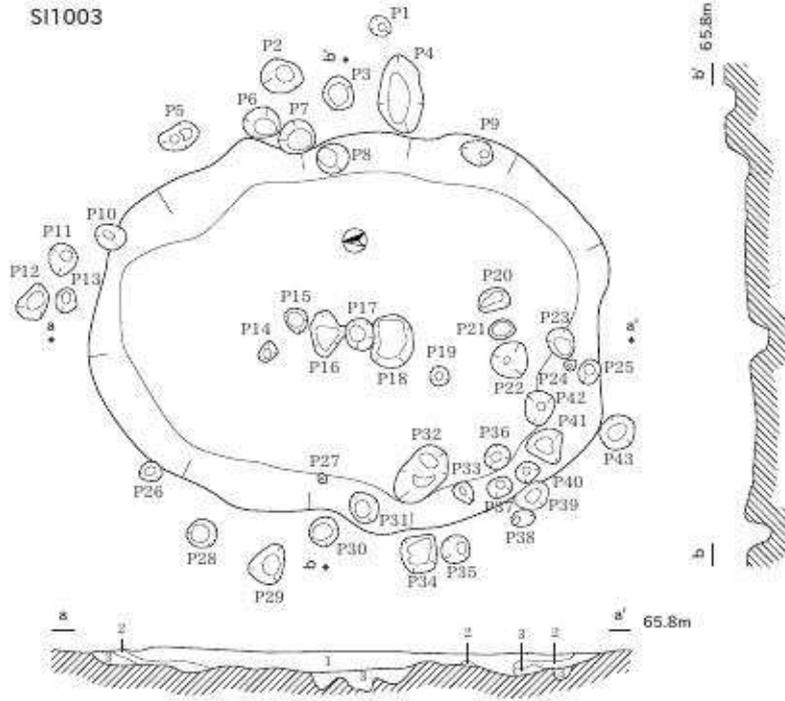
- 1 黒色砂質土 粘性なし、しまりなし。
- 2 黒褐色砂質土 粘性なし、しまりなし。1層より砂粒が粗い。

P1

- 1 黒褐色シルト 粘性なし、しまりなし。
- 2 暗褐色砂質土 粘性なし、しまりなし。炭化粒をブロック状に少量含む。



SI1003

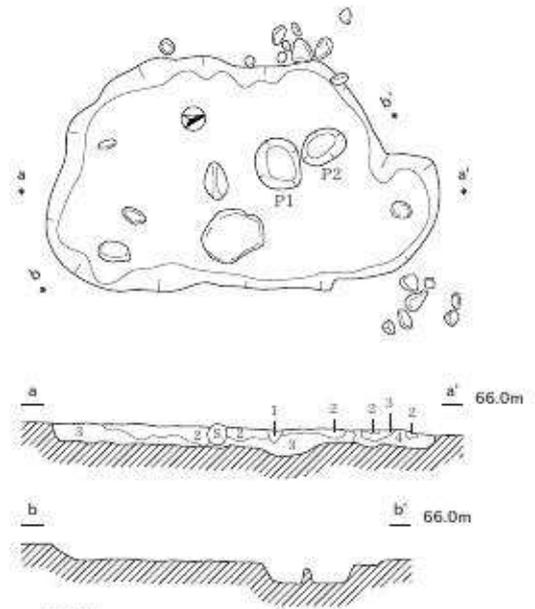


- SI1003  
 1 黒色土 しまりあり、粘性なし。  
 2 極暗褐色土 しまりあり。  
 3 黒褐色土 しまりあり。

SI1003 ビット深度表 (cm)

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
深さ	9	16	6	11	17	10	8	9	14	7	11	21	23	6	13
No.	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
深さ	11	14	10	8	6	6	10	8	4	12	6	4	10	11	11
No.	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43		
深さ	14	10	5	7	10	11	7	6	14	12	9	7	13		

SI1011

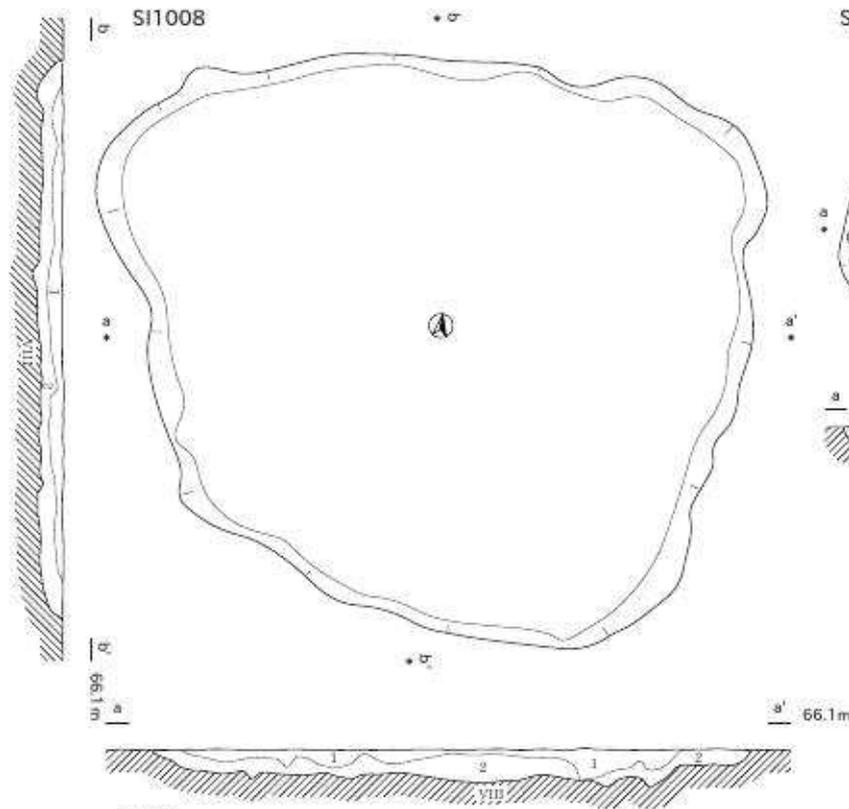


- SI1011  
 1 黒褐色土 粘性なし。  
 2 黒色土 粘性なし。  
 3 暗褐色砂質土 粘性なし。  
 4 黒色土 暗黄褐色土をブロック状に含む、粘性なし。

SI1011 ビット深度表 (cm)

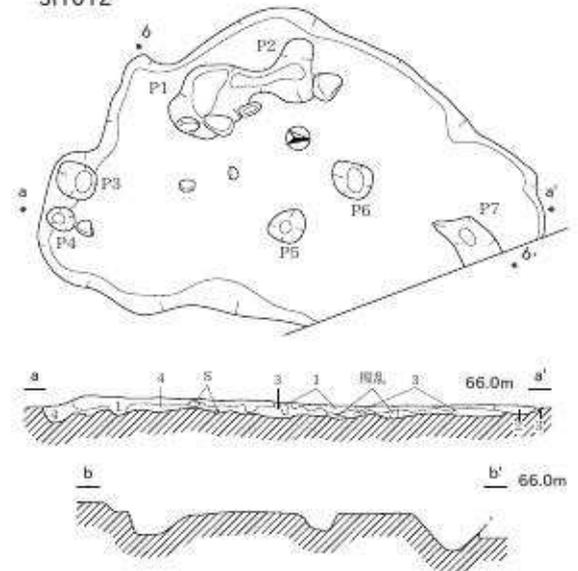
No.	1	2
深さ	11	10

SI1008



- SI1008  
 1 黒褐色シルト  
 2 暗褐色シルト 砂礫を多く含む。

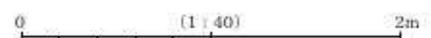
SI1012



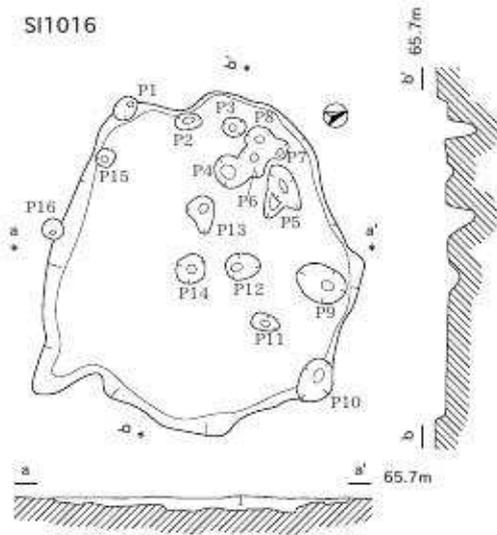
- SI1012  
 1 極黒褐色土 しまりあり、粘性なし。  
 2 暗褐色土 粘性なし。  
 3 黄褐色砂質土 粘性なし。  
 4 黄褐色砂質土 砂礫を多く含む、粘性なし。

SI1012 ビット深度表 (cm)

No.	1	2	3	4	5	6	7
深さ	12	14	9	6	8	10	20



SI1016



SI1016  
1 黒色土 しまりあり、堅い。

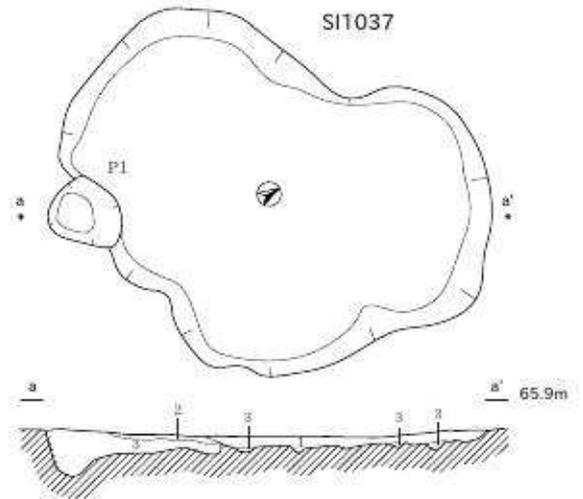
SI1016 ビット深度表 (cm)

No.	1	2	3	4	5	6	7	8
深さ	7	7	16	6	6	13	8	-
No.	9	10	11	12	13	14	15	16
深さ	8	14	7	6	14	7	8	9

SI1037

ビット深度表 (cm)

No.	1
深さ	15

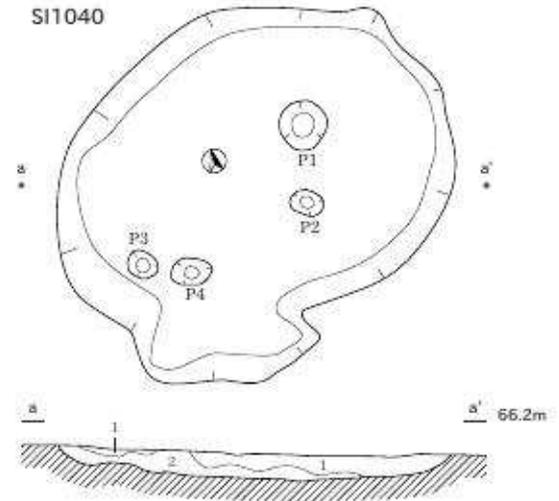


SI1037  
1 極暗赤褐色砂質土 炭化粒が混じる。  
2 暗褐色砂質土 炭化粒が混じる。  
3 暗赤褐色土 炭化粒が混じる。

SI1040 ビット深度表 (cm)

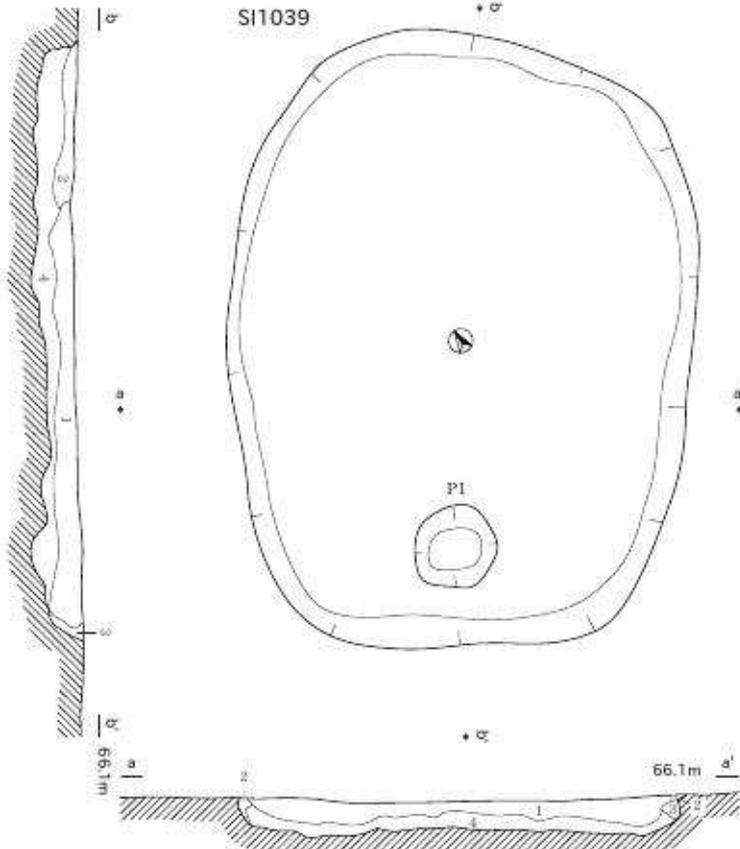
No.	1	2	3	4
深さ	8	8	9	7

SI1040



SI1040  
1 黒褐色土 粘性ややあり、微細~1.5cm程度の炭化粒が混入する。  
2 暗赤褐色土

SI1039



SI1039  
1 赤褐色砂質土 しまりあり、堅い。  
2 暗褐色土  
3 褐色砂質土  
4 褐色土 VII・VIII層が薄い帯状に堆積する。

SI1039

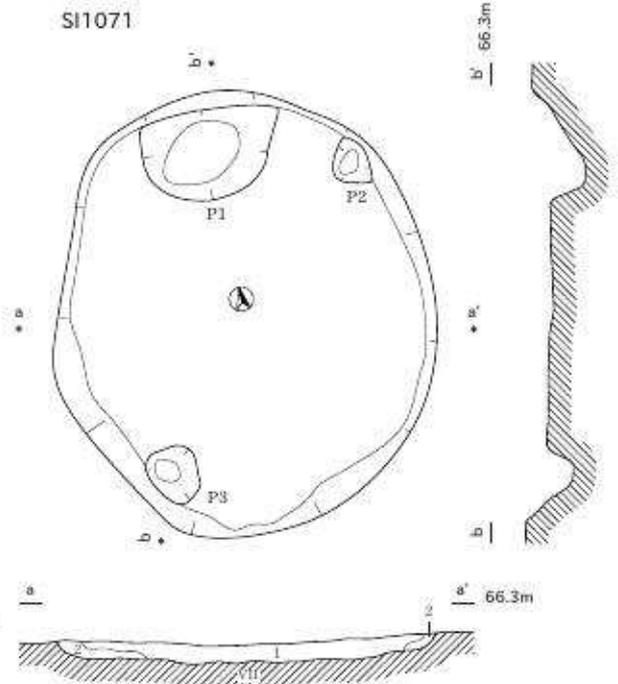
ビット深度表 (cm)

No.	1
深さ	11

SI1071 ビット深度表 (cm)

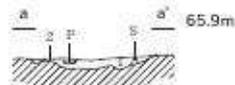
No.	1	2	3
深さ	18	11	15

SI1071



SI1071  
1 暗褐色土 粘性なし、しまりなし、底部付近には炭化粒を微量に含む。  
2 褐色土 粘性なし、しまりなし、1層とVII層の混合土。

SK1001



SK1001  
1 暗褐色土 炭化粒を含む。  
2 褐色土 炭化粒を含む。

SK1002

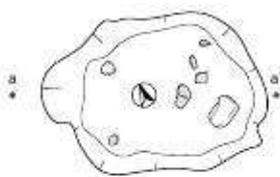


66.0m



SK1002  
1 黒褐色土 しまりあり、堅い。  
2 暗褐色土 しまりあり、堅い。

SK1004



66.3m



SK1004  
1 黒褐色シルト 粘性あり、ややしまりあり。  
炭化粒を少量含む。  
2 暗褐色シルト 黄褐色砂を微量に含む。  
粘性ややあり、しまりややあり。

SK1005

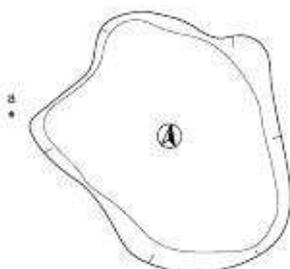


65.9m



SK1005  
1 黒褐色シルト 粘性なし、しまりなし。  
2 暗褐色シルト 粘性なし、しまりなし。  
3 暗褐色シルト (擾乱) 1とVIII層との混合土。  
粘性なし、しまりなし。  
2よりやや明るい。

SK1006

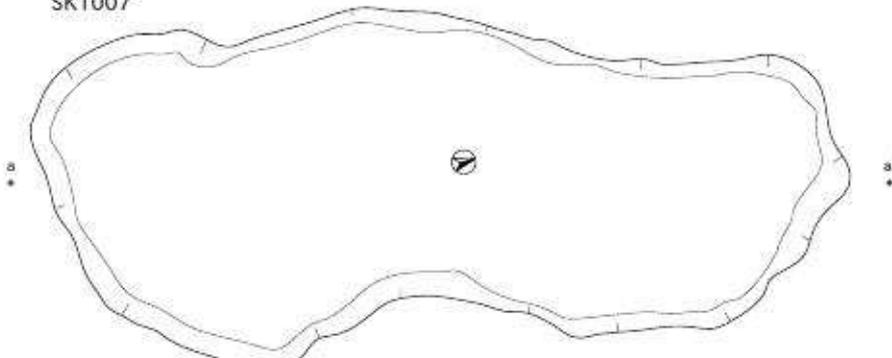


65.4m

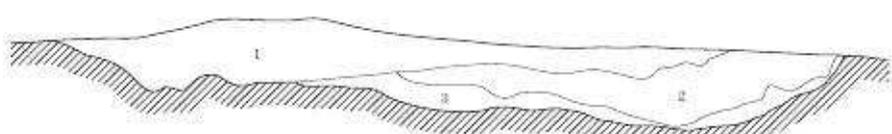


SK1006  
1 黒褐色砂質シルト 砂礫をやや多く含む。  
2 暗褐色砂質土 しまりあり。  
下層にはVIII層が混入する。  
砂礫をやや多く含む。  
しまりあり。

SK1007



66.0m

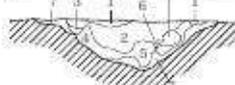


SK1007  
1 暗褐色シルト 礫を多く含む。  
2 黒褐色シルト 礫を多く含む。  
3 暗褐色シルトとVIII層の混合土 礫を多く含む。

SK1013



66.1m

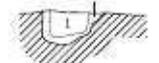


SK1013  
1 極暗黒褐色土  
2 黒色土  
3 暗褐色土  
4 黒褐色土  
5 暗褐色土 炭化粒を含む、4層より明るい。  
6 黒褐色土と黄褐色土の混合土  
7 黒褐色土と黄褐色土の混合土  
6層に近似するが黄褐色土が多くなる。  
いずれの層も粘性なし。  
しまりあり、堅い。

SK1014



66.0m



SK1014  
1 黒色土 粘性なし。  
2 黒色土とVII層の混合土

SK1015



65.6m

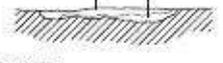


SK1015  
1 黒色シルト ややしまりなし。  
2 暗褐色土 やや粘性あり、しまりあり。

SK1017



65.8m



SK1017  
1 黒赤褐色土 しまりあり、堅い。  
2 暗赤褐色土 しまりあり、堅い。

SK1018

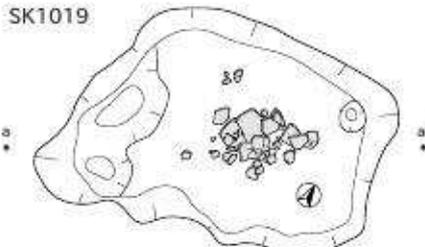


65.8m

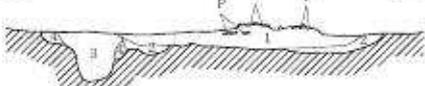


SK1018  
1 黒色土 赤褐色土を含む、しまりあり、堅い。  
2 暗赤褐色土 礫を多く含む、しまりあり、堅い。

SK1019



66.3m



SK1019  
1 黒色土 炭化粒を含む。  
2 暗褐色砂質土 しまりなし、炭化粒を含む。  
3 黒褐色土 暗褐色土をブロック状に含む。  
1・2・3層と比べ異質である。  
4 暗褐色砂質土 炭化粒を含む。

SK1021



65.9m



SK1021  
1 黒色土  
2 黒褐色土 1層よりやや明るい。  
3 暗褐色土 基本層VII層を少量含む。  
4 黒色土 いずれの層も粘性なし。  
5 褐色土 しまりなし、1層よりやや暗い。  
基本層VII層の崩落土。

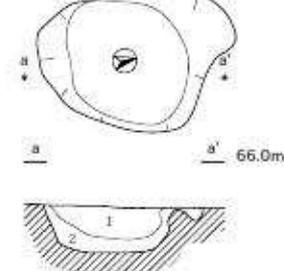
SK1020



SK1020

- 1 暗黄褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 暗黄褐色土と暗褐色土の混合土
- 4 黒褐色土
- 5 黒色土
- 6 暗黄褐色土 暗褐色土をブロック状に含む。
- 7 黒褐色土
- 8 黒褐色土 暗黄褐色土をブロック状に含む。
- 9 黒褐色土 7層より強い、いずれの層もしまりなし。

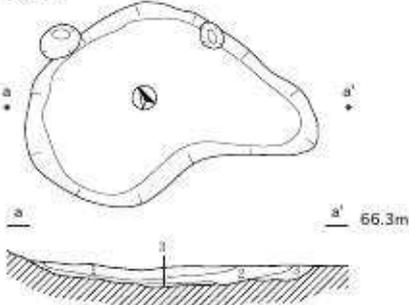
SK1024



SK1024

- 1 黒褐色土 粘性なし、しまりややなし。
- 2 黒褐色砂質土 粘性なし、しまりなし、1層よりやや明るい、VIII層が混入する。

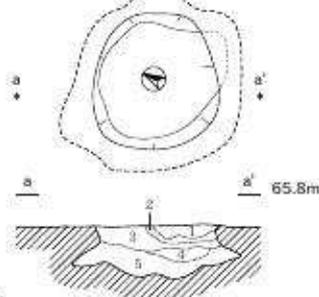
SK1028



SK1028

- 1 暗褐色シルト 炭化粒を多く含む、砂が多く混入する。VIII層が小さな層状となり混入する。粘性ややあり。埋め戻しにも見える。砂が少量混入する。炭化粒を少量含む。
- 2 黒褐色シルト
- 3 黄褐色シルト VII・VIII層の崩落土。

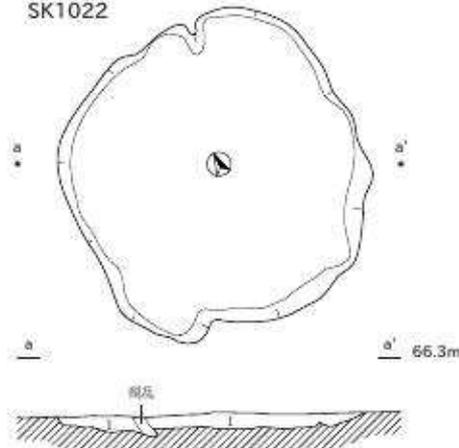
SK1033



SK1033

- 1 黒褐色砂質土 しまりあり、堅い。
- 2 暗赤褐色砂質土 1層に近似し、堅くしまっている。
- 3 黒褐色砂質土 1層に近似し、しまりあり。
- 4 暗褐色土 粘性ややあり、しまりややなし。
- 5 極暗褐色土 暗褐色土が混入する。

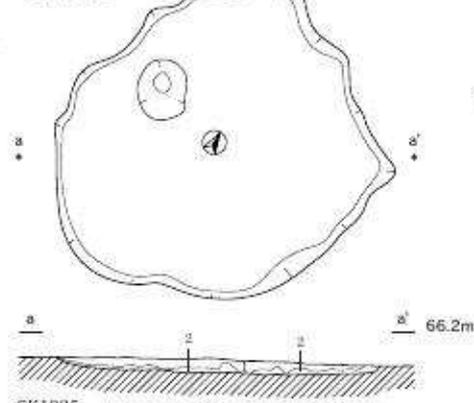
SK1022



SK1022

- 1 暗褐色シルト 底面中央部に炭化材(大きさ0.5～1.0cm)が6点認められる。

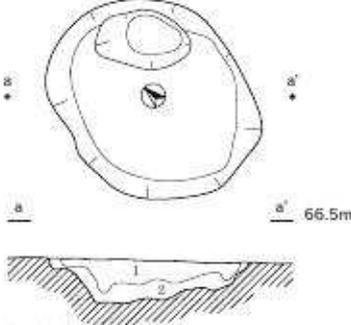
SK1025



SK1025

- 1 黒色土 しまりあり。
- 2 黄褐色土 黒色土がブロック状に混入する、しまりあり。

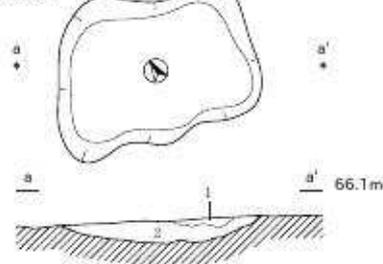
SK1031



SK1031

- 1 暗褐色シルト 粘性あり、しまりややあり。炭化粒を少量含む。
- 2 黄褐色シルト 1層とVII層の混合土。粘性ややあり。

SK1038

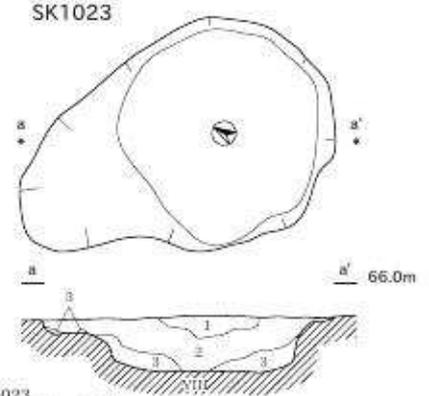


SK1038

- 1 極暗赤褐色土 しまりあり、堅い。
- 2 暗赤褐色土 しまりあり、堅い。

0 (1:40) 2m

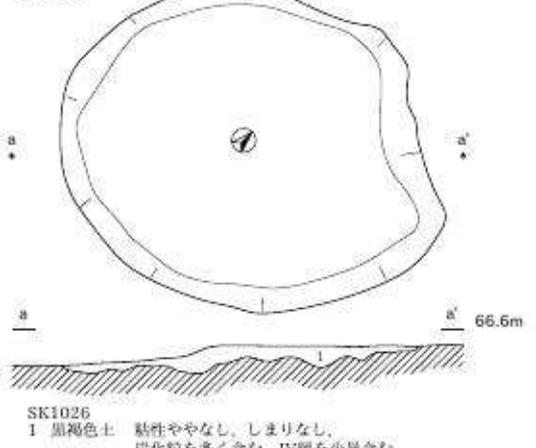
SK1023



SK1023

- 1 暗褐色土 粘性なし、しまりなし。
- 2 暗褐色土 粘性なし、しまりなし、1層よりやや暗い。炭化粒を微量に含む。
- 3 暗褐色土 粘性なし、しまりややなし。北面は1層より明るいためVII層が混入する。

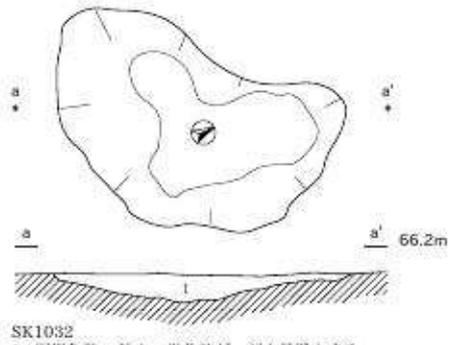
SK1026



SK1026

- 1 黒褐色土 粘性ややなし、しまりなし。炭化粒を多く含む、IV層を少量含む。

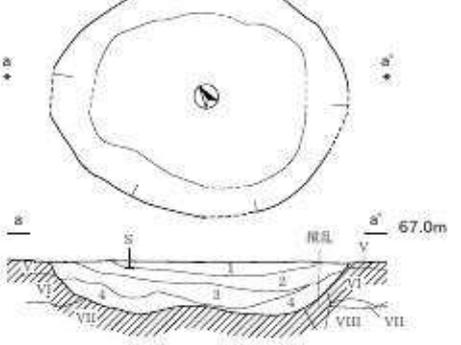
SK1032



SK1032

- 1 灰褐色砂 粘土・炭化粒が、が少量混入する。鈍い黄褐色砂がブロック状に混入する。しまりややあり。

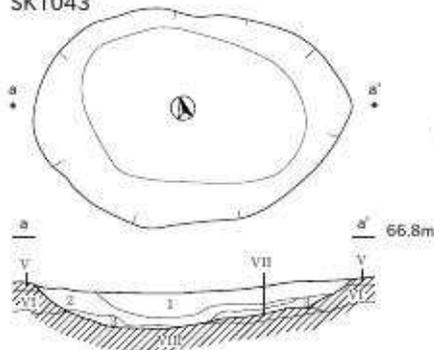
SK1041



SK1041

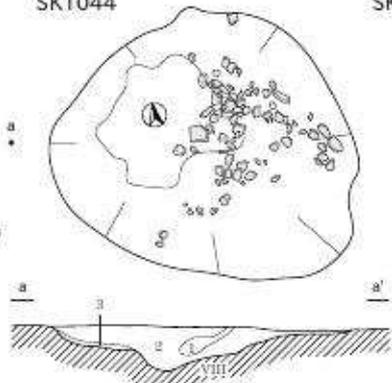
- 1 沼沢火山灰層 基本層IV層に同じ。
- 2 黒褐色シルト 炭化粒を多く含む、粘性ややあり、しまりややあり。
- 3 暗褐色シルト 粘性ややあり、1層よりしまりややなし。
- 4 暗黄褐色シルト 黄色砂質土がブロック状に混入する。VI・VII・VIII層の混合土。

SK1043



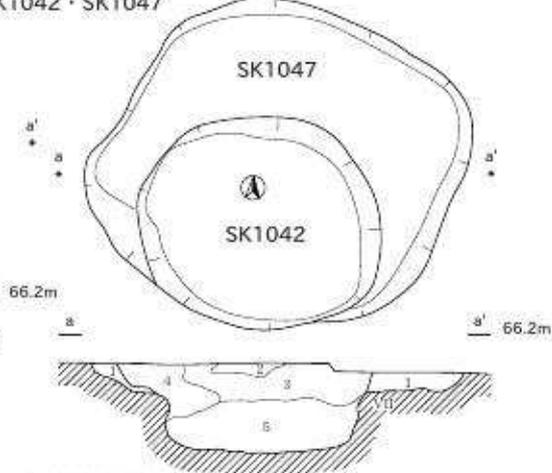
- SK1043
- 1 黒褐色シルト 炭化粒を少量含む。粘性ややあり、しまりややあり。
  - 2 暗褐色シルト VIII層が少量混入する。しまりややあり。
  - 3 暗褐色砂質土 2層とVIII層の混合土。粘性なし、しまりなし。

SK1044



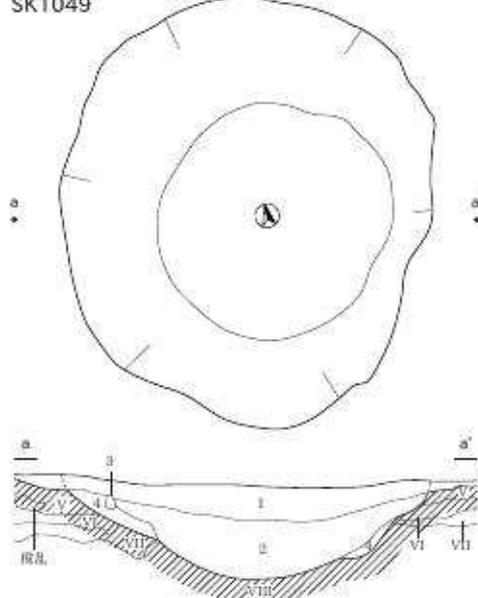
- SK1044
- 1 黒褐色土 (攪乱) 粘性ややなし、しまりなし。炭化粒を微量に含む。
  - 2 暗褐色土 粘性なし、しまりなし。
  - 3 暗褐色砂質土 2層とVII・VIII層の混合土。粘性なし、しまりなし。

SK1042・SK1047



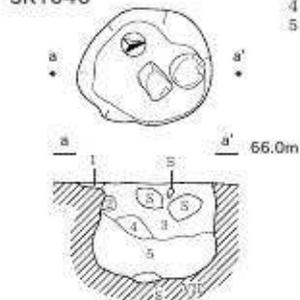
- SK1042・SK1047
- 1 黒褐色土 粘性なし、しまりややなし。VIII層が少量混入する。
  - 2 黒色土 粘性なし、しまりややなし。
  - 3 暗褐色土 粘性なし、しまりややなし。炭化粒を少量含む。
  - 4 暗褐色土 粘性なし、しまりややなし。3層よりやや暗い。
  - 5 暗褐色砂質土 粘性なし、しまりなし。VII層が混入する。

SK1049



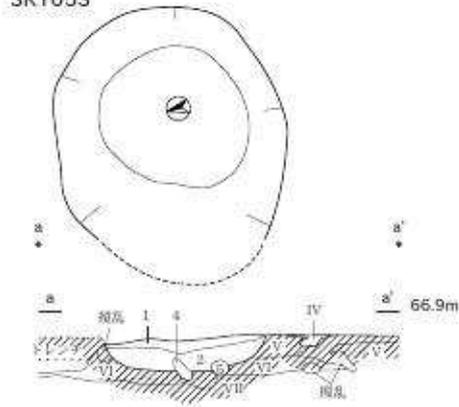
- SK1049
- 1 沼沢火山灰層 基本層IV層と同じ。
  - 2 黒色砂質土 粘性なし、しまりなし。
  - 3 暗褐色土 粘性なし、しまりなし。
  - 4 黒褐色土 粘性なし、しまりなし。1層とV・VI層の混合土。

SK1046



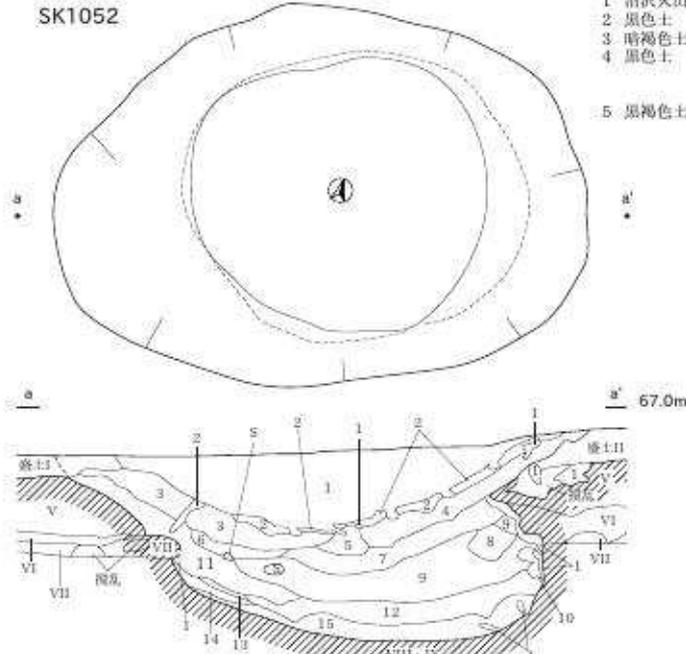
- SK1046
- 1 暗褐色砂質土 粘性なし、しまりなし。
  - 2 黒褐色土 (攪乱) 粘性なし、しまりなし。
  - 3 黒褐色土 2層より暗い。粘性なし、しまりややなし。
  - 4 黒褐色土 (攪乱) 粘性なし、しまりなし。
  - 5 黒褐色砂質土 3層より明るい。粘性なし、しまりややなし。

SK1053



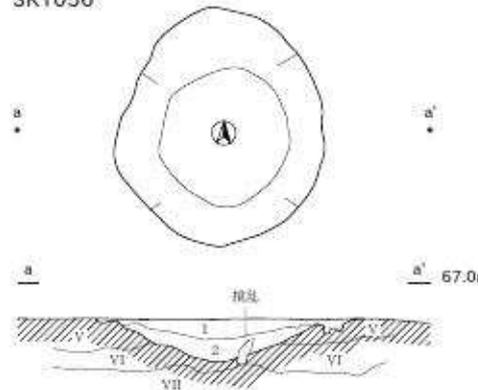
- SK1053
- 1 沼沢火山灰層 基本層IV層と同じ。
  - 2 黒色土 粘性なし、しまりなし。
  - 3 暗褐色土 粘性なし、しまりなし。
  - 4 黒色土 粘性なし、しまりなし。IV層が小ブロック状に混入する。
  - 5 黒褐色土 粘性なし、しまりなし。2層とVI層の混合土。2層より明るい。

SK1052

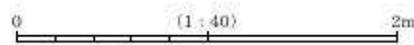


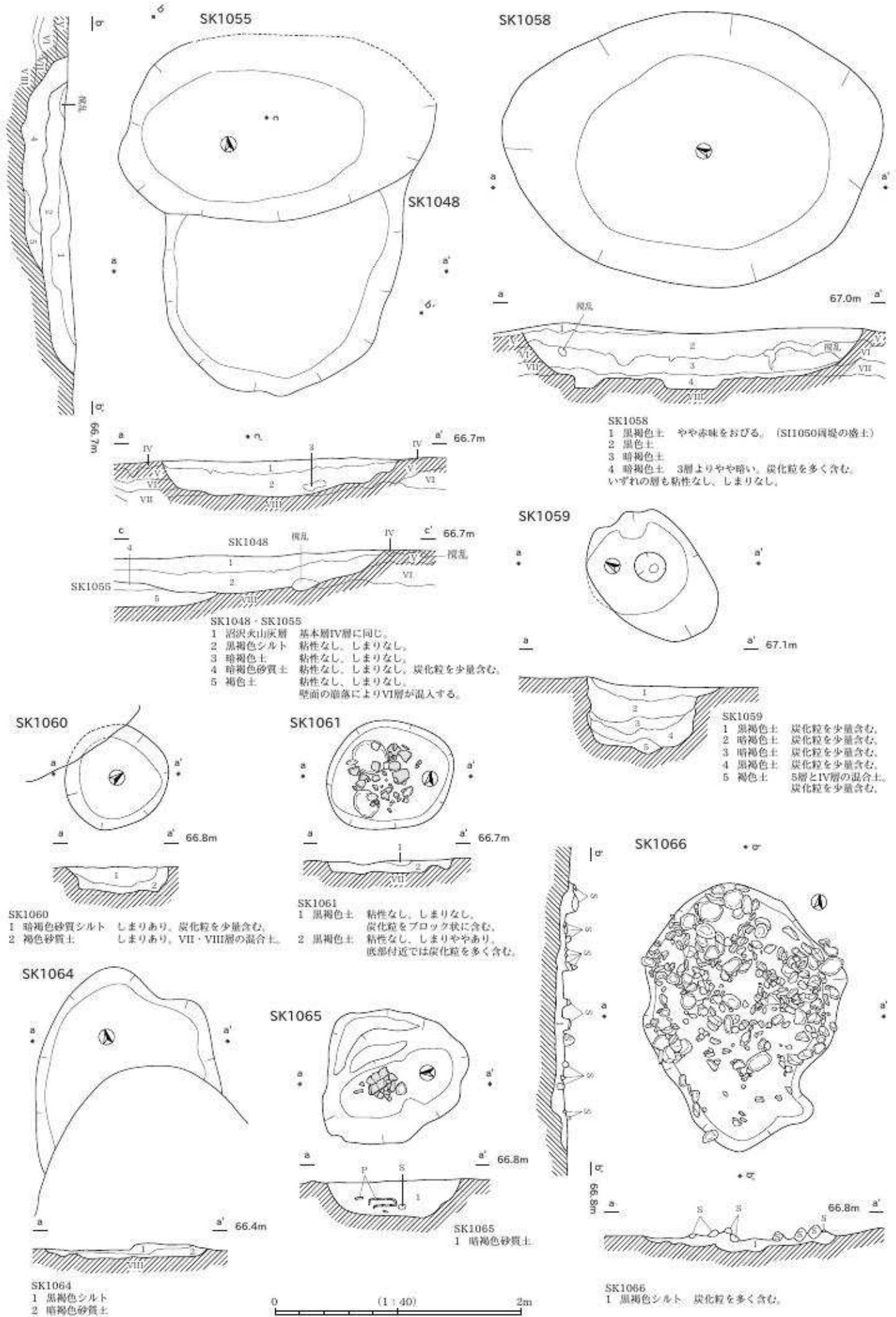
- SK1052
- 1 沼沢火山灰層 基本層IV層と同じ。
  - 2 暗褐色土 1・3・4層の混合土。1層がブロック状に入る。
  - 3 暗褐色砂質土 盛土Iの流れ込み土。小塊が混入する。
  - 4 黒褐色土 盛土Iの流れ込み土。炭化粒を微量に含む。
  - 5 黒褐色砂質土 4層よりやや暗い。3・4層の混合土。
  - 6 暗褐色砂質土 3層よりやや明るい。VII層が崩落により混入する。
  - 7 暗褐色土 6層に近い部分はやや砂っぽい。炭化粒をやや多く含む。
  - 8 黒色土
  - 9 黒褐色土 7層よりやや暗い。11層に近い部分はやや砂っぽい。炭化粒を含まない。
  - 10 褐色砂質土 9・12層と基本層VIII層崩落土の混合土。炭化粒を少量含む。
  - 11 黒褐色砂質土
  - 12 黒褐色土
  - 13 暗褐色砂質土 11層と基本層VIII層崩落土の混合土。
  - 14 黒色砂質土
  - 15 黒褐色土 12層よりやや明るい。いずれの層も粘性なし、しまりなし。

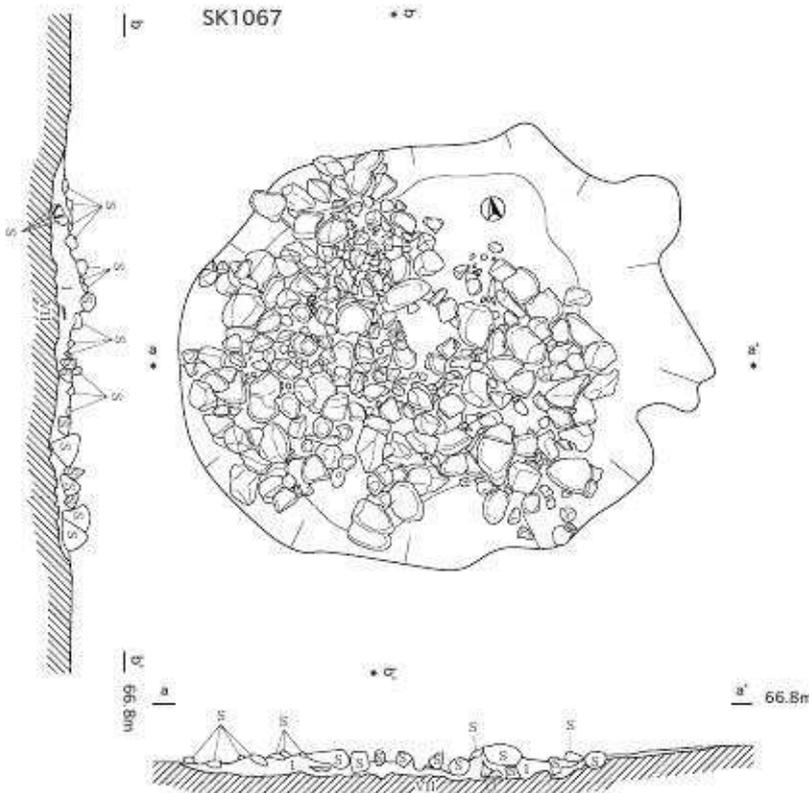
SK1056



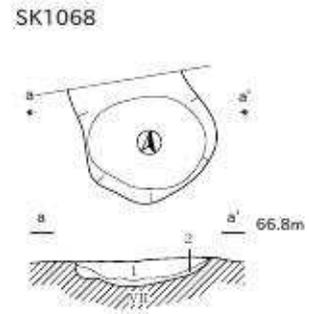
- SK1056
- 1 沼沢火山灰層 基本層IV層と同じ。
  - 2 黒褐色土 粘性なし、しまりなし。



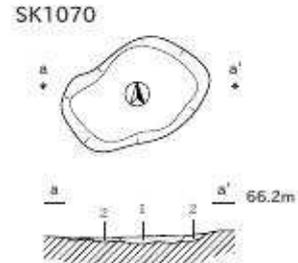




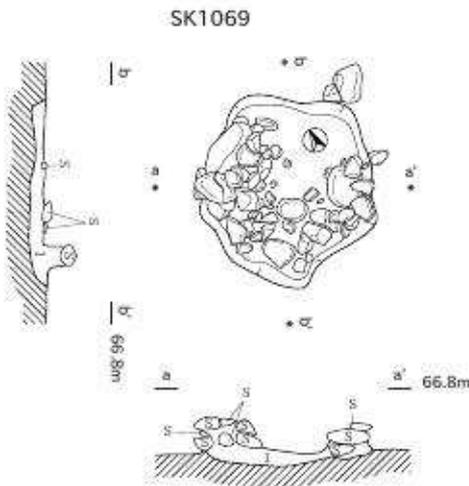
SK1067  
1 黒色土 しまりなし、粘性ややあり。  
炭化粒を多く含む。



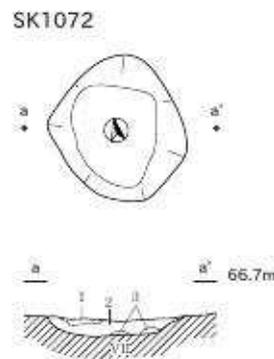
SK1068  
1 黒褐色土 粘性なし、しまりややあり。  
炭化粒をブロック状に少量含む。  
2 黒褐色土 粘性なし、しまりなし。  
VII層が混じり、1層より明るい。



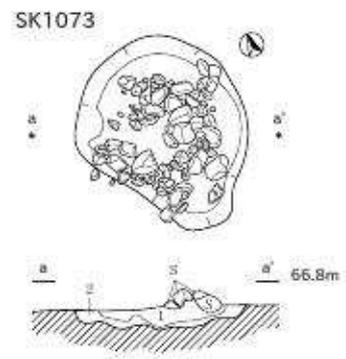
SK1070  
1 褐色砂質土 粘性なし、しまりなし。  
2 暗褐色砂質土 粘性なし、しまりなし。



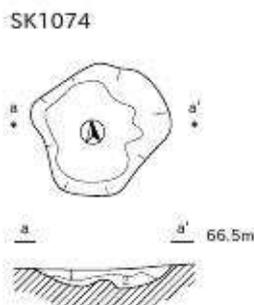
SK1069  
1 黒褐色シルト 炭化粒を多く含む。  
下層には被熱小礫を多く含む。



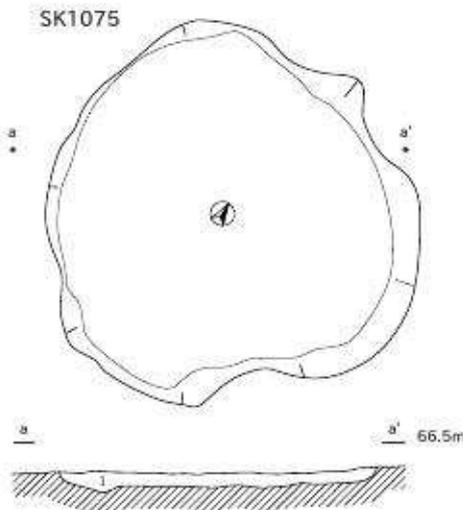
SK1072  
1 黒褐色土 粘性なし、しまりなし。  
2 暗褐色土 粘性なし、しまりなし。  
炭化粒を微量に含む。  
3 褐色砂質土 粘性なし、しまりなし。



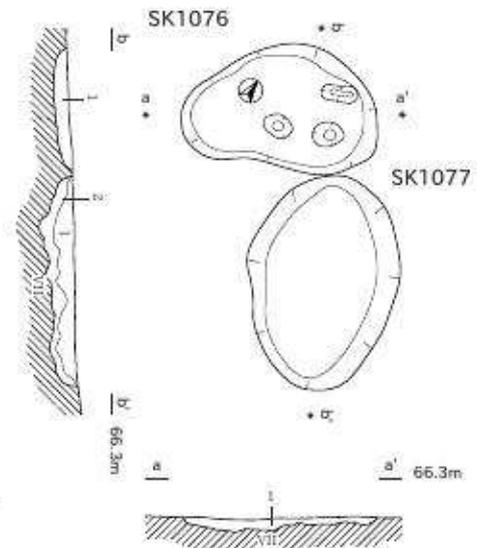
SK1073  
1 黒色土 粘性なし、しまりなし。  
炭化粒をブロック状に含む。  
2 暗褐色砂質土 粘性なし、しまりなし。  
VIII層が少量混入する。



SK1074  
1 暗褐色砂質土 炭化粒を少量含む。  
2 褐色砂



SK1075  
1 暗褐色砂質土



SK1076・SK1077  
1 黒褐色シルト しまりあり、炭化粒を多く含む。  
2 暗褐色シルト しまりあり、1層とVII層の混合土。  
炭化粒をほとんど含まない。

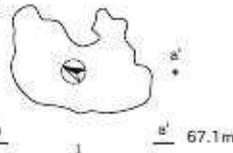
SD1030



SD1030

- 1 暗褐色土 粘性なし、しまりややなし。2層よりやや黒が多く、やや暗い。
- 2 暗褐色土 粘性なし、しまりややなし。
- 3 黒褐色土 粘性なし、しまりややなし。2層とV層の混合土。

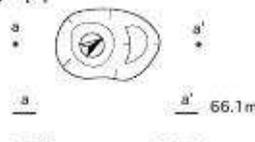
SX1062



SX1062

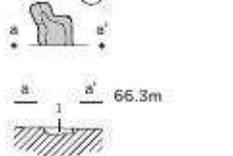
- 1 暗褐色砂質土 砂質シルトと暗褐色土の混合土。極めてしまりがあり、堅い。径2~3cmの礫を少量含む。

6C・P1



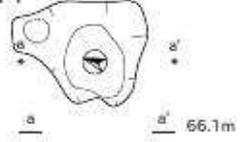
6C・1号焼土

6C・1号焼土

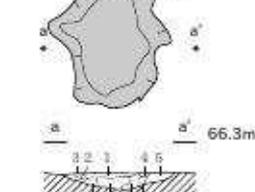


- 1 明赤褐色土 しまりあり、堅い。

7C・P1

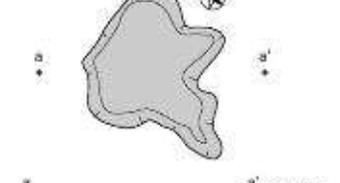


7C・1号焼土



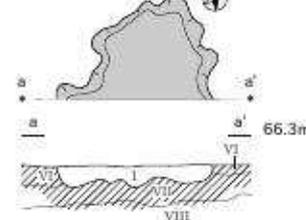
- 7C・1号焼土
- 1 赤褐色土
- 2 暗赤褐色土
- 3 暗褐色土
- 4 黒色土
- 5 黒褐色土

8D・1号焼土



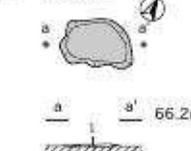
- 8D・1号焼土
- 1 暗褐色土 橙色を帯びる。しまりあり、堅い。
- 2 黒褐色土 しまりあり、堅い。
- 3 暗赤褐色土 しまりあり、堅い。

8D・2号焼土



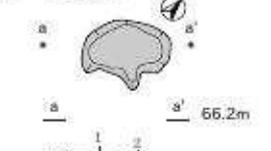
- 8D・2号焼土
- 1 暗褐色土 橙色を帯びる。しまりあり、堅い。

11B・1号焼土



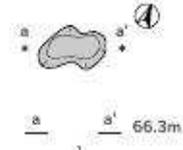
- 11B・1号焼土
- 1 橙色焼土 シルト質、炭化粒を少量含む、粘性なし。

11D・1号焼土



- 11D・1号焼土
- 1 橙色焼土 シルト質、炭化粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 1層が混入する。

12B・1号焼土



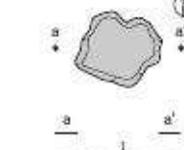
- 12B・1号焼土
- 1 橙色焼土 シルト質、炭化粒を少量含む、粘性なし。

12B・2号焼土



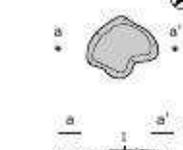
- 12B・2号焼土
- 1 橙色焼土 シルト質、炭化粒を少量含む、粘性なし。

12B・3号焼土



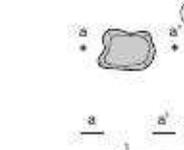
- 12B・3号焼土
- 1 橙色焼土 シルト質、炭化粒を少量含む、粘性なし。

12B・4号焼土



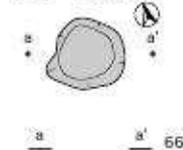
- 12B・4号焼土
- 1 橙色焼土 シルト質、炭化粒を少量含む、粘性なし。

12B・5号焼土



- 12B・5号焼土
- 1 橙色焼土 シルト質、炭化粒を少量含む、粘性なし。

12C・1号焼土



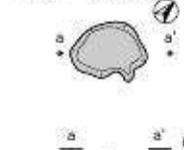
- 12C・1号焼土
- 1 橙色焼土 シルト質、炭化粒を少量含む。
- 2 黄褐色焼土 シルト質、炭化粒を少量含む。

12C・2号焼土



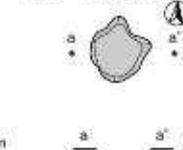
- 12C・2号焼土
- 1 橙色焼土 シルト質、炭化粒を少量含む。
- 2 黄褐色焼土 シルト質、炭化粒を少量含む。

12D・1号焼土



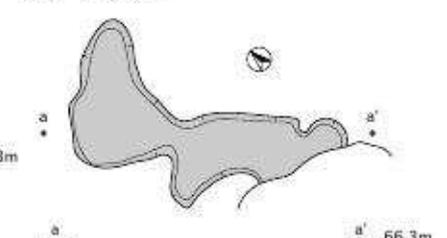
- 12D・1号焼土
- 1 橙色焼土 炭化粒を少量含む。

12D・2号焼土



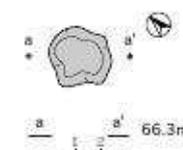
- 12D・2号焼土
- 1 橙色焼土 炭化粒を少量含む。

12D・3号焼土



- 12D・3号焼土
- 1 黒色炭化材
- 2 黄褐色焼土、炭化粒を含む。
- 3 暗褐色土、2層が少量混入する。

12E・1号焼土



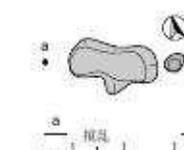
- 12E・1号焼土
- 1 明赤褐色焼土 シルト質、しまりあり、堅い。
- 2 極暗赤褐色焼土 シルト質、しまりあり、堅い。

12F・1号焼土



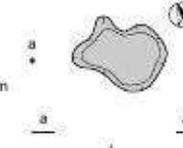
- 12F・1号焼土
- 1 赤褐色土 粘性ややなし、しまりややあり。
- 2 暗褐色土 粘性なし、しまりなし。1層とV層の混合土。
- 3 暗褐色砂質土 粘性なし、しまりなし。2層よりやや暗い。

12G・1号焼土



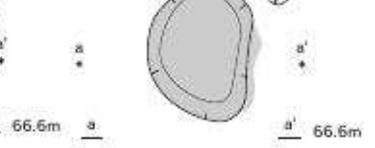
- 12G・1号焼土
- 1 橙色焼土 シルト質、炭化粒を少量含む。

13B・1号焼土

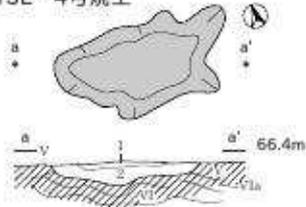


- 13B・1号焼土
- 1 焼土 黒褐色土を多く含む。

13D・1号焼土

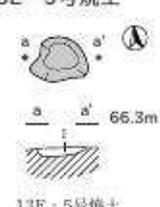


13E・4号焼土



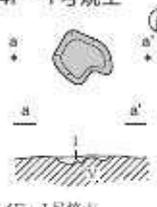
13E・4号焼土  
1 赤褐色シルト  
2 暗赤褐色シルト

13E・5号焼土



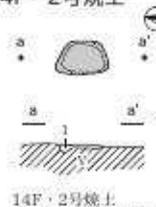
13E・5号焼土  
1 暗赤褐色土

14F・1号焼土



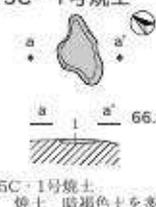
14F・1号焼土  
1 暗赤褐色土 粘性なし、しまりなし。

14F・2号焼土



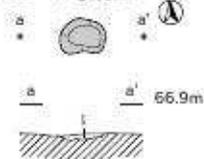
14F・2号焼土  
1 褐色土 粘性なし、しまりなし。

15C・1号焼土



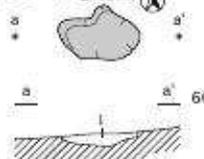
15C・1号焼土  
1 焼土 暗褐色土を多く含む。

15D・1号焼土



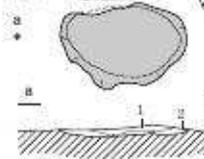
15D・1号焼土  
1 暗赤褐色土 しまりなし、粘性ややあり。

15G・1号焼土



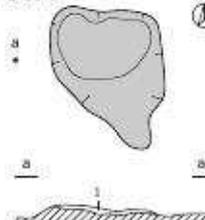
15G・1号焼土  
1 暗赤褐色土 粘性なし、しまりなし。  
焼土とV層の混合土。

16B・1号焼土



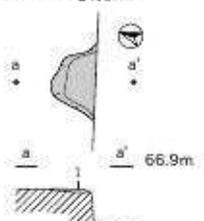
16B・1号焼土  
1 焼土 黒褐色土を少量含む。  
2 黒褐色土 焼土を少量含む。

16D・1号焼土



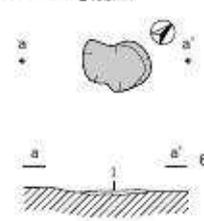
16D・1号焼土  
1 焼土と暗褐色土の混合土

16D・2号焼土



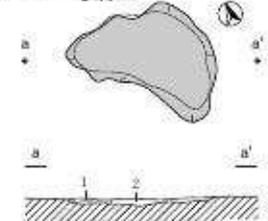
16D・2号焼土  
1 暗赤褐色土 しまりあり、堅い。  
粘性ややあり。炭化粒を  
少量含む。

16E・1号焼土



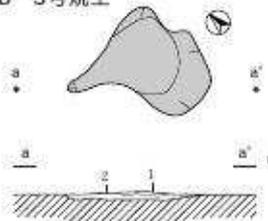
16E・1号焼土  
1 暗赤褐色土 粘性なし、しまりなし。

17B・2号焼土



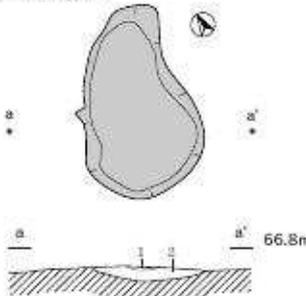
17B・2号焼土  
1 焼土 黒褐色土を少量含む。  
2 黒褐色土 焼土を少量含む。

17B・3号焼土



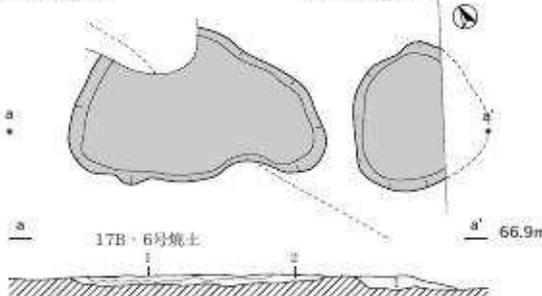
17B・3号焼土  
1 焼土 黒褐色土を少量含む。  
2 黒褐色土 焼土を少量含む。

SI1034炉2



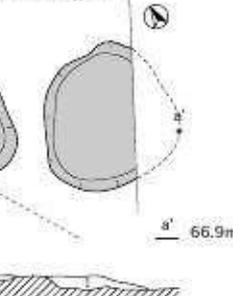
17B・4号焼土  
1 焼土  
2 焼土と褐色砂の混合土。

SI1034炉3



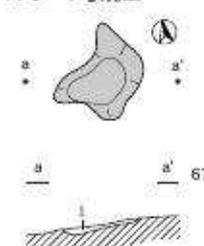
17B・6号焼土  
1 焼土  
2 焼土と褐色砂の混合土。

SI1034炉1



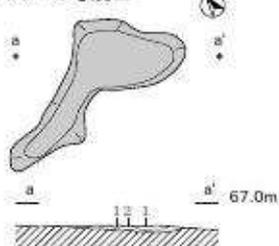
SI1034炉  
1 黒褐色シルト 焼土を多く含む。

17C・1号焼土



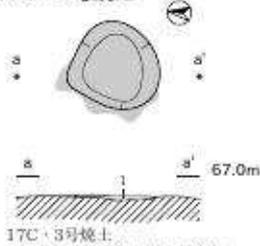
17C・1号焼土  
1 焼土と暗褐色土の混合土。

17C・2号焼土



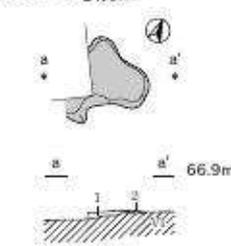
17C・2号焼土  
1 焼土 黒褐色土を少量含む。  
2 黒褐色土 焼土を少量含む。

17C・3号焼土



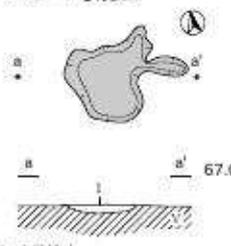
17C・3号焼土  
1 焼土 黒褐色土を少量含む。

17D・1号焼土



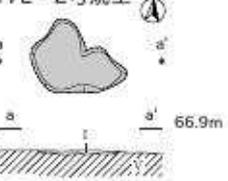
17D・1号焼土  
1 褐色土 しまりあり、炭化粒を  
少量含む。  
2 暗褐色土 しまりあり、1層より密い。

17E・1号焼土



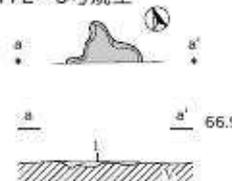
17E・1号焼土  
1 赤褐色土 粘性なし、しまりなし。

17E・2号焼土



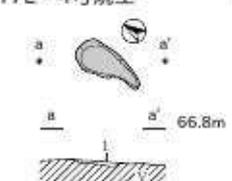
17E・2号焼土  
1 明褐色土 粘性なし、  
しまりなし。

17E・3号焼土



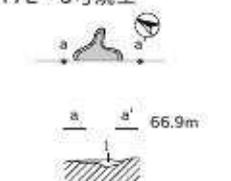
17E・3号焼土  
1 褐色土 粘性なし、  
しまりなし。

17E・4号焼土



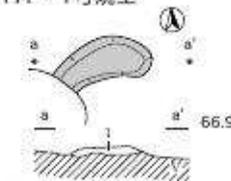
17E・4号焼土  
1 褐色土 粘性なし、  
しまりなし。

17E・5号焼土

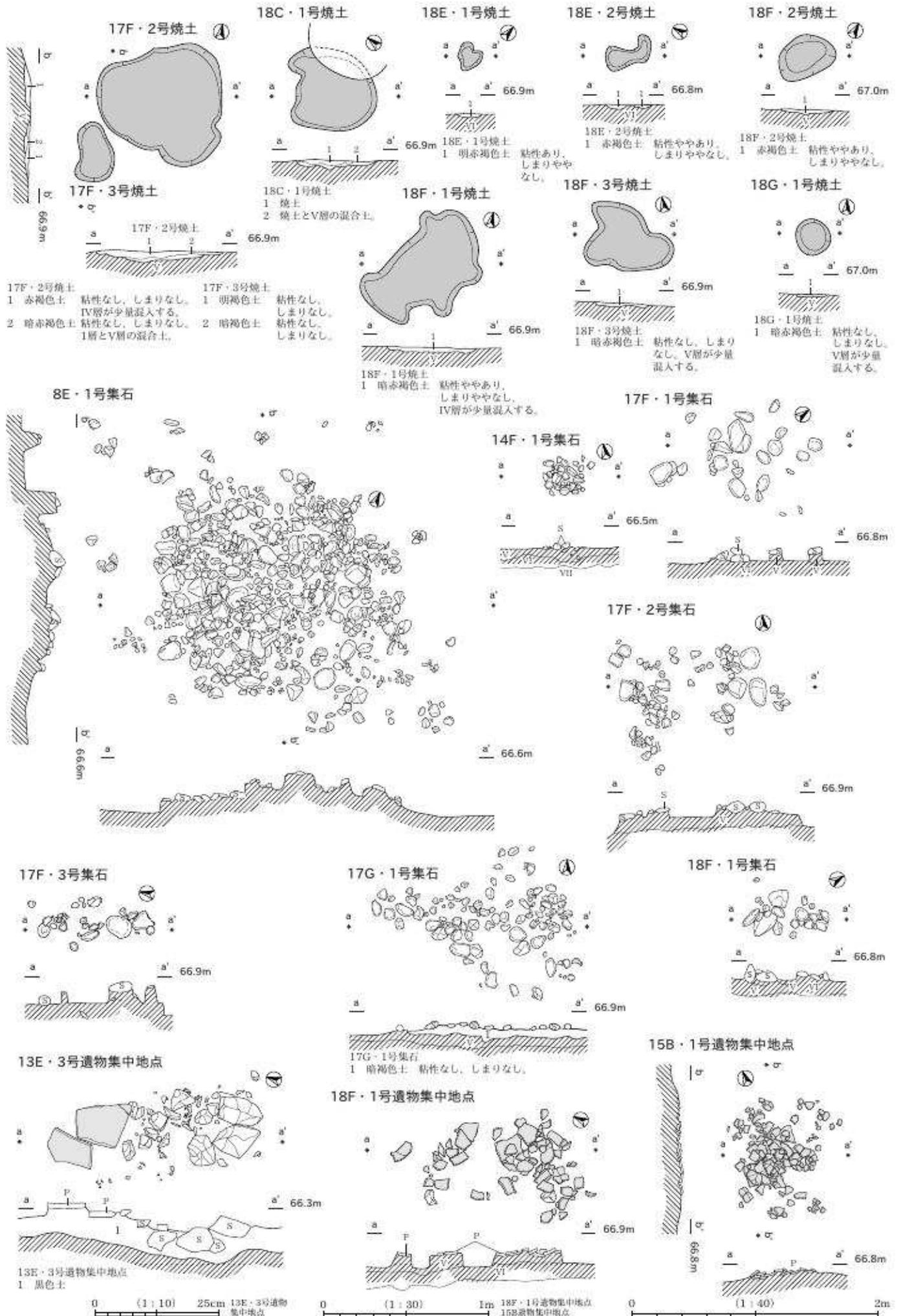


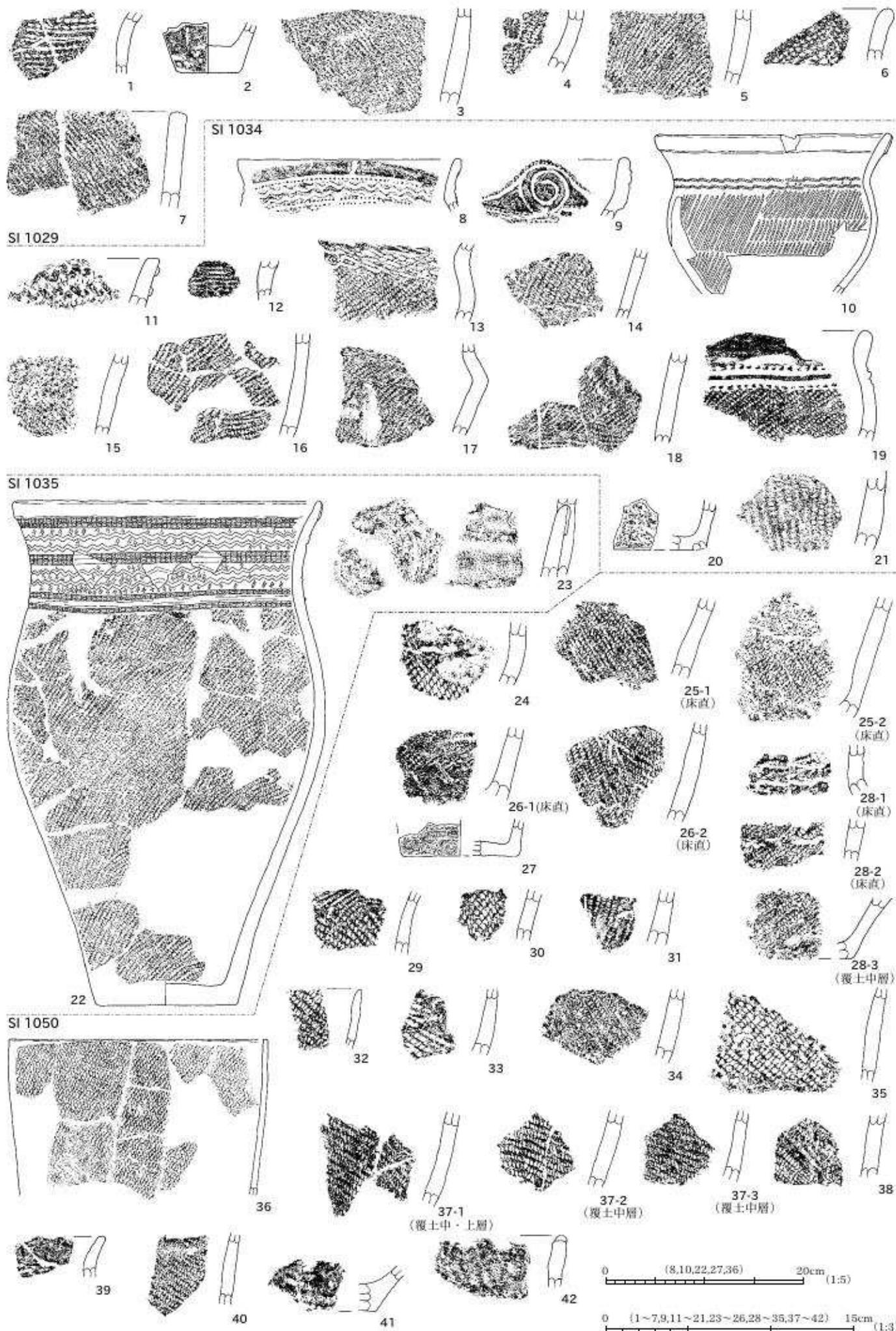
17E・5号焼土  
1 暗赤褐色土 しまりあり。  
炭化粒を少量含む。

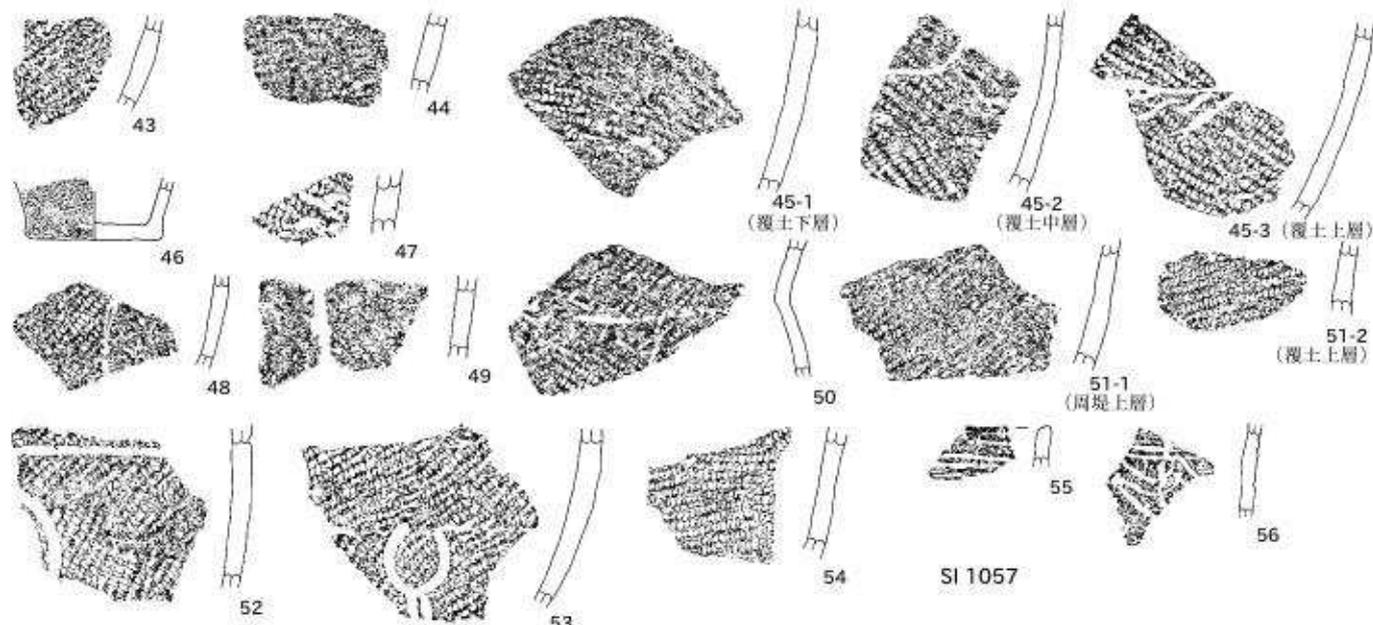
17F・1号焼土



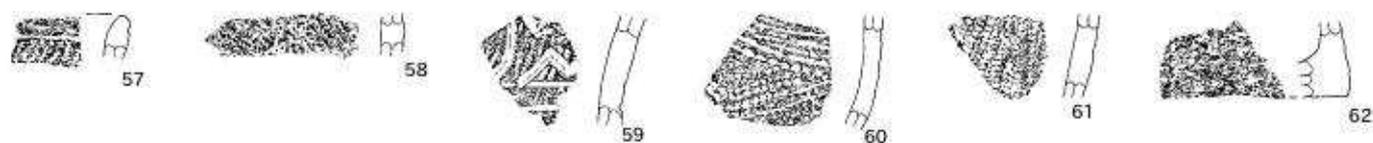
17F・1号焼土  
1 赤褐色土 粘性なし、しまり  
なし。西側にはV  
層が少量混入する。



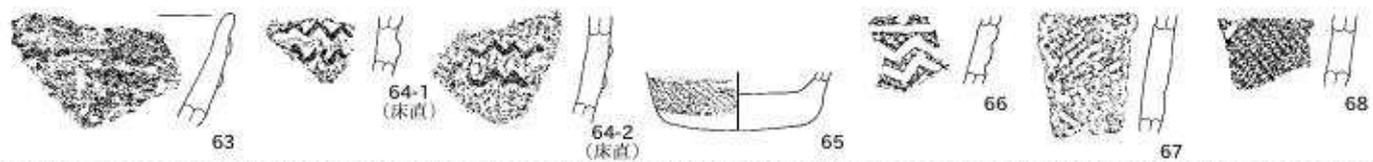




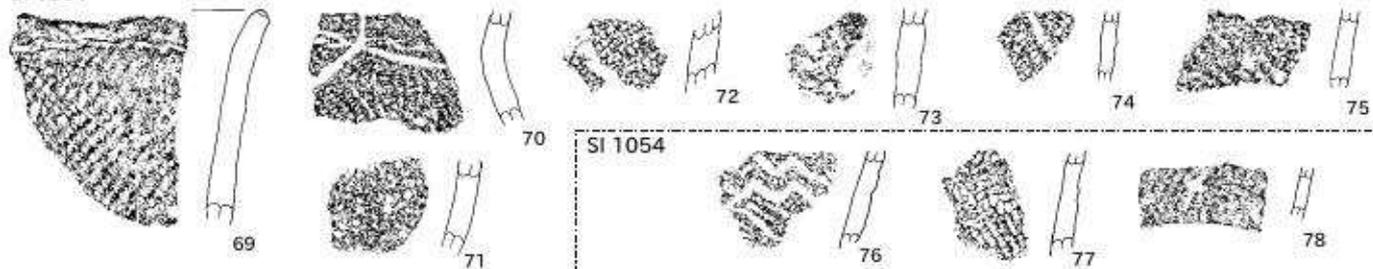
SI 1027



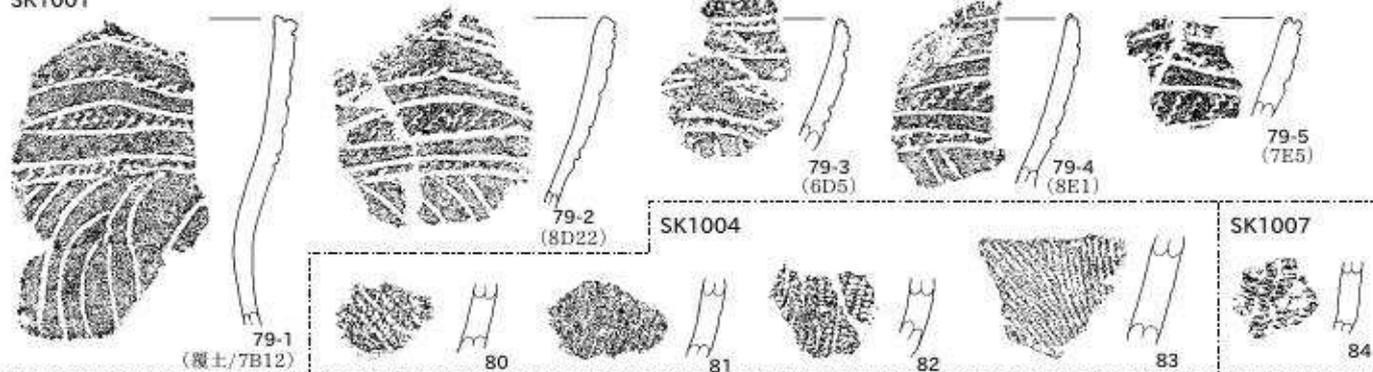
SI 1036



SI 1051



SK1001

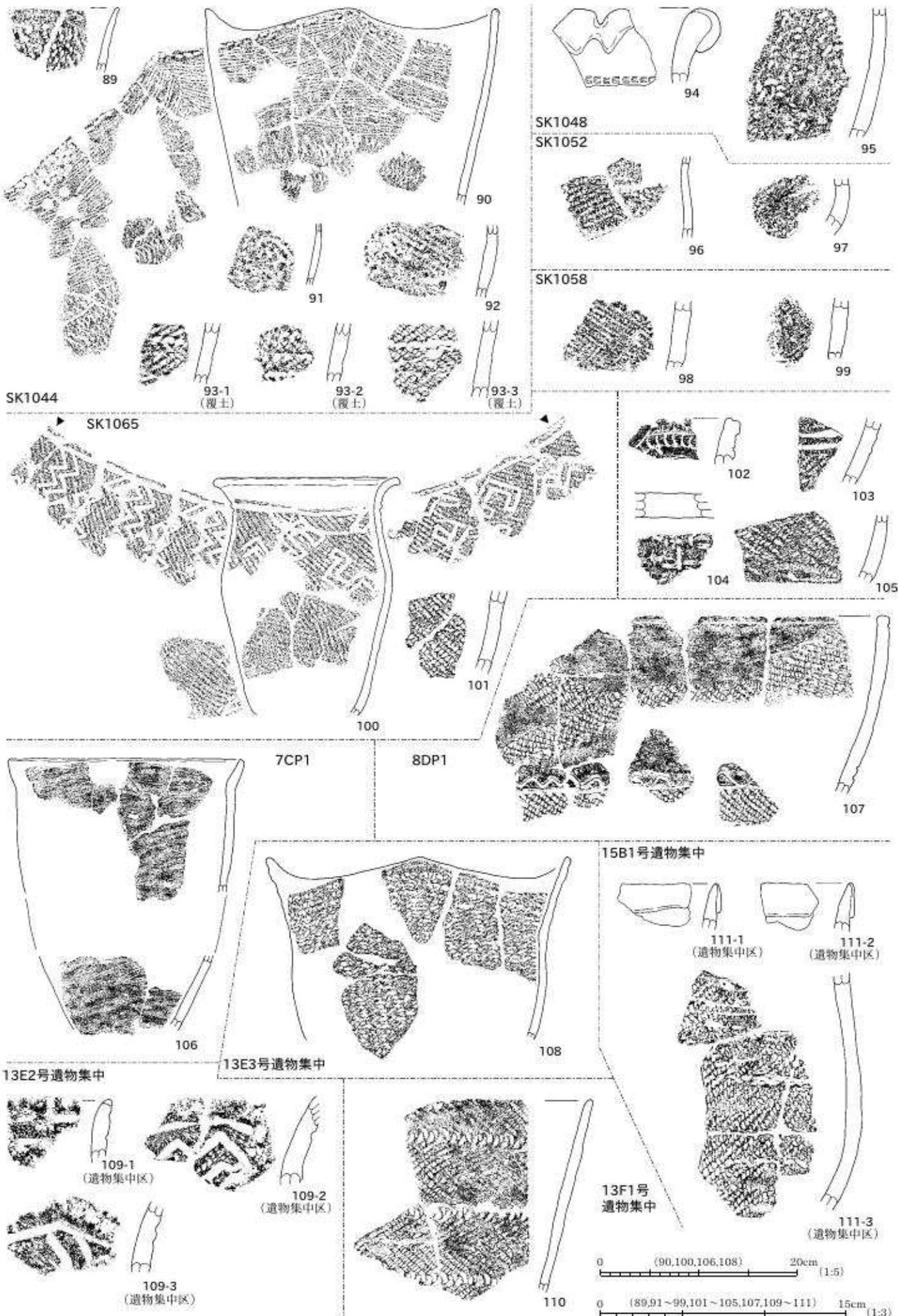


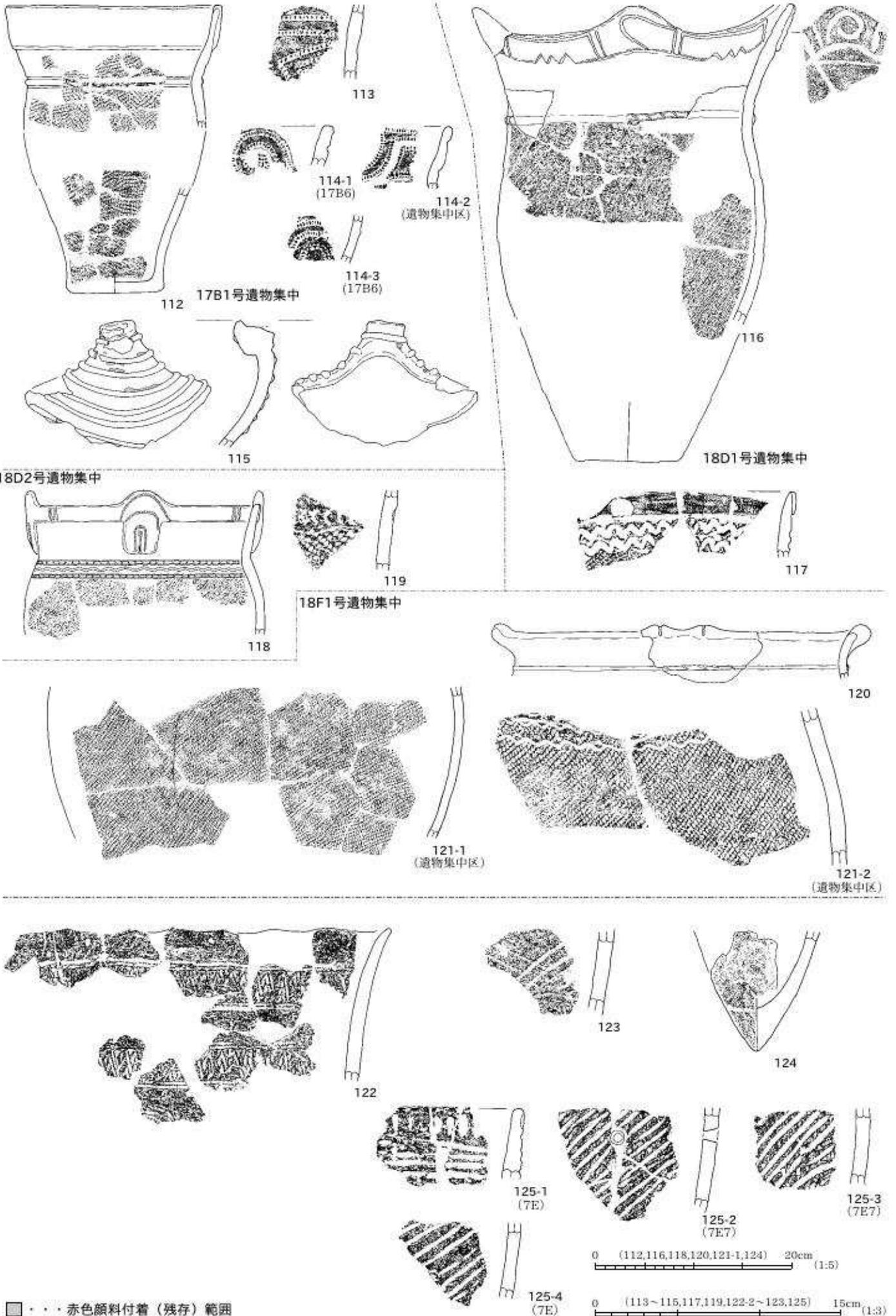
SI1040



0 (46,65,87) 20cm (1:5)

0 (43~45,47~64,66~86,88) 15cm (1:3)





17B1号遺物集中

114-2 (遺物集中区)

114-3 (17B6)

18D1号遺物集中

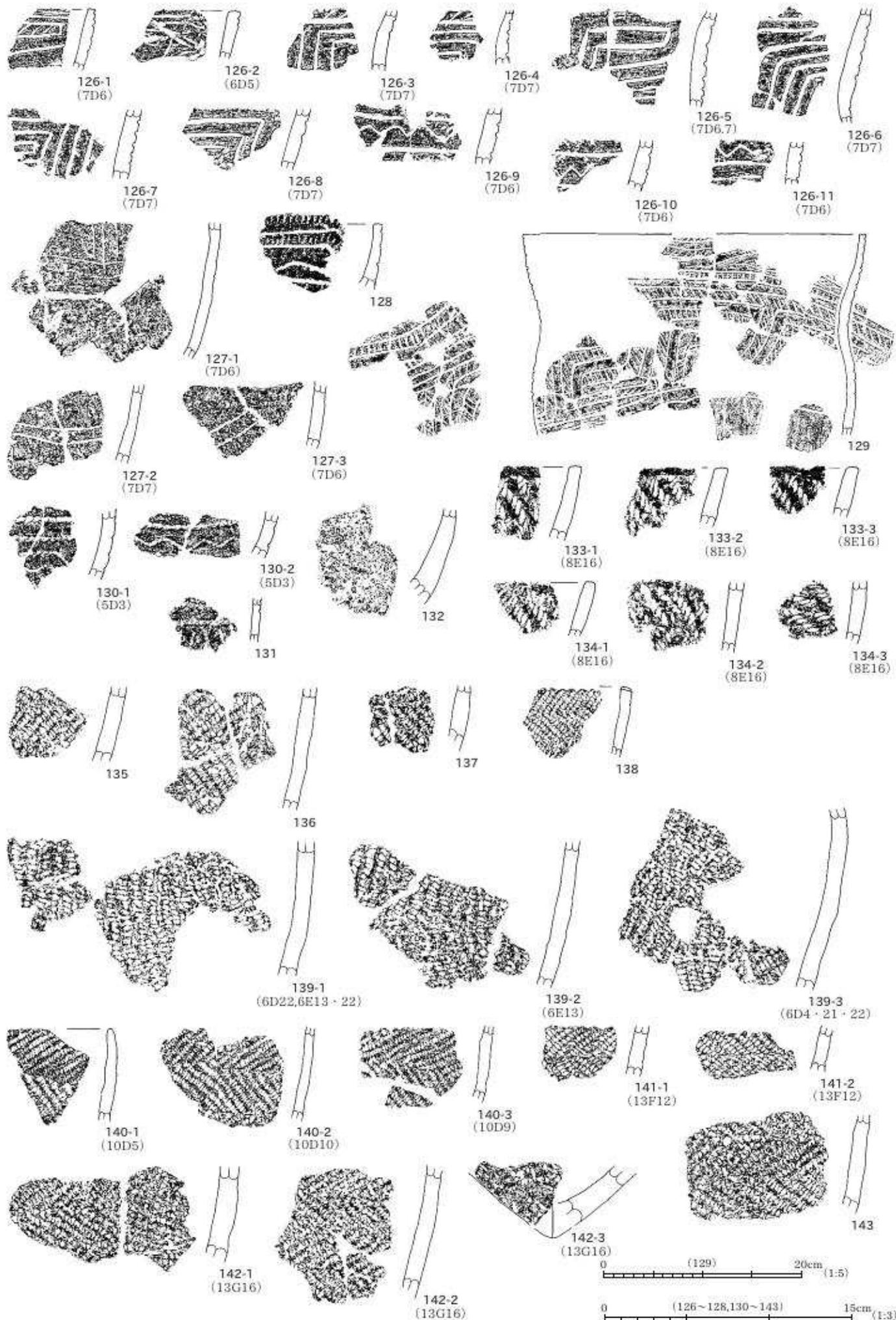
18D2号遺物集中

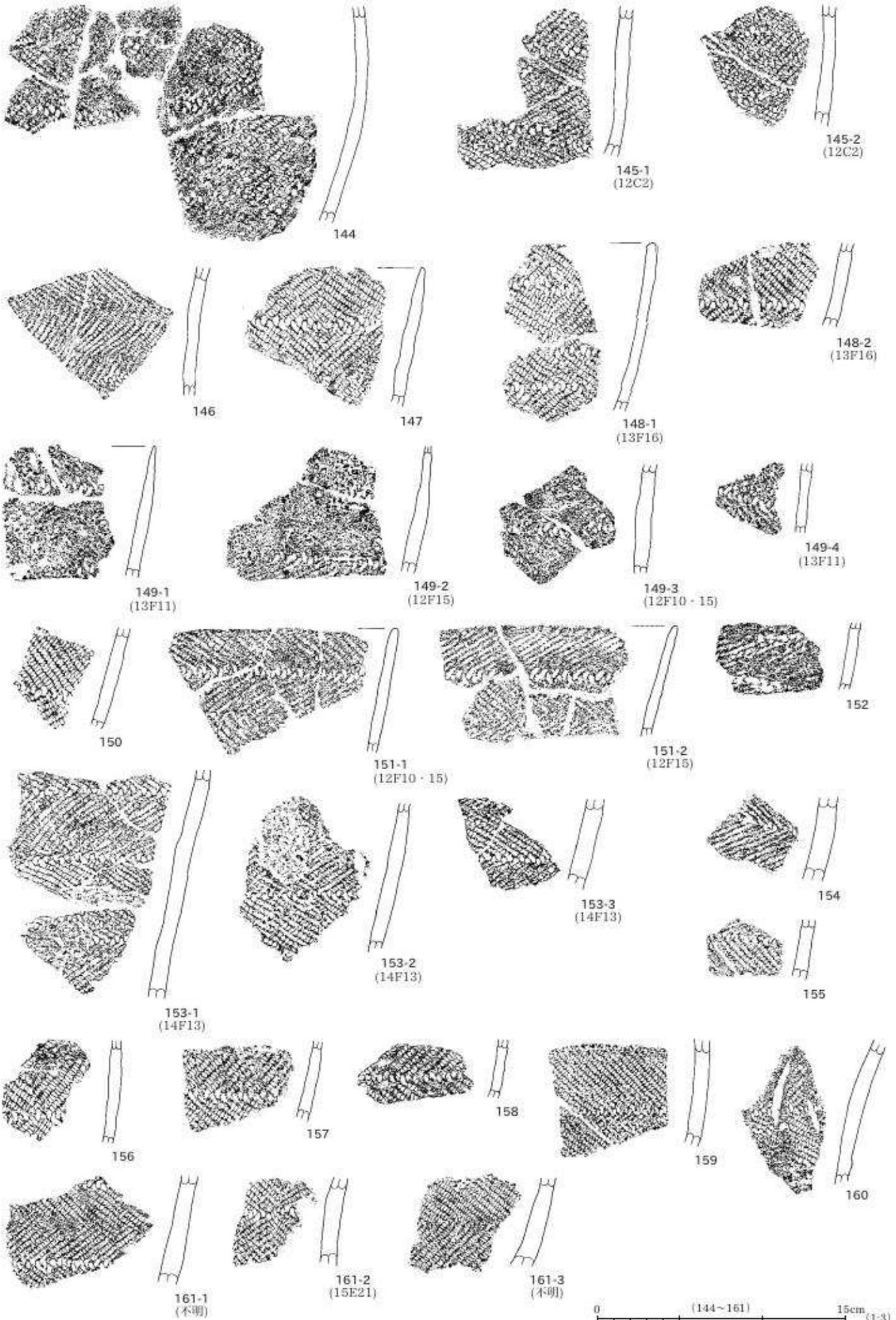
18F1号遺物集中

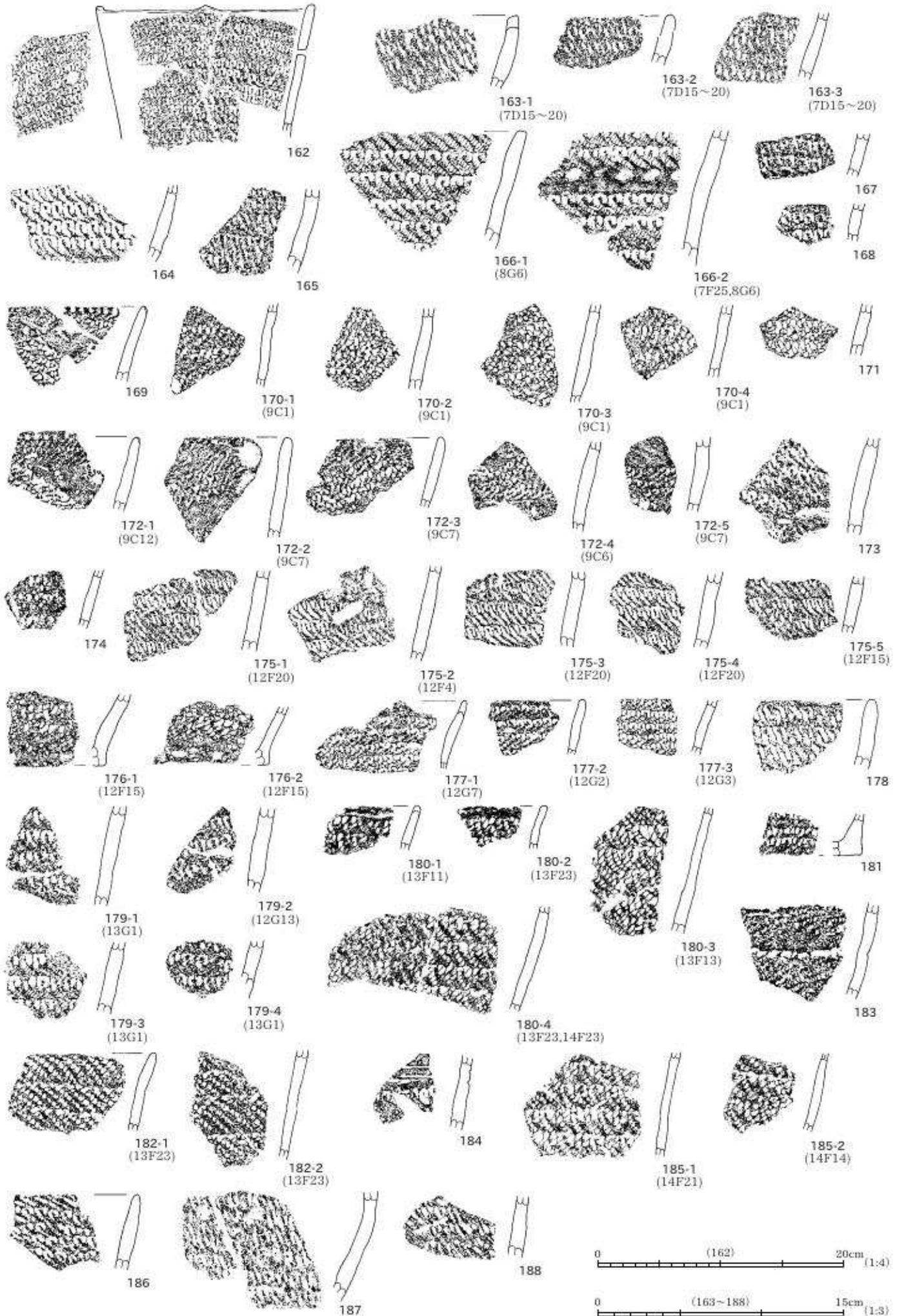
■ . . . 赤色顔料付着 (残存) 範囲

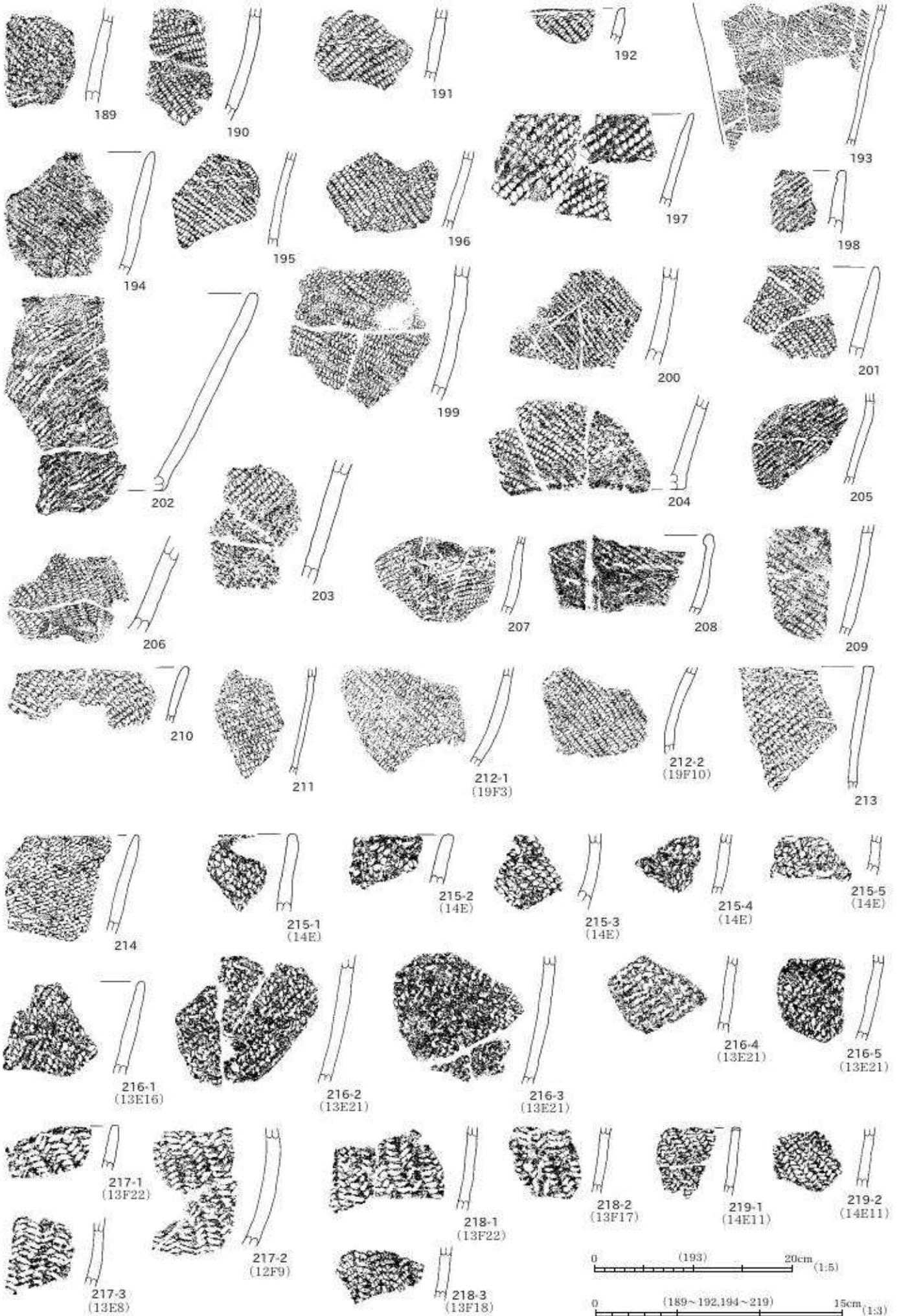
0 (112,116,118,120,121-1,124) 20cm (1:5)

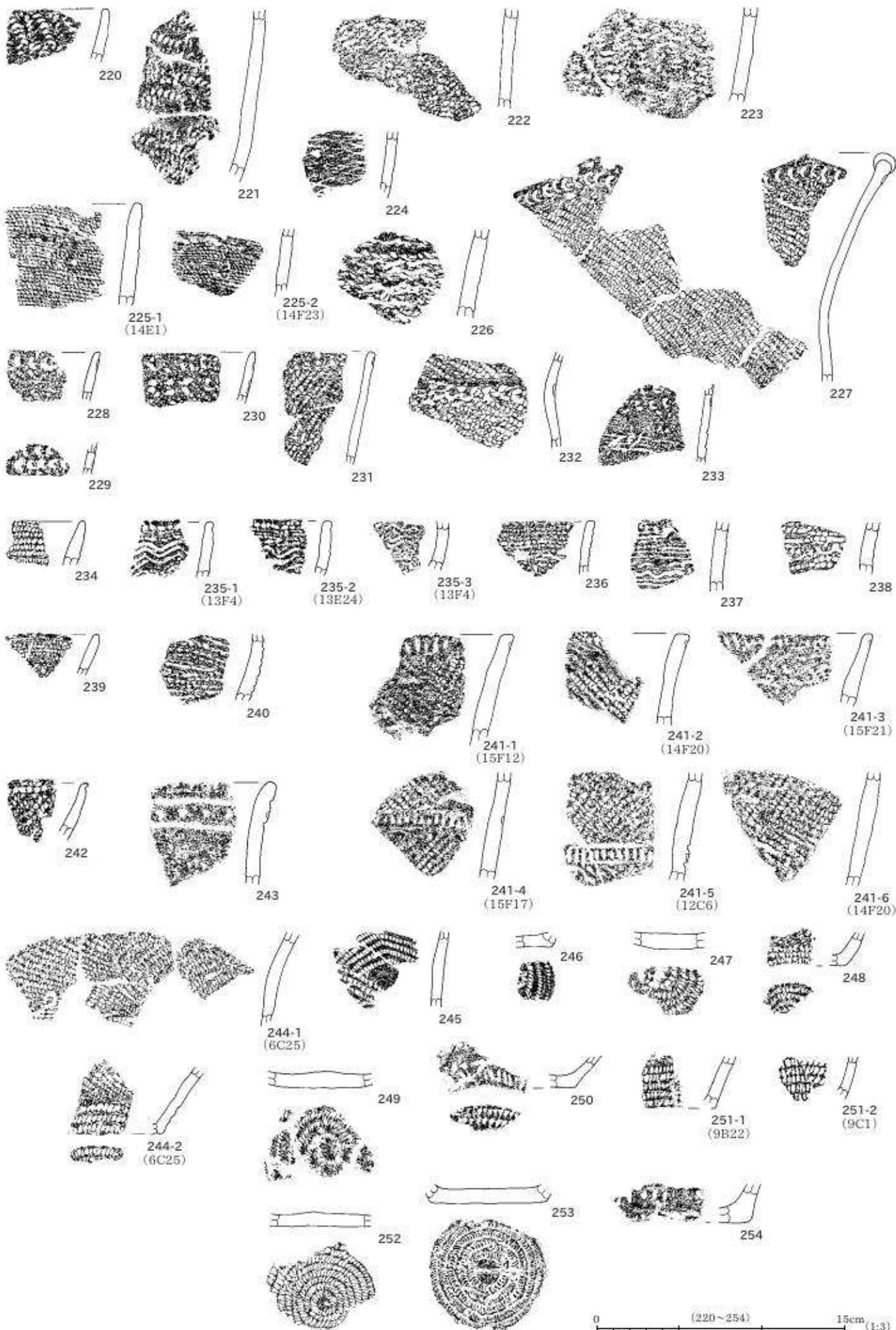
0 (113~115,117,119,122-2~123,125) 15cm (1:3)

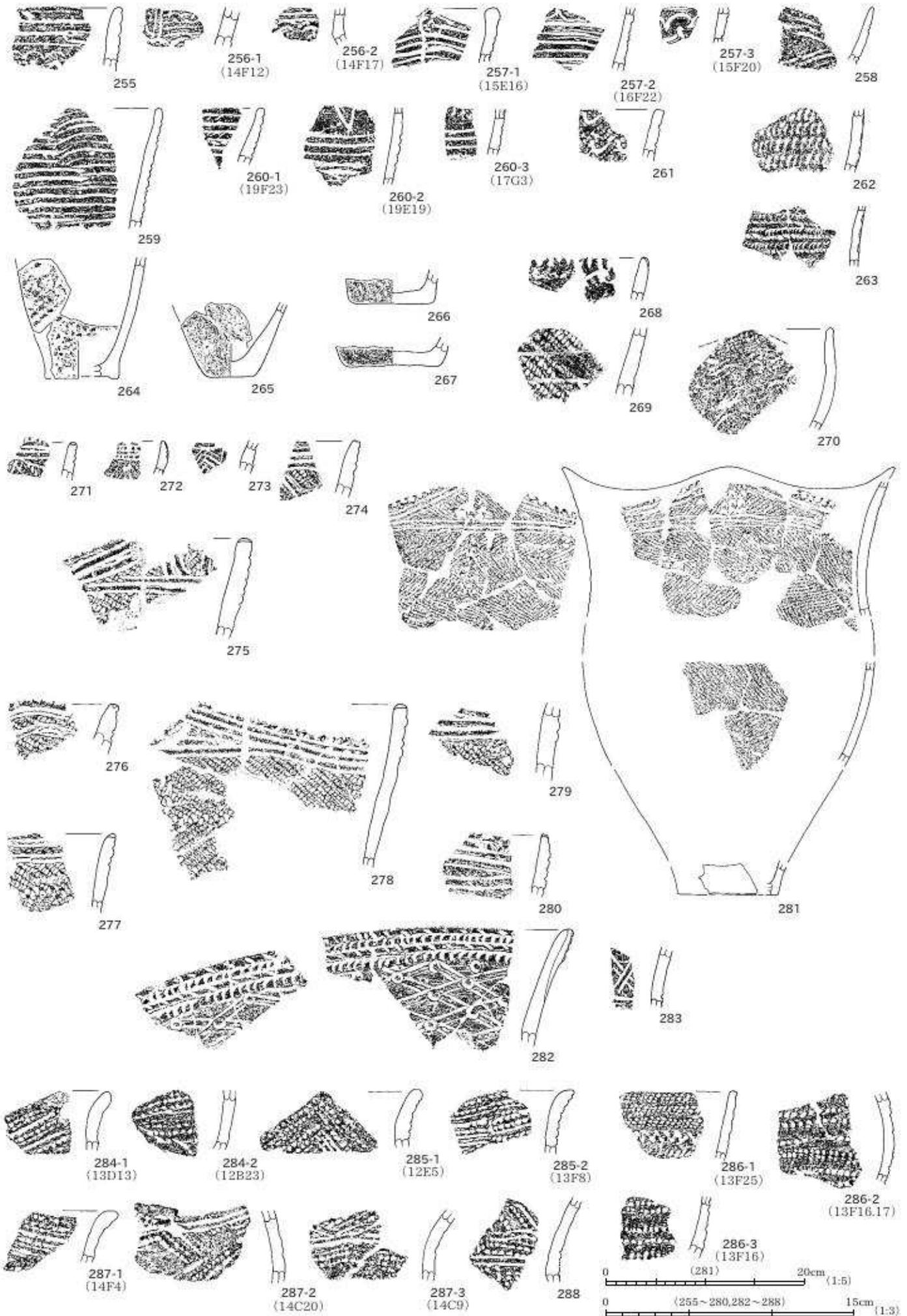








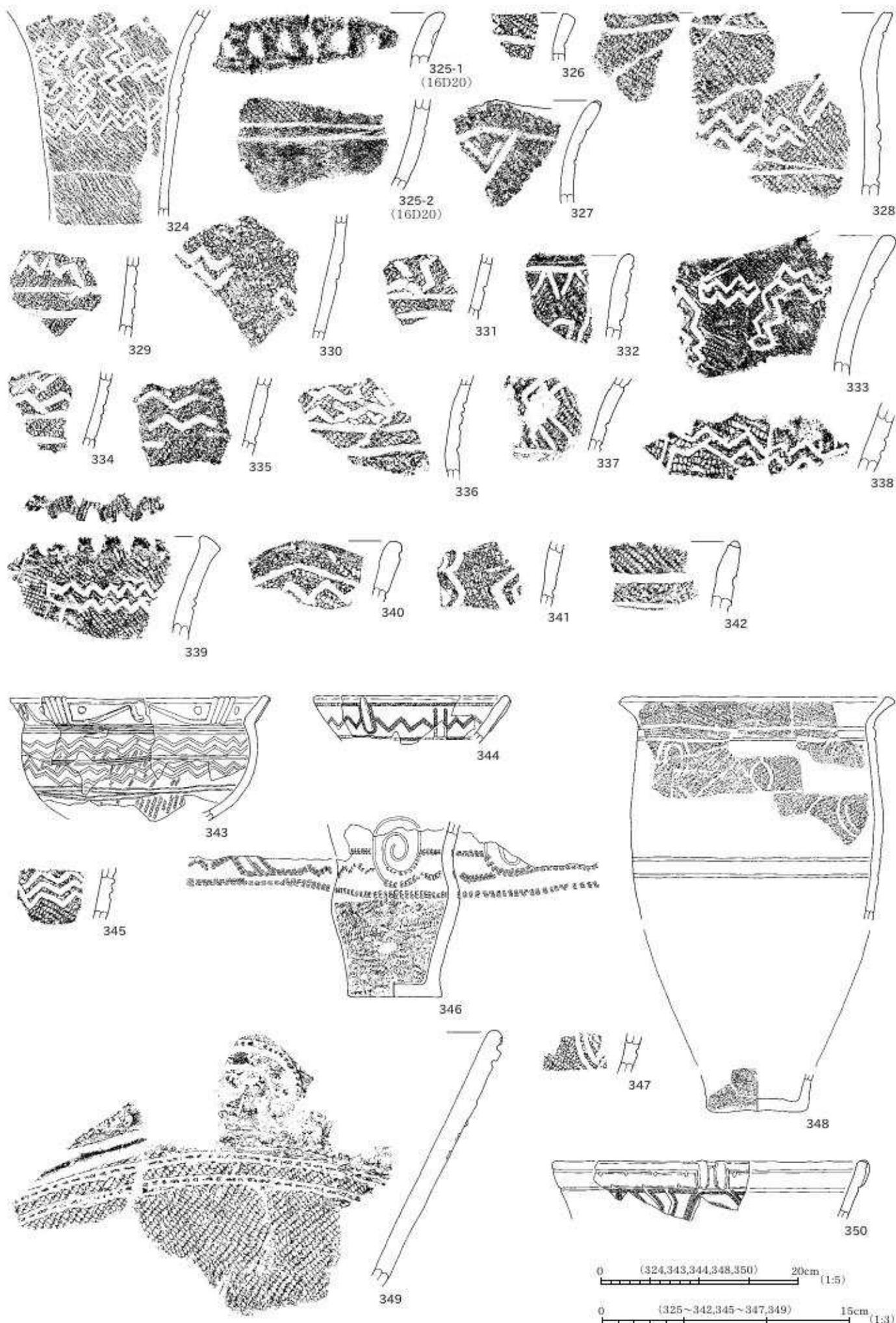


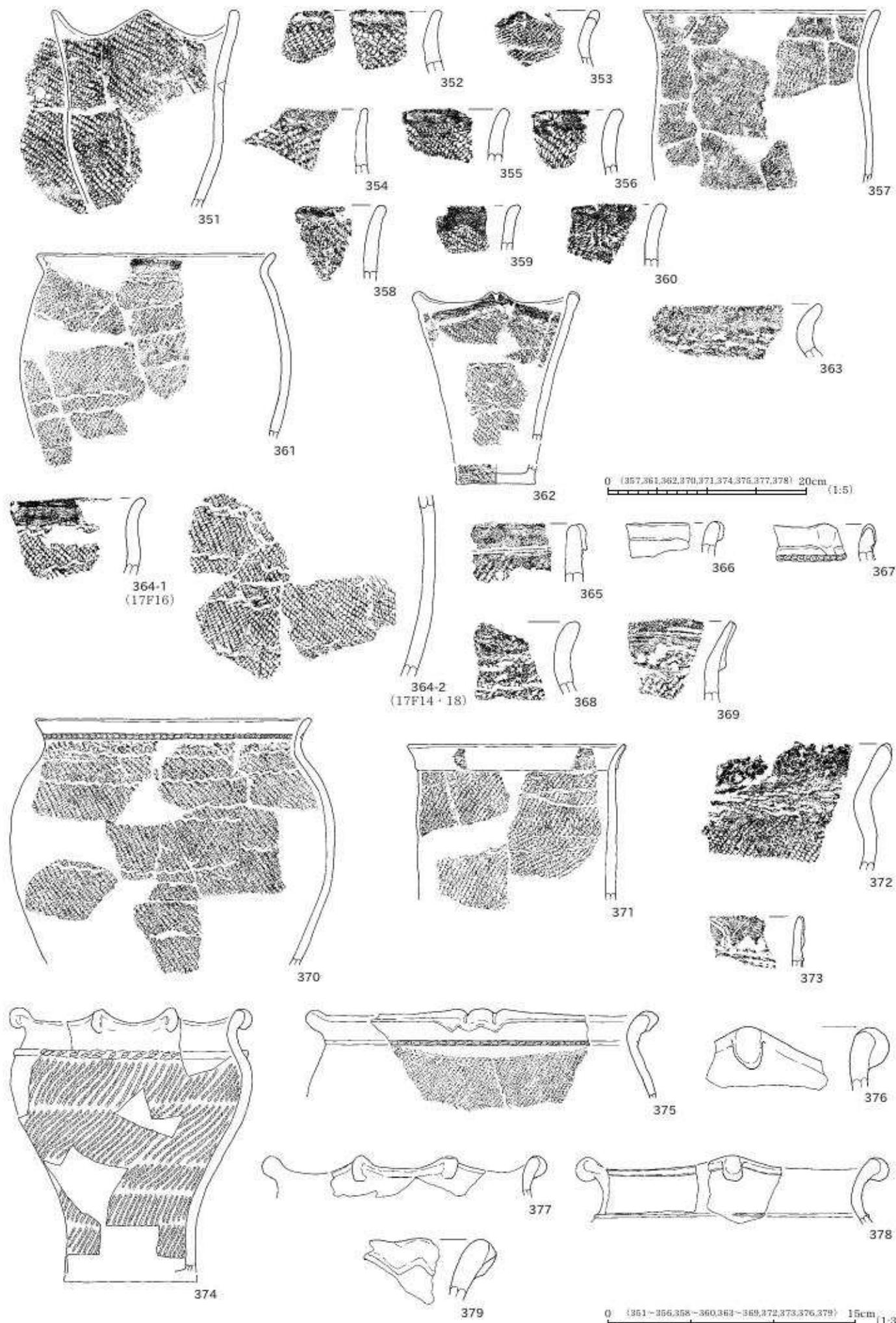


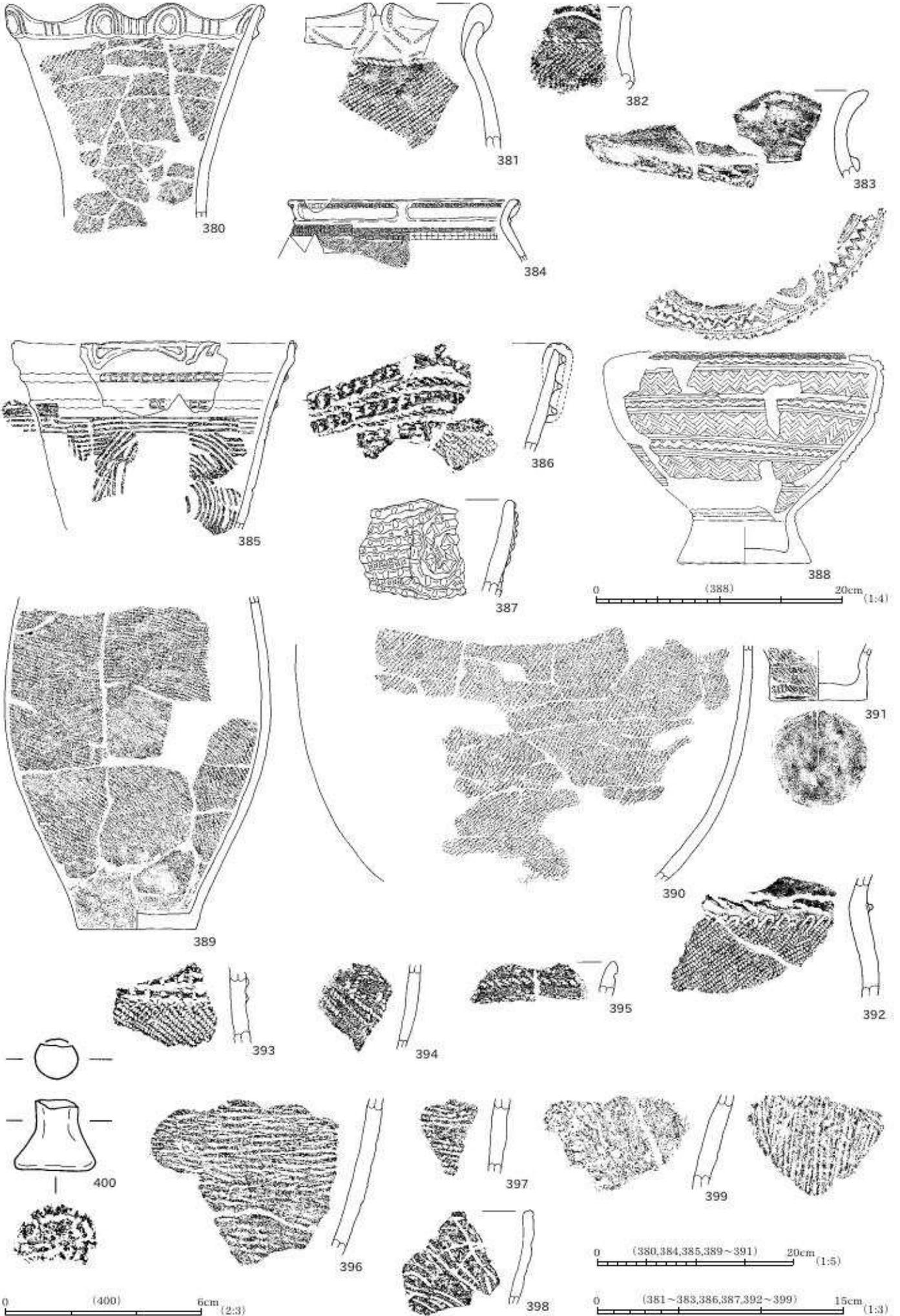


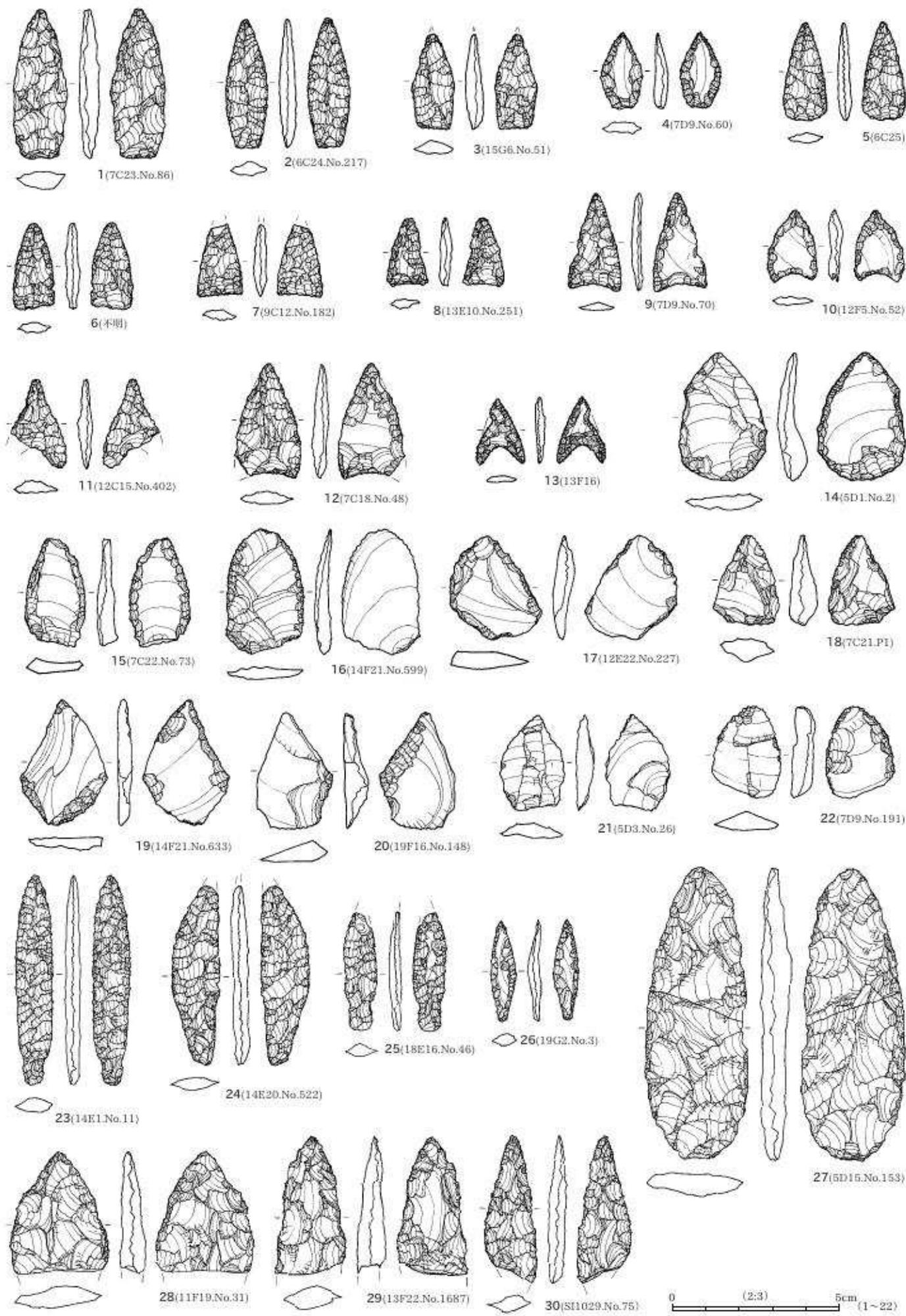
0 (289,293,294,303,304) 20cm (1:5)

0 (290~292,295~302,305~323) 15cm (1:3)



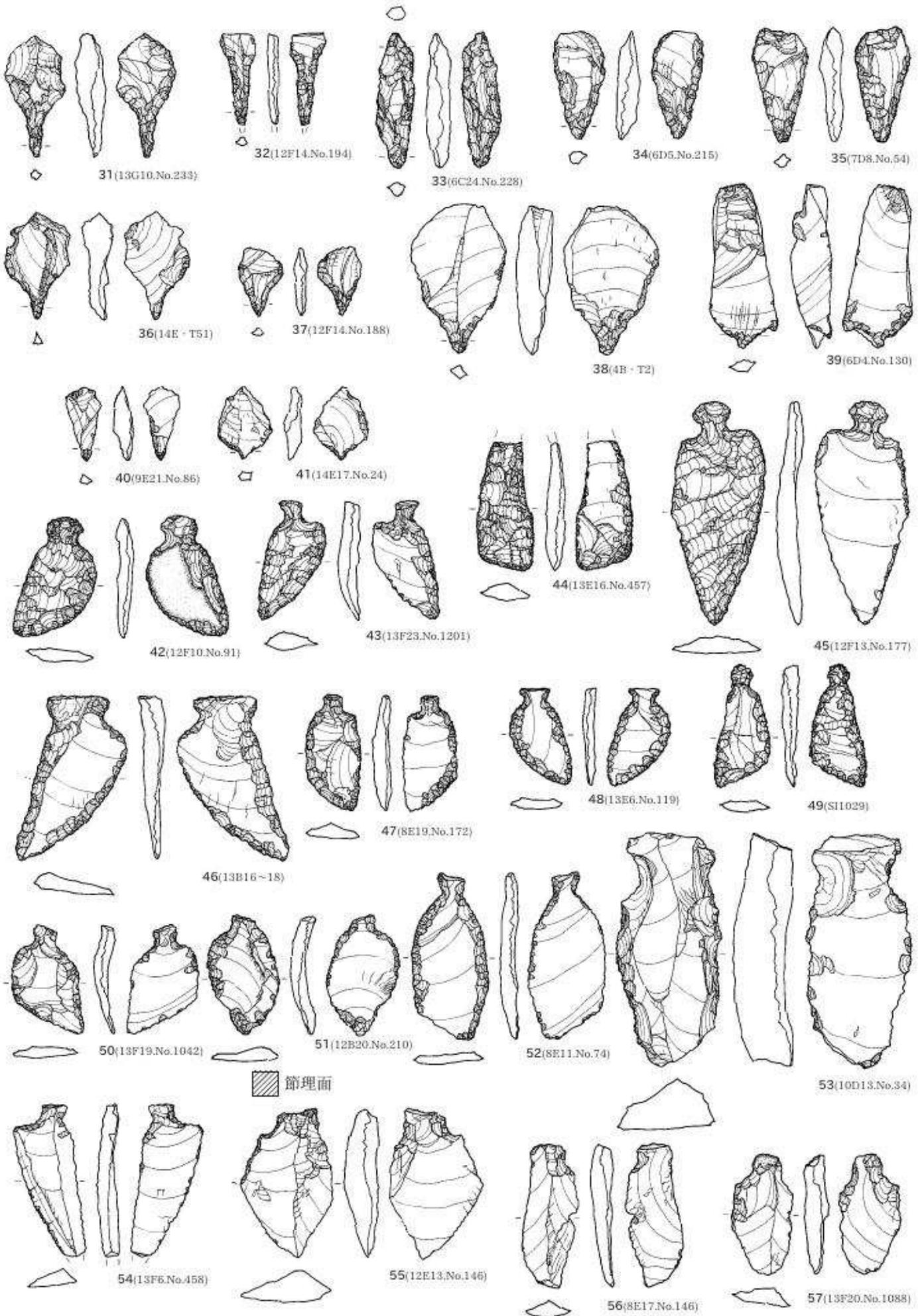






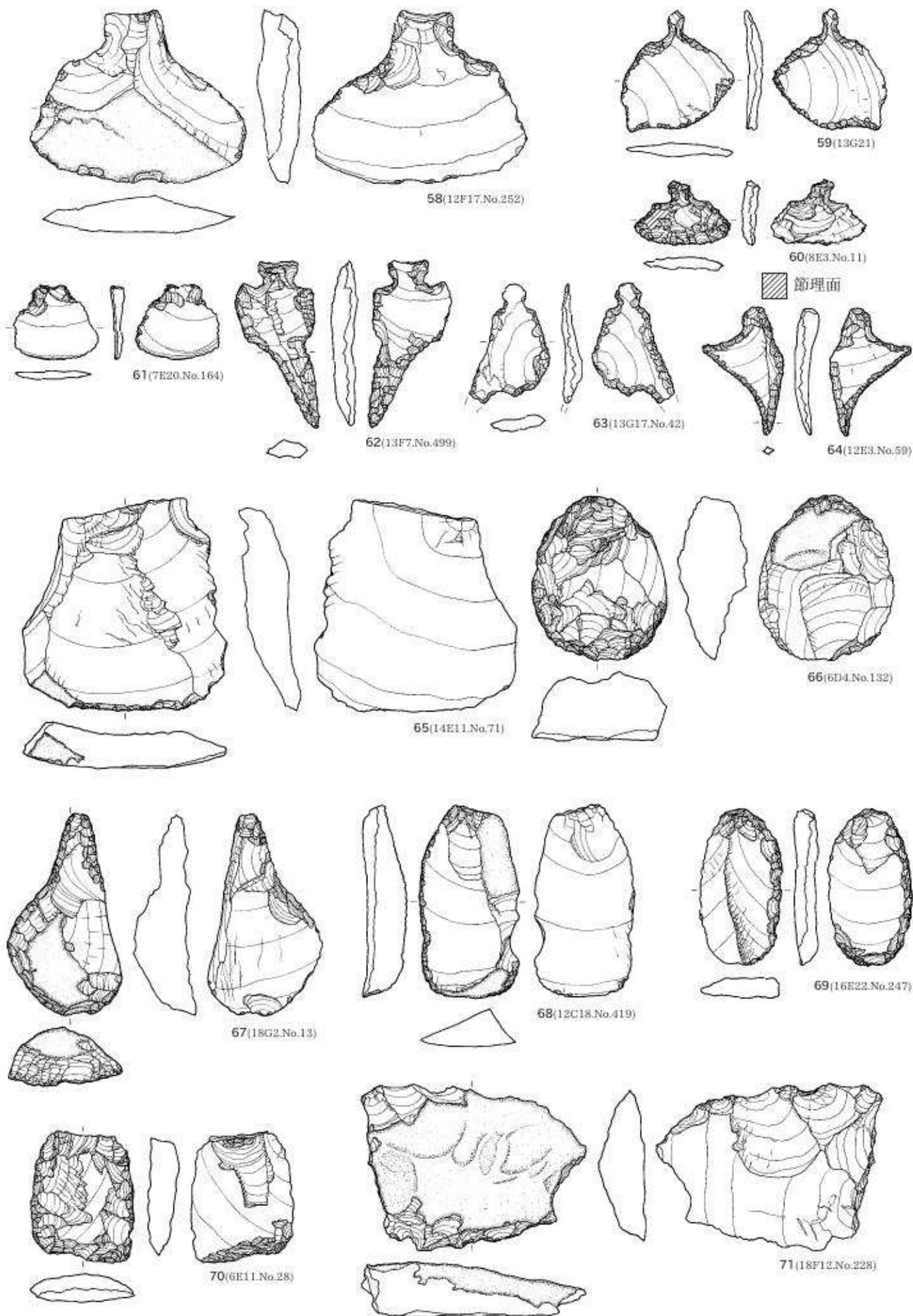
石器 A 1 類 (1~4) · A 2 類 (5~8) · B 類 (9~13) 石器未成品 A 類 (14~19) · B 類 (20~22)  
 尖頭器 A 類 (23~26) · B 類 (27) · C 類 (28~30)

0 (2:3) 5cm (1~22)  
 0 (1:2) 10cm (23~30)

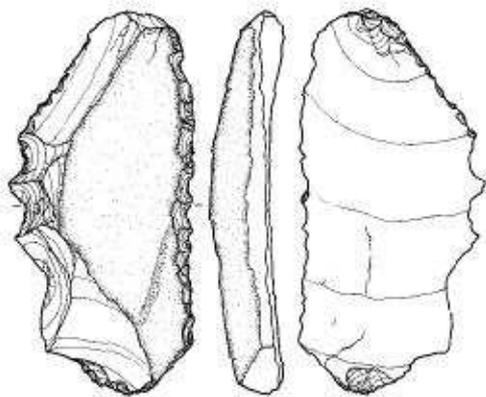


石斧A類 (31-32)・B類 (33)・C1類 (34-35)・C2類 (36-38)・D類 (39-41) 石鏃A1類 (42-45)  
A2類 (46-49)・A3類 (50-53)・A4類 (54-57)

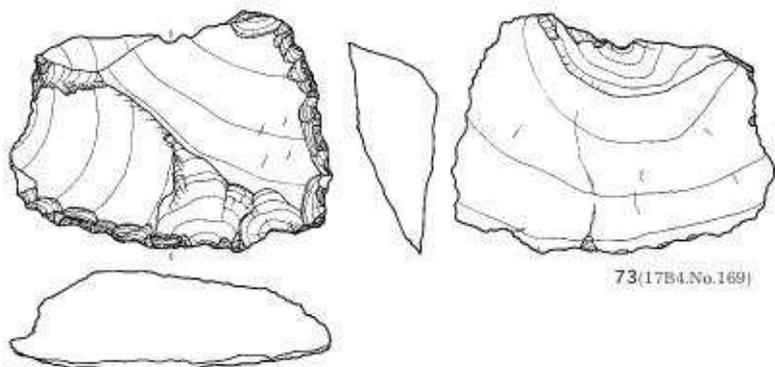
0 (1:2) 10cm



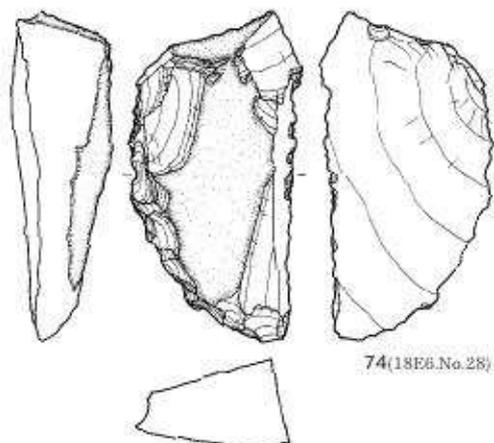
石器B類 (58-61)・C類 (62-64) 不定形石器A類 (65-70)・B類 (71)



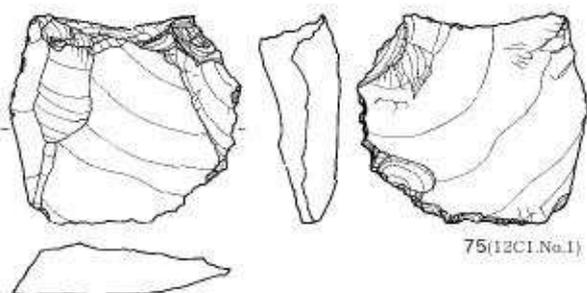
72(14G4.No.85)



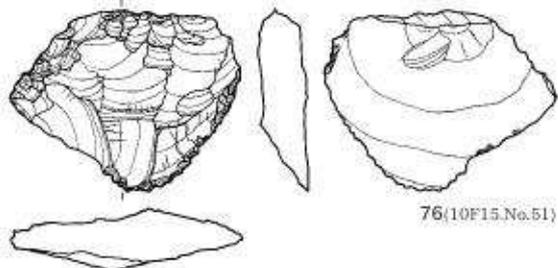
73(17B4.No.169)



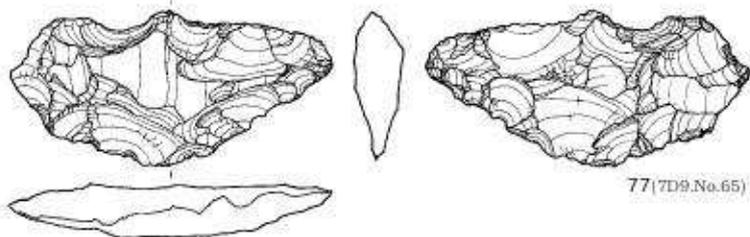
74(18E6.No.28)



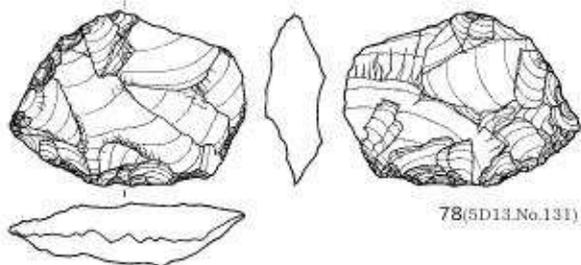
75(12C1.No.1)



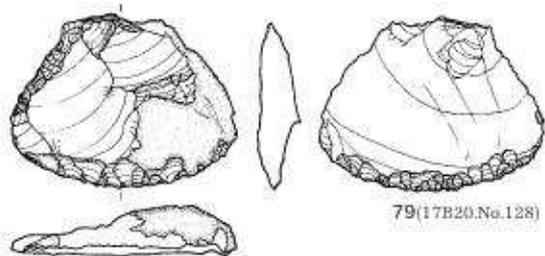
76(10F15.No.51)



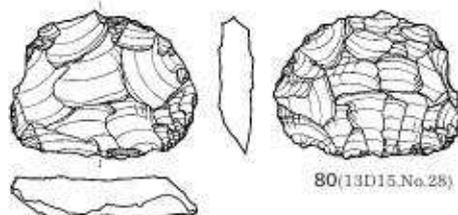
77(7D9.No.65)



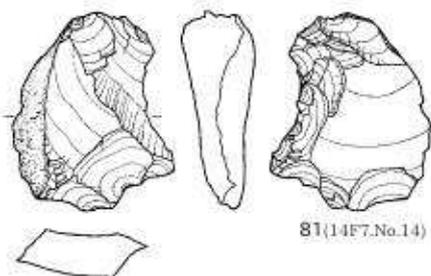
78(5D13.No.131)



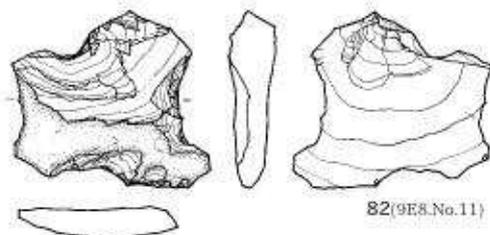
79(17B20.No.128)



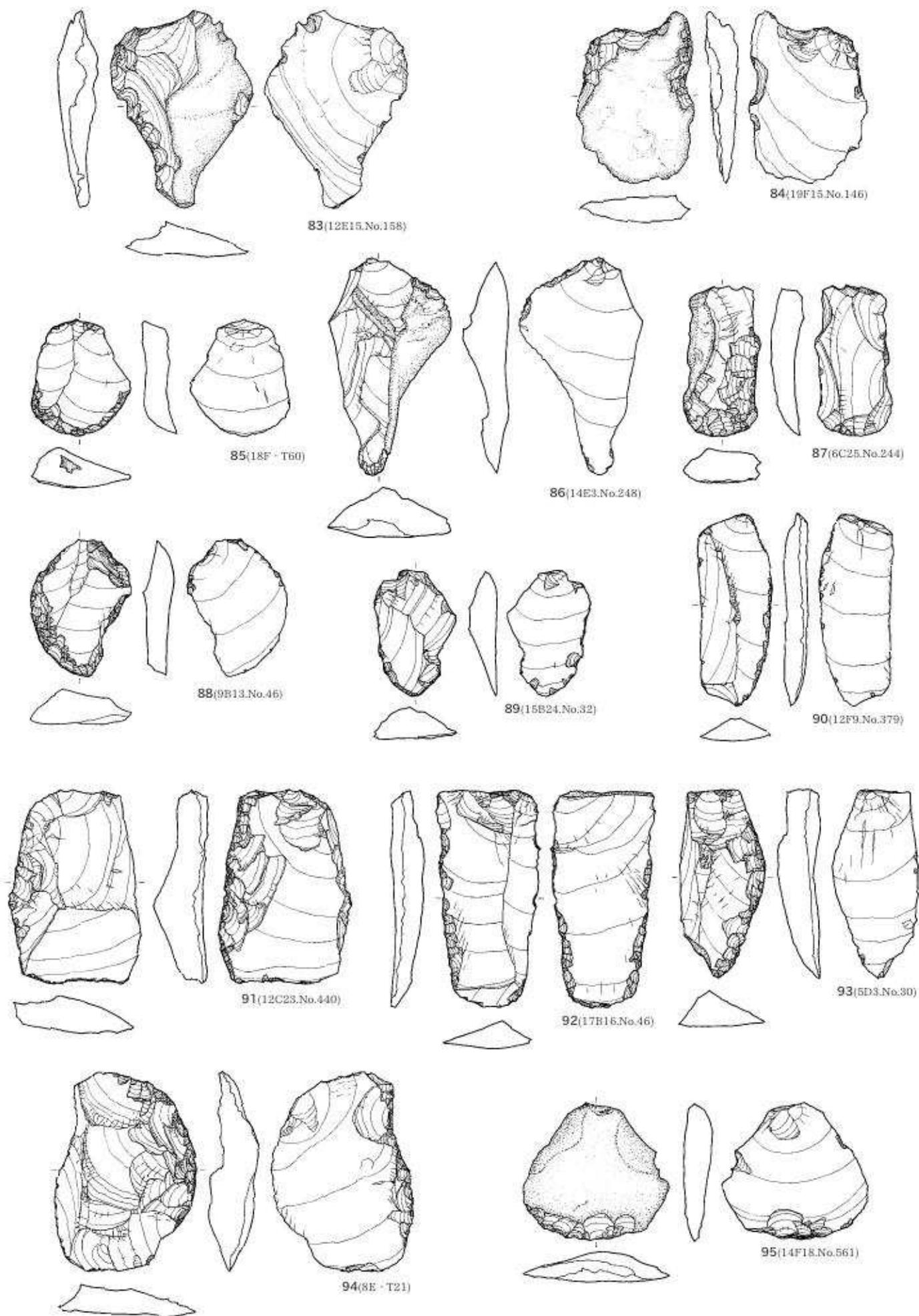
80(13D15.No.28)

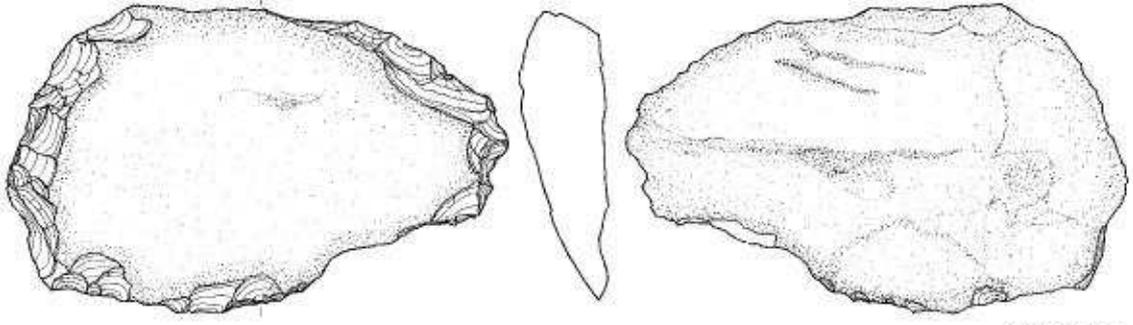


81(14F7.No.14)

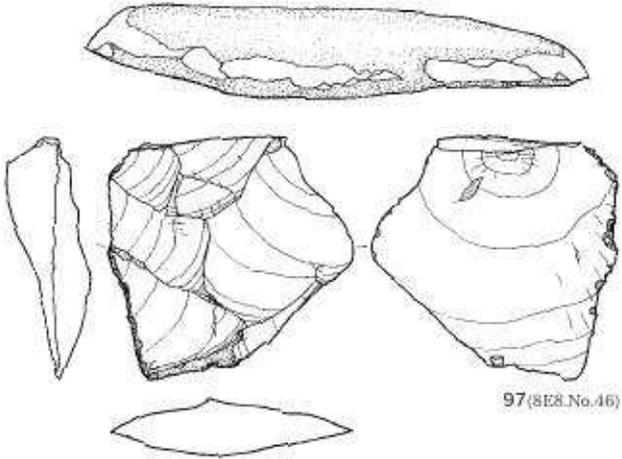


82(9E8.No.11)

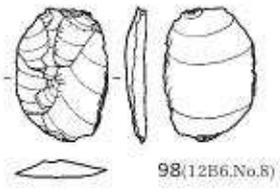




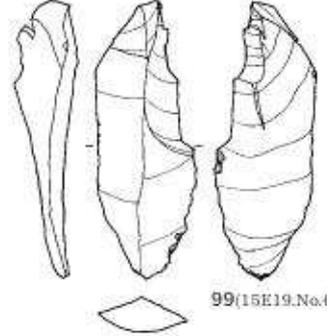
96(7G20.ⅡA)



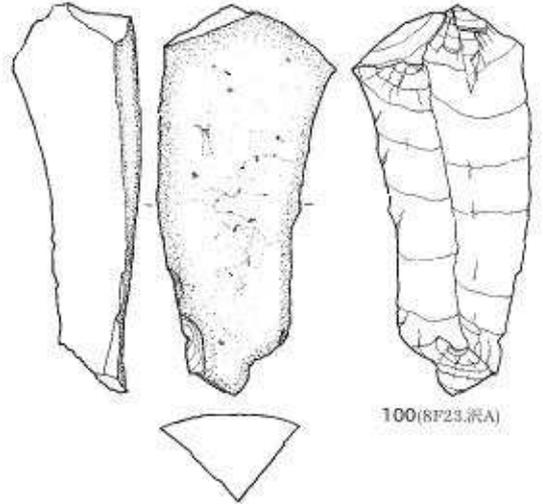
97(8E8.No.46)



98(12B6.No.8)



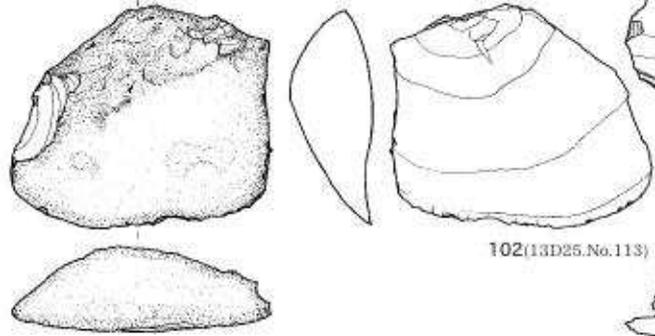
99(15E19.No.69)



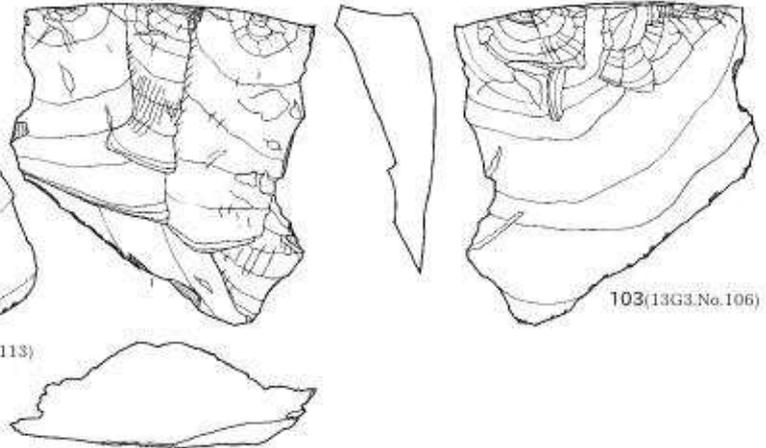
100(8F23.ⅡA)



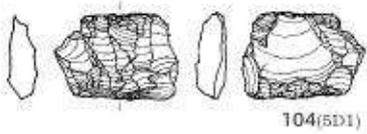
101(13E9.No.830.ⅡA)



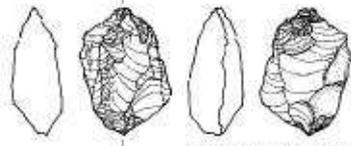
102(13D25.No.113)



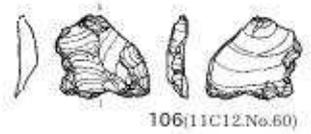
103(13G3.No.106)



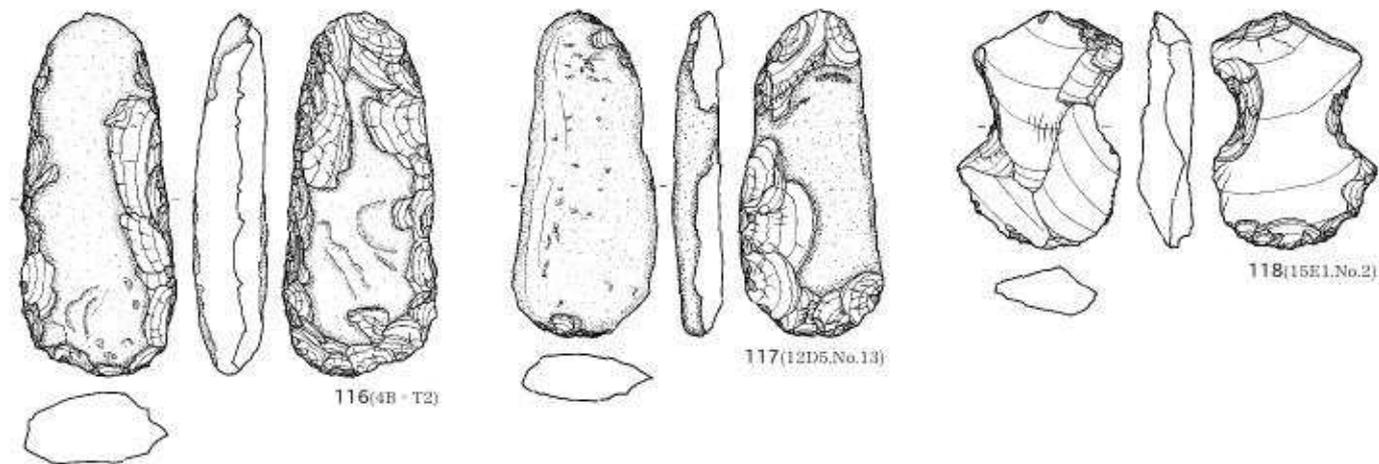
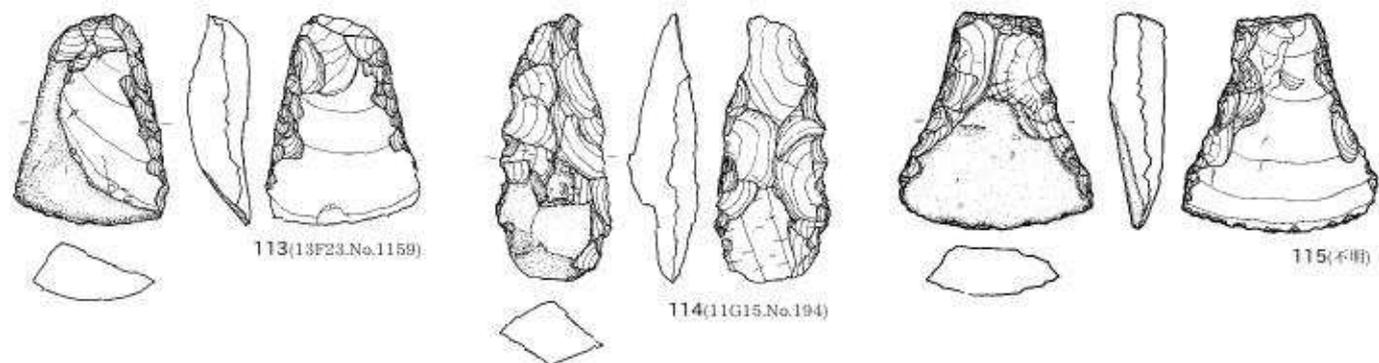
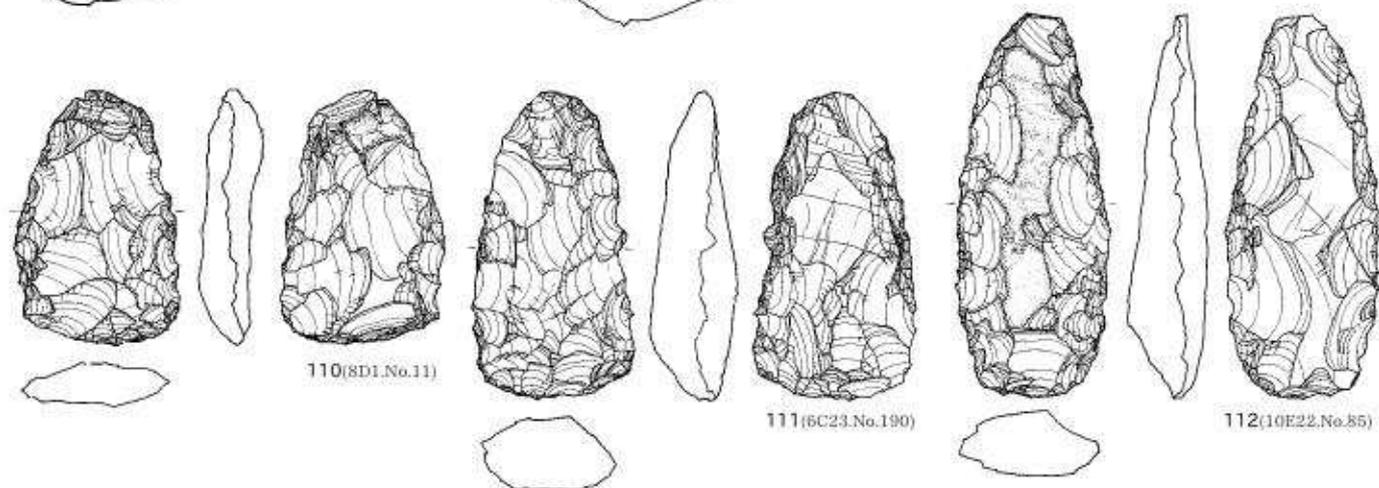
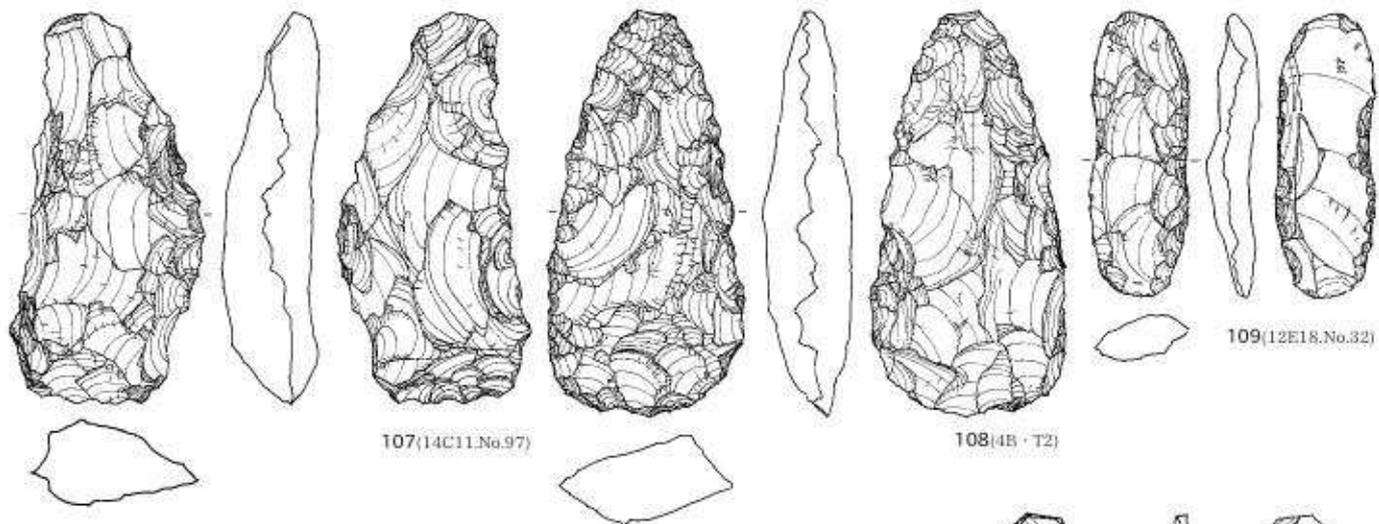
104(5D1)



105(13F11.No.1501)

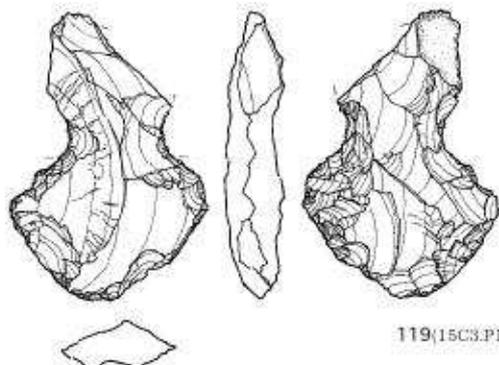


106(11C12.No.60)

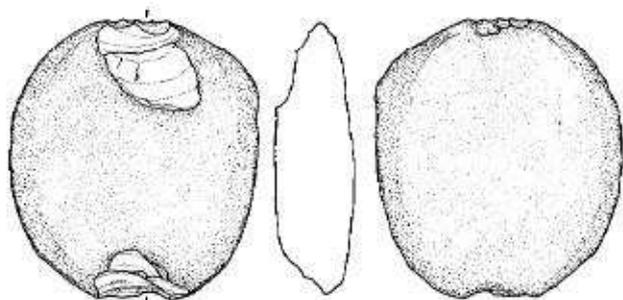


0 (1:2) 10cm (107~114)

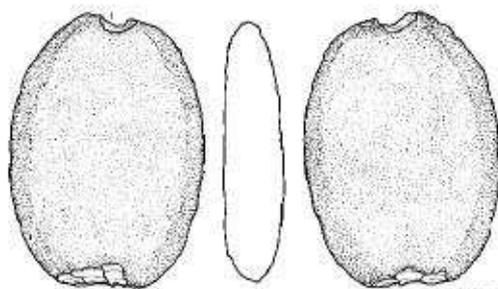
0 (1:3) 15cm (115~118)



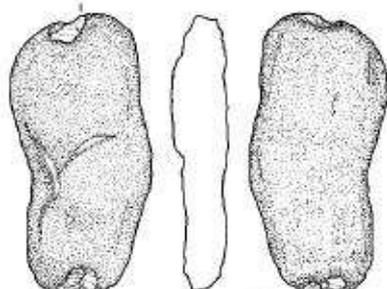
119(15C3.P1)



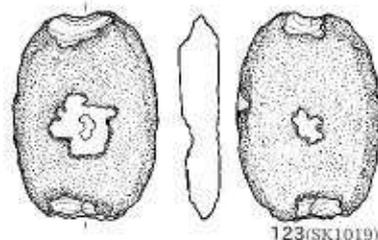
120(13G4.No.146)



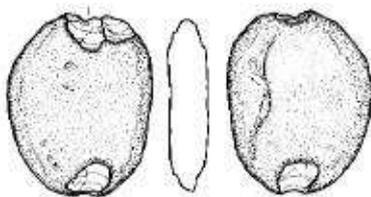
121(6E2.No.2)



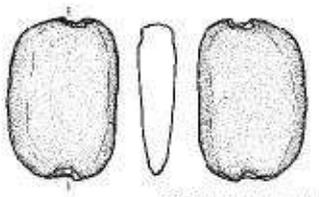
122(8E14.No.114)



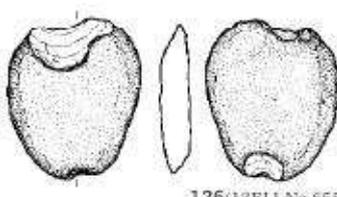
123(SK1019)



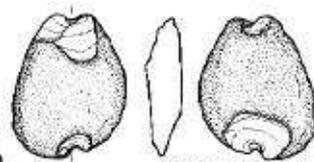
124(9F.T24)



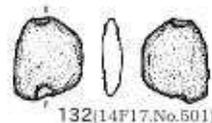
125(13F11.No.648)



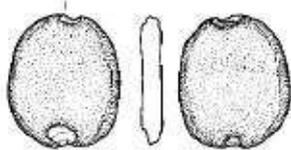
126(13F11.No.655)



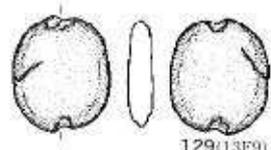
127(12E24.No.263)



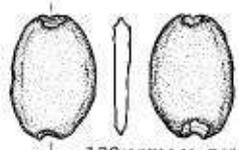
132(14F17.No.601)



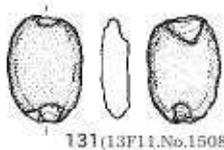
128(13F2.No.256)



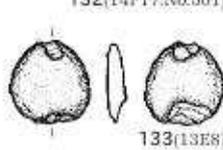
129(13F9)



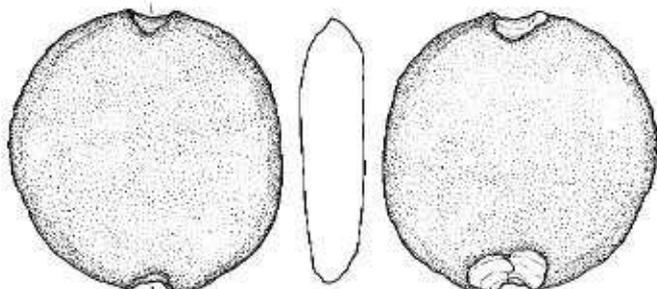
130(13F11.No.743)



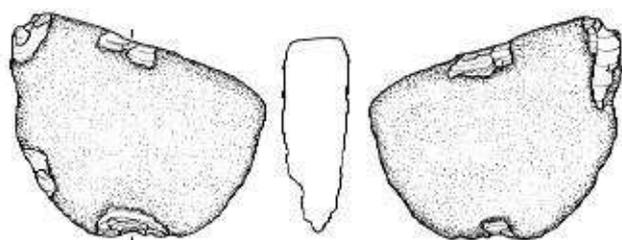
131(13F11.No.1508)



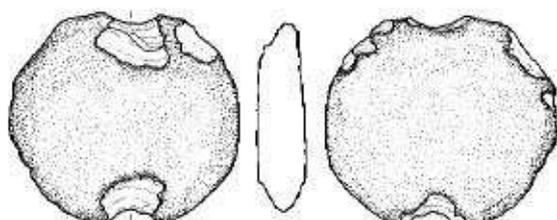
133(13E8)



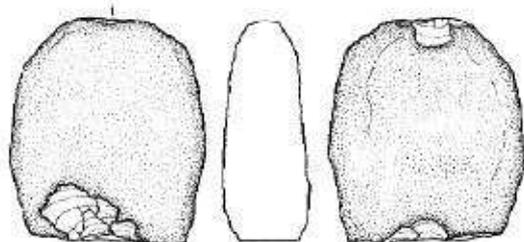
134(13E8.No.199)



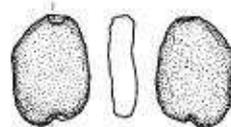
135(8E19.No.176)



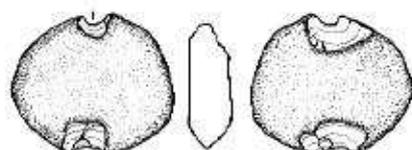
136(15G7.No.172)



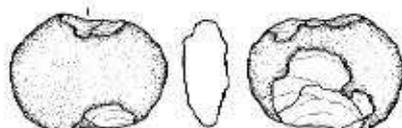
137(13F15.No.869)



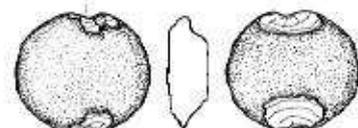
141(18E.T35)



138(9C17.No.194)



139(12D18.No.227)



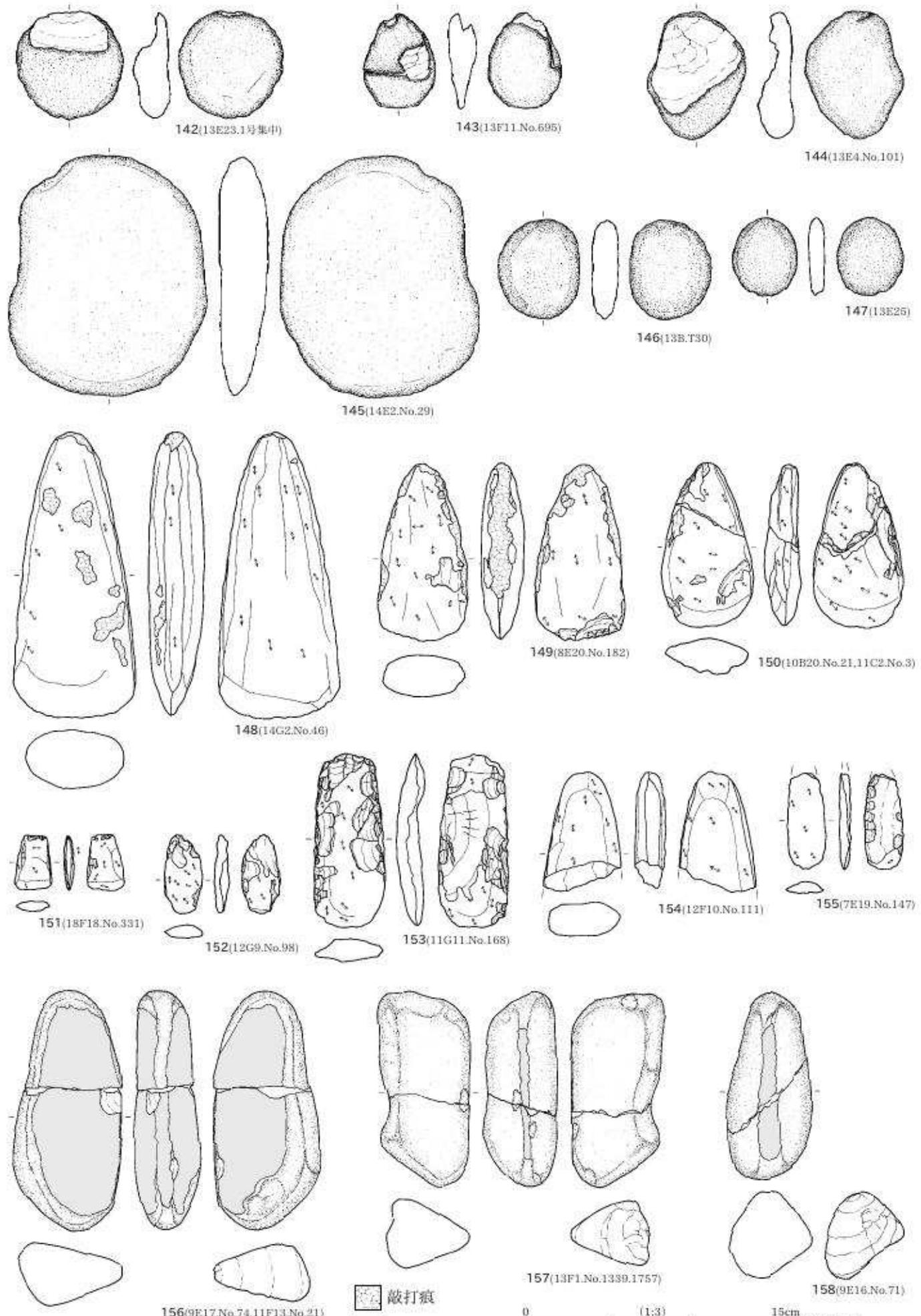
140(9D16.No.37)

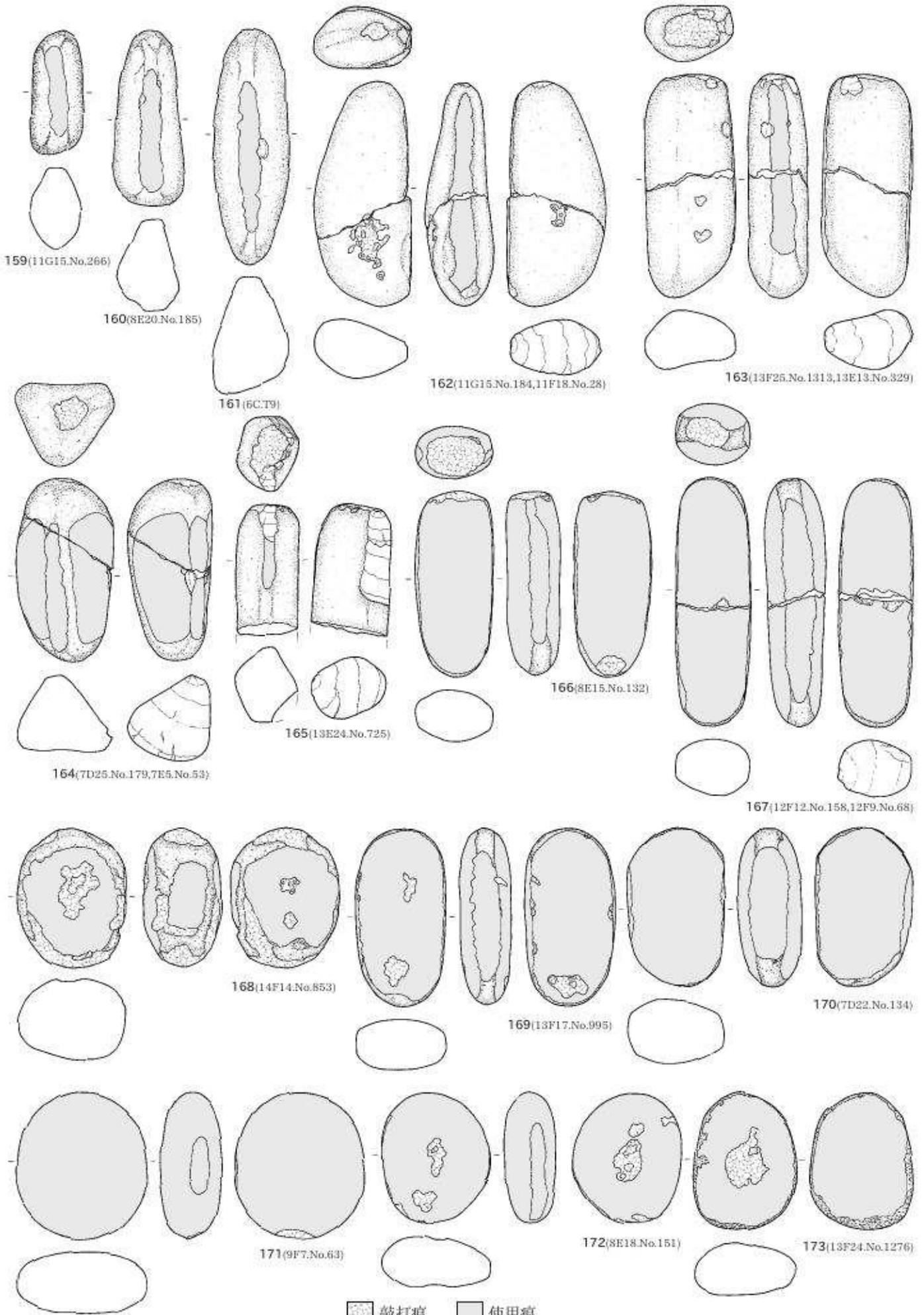
敲打痕

0 (1:3) 15cm (119)

0 (1:4) 20cm (120~141)

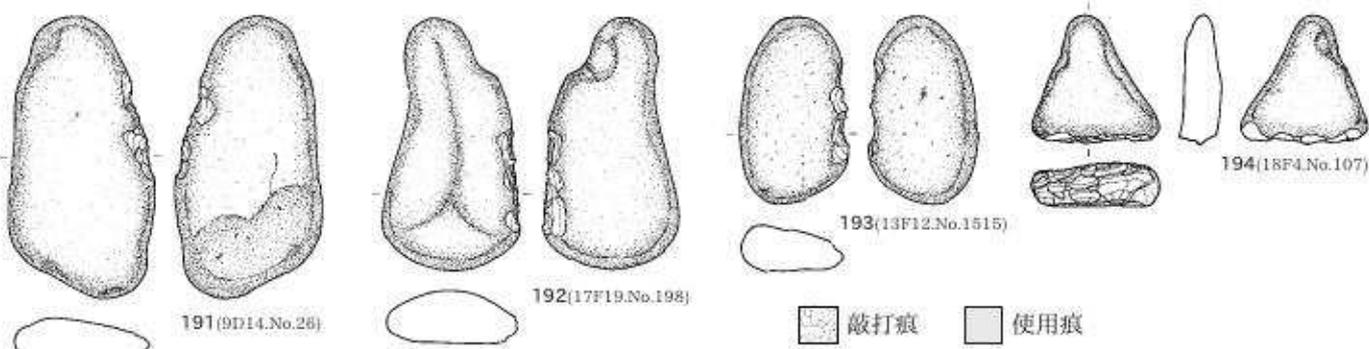
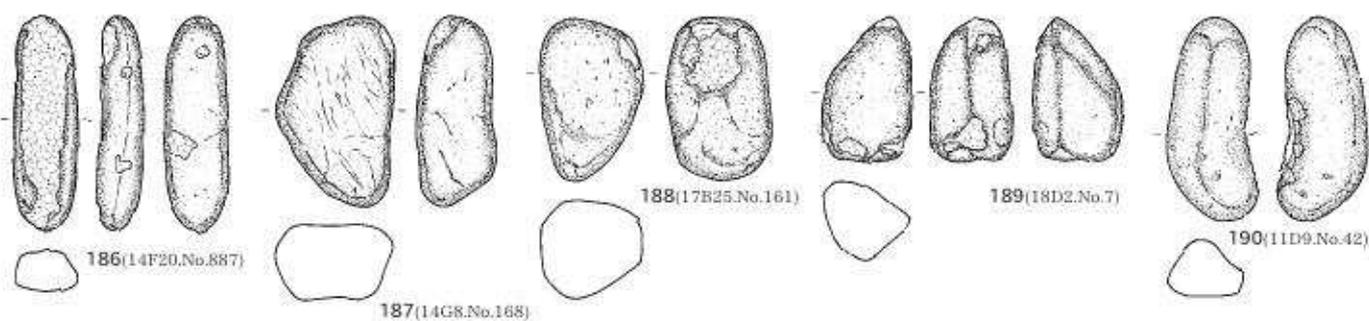
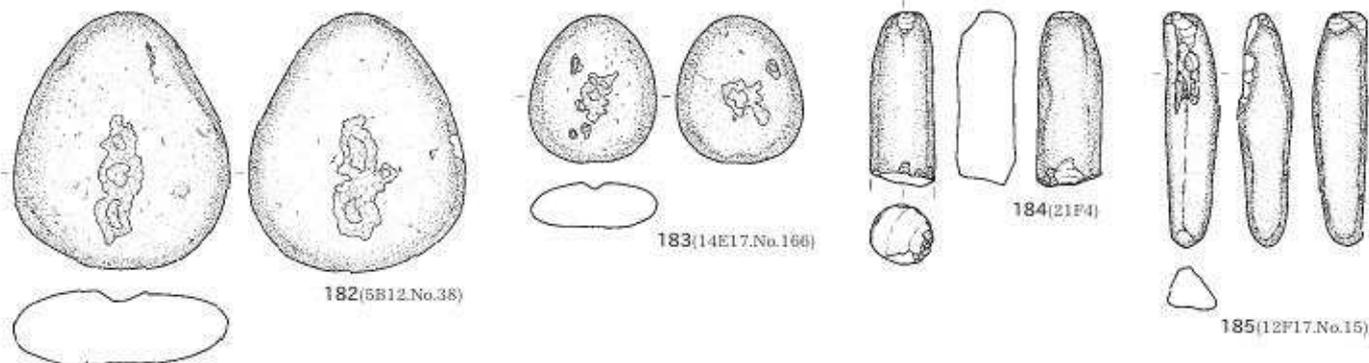
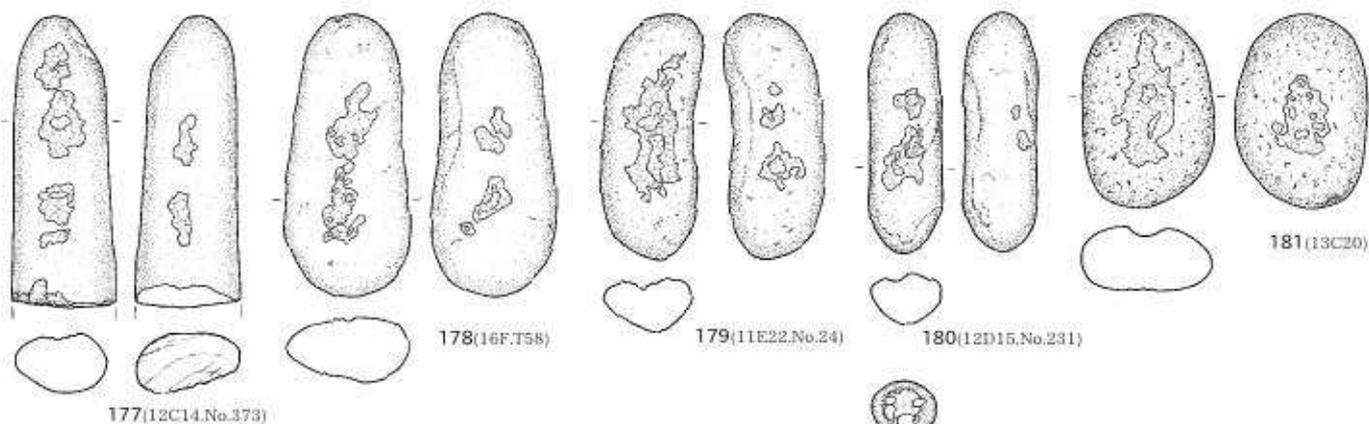
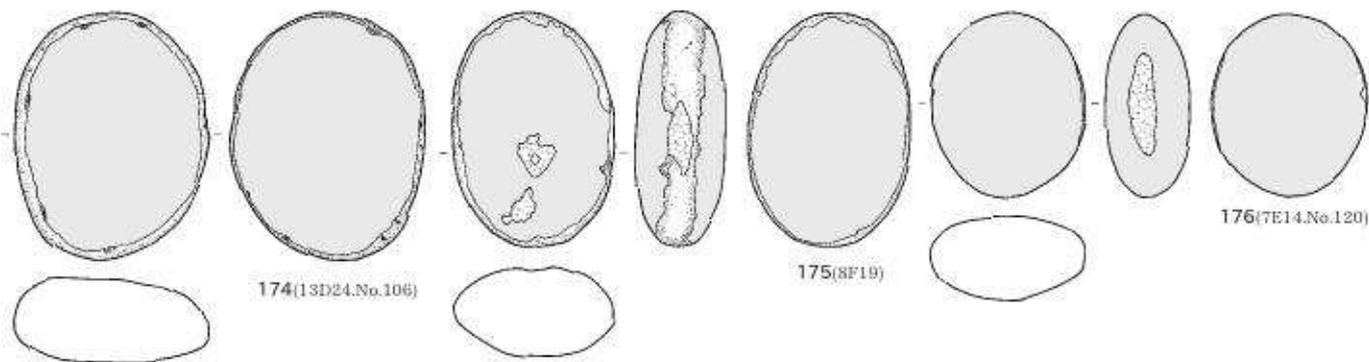
打製石片C類 (119) 石核A1類 (120~133・137)・A2類 (134~136・138~140)・B類 (141)

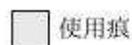




群石類A1類 (159-161) - A2類 (162-165) - B1類 (166-167) - B2類 (168-172) - C1類 (173)

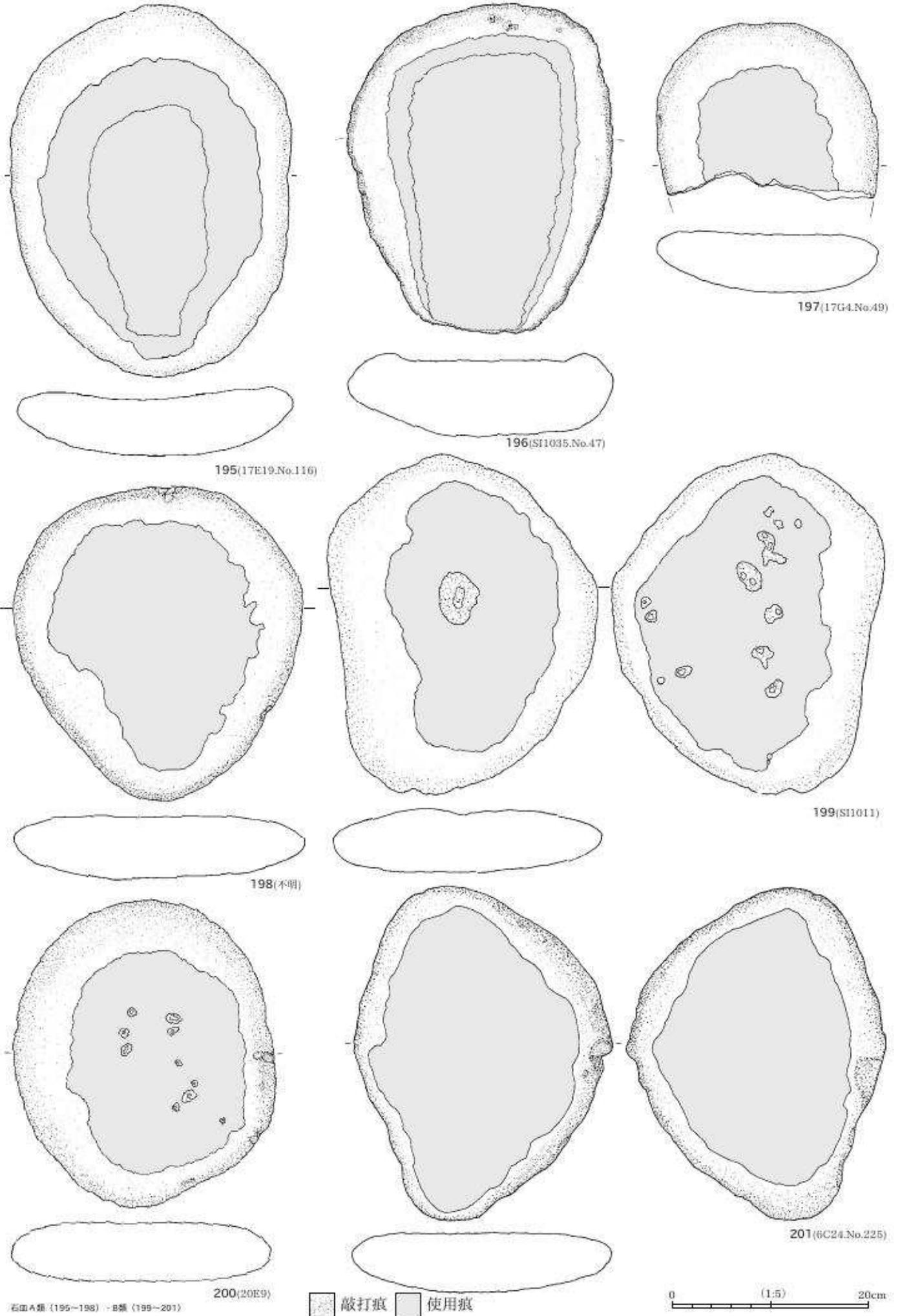
0 (1:4) 20cm



 敲打痕
  使用痕

原器石類 C1 類 (174-176) · C2a 類 (177-180) · C2b 類 (181-183) · D1 類 (184-186) ·  
 D2 類 (187-189) · D3 類 (190-193) · E 類 スタンプ形石器 (194)

0 (1:4) 20cm



195(17E19.No.116)

196(SI1035.No.47)

197(17G4.No.49)

198(不明)

199(SI1011)

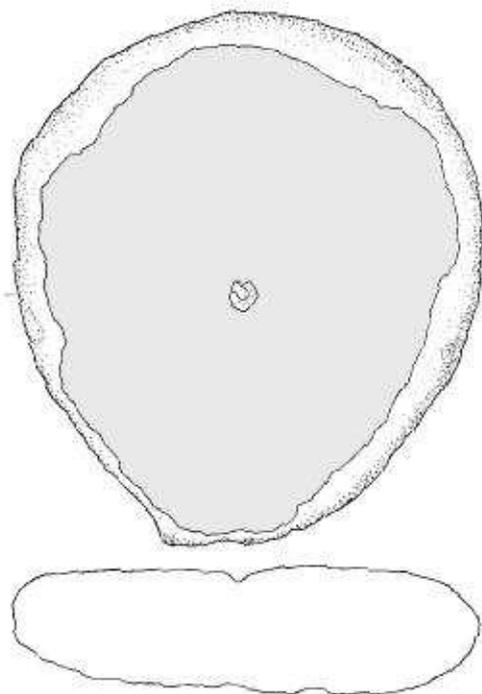
200(20E9)

201(6C24.No.225)

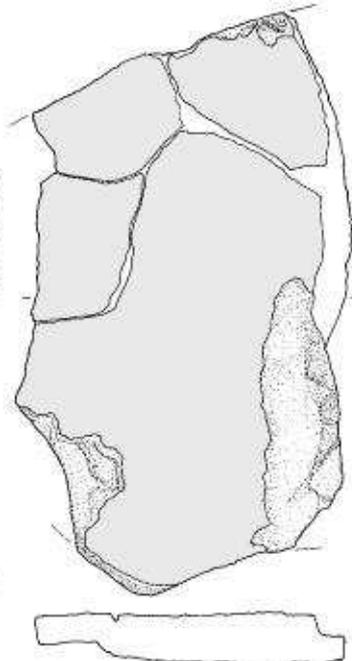
石田A類 (195~198) · B類 (199~201)

敲打痕 使用痕

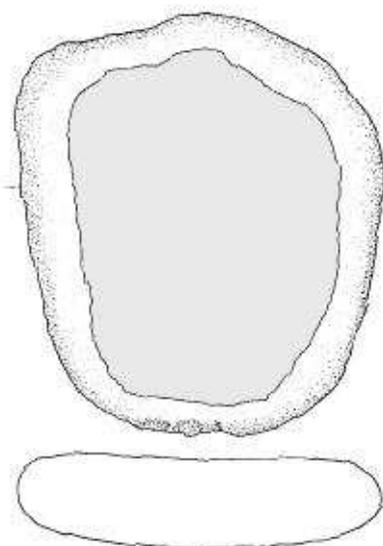
0 (1:5) 20cm



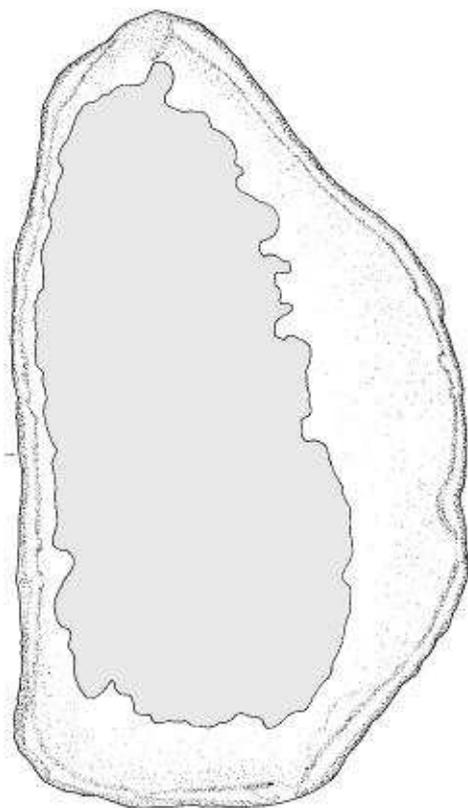
202(13F15.No.898)



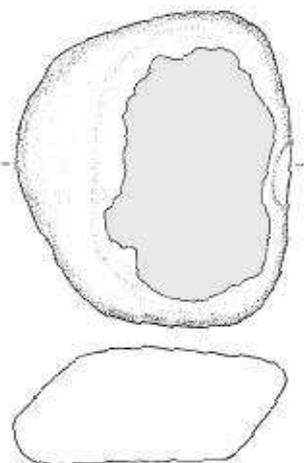
203(14F17.No.472,14E16.No.426,14E1.No.1,13F25.No.1313)



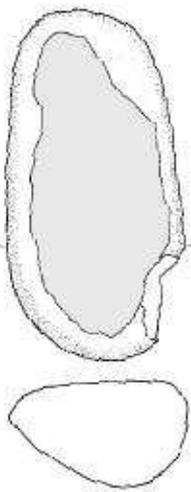
204(8F10.No.61)



205(15D20.No.29)



206(7D4.No.28)

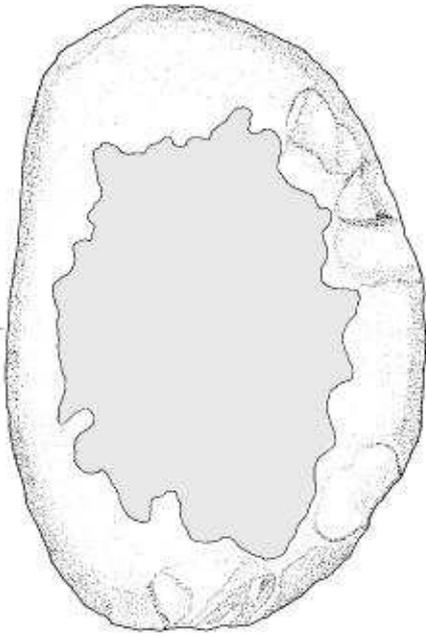


207(6D4.No.149)

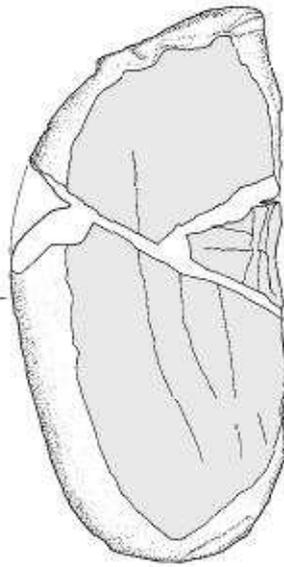
0 (1:4) 20cm (205~207)

0 (1:5) 20cm (202~204)

■ 敲打痕 ■ 使用痕



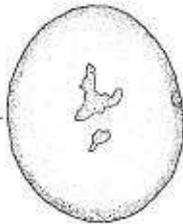
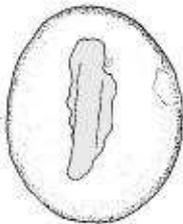
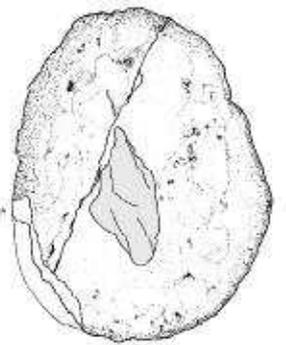
208(17D10.No.116)



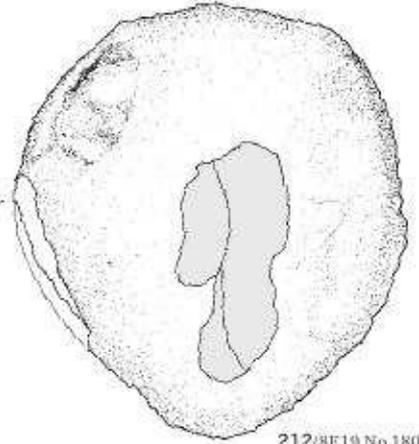
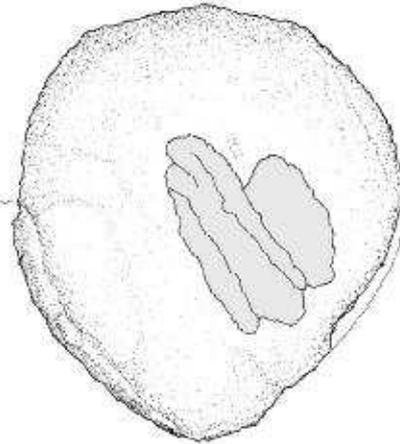
209(12F14.No.200)



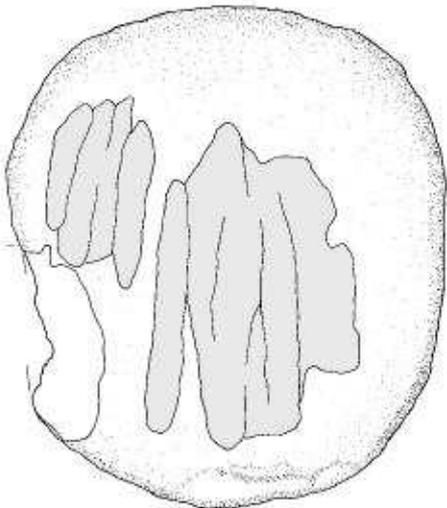
210(9F1.No.2)



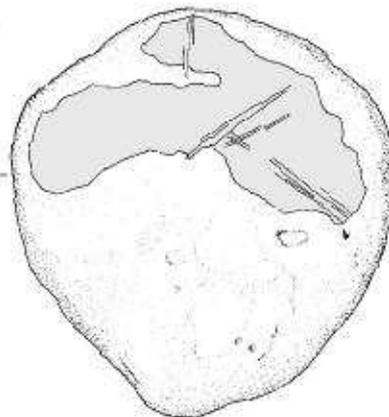
211(19B20.No.12)



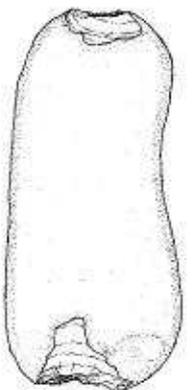
212(8E19.No.180)



213(13G2.No.89)



214(13F17.No.619)



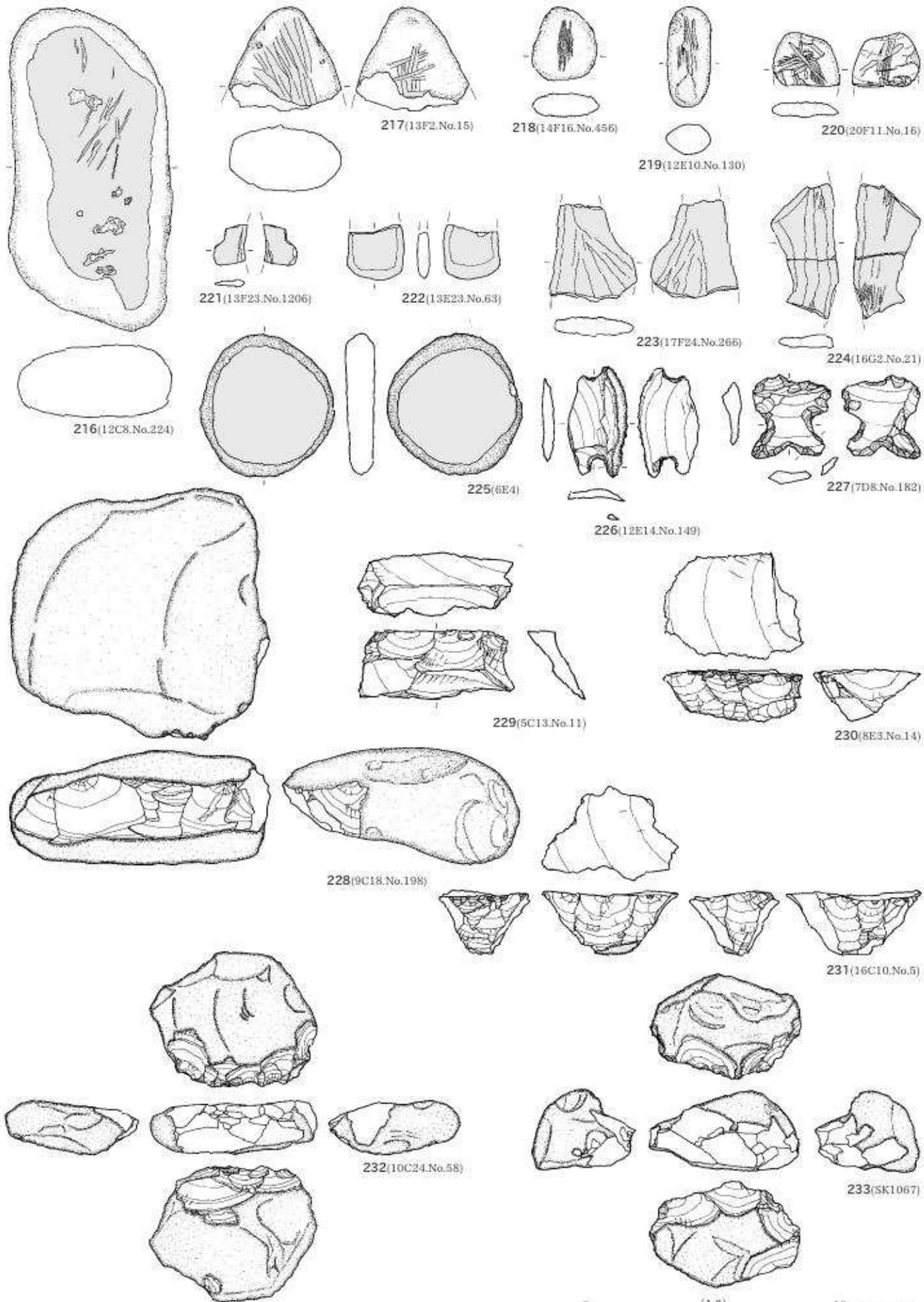
215(14F18.No.532)

縦石A類 (208)・B類 (209-213)・C類 (214-215)

敲打痕

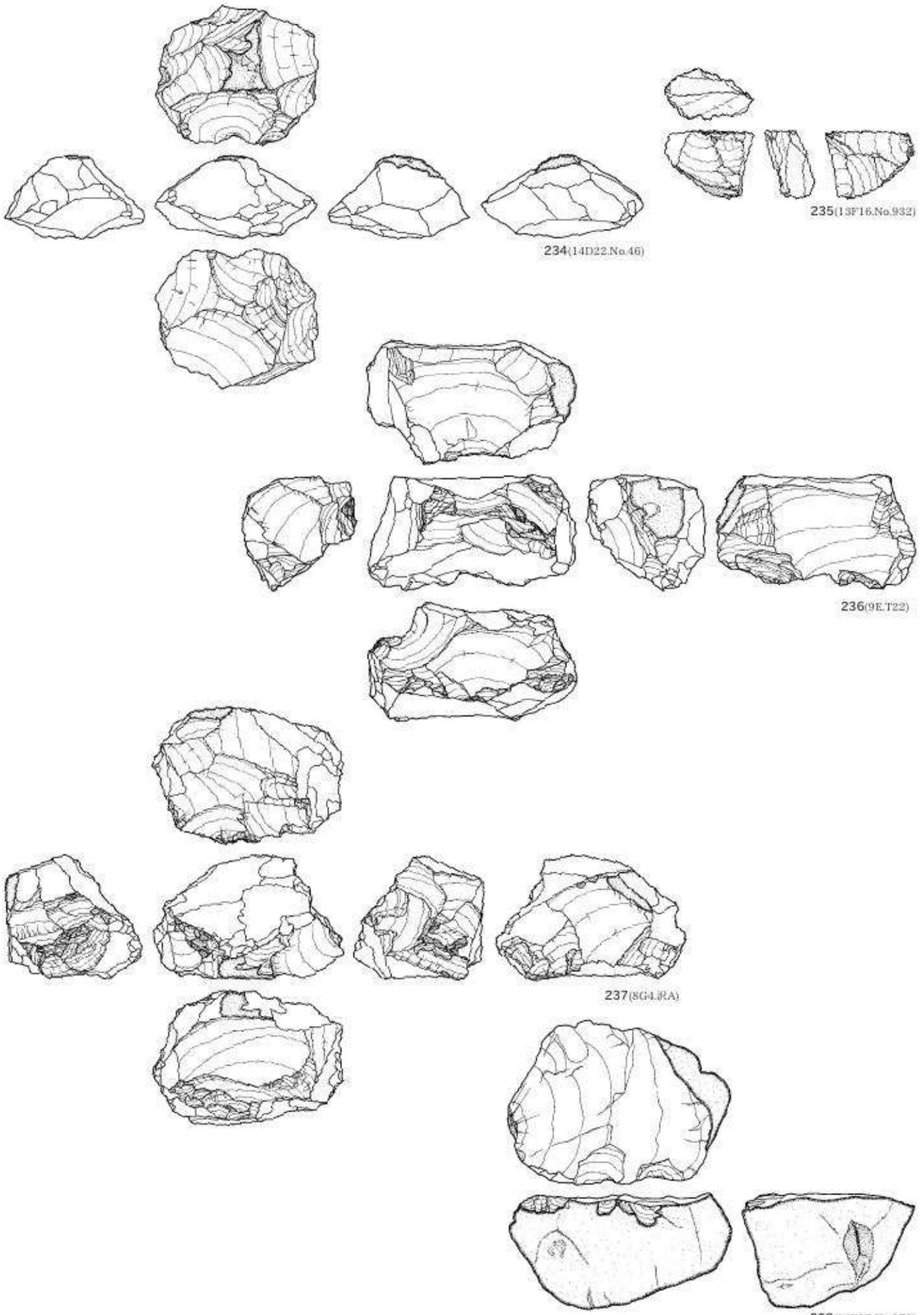
使用痕

0 (1:4) 20cm



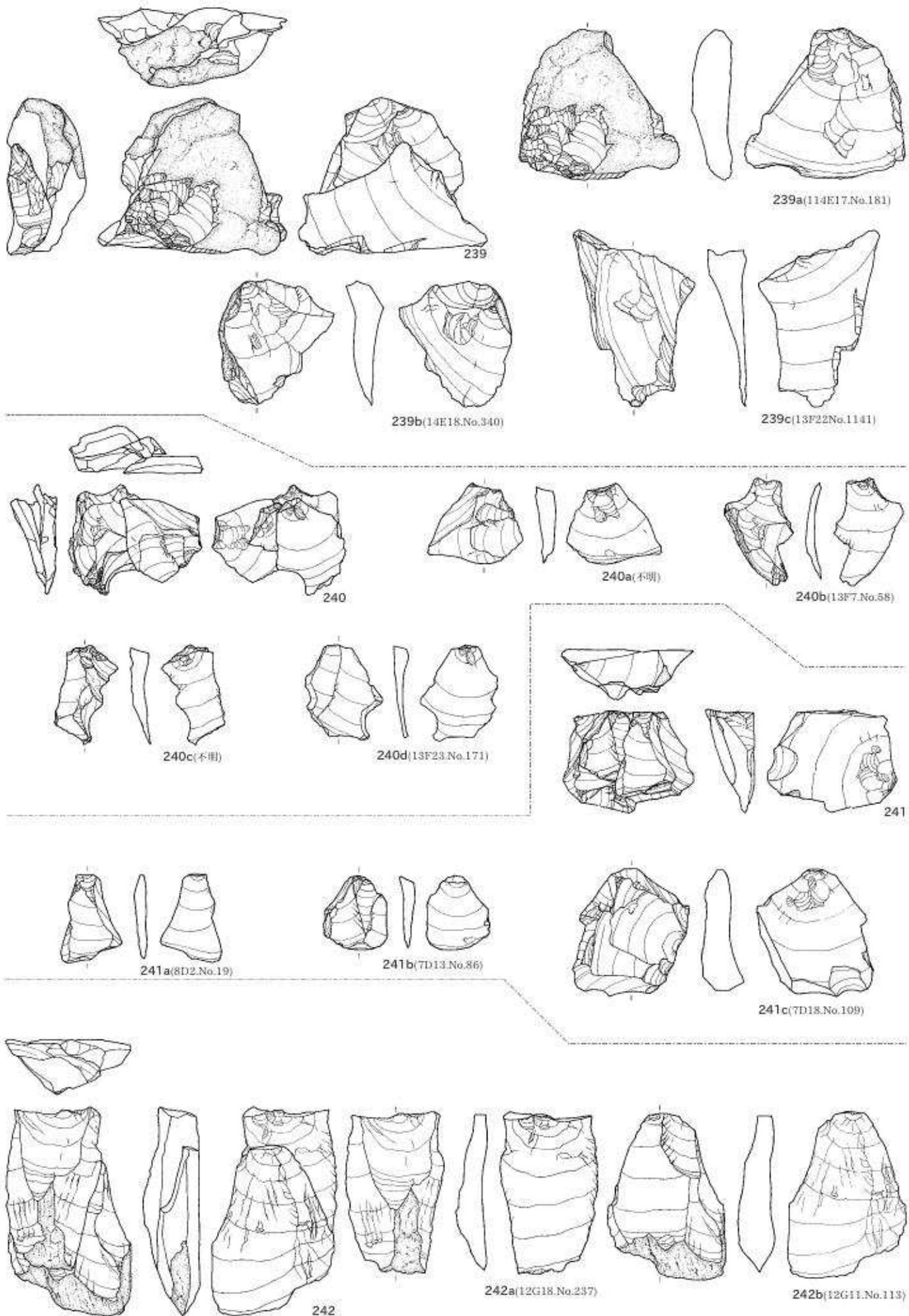
砥石C類 (216~220) - D類 (221~224) 各種分類不明石器 (225~227) 石核A類 (228~229)  
 B類 (230) - C類 (231) - D類 (232~233)

0 (1:2) 10cm (226,227)  
 0 (1:3) 15cm (228~233)  
 0 (1:4) 20cm (216~225)



石核E類 (234)・F類 (235~237)・石核素材 (238)

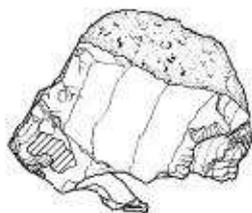
0 (1:3) 15cm



接合資料 (239~242)

節理面

0 (1:3) 15cm



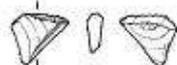
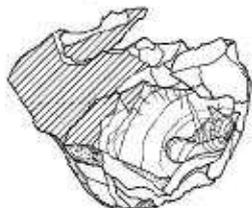
243a(13E14.3号集中)



243



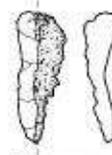
243b(不明)



243c(13E14.3号集中)



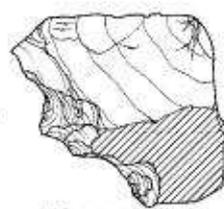
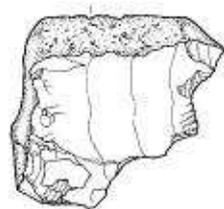
243d(不明)



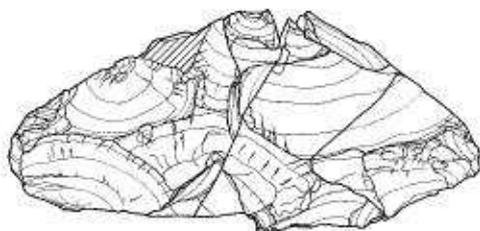
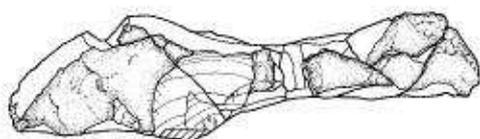
243e(13E14.3号集中)



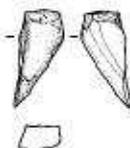
243f(不明)



243g(13E14.3号集中)



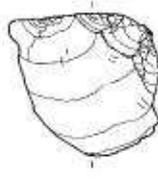
244



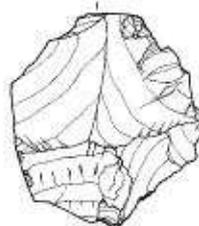
244a(14E17.No.172)



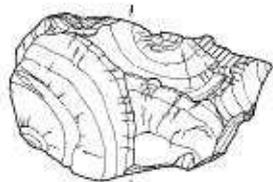
244b(13E20.No.570)



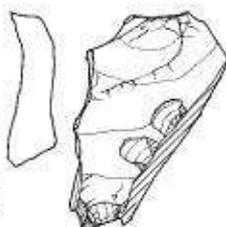
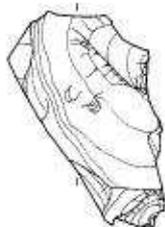
244c(13E21.No.47)



244d(14E13.No.316)



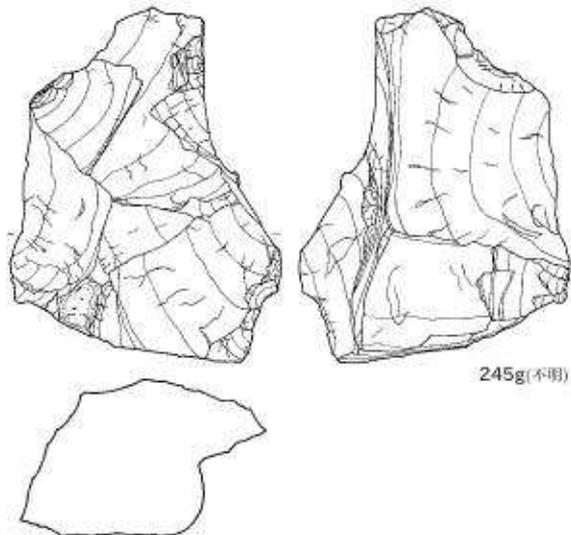
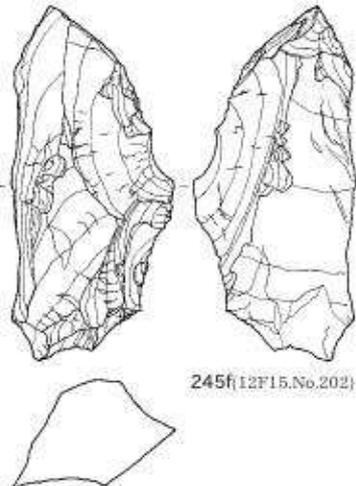
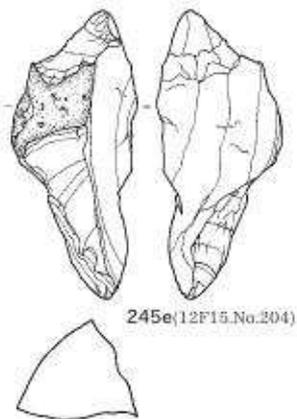
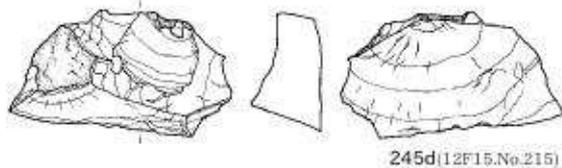
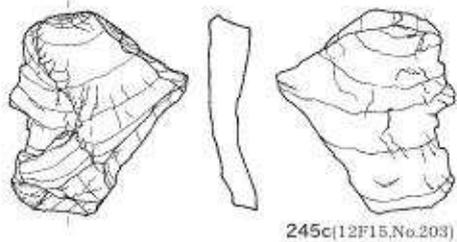
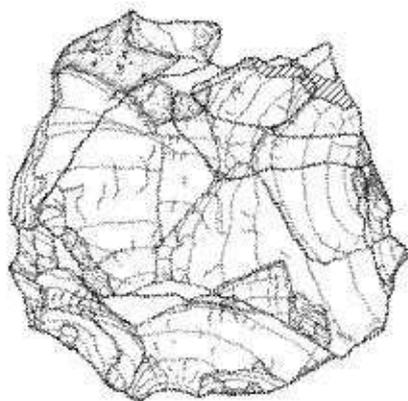
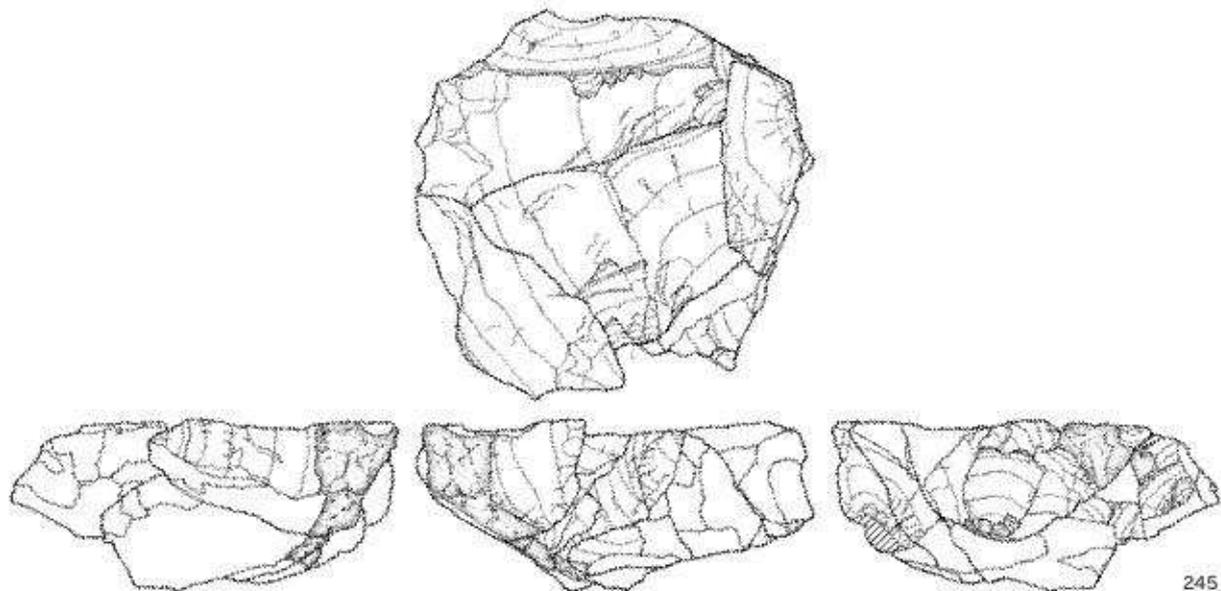
244e(14E17.No.244)

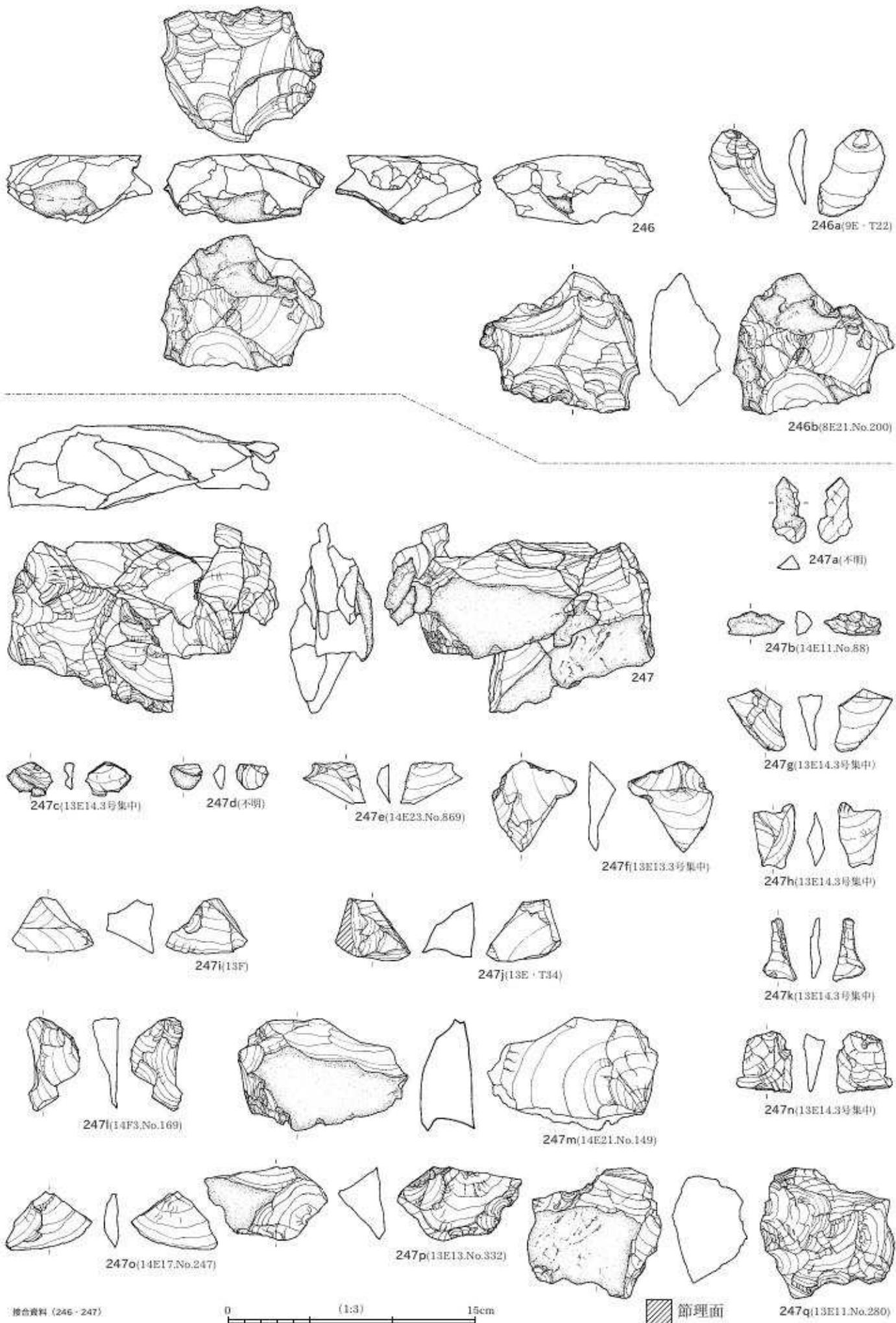


244f(14E17.No.197)



244g(14E17.No.180)







遺跡位置と周辺の景観 (建設省国土地理院1976年9月25日撮影、空中写真)



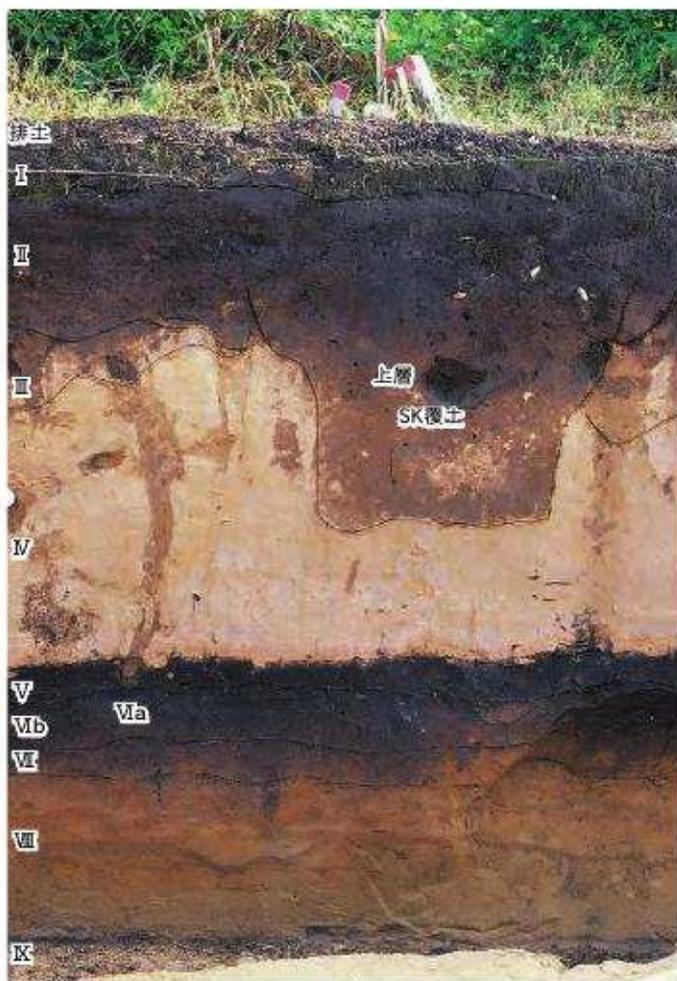
遺跡遠景 北上空から



V層上面での完掘全景 南東上空から



V層上面での遺跡全景 (遺構の窪地に沼沢火山灰層(IV層)が堆積する)上空から



基本層序 (1386) と上層遺構の土層断面 南西から



SI1027 (左下)・1029 (中央) 完掘 南から



SI1035 土層断面 北西から



15FG・16FG 付近全景 (住居跡、土坑の窪地にIV層が堆積する) 北から



土器（前期後葉～末葉の土器群）



石器（上段左2点蛇紋岩製磨製石斧・中2点筥状石器・右2点特殊磨石、下段左3点押出型ポイント・中4点松原型石匙・右3点礫石鐘）



遺跡西区完掘全景 西から



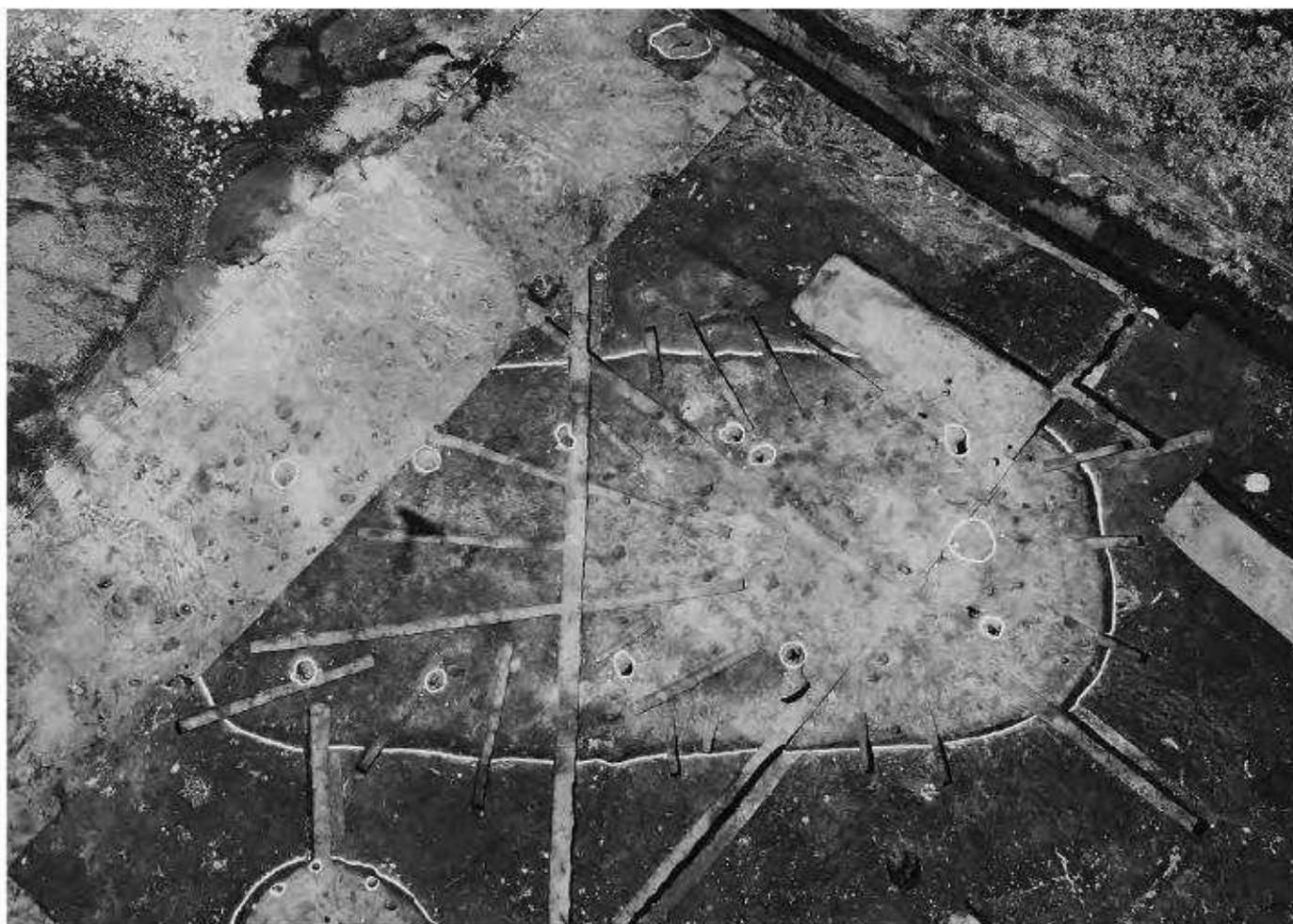
遺跡東区完掘全景 上空から



SI1029 土層断面 南西から



SI1029 周境部付近土層断面 北西から



SI1029 完掘 上空から



SI1034 土層断面 西から



SI1034 遺物出土状況 西から



SI1034 P10 土層断面 南西から



SI1034 P10 完掘 南から



SI1035 完掘 西から



SI1035 炉検出状況 西から



SI1035 土器出土状況 南から



SI1035 P7土層断面 西から



SI1035 P9土層断面 西から



SI1050 土層断面 南から



SI1050 完掘 東から



SI1050 P2 完掘 南から



SI1050 P3 完掘 南から



SI1057 土層断面 南から



SI1057 完掘 西から



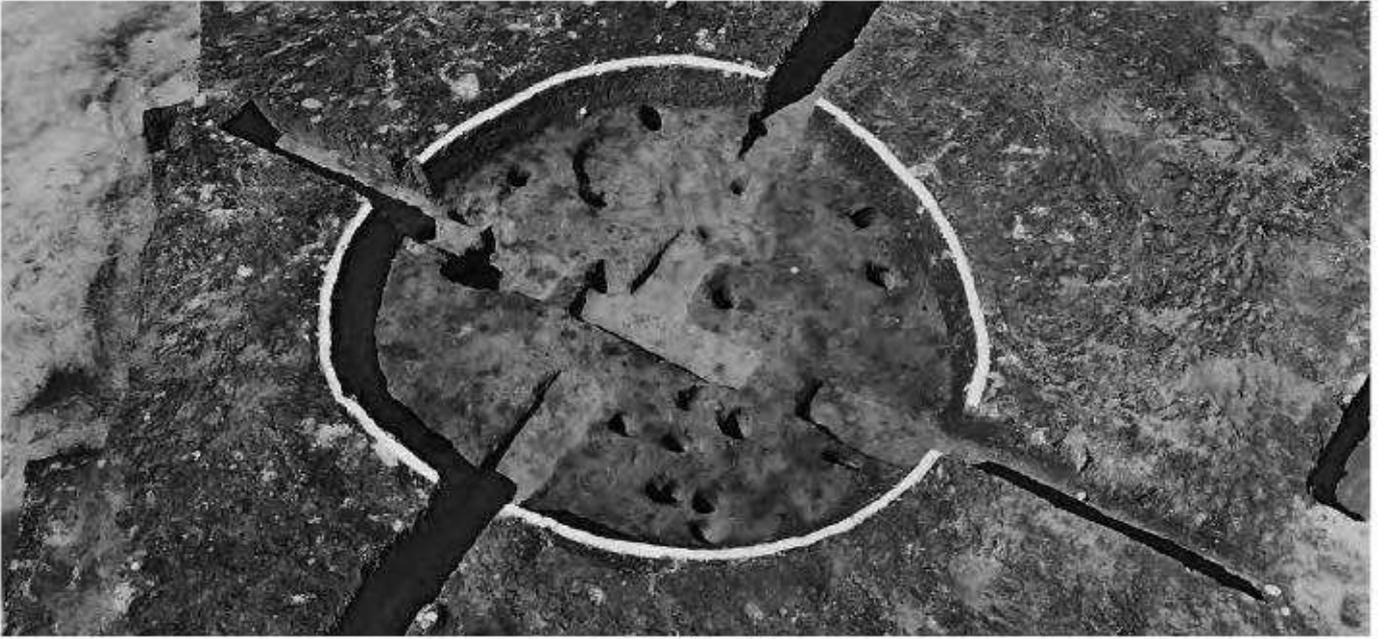
SI1057 炉検出状況 南から



SI1057 炉土層断面 西から



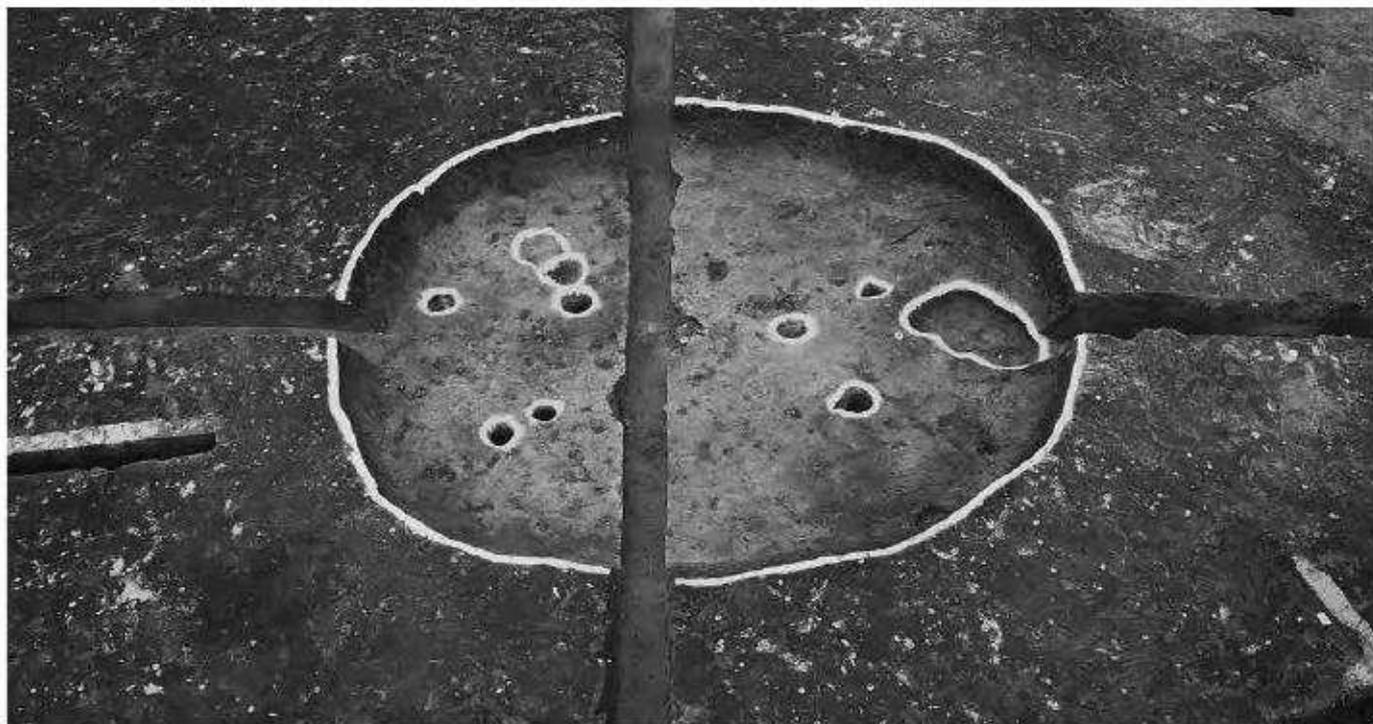
SI1027 土層断面 南西から



SI1027 完掘 南から



SI1036 土層断面 南から



SI1036 完掘 南から



SI1036 炉検出状況 南から



SI1036 P1 土層断面 南から



SI1051 土層断面 北から



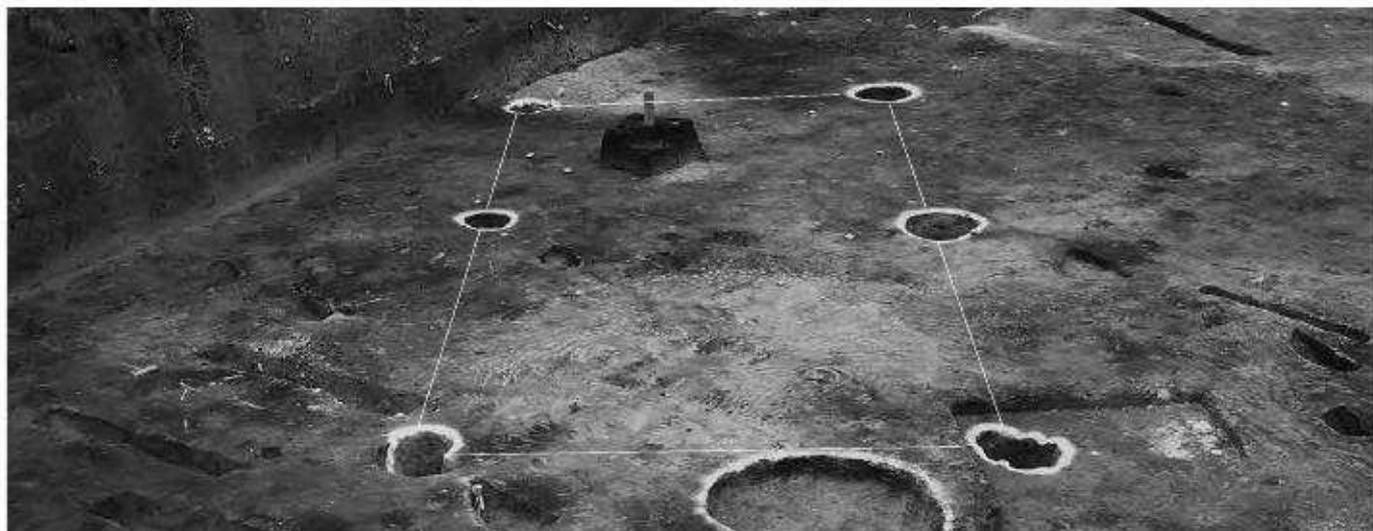
SI1051 完掘 北から



SI1054 完掘 南から



SB1045 完掘 東から



SB1063 完掘 南東から



SB1063 P3 土層断面 南から



SB1063 P4 土層断面 南から



SI1003 土層断面 西から



SI1003 完掘 西から



SI1008 土層断面 南から



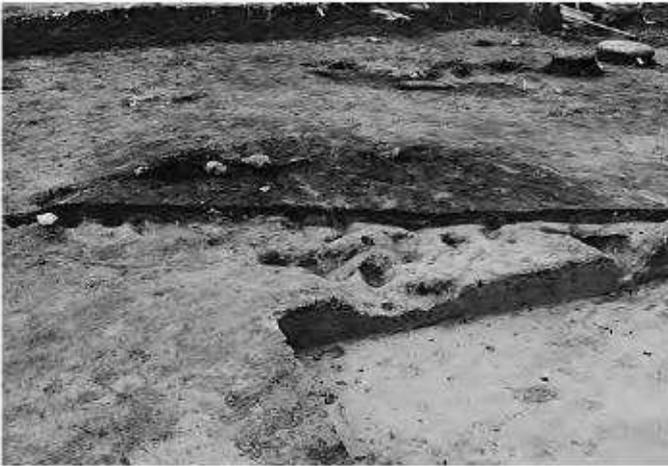
SI1008 完掘 南から



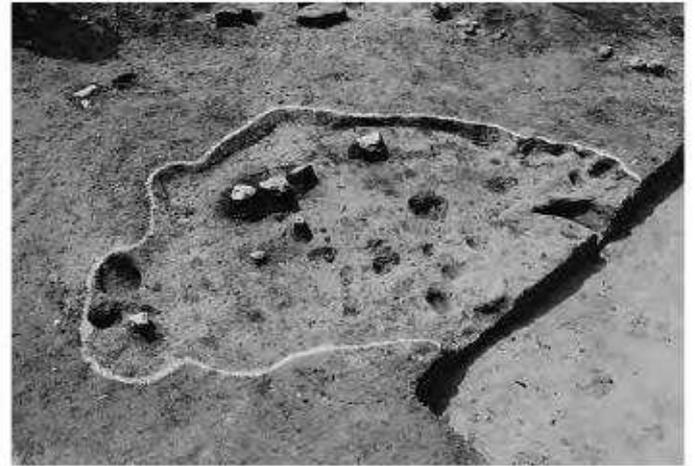
SI1011 土層断面 西から



SI1011 礫出土状況 東から



SI1012 土層断面 東から



SI1012 礫出土状況 南東から



SI1016 土層断面 北西から



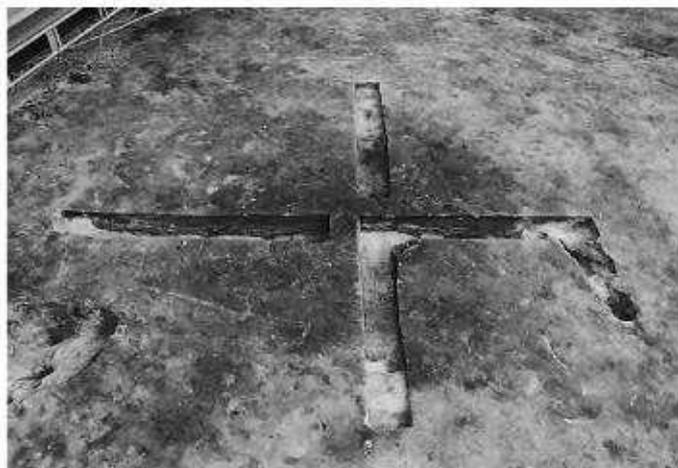
SI1016 完掘 北東から



SI1037 土層断面 西から



SI1037 完掘 東から



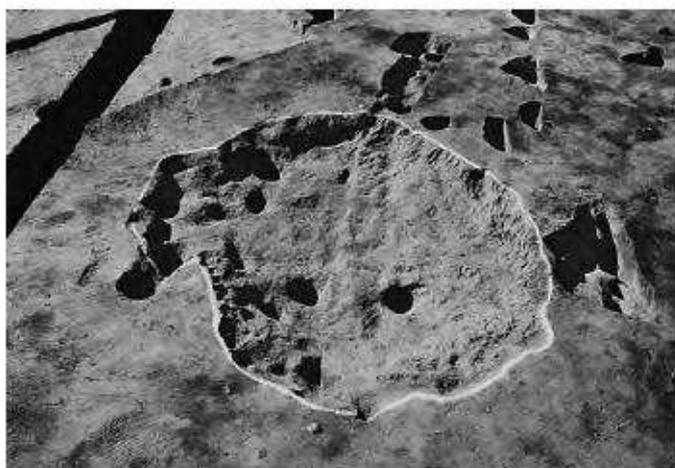
SI1039 土層断面 北西から



SI1039 完掘 西から



SI1040 土層断面 北から



SI1040 完掘 東から



SI1071 土層断面 南から



SI1071 完掘 南から



SK1001 土層断面 南西から



SK1001 遺物出土状況 南西から



SK1002土層断面 北西から



SK1002完掘 北西から



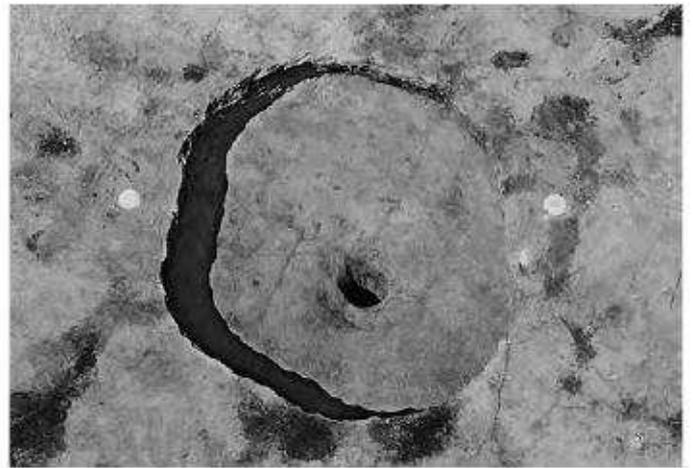
SK1004土層断面 北から



SK1004遺物出土状況 北から



SK1005土層断面 南から



SK1005完掘 南から



SK1006土層断面 南から



SK1006完掘 南から



SK1007土層断面 西から



SK1007完掘 西から



SK1013土層断面 北から



SK1013完掘 北から



SK1014土層断面 東から



SK1014完掘 北から



SK1015土層断面 南東から



SK1015完掘 北東から



SK1017 (上)・1018 (下) 土層断面 北から



SK1017 (左)・1018 (右) 完掘 北東から



SK1019 土層断面 南東から



SK1019 完掘 南東から



SK1020 土層断面 北西から



SK1020 完掘 南東から



SK1021 土層断面 西から



SK1021 完掘 東から



SK1022土層断面 南から



SK1022完掘 南から



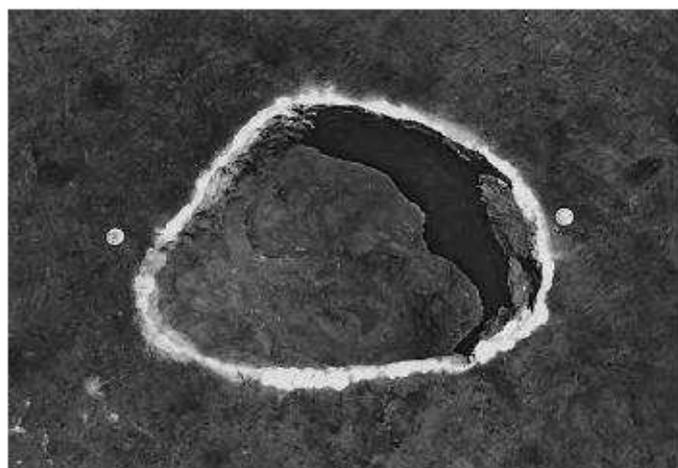
SK1023土層断面 南西から



SK1023完掘 西から



SK1024土層断面 西から



SK1024完掘 西から



SK1025土層断面 南東から



SK1025完掘 南から



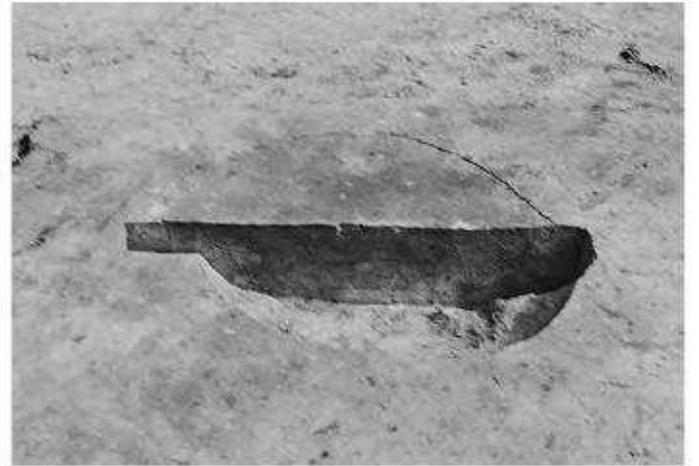
SK1026 完掘 西から



SK1028 土層断面 南西から



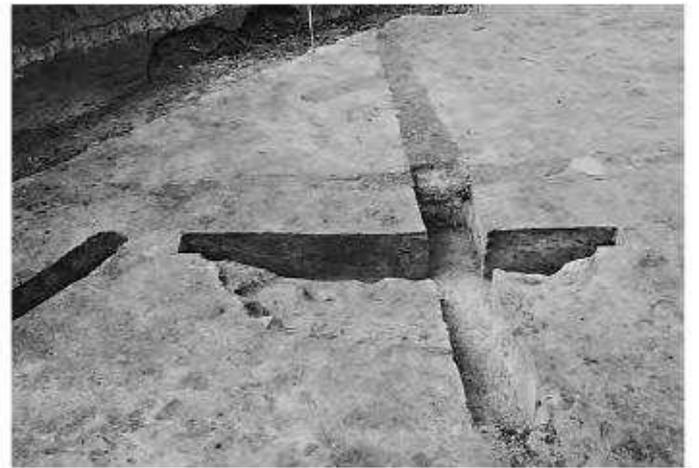
SK1028 完掘 南から



SK1031 土層断面 南西から



SK1031 完掘 東から



SK1032 土層断面 東から



SK1032 完掘 北西から



SK1033 土層断面 北東から



SK1033 完掘 西から



SK1038 土層断面 北東から



SK1041 土層断面 南から



SK1041 完掘 南から



SK1042 (中)・1047 (両側) 土層断面 北から



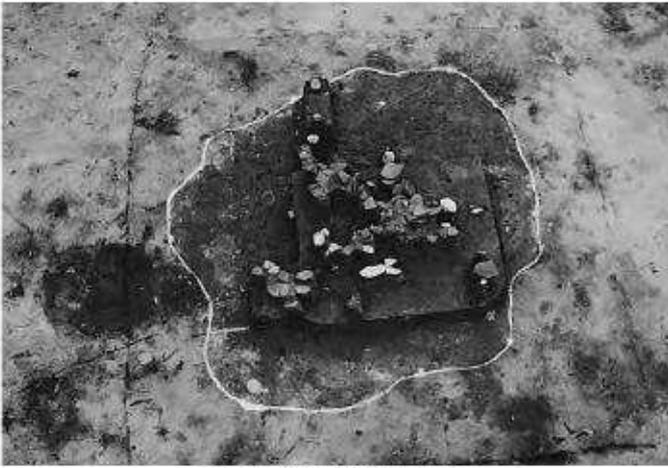
SK1042 (中)・1047 (両側) 完掘 南から



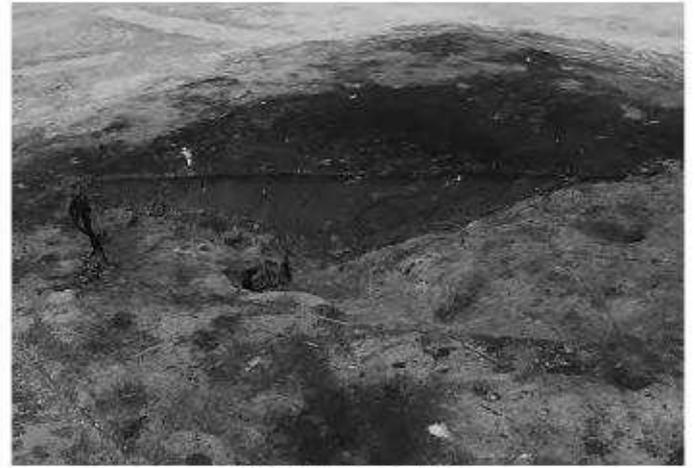
SK1043 土層断面 南から



SK1043 完掘 南から



SK1044 遺物出土状況 東から



SK1044 土層断面 南から



SK1044 完掘 北から



SK1046 土層断面 西から



SK1046 遺物出土状況 西から



SK1048 (右)・1055 (左) 土層断面 西から



SK1048 (上)・1055 (下) 完掘 北東から



SK1049 土層断面 南から



SK1049 完掘 北東から



SK1052 土層断面 南から



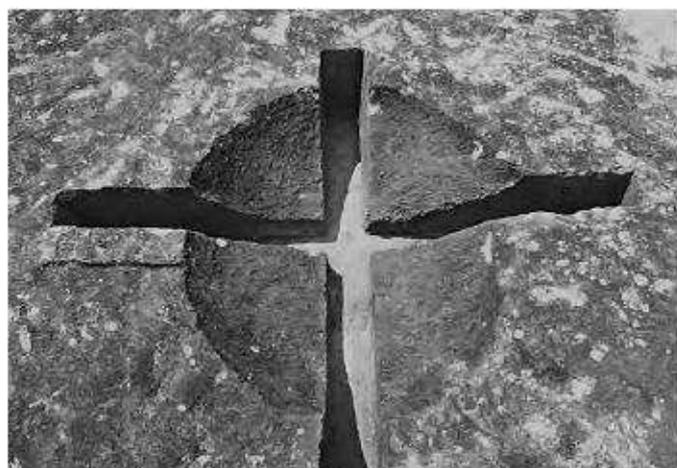
SK1052 完掘 南から



SK1053 土層断面 西から



SK1053 完掘 東から



SK1056 完掘 北から



SK1058 土層断面 南西から



SK1058 完掘 北東から



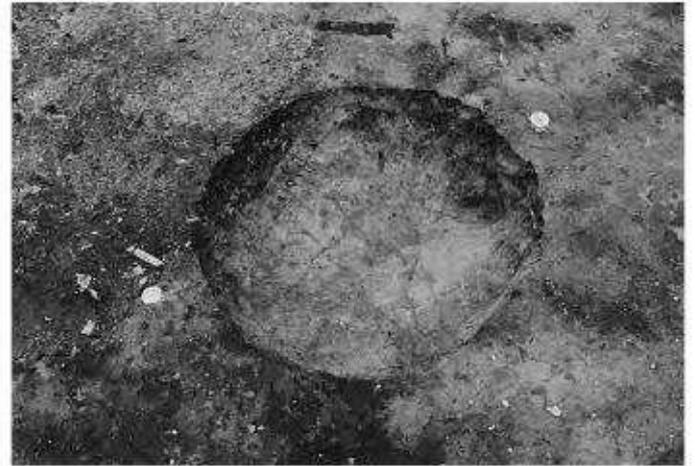
SK1059 土層断面 北東から



SK1059 完掘 北東から



SK1060 土層断面 南東から



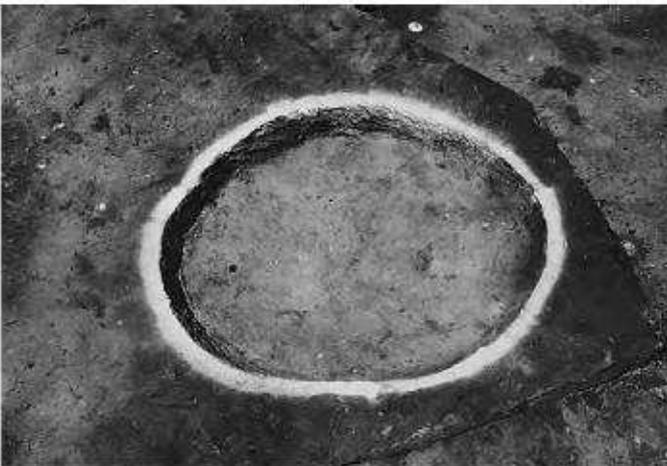
SK1060 完掘 南から



SK1061 遺物出土状況 南から



SK1061 土層断面 南から



SK1061 完掘 南から



SK1064 土層断面 南から



SK1064 完掘 西から



SK1065 土層断面 西から



SK1065 遺物出土状況 西から



SK1066 礫出土状況 西から



SK1066 土層断面 南から



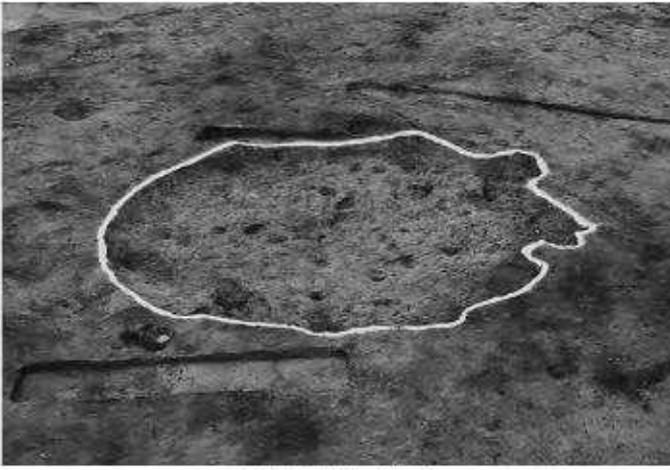
SK1066 完掘 西から



SK1067 礫出土状況 西から



SK1067 土層断面 西から



SK1067 完掘 南から



SK1068 土層断面 南から



SK1068 完掘 南から



SK1069 礫出土状況 南から



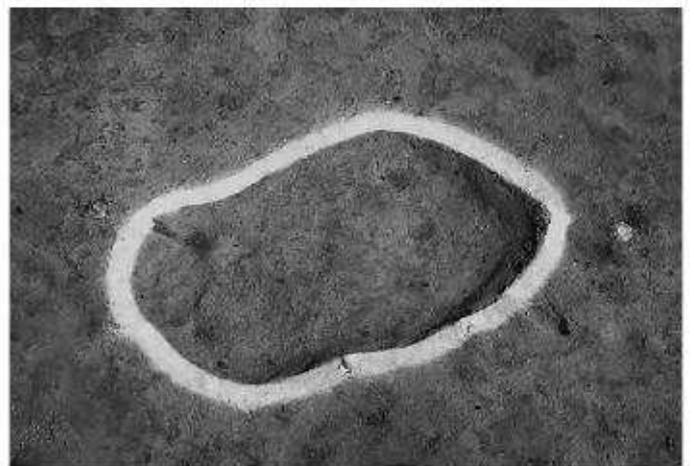
SK1069 土層断面 南から



SK1069 完掘 南から



SK1070 土層断面 南から



SK1070 完掘 南から



SK1072土層断面 南から



SK1072完掘 西から



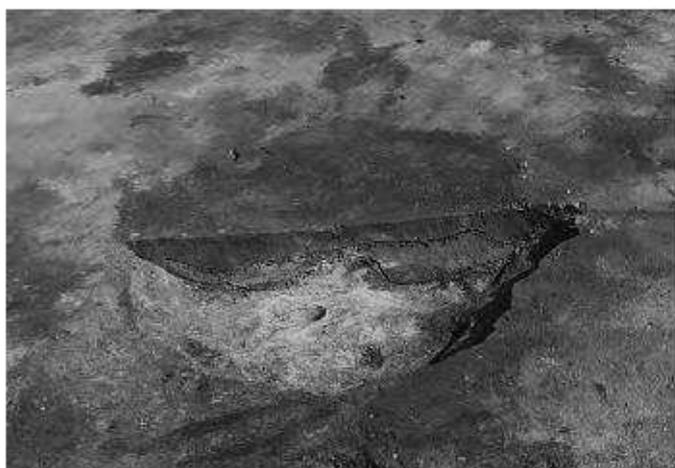
SK1073礫出土状況 南から



SK1073土層断面 南から



SK1073完掘 南から



SK1074土層断面 南から



SK1074完掘 南から



SK1075土層断面 南東から



SK1075 完掘 南から



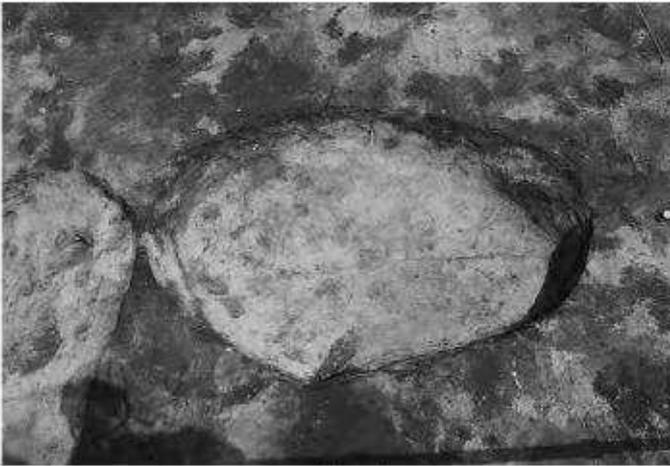
SK1076 土層断面 西から



SK1076 完掘 北西から



SK1077 土層断面 西から



SK1077 完掘 南西から



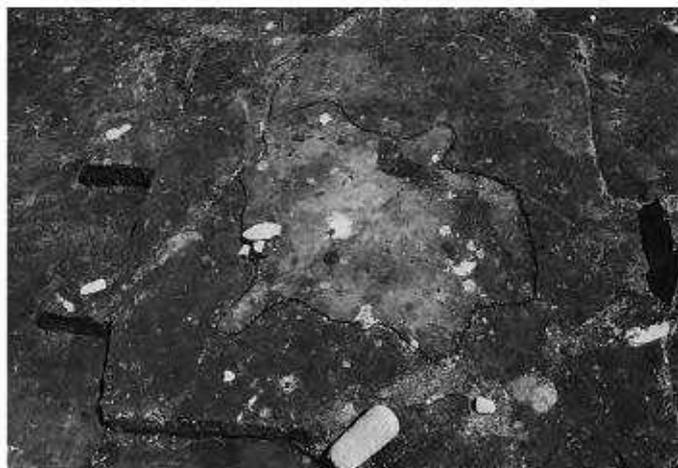
SD1030 土層断面 南西から



SD1030 完掘 北西から



SX1062 検出状況 南西から



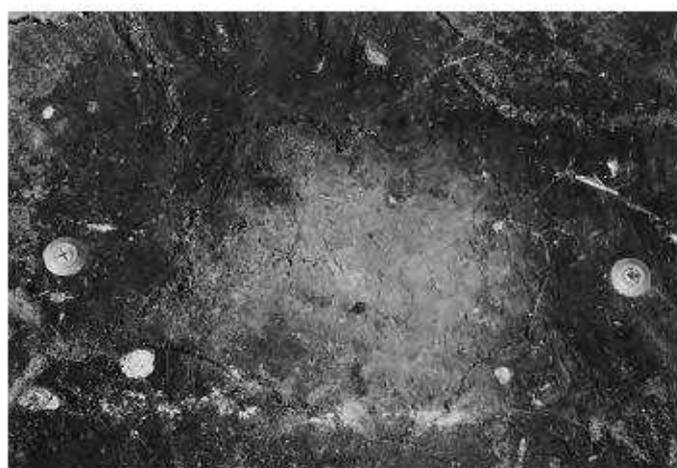
7C・1号焼土検出状況 西から



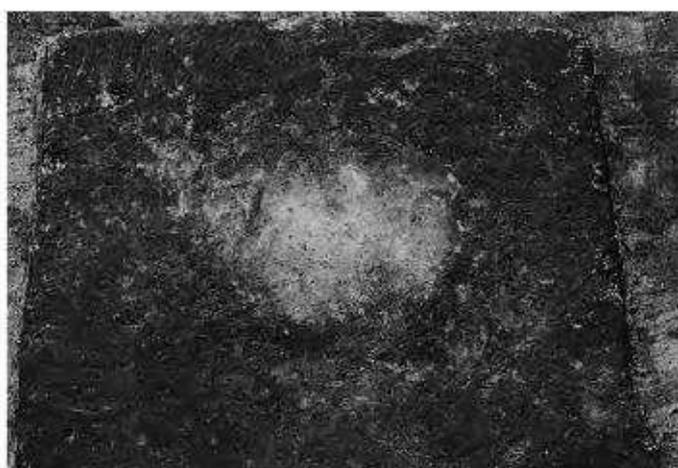
8D・1号焼土検出状況 南から



11D・1号焼土検出状況 北西から



12B・3号焼土検出状況 南から



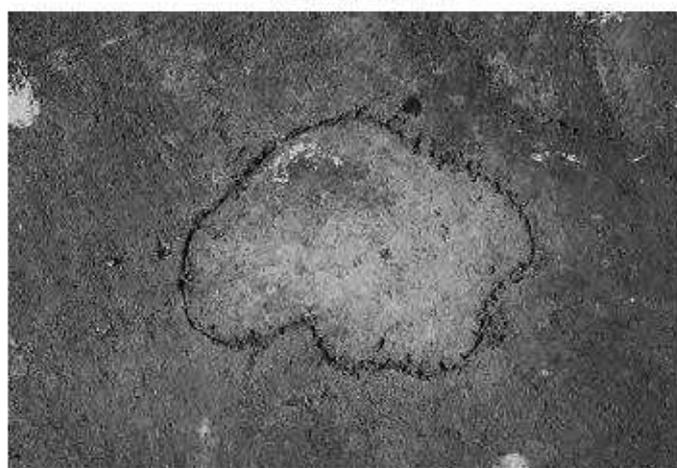
12F・1号焼土検出状況 北から



13D・1号焼土検出状況 北から



14F・1号焼土検出状況 南東から



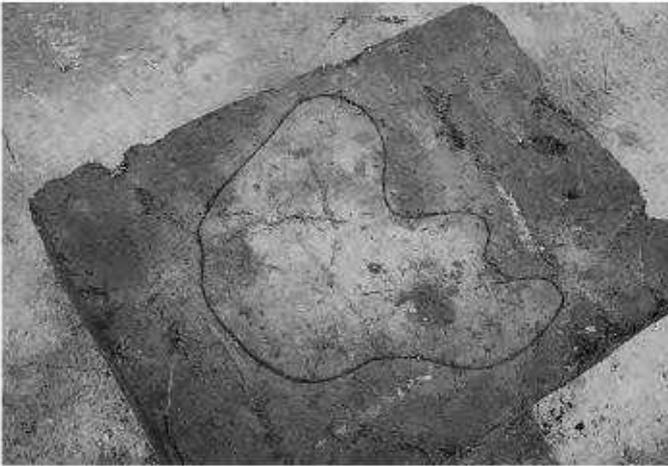
15D・1号焼土検出状況 南から



16E・1号焼土検出状況 南東から



17C・3号焼土検出状況 南から



17E・2号焼土検出状況 南から



18F・2号焼土検出状況 南から



8E・1号集石検出状況 南から



14F・1号集石検出状況 南東から



14F・1号集石土層断面 南から



17F・1号集石検出状況 南から



17F・1号集石土層断面 北西から



17F・2号集石検出状況 南から



17F・2号集石土層断面 南から



17F・3号集石検出状況 南東から



17F・3号集石土層断面 西から



17G・1号集石検出状況 南西から



18F・1号集石検出状況 南から



18F・1号集石土層断面 西から



13E・3号遺物集中地点検出状況 南から



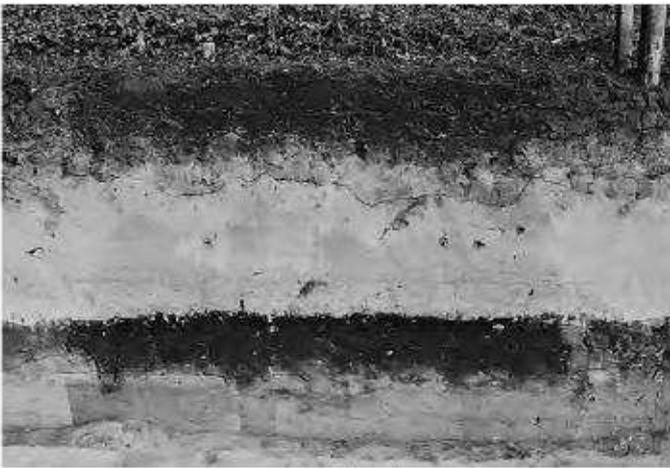
18F・1号遺物集中地点検出状況 北東から



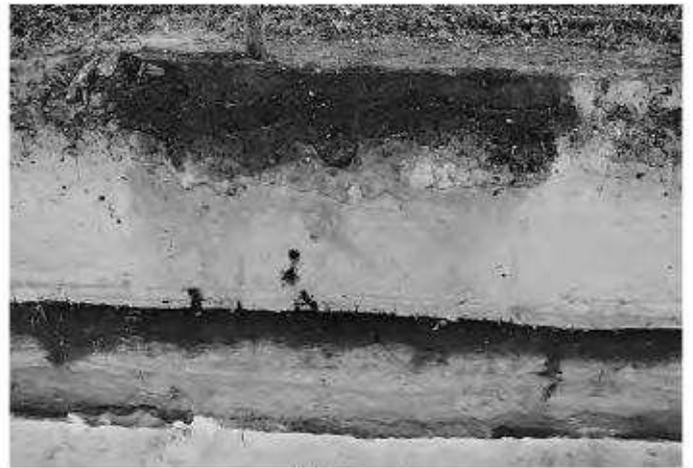
15B・1号遺物集中地点検出状況 西から



4B・沢A土層堆積状況 南西から



6A21・基本層序 南西から



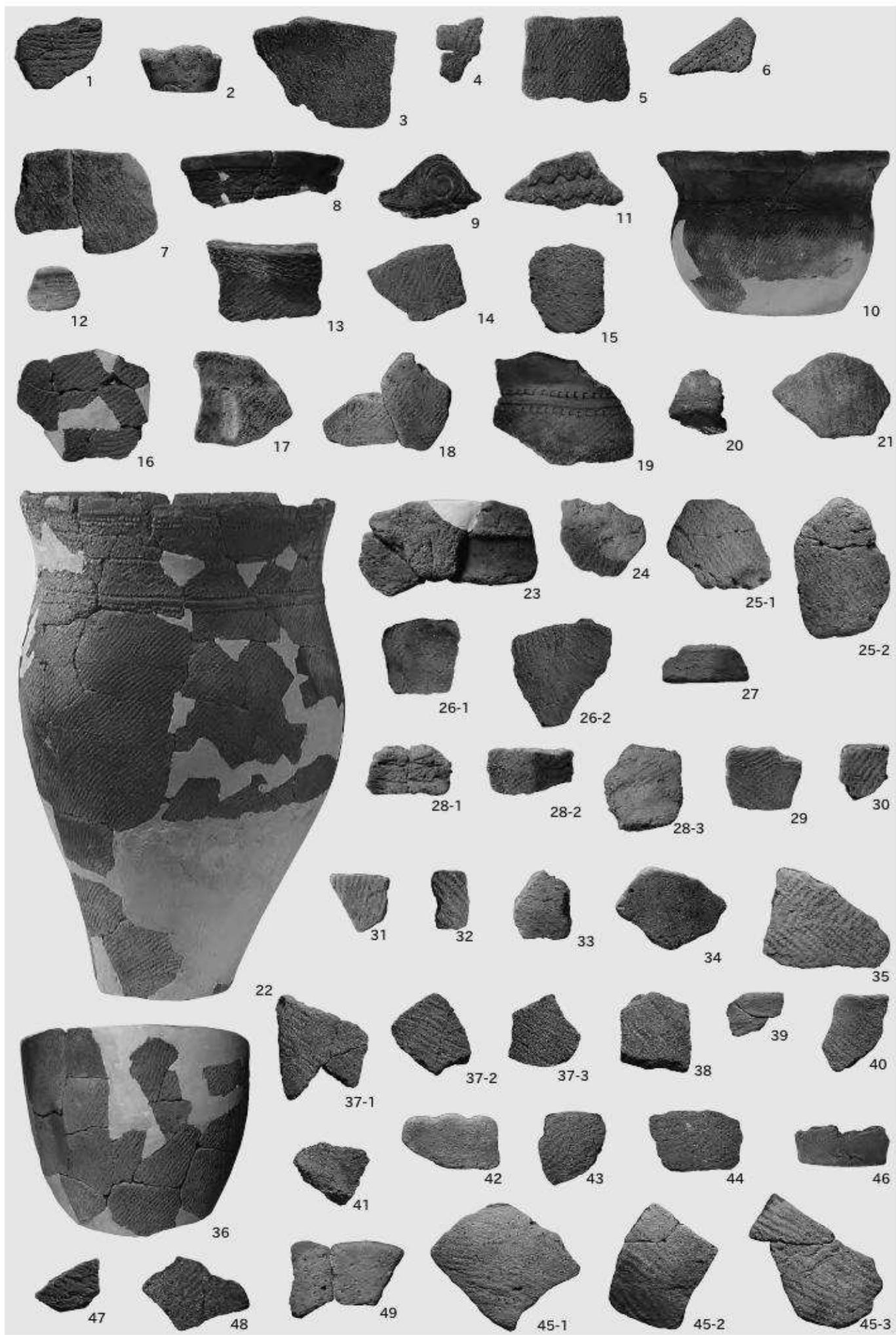
10B6・基本層序 南西から

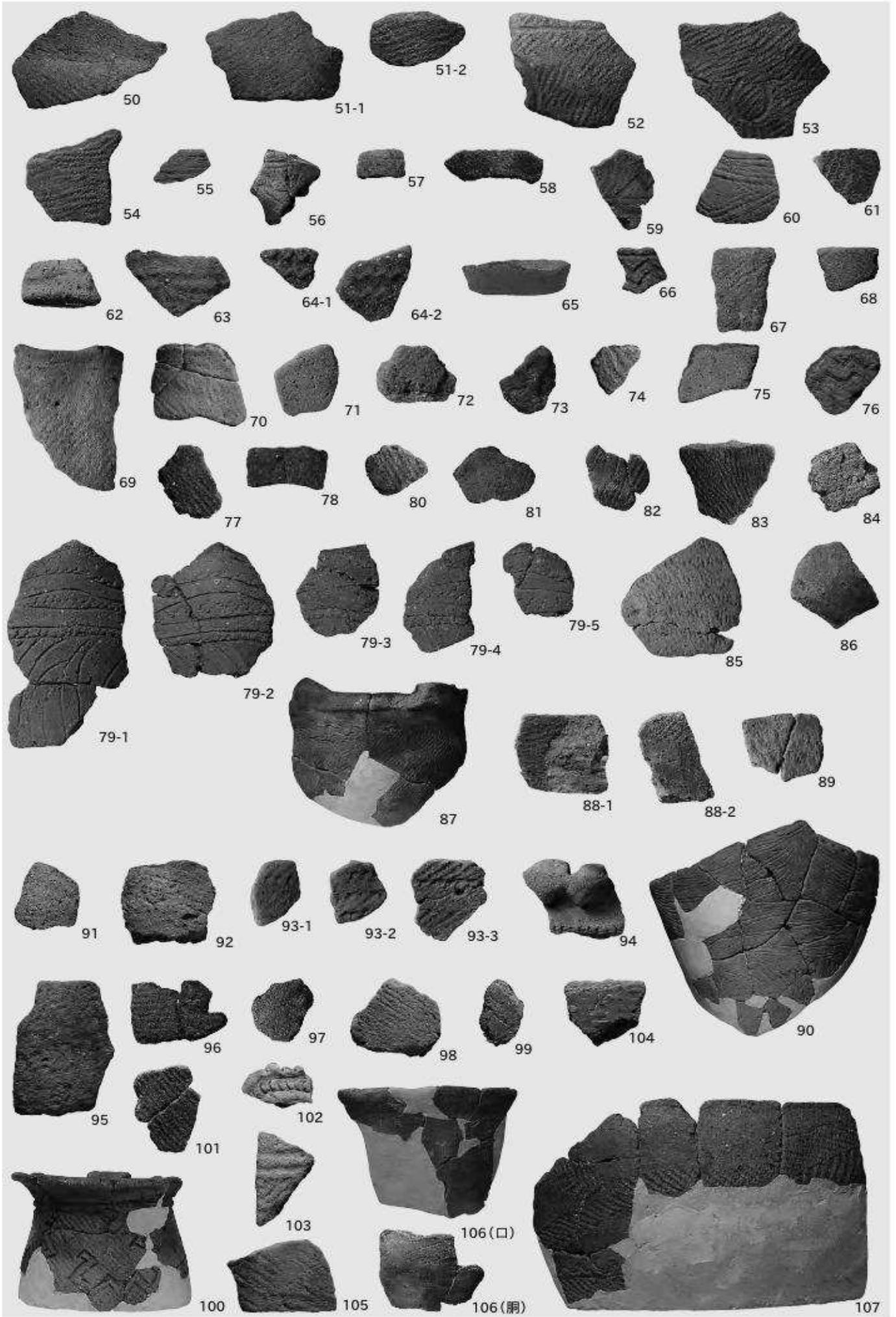


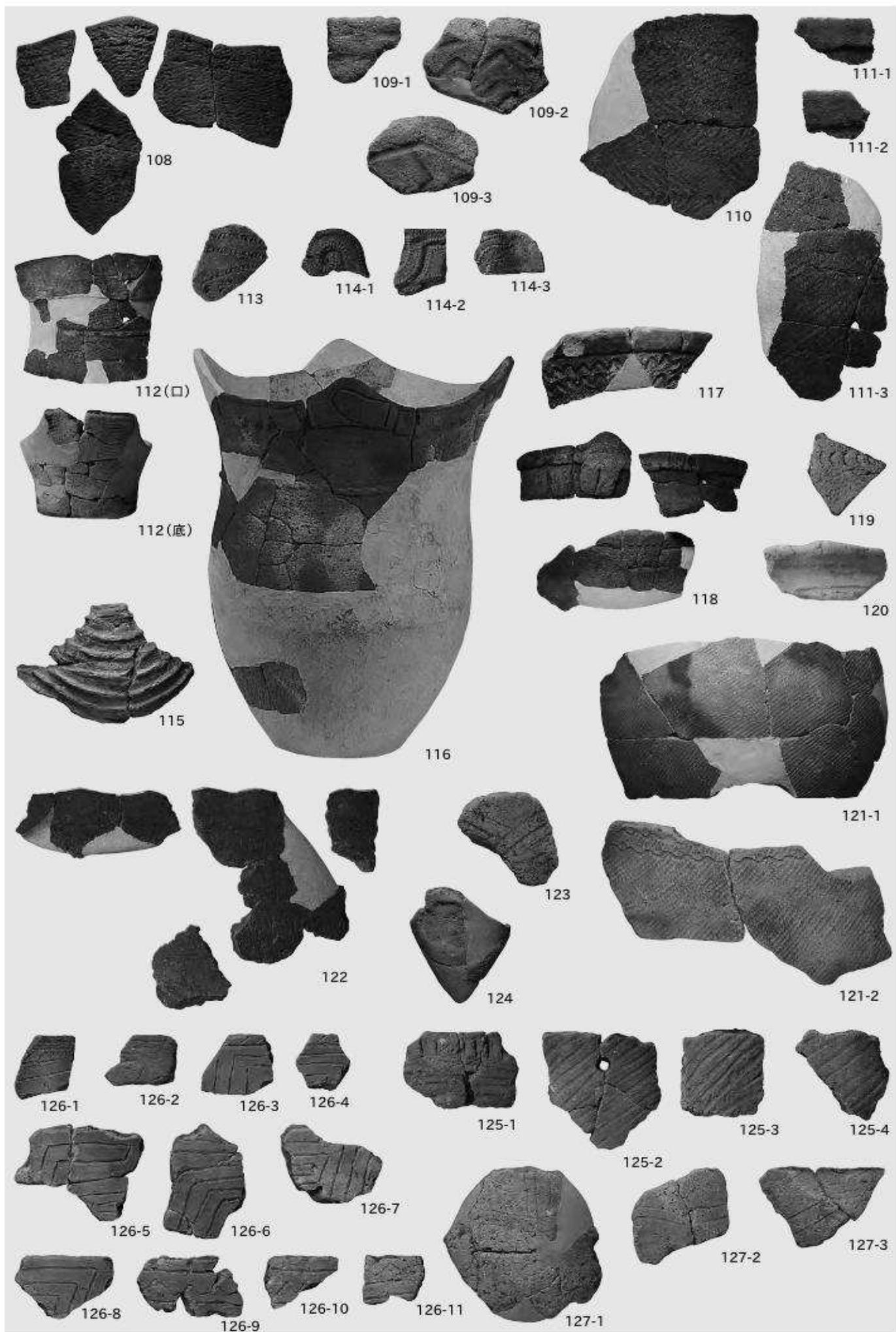
基本層序・東側調査区境界壁 南から

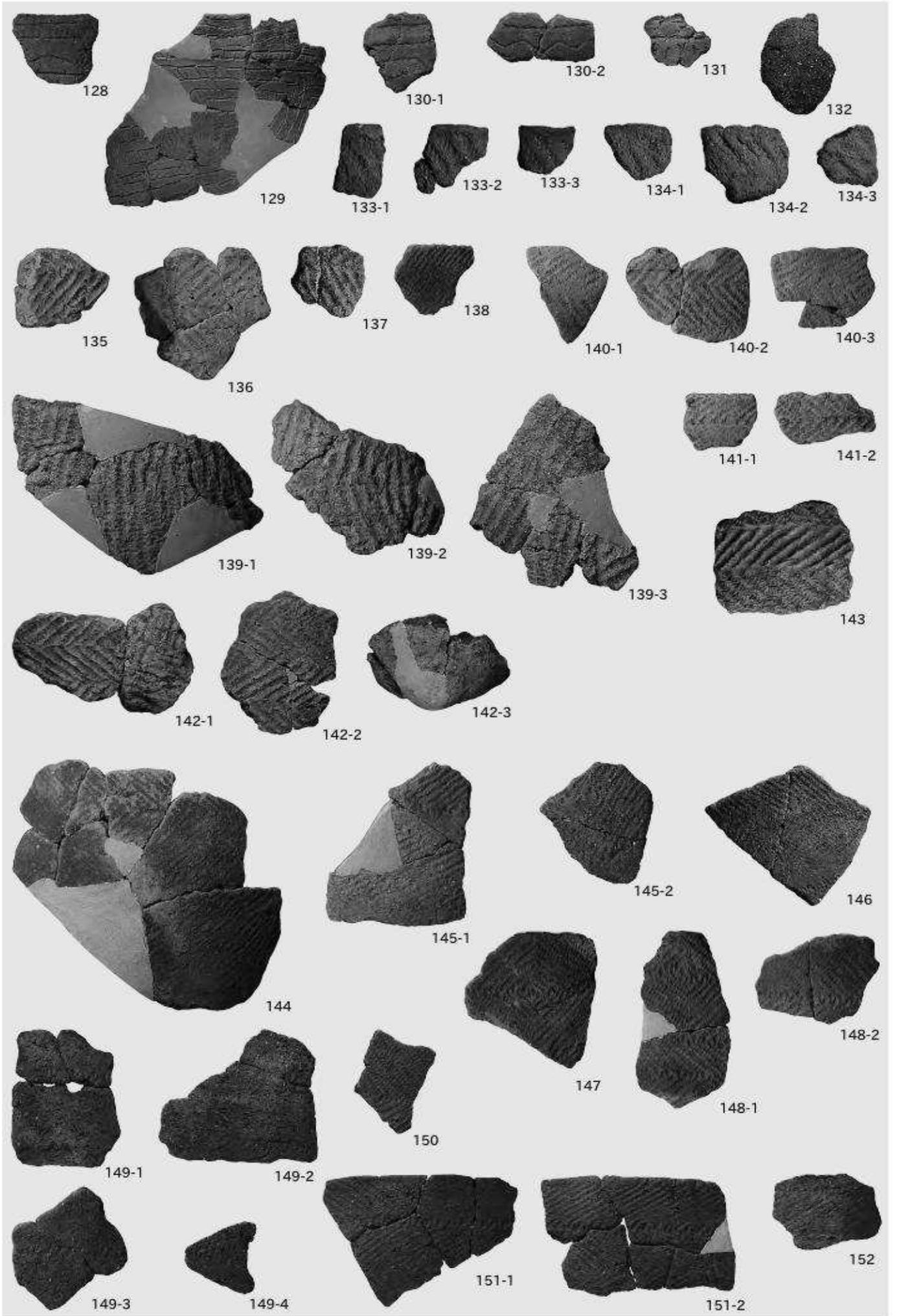


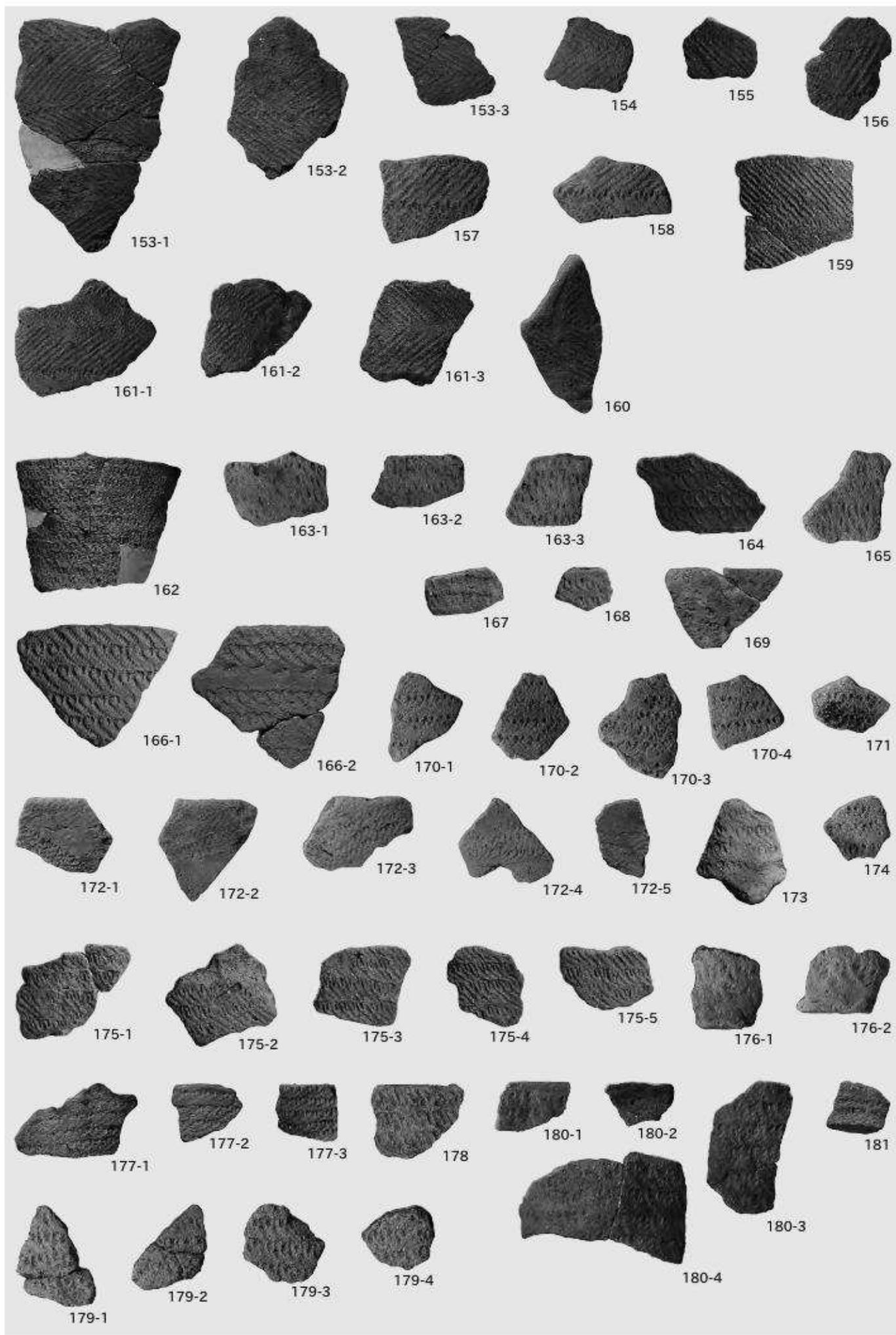
基本層序・西側調査区境界壁 東から

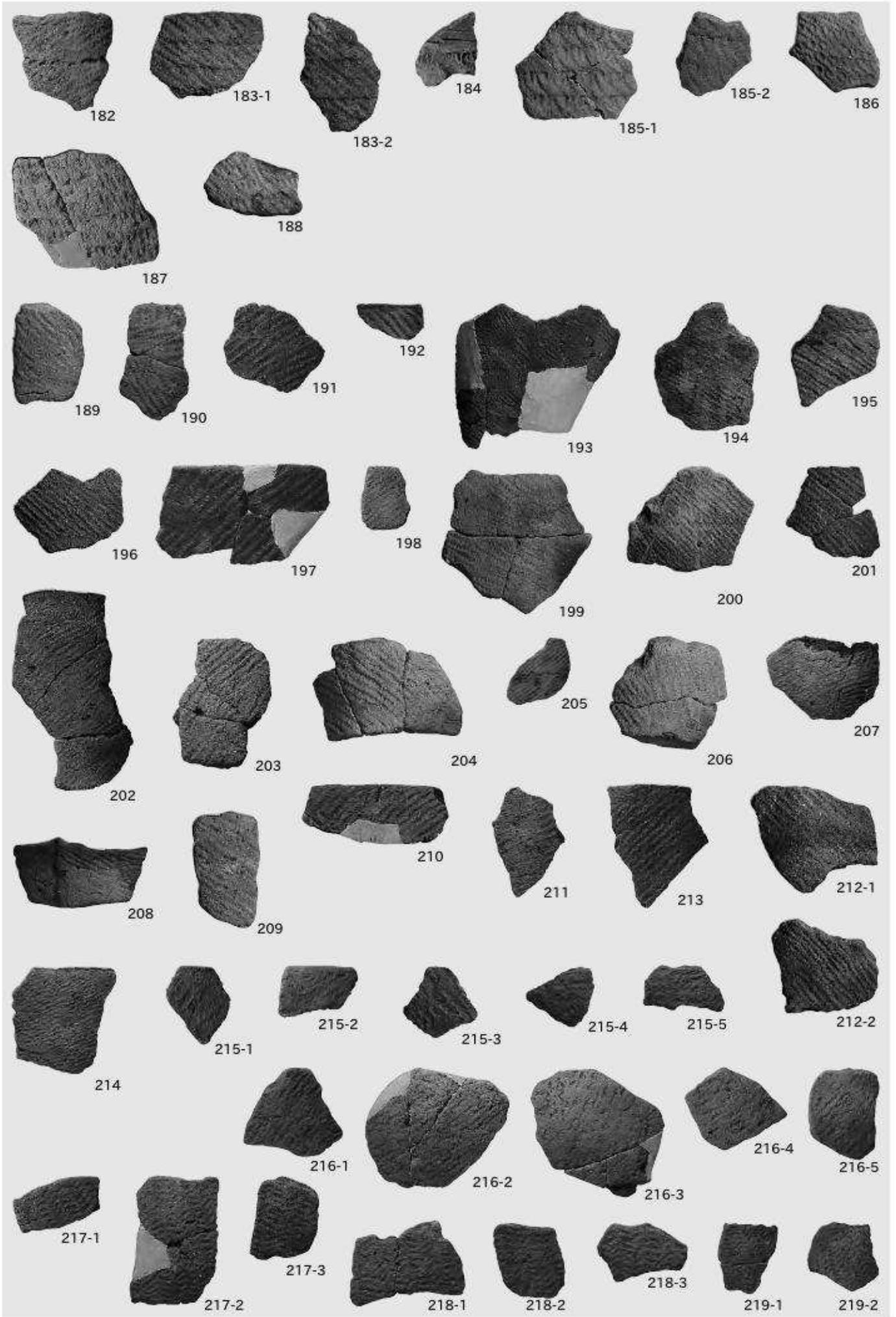


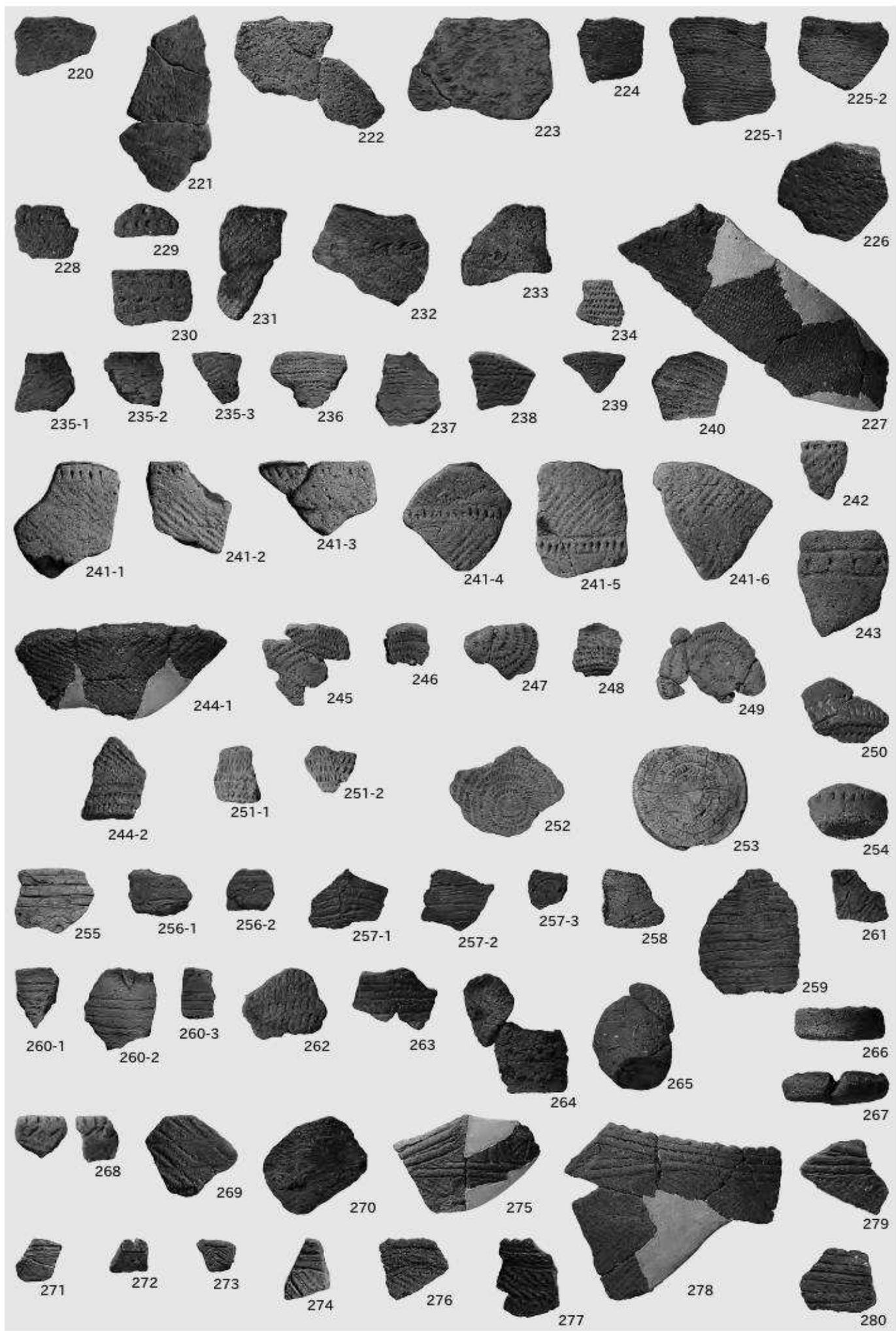


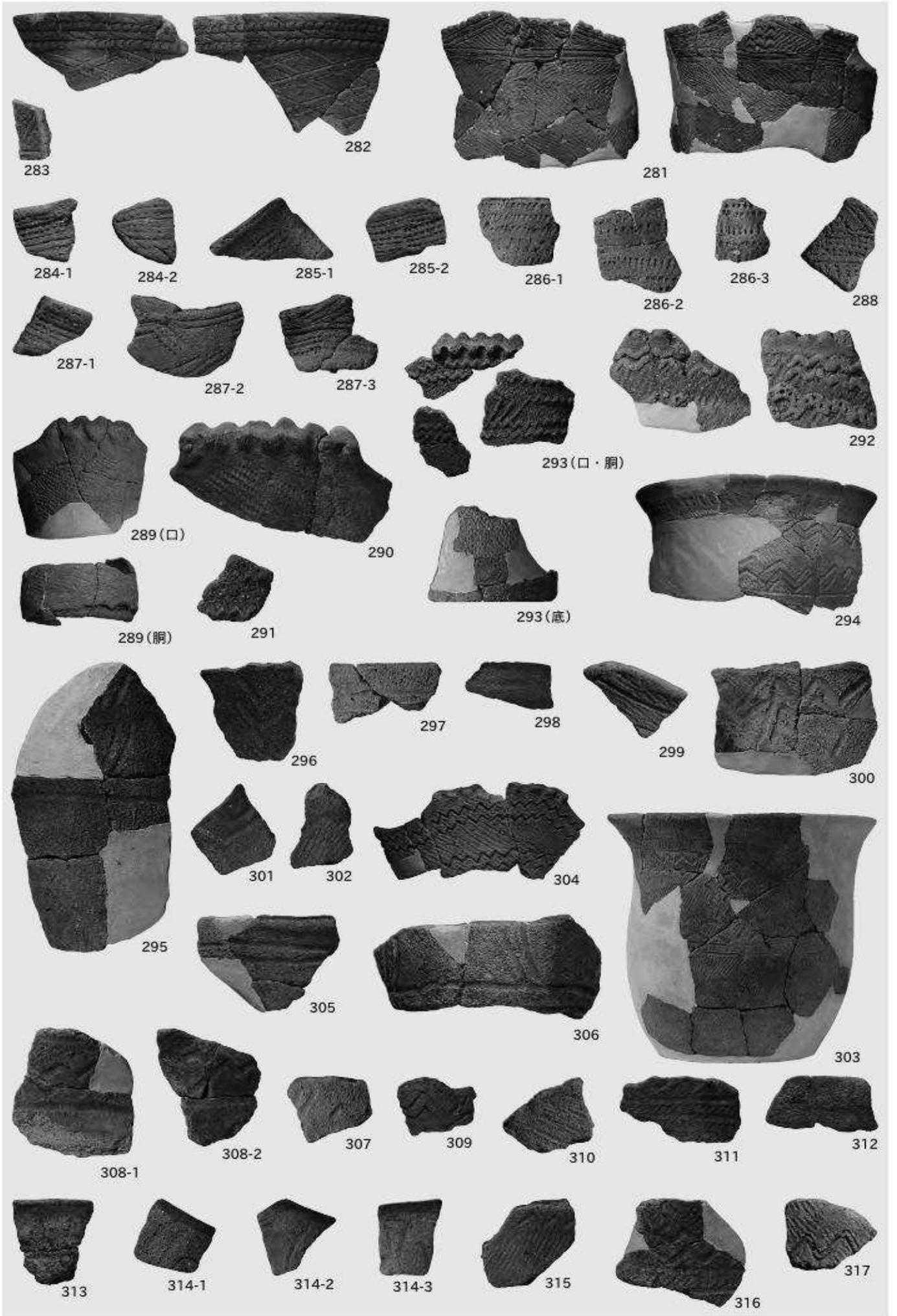


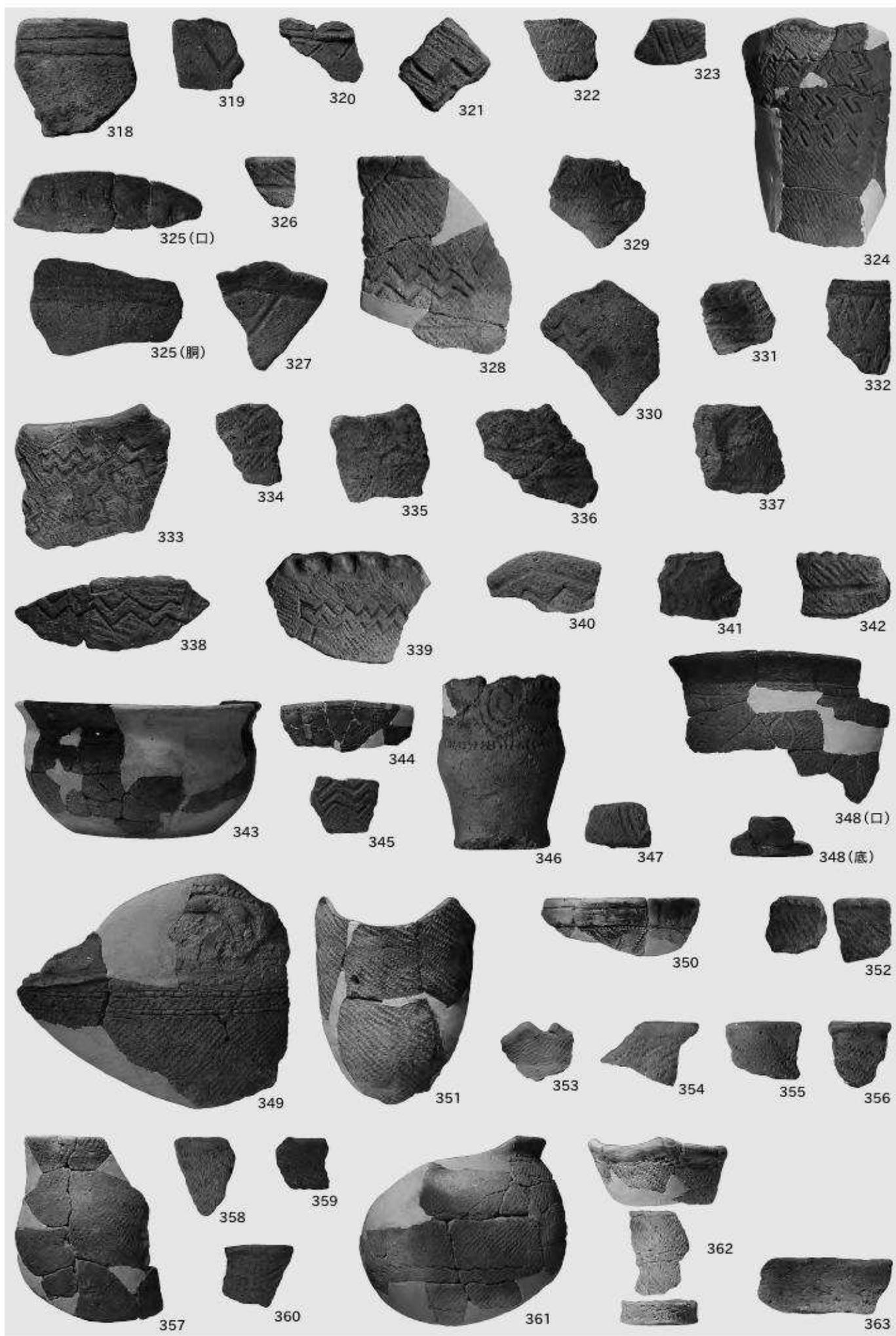


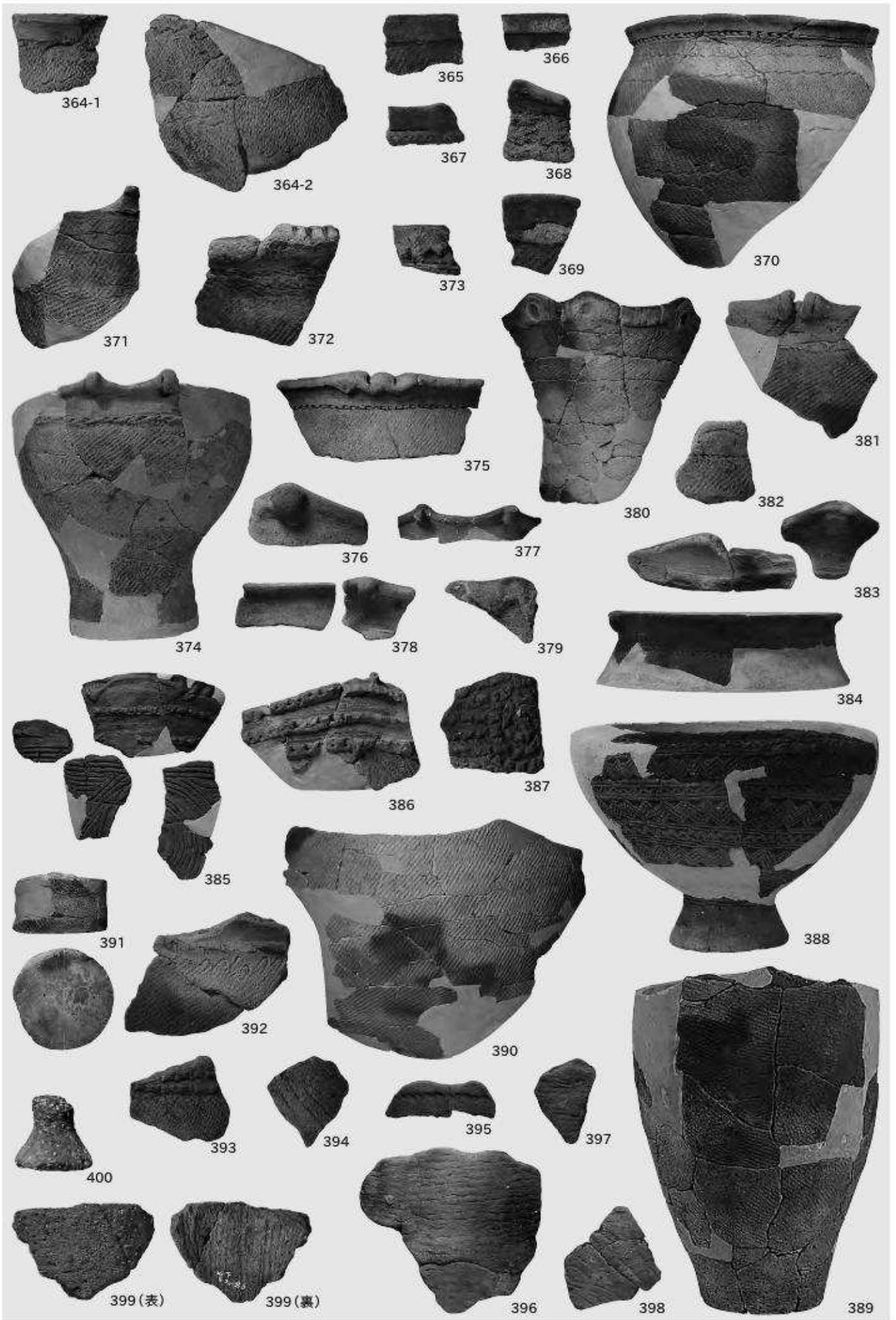


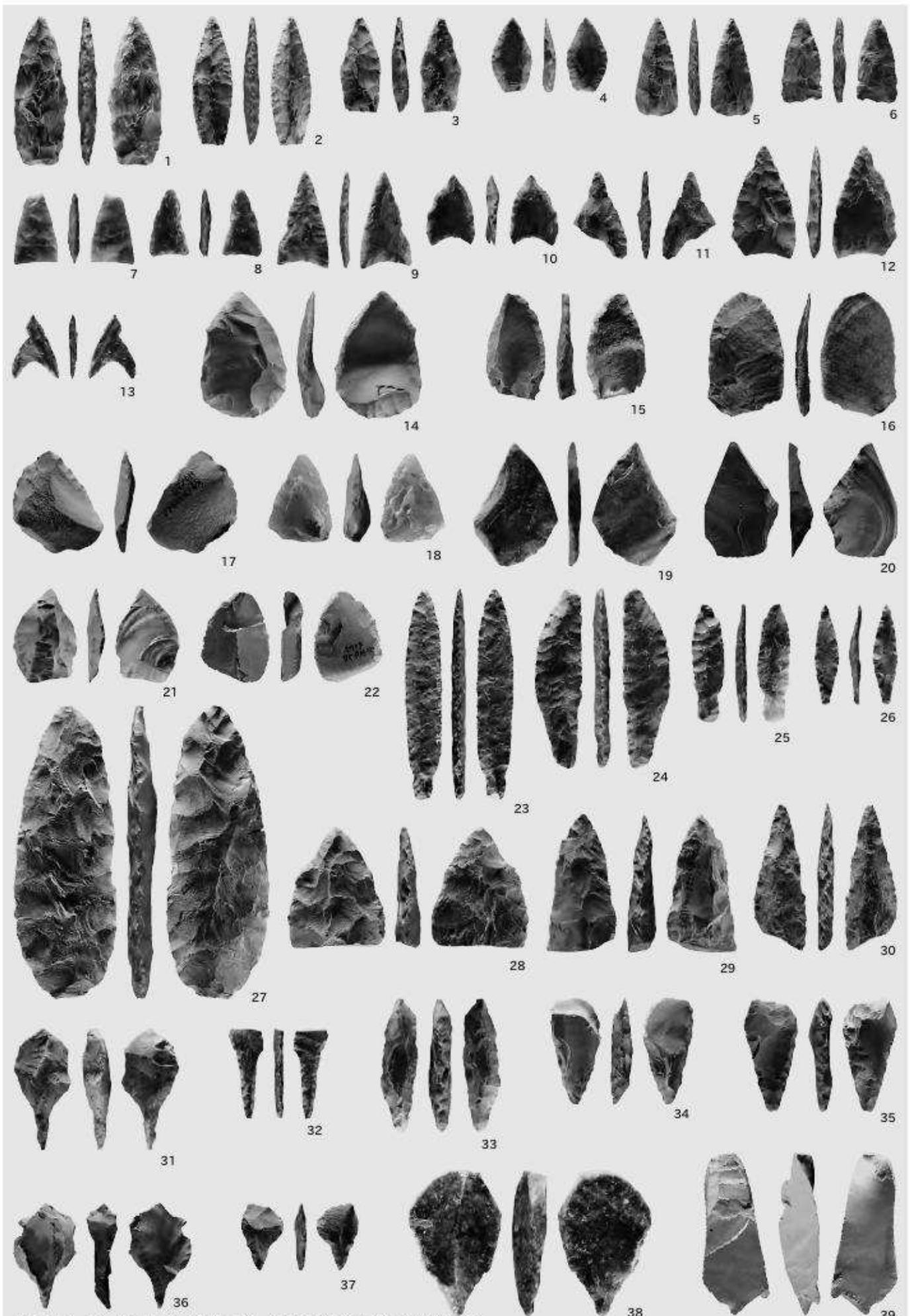










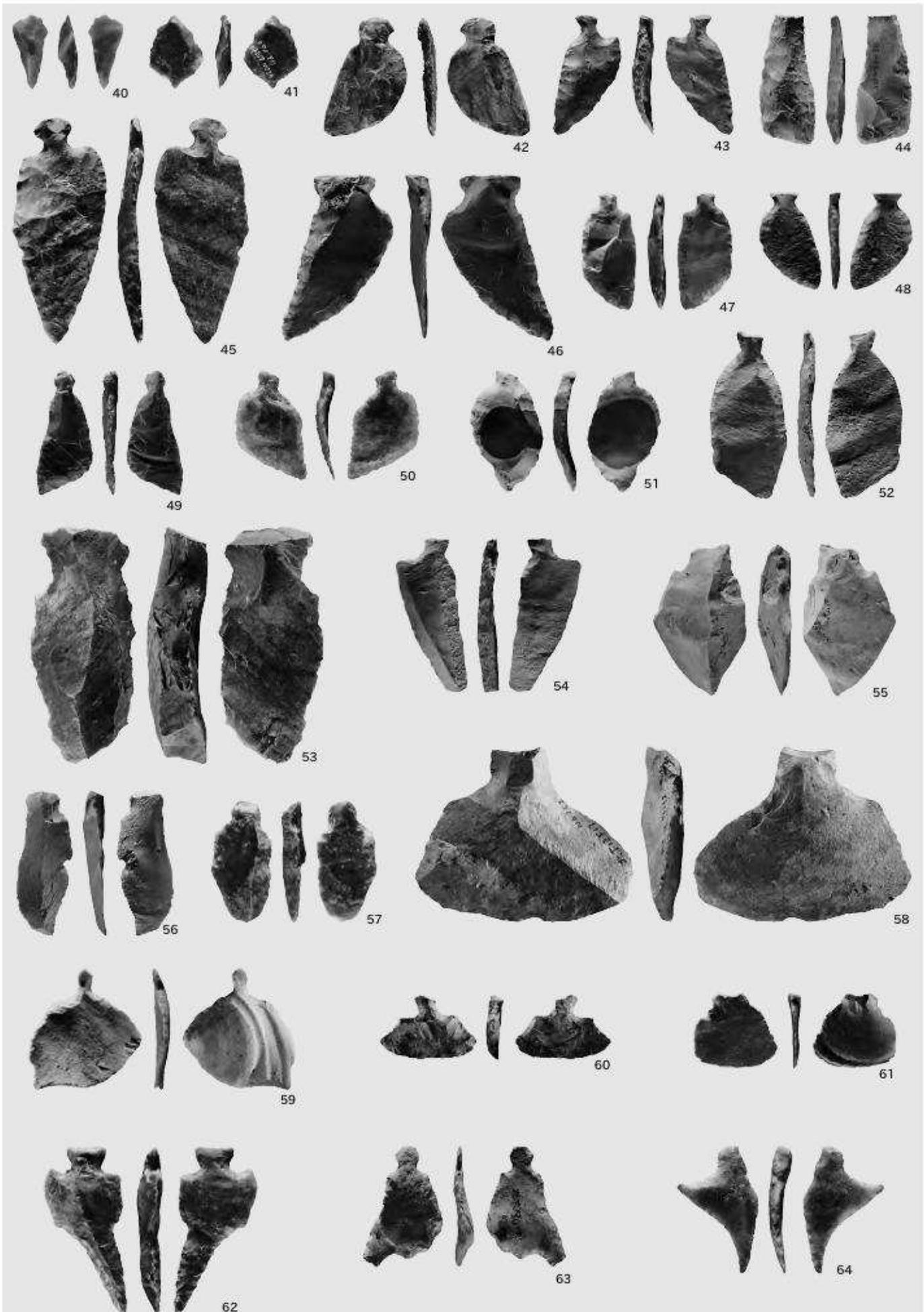


石鏃A1類 (1~4)・A2類 (5~8)・B類 (9~13)  
尖頭器A類 (23~26)・B類 (27)・C類 (28~30)

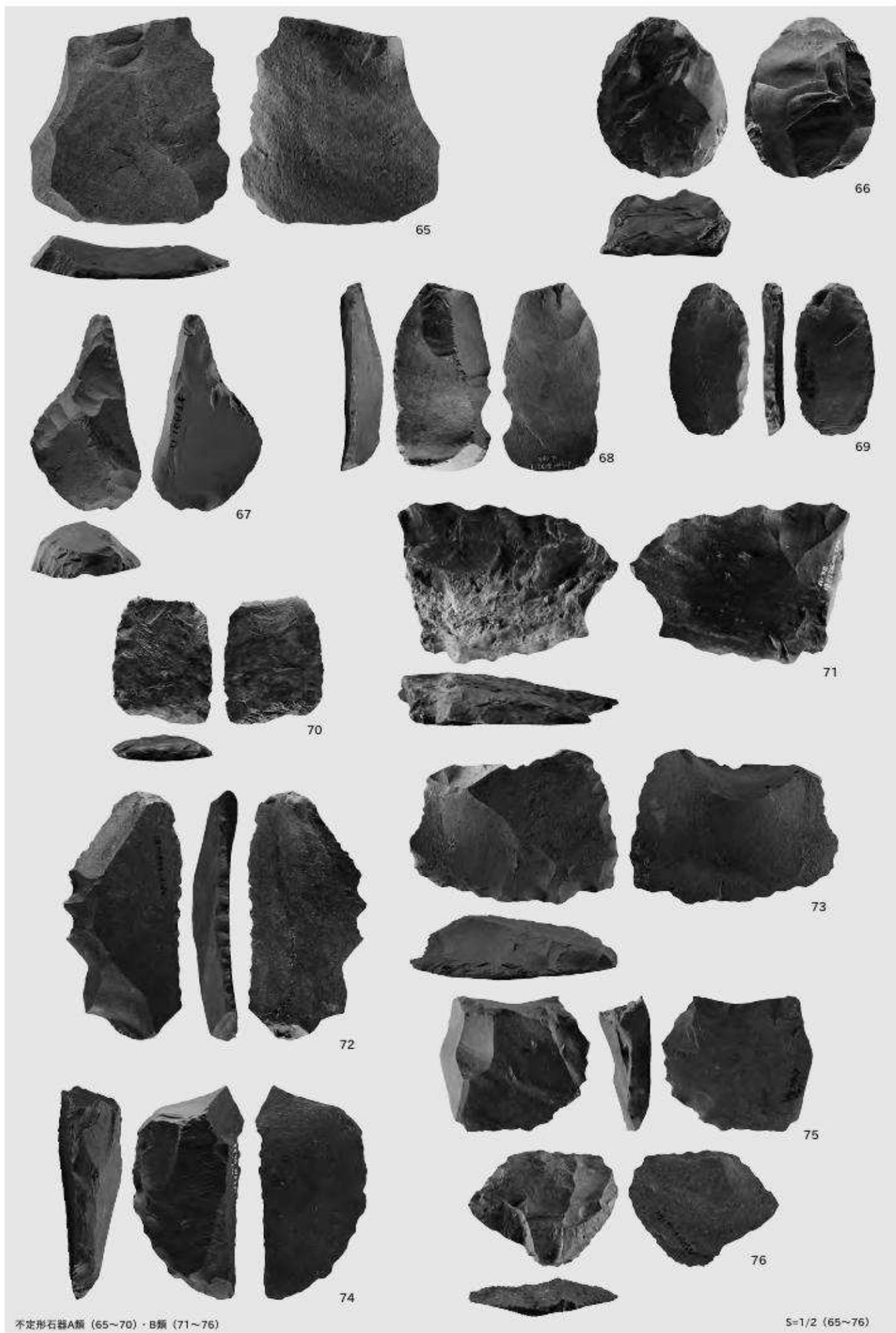
石鏃未成品A類 (14~19)・B類 (20~22)

石錐A類 (31・32)・B類 (33)・C1類 (34・35)・C2類 (36~38)・D類 (39)

S=2/3 (1~22)・1/2 (23~39)

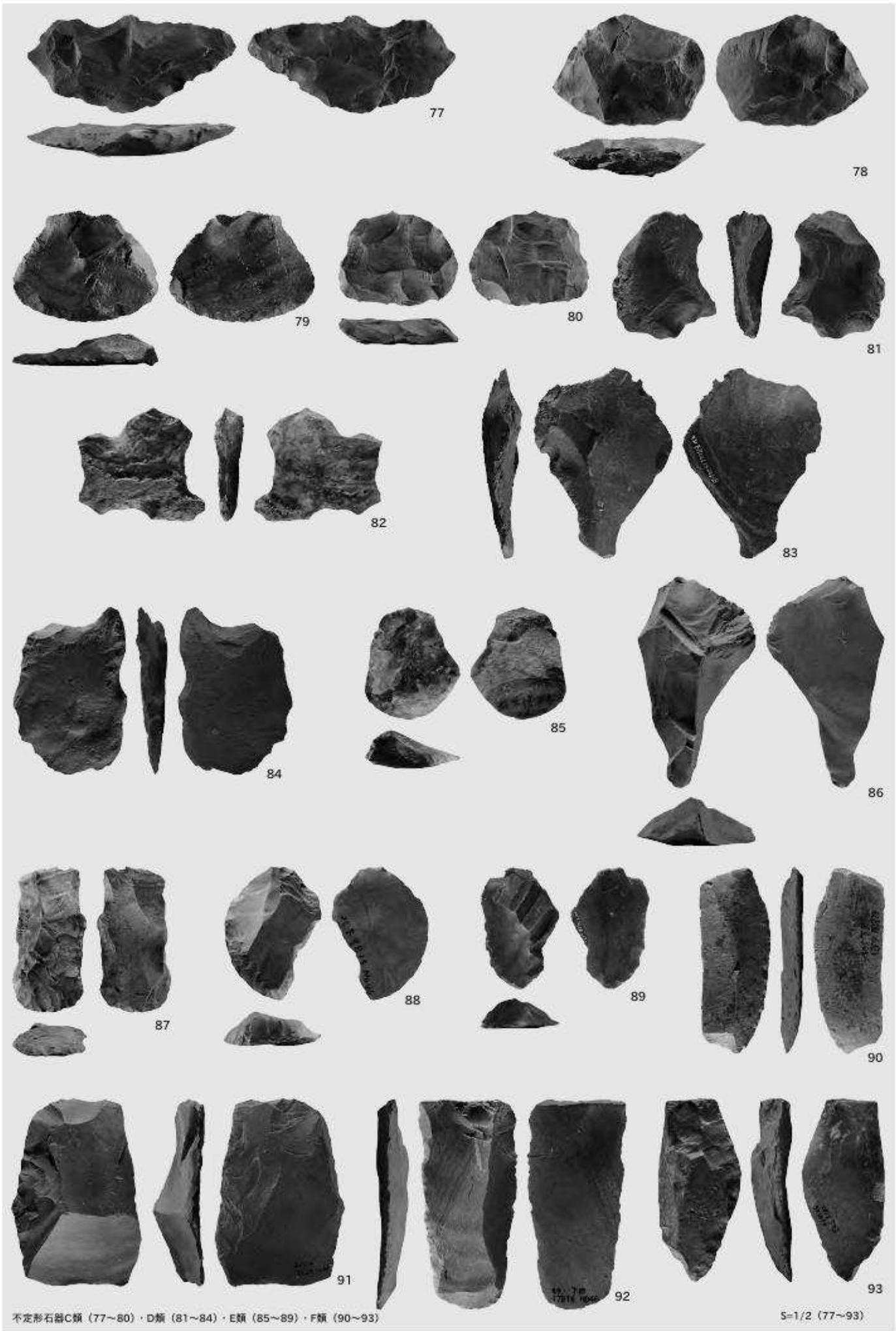


石錐D類 (40~41) 石匙A1類 (42~45) · A2類 (46~49) · A3類 (50~53) · A4類 (54~57) · B類 (58~61) · C類 (62~64)



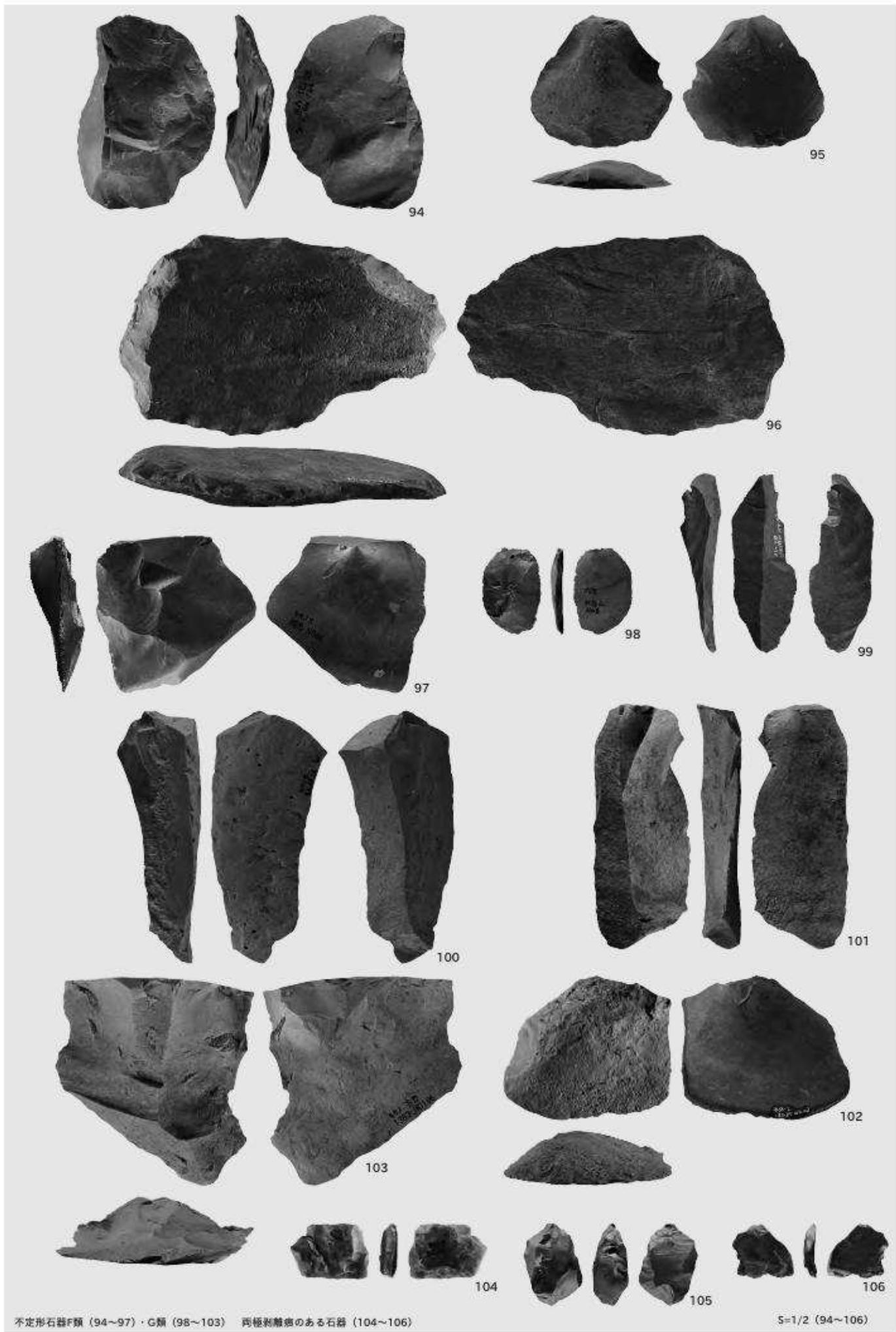
不定形石器A類 (65~70)・B類 (71~76)

S=1/2 (65~76)



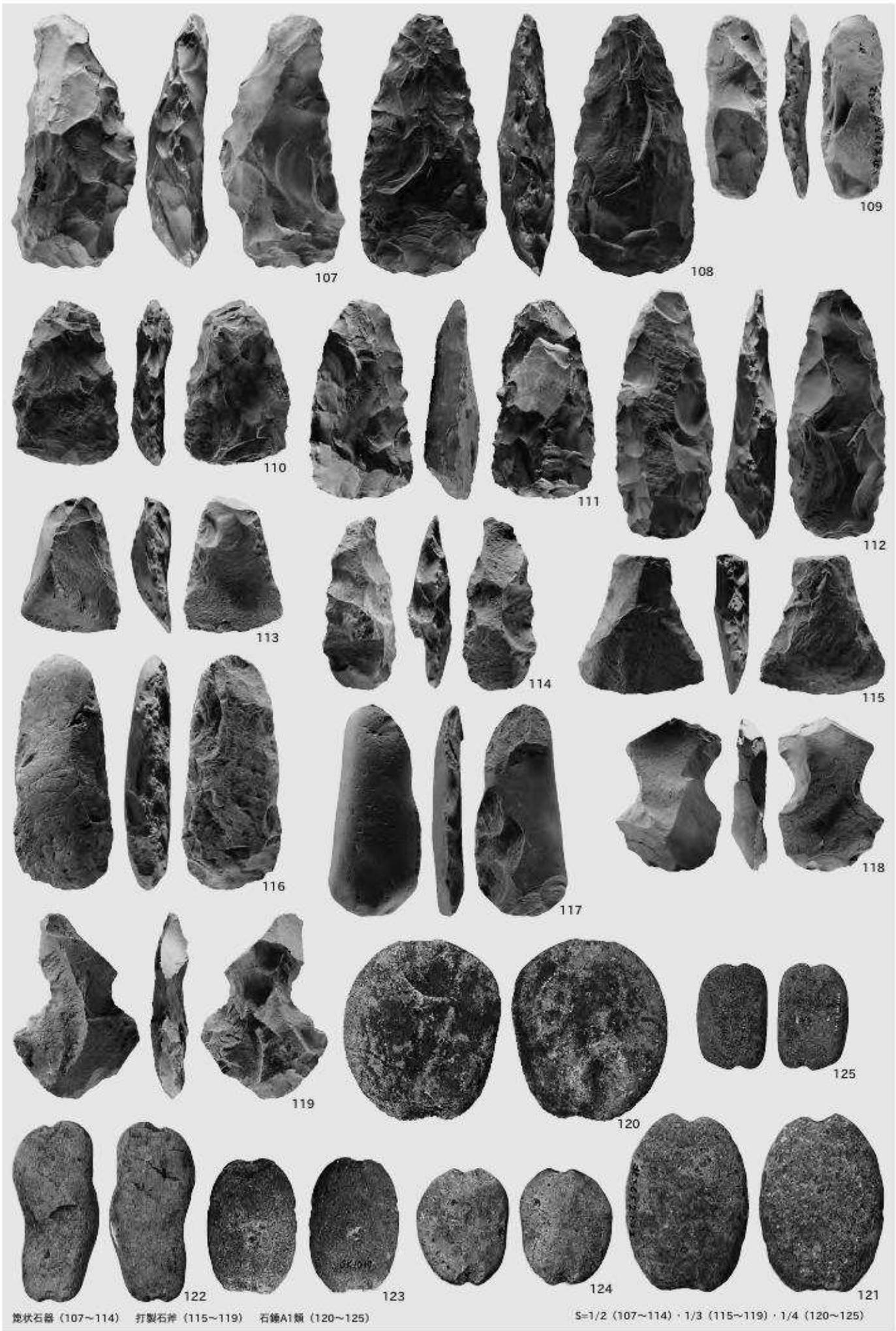
不定形石器C類(77~80)・D類(81~84)・E類(85~89)・F類(90~93)

S=1/2 (77~93)

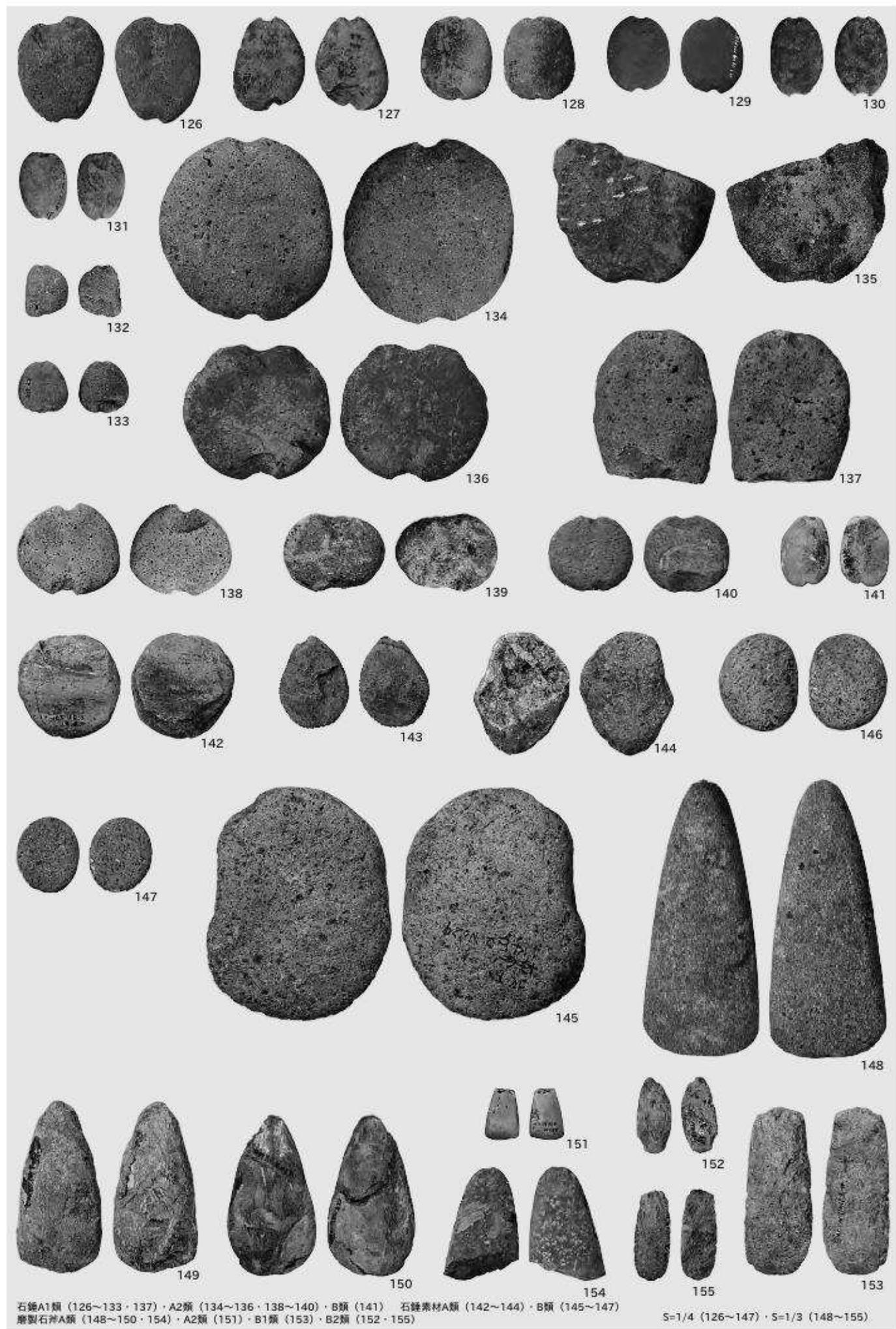


不定形石器F類 (94~97)・G類 (98~103) 両極剥離痕のある石器 (104~106)

S=1/2 (94~106)

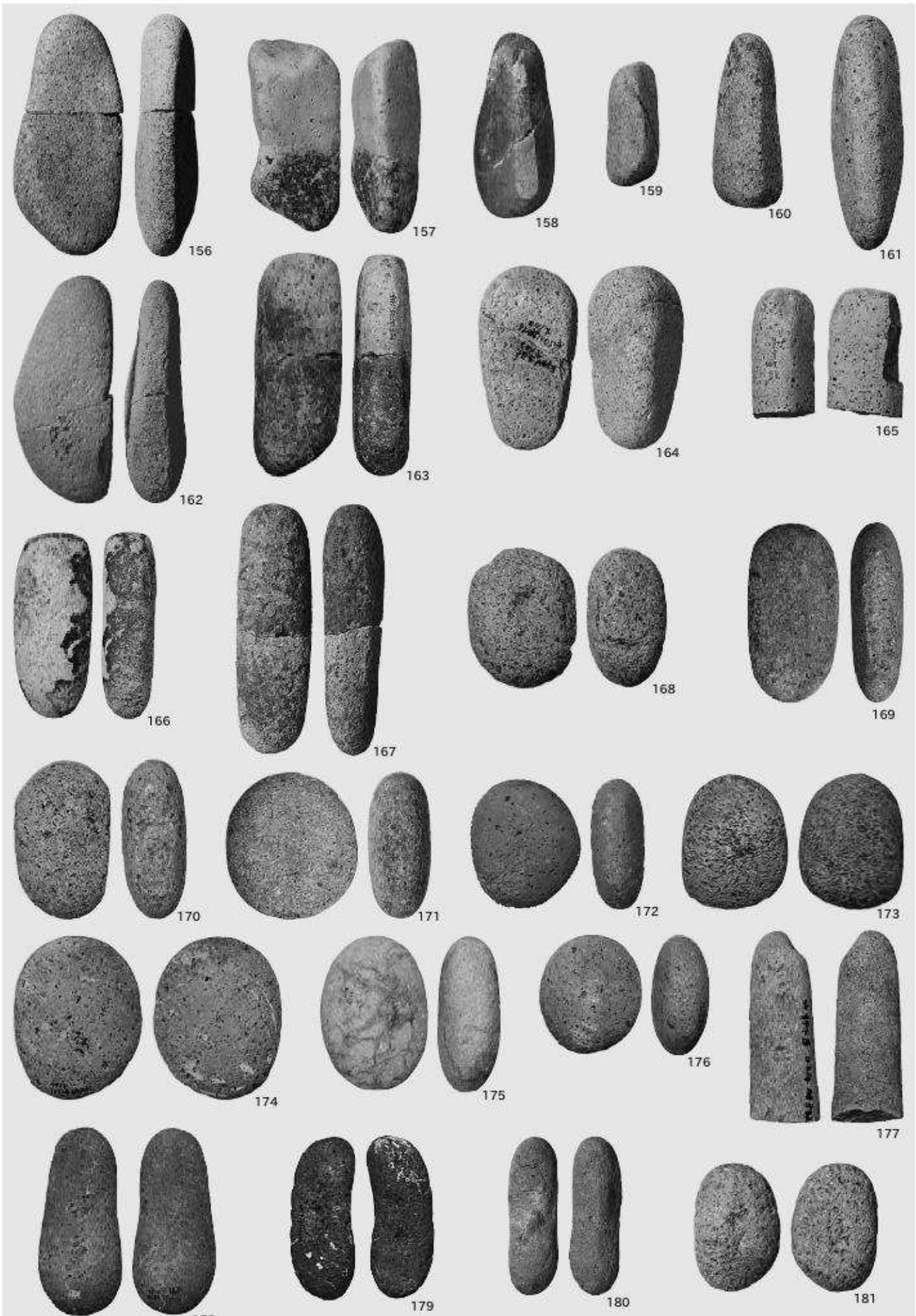


鏡狀石器 (107~114) 打製石斧 (115~119) 石錘A1類 (120~125)  $S=1/2$  (107~114) ·  $1/3$  (115~119) ·  $1/4$  (120~125)



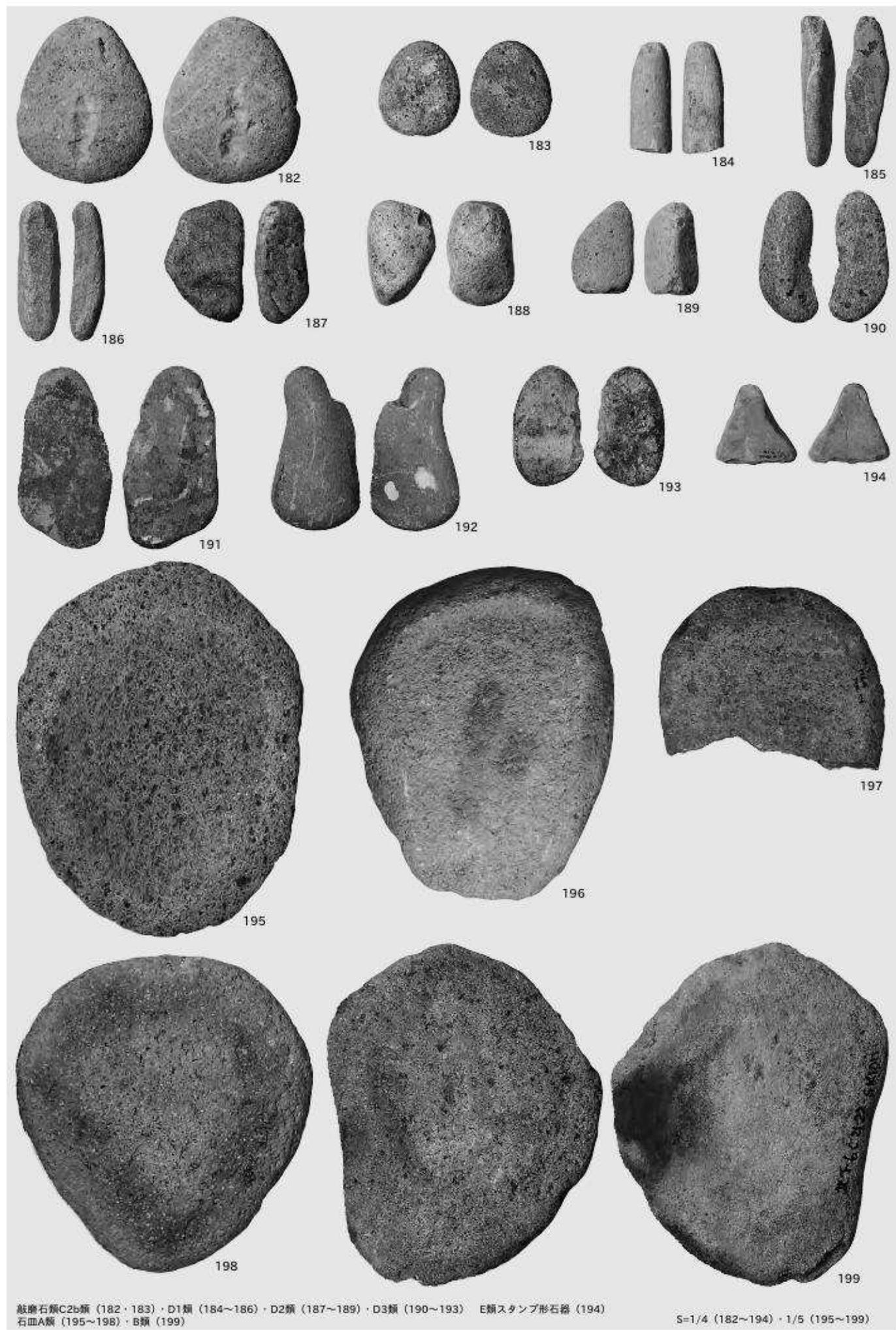
石錘A1類 (126~133 · 137) · A2類 (134~136 · 138~140) · B類 (141) 石錘素材A類 (142~144) · B類 (145~147)  
磨製石斧A類 (148~150 · 154) · A2類 (151) · B1類 (153) · B2類 (152 · 155)

S=1/4 (126~147) · S=1/3 (148~155)



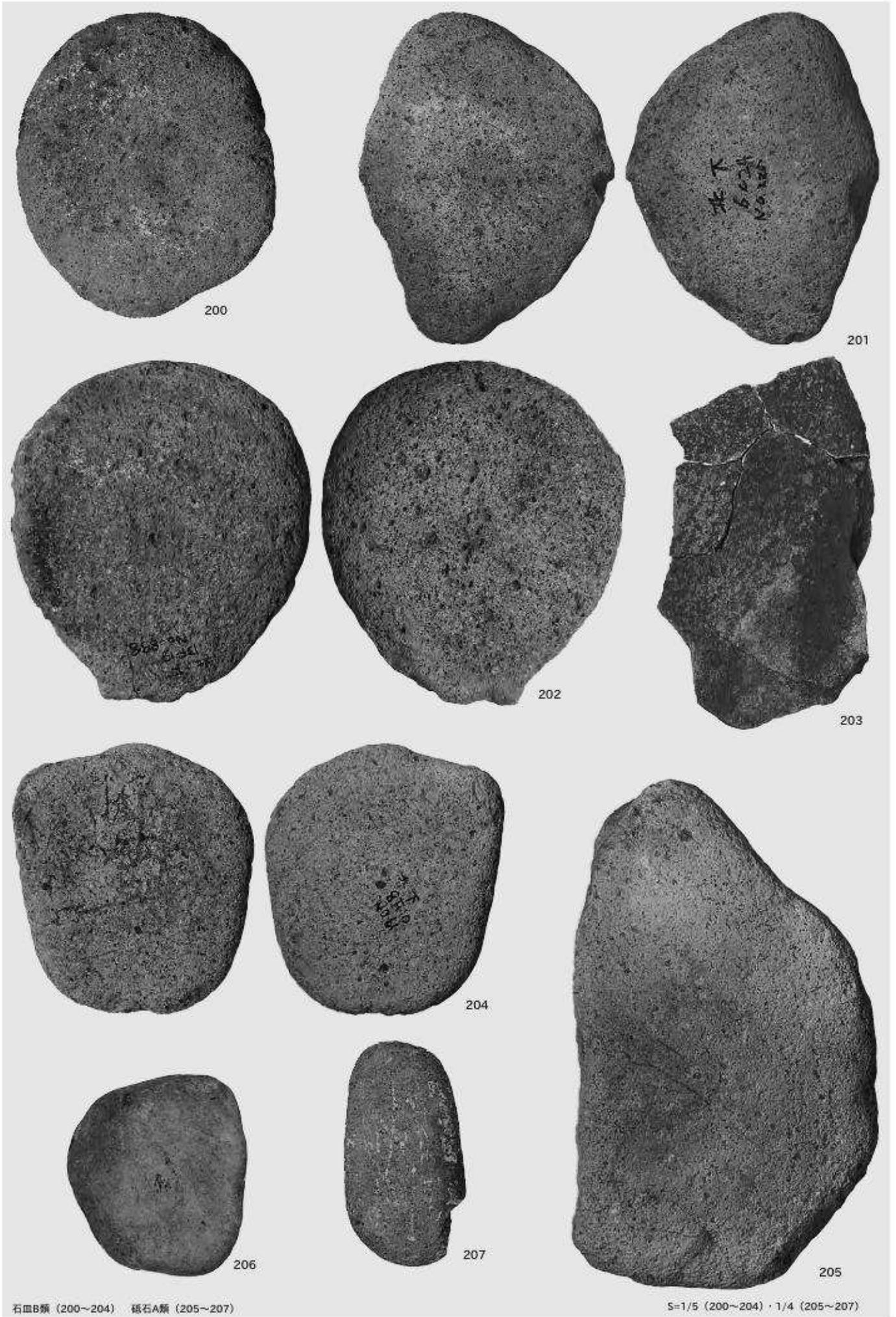
敲磨石類A1類 (156~161)・A2類 (162~165)・B1類 (166・167)・B2類 (168~172)・C1類 (173~176)・C2a類 (177~180)・C2b類 (181)

S=1/4 (156~181)



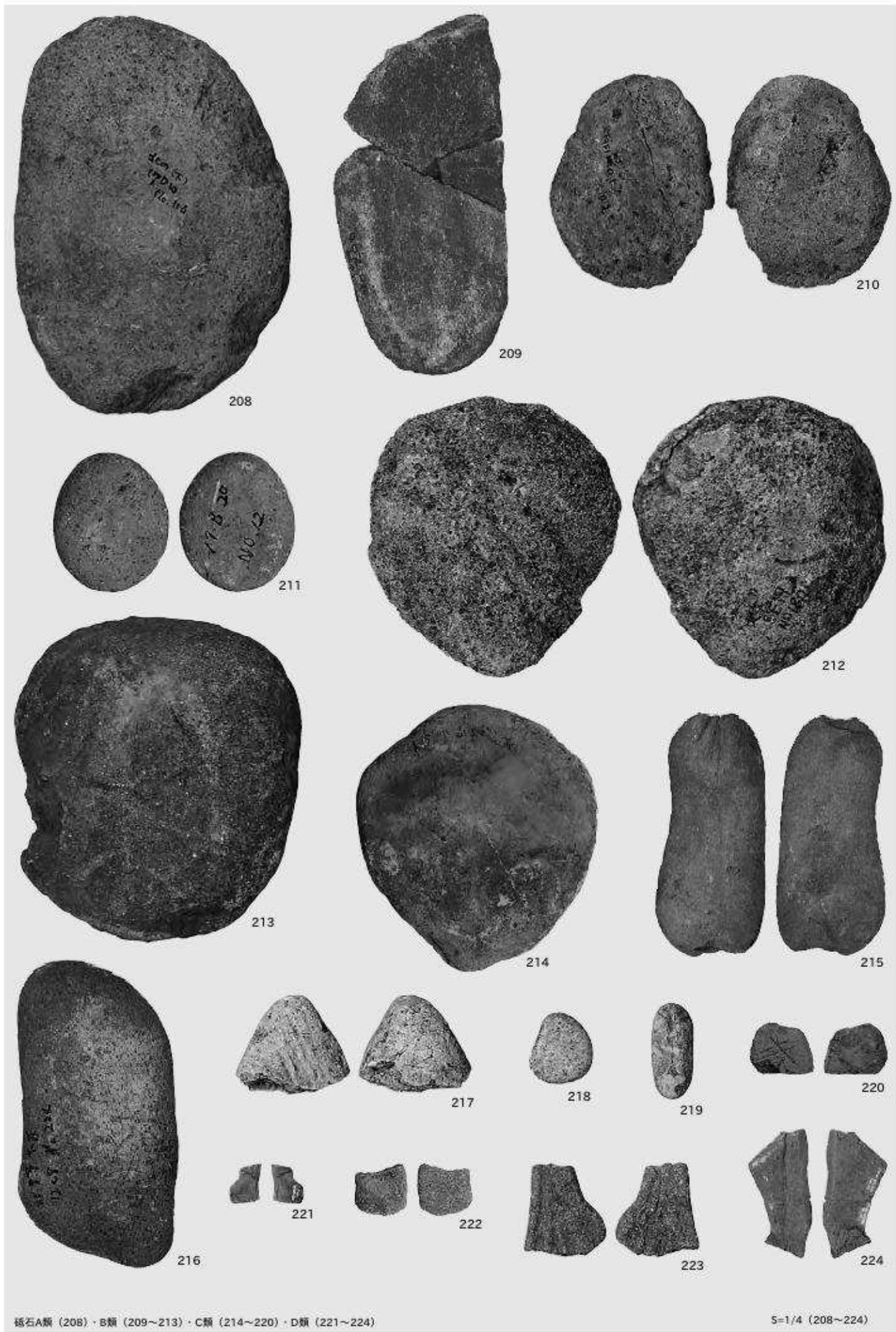
敲磨石類C2b類(182・183)・D1類(184~186)・D2類(187~189)・D3類(190~193) E類スタンプ形石器(194)  
 石皿A類(195~198)・B類(199)

S=1/4(182~194)・1/5(195~199)



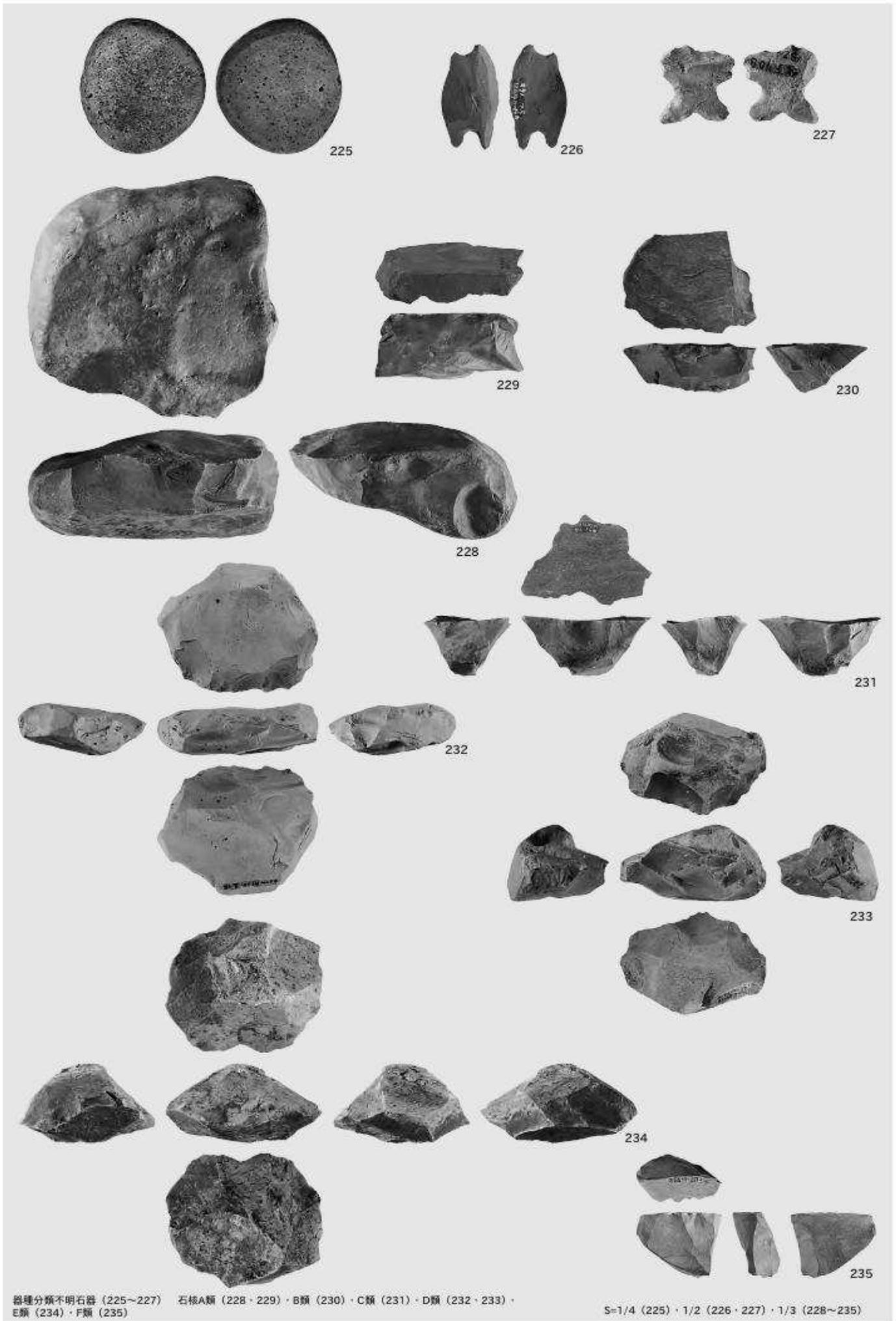
石皿B類 (200~204) 砥石A類 (205~207)

S=1/5 (200~204) · 1/4 (205~207)



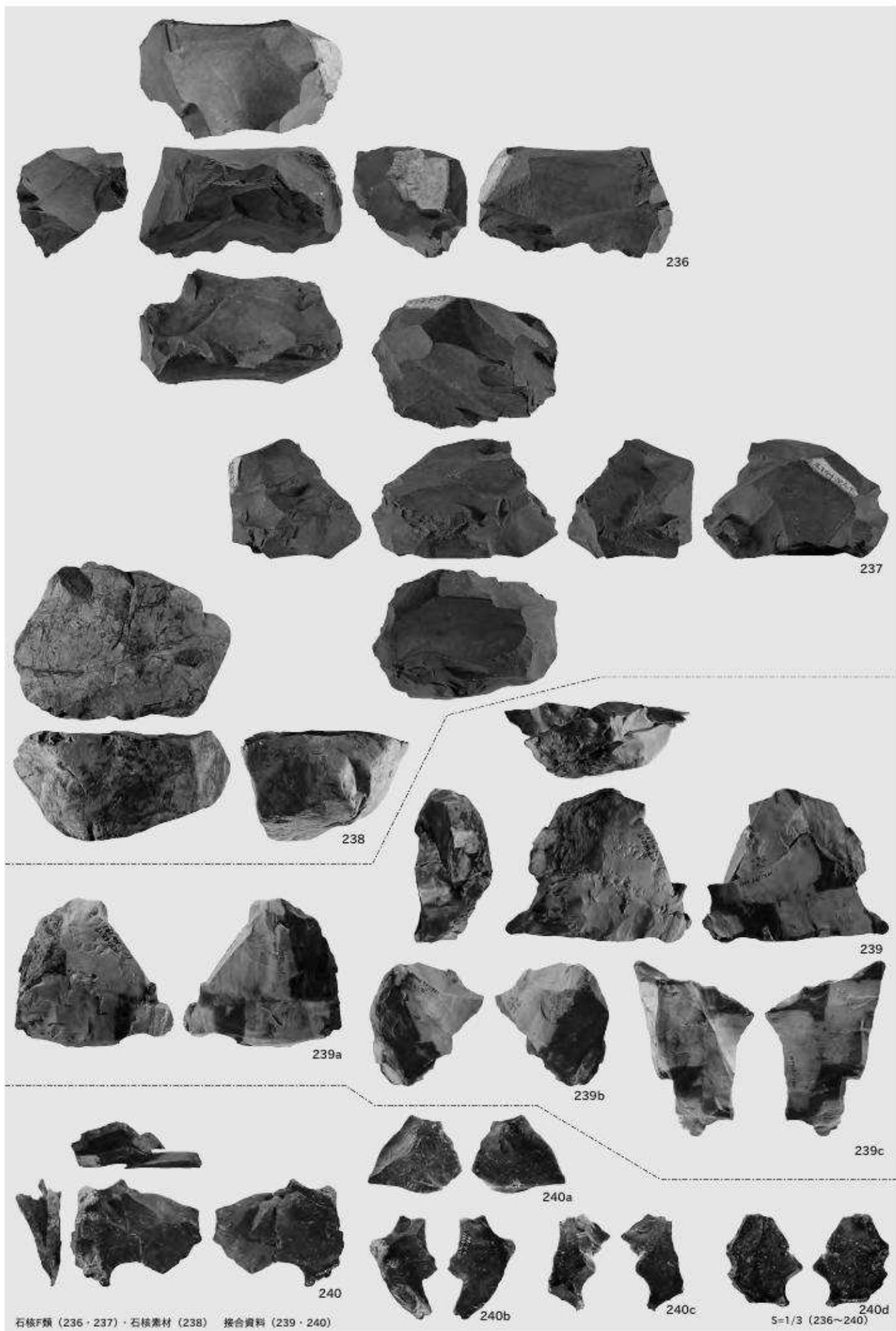
砥石A類 (208)・B類 (209~213)・C類 (214~220)・D類 (221~224)

S=1/4 (208~224)



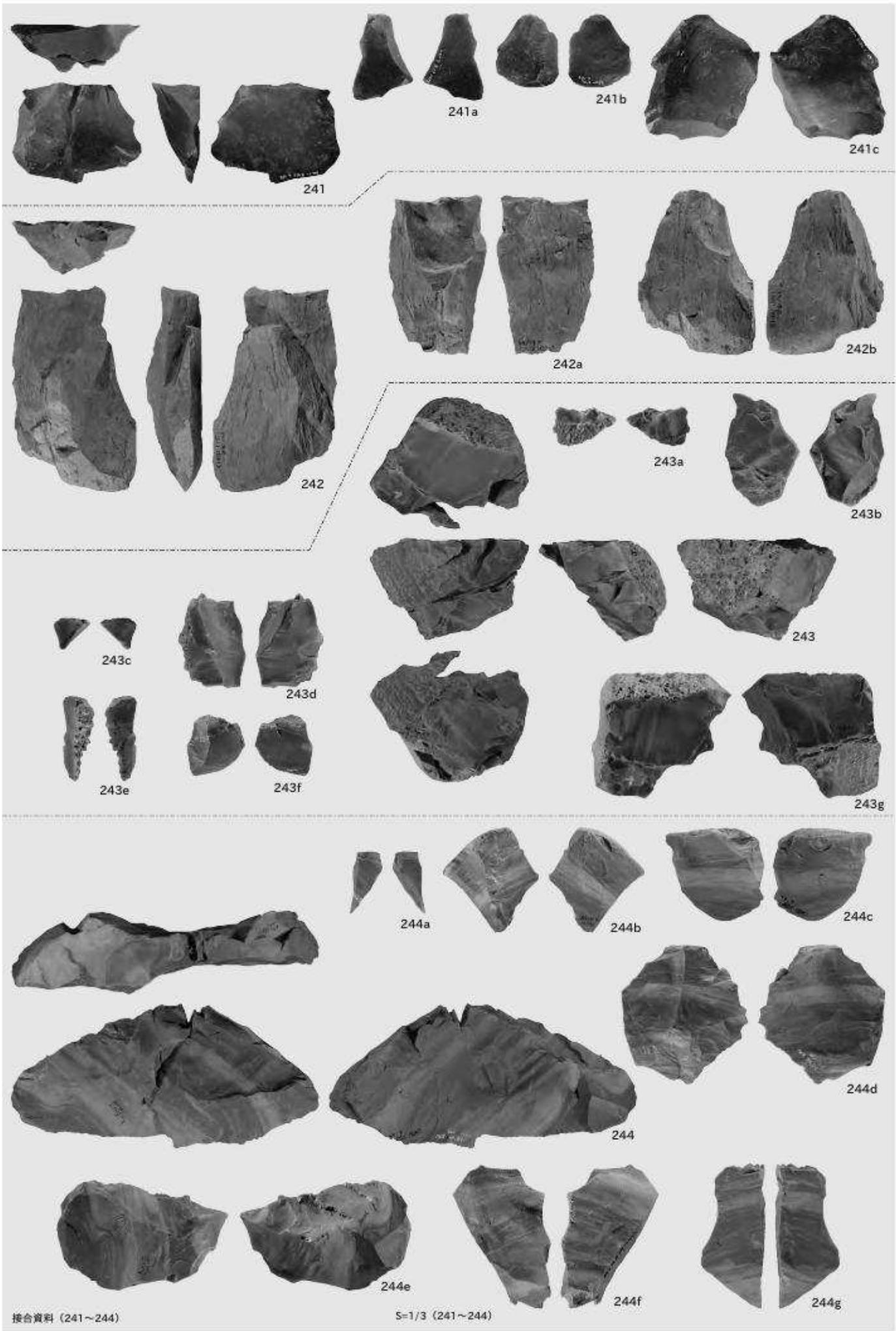
器種分類不明石器 (225~227) 石核A類 (228・229)・B類 (230)・C類 (231)・D類 (232・233)・E類 (234)・F類 (235)

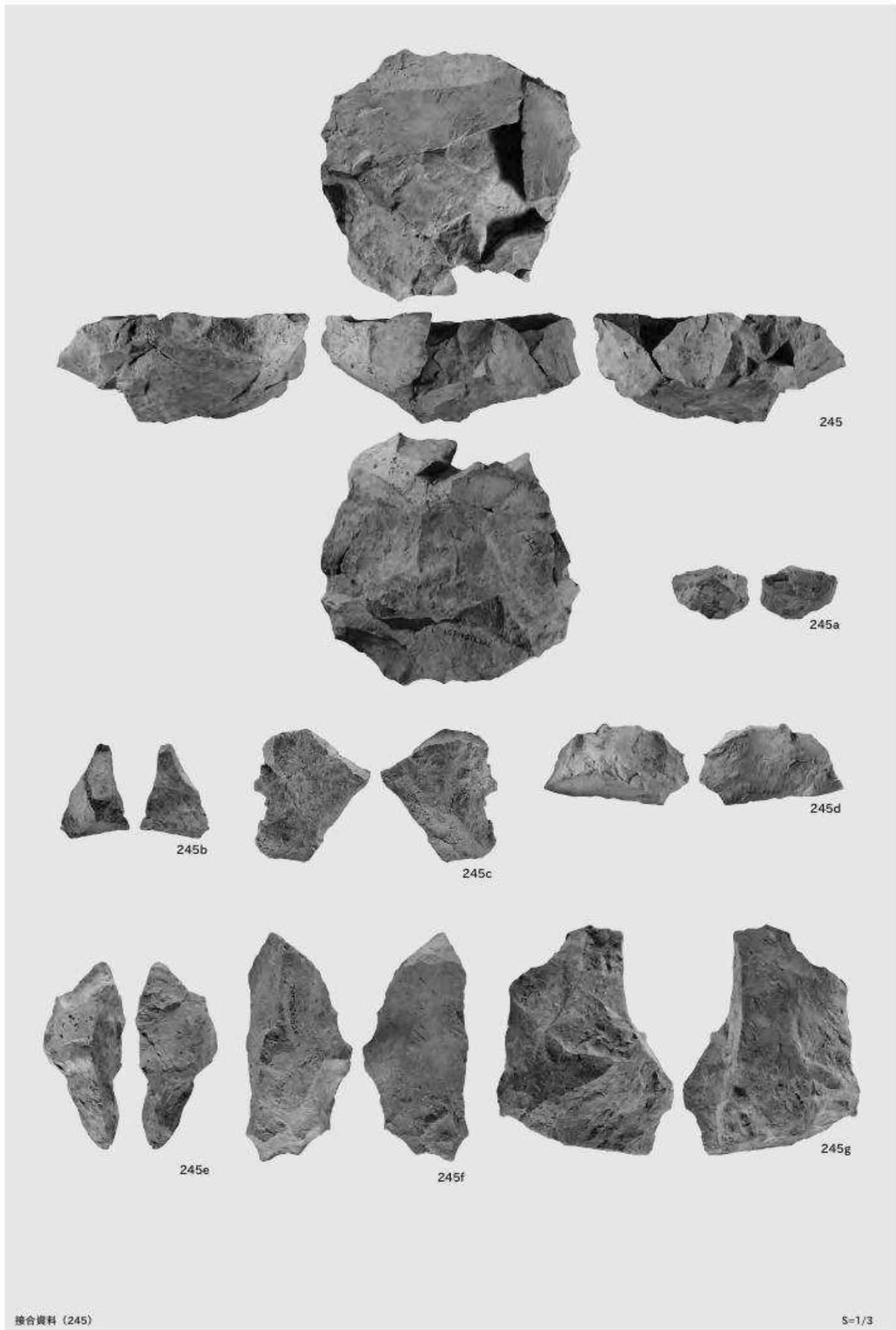
S=1/4 (225)・1/2 (226・227)・1/3 (228~235)

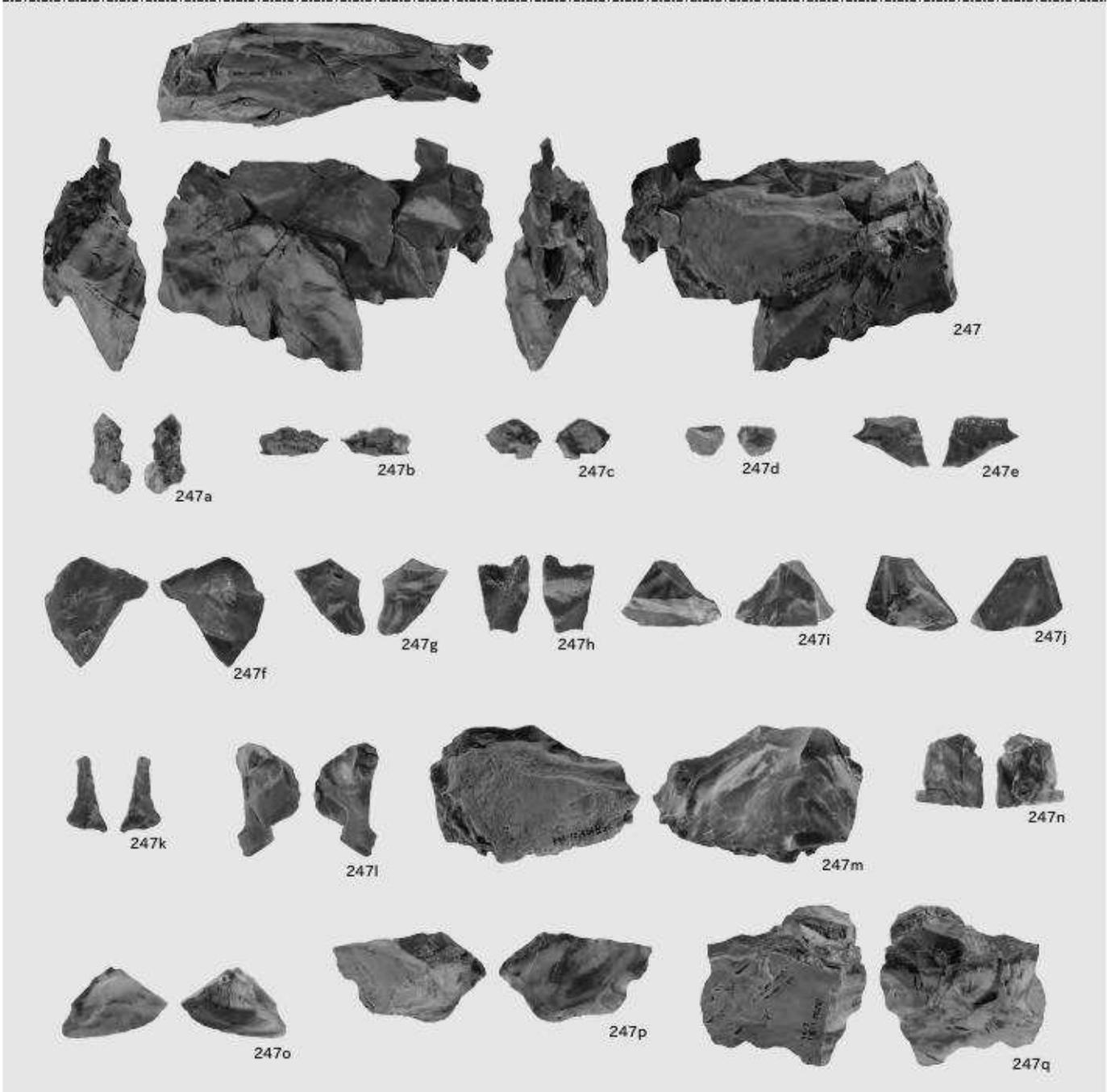
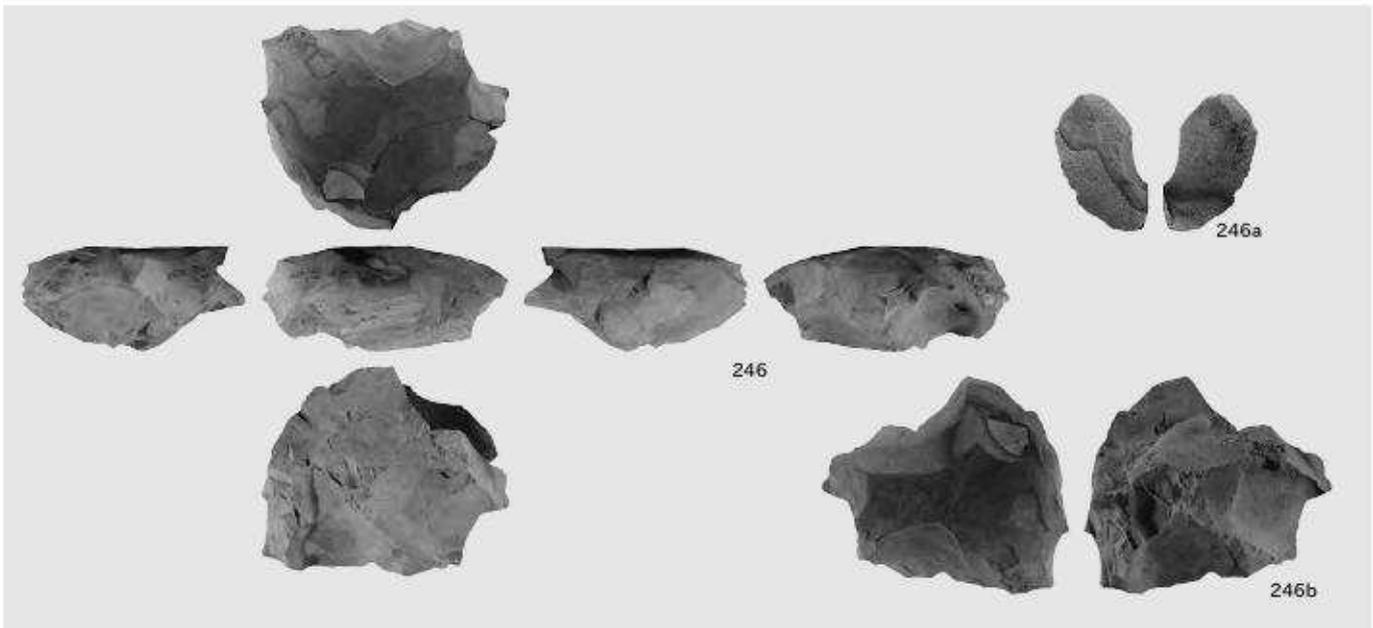


石核F類 (236・237)・石核素材 (238) 接合資料 (239・240)

S=1/3 (236~240)







接合資料 (246・247)

S=1/3 (246・247)

## 報告書抄録

ふりがな	きたのいせき							
書名	北野遺跡Ⅰ（下層）							
副書名	磐越自動車道関係発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第119集							
編著者名	高橋保雄・荒谷伸郎							
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒956-0845 新潟県新津市大字金津93番地1 TEL.0250(25)3981							
発行年月日	2003（平成15）年3月20日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'″	東経 °'″	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
北野遺跡（下層）	新潟県東蒲原郡 上川村大字九島 字長木3,429番地 ほか	15383	7	37度 39分 6秒 (旧座標)	139度 28分 20秒 (旧座標)	19930419～ 19931203 19940412～ 19941122 19950412～ 19950831	8,900	道路（磐越自動車道）建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
北野遺跡（下層）	集落	縄文時代（早期・前期）		竪穴住居18基、掘立柱建物2棟、土坑53基、焼土53基、集石7基、遺物集中地点11か所、溝1条、硬化面1基、ピット29基		縄文土器 石器	沼沢火山灰層に覆われた縄文時代早・前期の集落	

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第119集	
<b>磐越自動車道関係発掘調査報告書</b>	
北野遺跡Ⅰ（下層）	
平成15年3月19日印刷 平成15年3月20日発行	編集・発行 新潟県教育委員会 〒950-8570 新潟市新光町4番地1 電話 025(285)5511  財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒956-0845 新津市大字金津93番地1 電話 0250(25)3981 FAX 0250(25)3986
印刷・製本	株式会社 第一印刷所 〒950-8724 新潟県新潟市和合町2丁目4番18 電話 025(285)7161

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第119集『北野遺跡Ⅰ（下層）』 正誤表追加 2018年11月追加

頁	位置	誤	正
抄録	東経（旧座標）	139度28分18秒	139度28分20秒

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第119集

磐越自動車道関係発掘調査報告書

北野遺跡Ⅰ（下層）

### 正誤表

頁	行	誤	正
目次2頁目	11	K 石錘失敗品・素材	K 石錘失敗品・石錘素材
目次2頁目	16	第Ⅵ章 自然科学の分析	第Ⅵ章 自然科学分析
目次3頁目	下から10行目	図版 2 沼沢層（Ⅳ層）直下の地形図	図版 2 沼沢火山灰層（Ⅳ層）直下の地形図
目次4頁目	24	図版 57 遺構位置と…	図版 57 遺跡位置と…
目次4頁目	下から3行目	…6A21 基本層序・10B6 基本層	…6A21・基本層序・10B6・基本層